
最強がハンター生活をした場合

香具師之樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強がハンター生活をした場合

【Nコード】

N5500V

【作者名】

香具師之樹

【あらすじ】

交通事故で死んでしまった主人公の転生の世界はモンハン……だ……と？ どうみてもテンプレです本当に（ry。最初から人外のかせに更に魔改造を施され、古龍種とも1vs1でどうにかなる程度の強さを得る。さて、異世界の青年が狩りの世界で学ぶものとは？ 『誤字脱字の指摘、大歓迎キャンペーン実施中』（追記：次話の完成度を記すことにしました。目安として見てください。投稿したら0に戻ります 現在0%）

プロローグ「神様との会話」(前書き)

〔WARNING〕

この物語には以下の要素が含まれています

- ・チート
- ・世界観ブレイカー
- ・行き当たりばったり
- ・作者の残念な頭
- ・統一されないジャンル

お気をつけください

初投稿です。生暖かく見守ってください。

プロローグ「神様との会話」

「……どこどこ？」

気がついたら変な所に居た。

一面真っ白な部屋。否、壁が無いので『空間』と表記するのが正しいか？

兎にも角にもいきなり訳のわからない所に移動したのだ。

うん、まずは状況整理だ。確か学校帰りにコンビニよってジャ。プ読んで、パン買って、夢中で貪って……その先が思いだせない。

「貴方は死んでしまったんですよ」

ああ、そうか。俺は死んでしまったのか。

おお、俺よ、死んでしまうとは情けない。

「って納得できるかー！！！」

「ひゅい！？」

「そして誰だー！！！」

「お、お、お、落ちついてください」

「死亡宣言されて落ちついてられるかっての！！！」

「せ、説明しますから」

「少々お待ち下さい」

「なるほど。キミは神様で俺は文字通り死んだ、と」

「まあそうなりますね」 自分で言っておいてなんですがよく信じられますね」

なんでってあんた、自分の体が透けてる上浮いてるんだぜ？ 信じないほうがおかしい。

「嘘を言っているようには見えないからね。で、俺を呼んだってことは何か言いたいことでも？」

「ええ、実はですね……」

神様（笑）の説明を三行でまとめると

やっべ、すっかりミスで人（俺）死んじやったよ

天国も地獄も「ふざけんな、寿命尽きてない奴を送りこむな」
で総スカン

だったらてきとうな世界に放り込むかー

らしい。

ちなみに死因は雨が降る↓雨でスリップした自転車が軽い衝突事故
↓相手の人（工事関係者・25歳・独身）の道具である金槌が吹っ
飛ぶ↓猫のそばへ↓猫驚いて道路へ飛び退く↓車がハンドル切る↓
俺アボン

それなんてピタゴラススイッチ？

さて、理由は（心の平静を保つ意味で無理矢理）納得できた訳だが

「俺はどこ这个世界に行くの？」

「随分と割切りますね。原因は私ですが」

「面白いことになってるのに拒否する必要はないでしょ」

「は、はあ。取り敢えずBOXドン」

目の前には自転車のカゴくらいの箱が出てくる。

さすが神だな。手品士も真つ青な芸当だ。

「なに？この中にある紙切れに書いてあるの？」

「そぞ。18、269、457通りありますね」

「多いなおい！！　ちなみにどんな感じだ？」

俺としては一番気にする所だ。

なにせこれから云十年は生きる世界、頼むからほのぼのとした……

「第2次世界大戦も驚く戦争してる国とか惑星衝突で廃墟と化した世界、他にもエイリアンがうじゃうじゃいるサバイバルなトコ等、各種取り揃えてます」

俺が望む世界はないと断言できるラインナップですね。

しかも各種言う割にはバトルで一括りなんだが……

「そんなんばつかなの？」

「だって私、戦神【いくさがみ】ですし」

大変な神様に見染められたようだ。勘弁して欲しいよトホホ。

「気を落としてないでやっちゃってください。時間も押してますし」

あ、時間制限あるんだ。

「……ええい！ ままよ！ いいの来てくれ！！！」

ガサガサゴソゴソ

ひよい

くモンスターハンターく

「これって……」

「あー、当たりですね。文字通りゲームで有名なあの世界です。ちなみに作者は3rdから初めて2ndは齧ったくらいです」

「いきなり何言ってるの？」

「変な電波受信しました」

「さいですか……」

「……………」

「あ、そういえば転生するに当たっての忠告を忘れてました」

忘れてたんかよ、しっかりしてくれ神様（笑）

「えーと、まずは記憶は持ち越しです」

「mjd」

「ええ、初期化とか結構メンドクサインで」

ぶっちゃけた。

「ついでに、行った世界ですぐピチュられても問題なので魔改造を

「施します」

チートキタ (。 。) ！！

「まあ、貴方の場合元から異常なのでそこまで手を加える必要ありませんね。紅い彗星使用にしますか」

つまりは3倍（当社比）にするんですねわかります。

「最後に、転生後の世界に持ち込める物は服を除いて1つです。どうしますか？」

「あー、じゃあ夜叉鴉にしてくれ。仮にも危険な世界だし」

「夜叉鴉……あの日本刀のことですね。了解です。ちょちょいっと」

なにやら書類みたいなのに書き込む神さry

「えーと、名前は神威白夜で持ち物は刀、追加能力は紅い彗星使用の戦闘力、ラカンさん程度のスペック」と「ボソボソ

今、どこぞの魔法世界の公式バグキャラの名前が聞こえたんだが…
…本格的な魔改造じゃーねか。

ちなみに神威 白夜【カムイ ビヤクヤ】が俺の名前だ。幼い頃から神威流剣術とやらを叩き込まれたので生前から立派な人外。

変な名前と恐ろしいくらいまでの強さが原因でよくイジメられてました。まあ、しょーもなかったので無視はしていたけど、精神的にキツイものがあった。

教えてくれたじいちゃんありがとう。殺したくらい感謝しています。

「ここをこうして……つとできた!!!」

物思いにふけっていると準備ができたらしい。オラわくわくすつぞ。

「じゃあ、覚悟はいいですか？」

「いつでもいいぞ」

「それでは、夢と希望溢れる冒険の世界にいつてらっしゃい!!!」

どこのテーマパークだ、と言いかけた途端に白い光が意識を奪った。

ブローグ「神様との会話」(後書き)

更新速度は牛歩の極み。

夏休みなので1週間以内には…………必ずッ…………

第1話「ハンターとの出会い」（前書き）

↓ WARNING ↓

この物語には以下の要素が含まれています

- ・チート
- ・世界観ブチ壊し
- ・行き当たりばったり
- ・作者の残念な頭
- ・統一されないジャンル
- ・バカ丸出しの文章
- ・更新速度の犠牲

お気をつけください

第1話「ハンターとの出会い」

意識を取り戻した時には、既に森の中に居た。

な、なにを言ってるのかわからねーと思うがry

「ふう、目覚めが大地の上でよかった」

火山とか雪山だったら眠ったまま昇天する可能性もあるし、海や沼地だったら窒息で終了。

今考えるとかなり怖い。

「よかったものの・・・人の気配がない。どうすつかー」

当たり前と言えば当たり前だが人なんて居なかった。ハンターが運良く居てくれれば楽になるのだが、そう簡単にいくわけがない。

もし簡単に行くんだったら、そもそも俺はここにいないわけで。

「外傷は……ないな。それにしても服装が道着か。夜叉烏が腰に掛けてあるとか準備よすぎだろ」

道着はユクモ装備みたいな感じです

身の回りを確認したあと、突発的な戦闘があっても十分動けるくらいに体を慣らす。

辺に殺気はないからしばらくは大丈夫だと思う。気配を消すモンスターがいらないとは限らないが、まあ大丈夫だろう…… たぶん。

少ししてから動き出す。森のど真ん中にいるので、どのルートが人里へ繋がっているかわからない。ひとまず川を探す。

川、即ち水は全ての生命の源であり、故に人里も川の下流を中心に発展しやすい。我ながら名推理だ。うん。

「しっかしまあー広いな。ト。口でも住んでそうだな」

『キシヤー』

いや、気付かなかったわけじゃないよ？ この世界に来て最初の出会いがランポスだったので軽く現実逃非に走っただけ。

それにしてもこのランポス、大きい。

ゲームだともうちよい小さかった気がするが、固体によってまちまちなのは当然だな。どうせたいした驚異じゃないし。

そんなことを考えると、それをスキだと思ったのか1匹が飛かかって来た。

あ、ちなみに4匹に囲まれている状況。

「遅すぎるな」

溜息を吐くと同時に半歩ずれる。ランポスの体が通過しようとした時、すかさず尻尾を掴み手頃な奴に思いきりぶつける。

仮にもダイナソーだから死にはしないけど失神している。残り2匹。

「で、キミたちもやるの？」

ちよいと殺気をぶつけてみる。するとあら不思議、蜘蛛の子を散らすように逃げていったではありませんか。

「そこまで強く当てたわけじゃないんだが……拍子抜けだな」

逆に言えば雑魚はこれで蹴散らせるのだから使えることが判明した。嬉しくもあり悲しくもある。

ひさびさに実戦ができと思ったのに。

その後、5回ほど襲撃を受けたが同様の手口で撃退。敵も賢いのでそれ以上襲われることが無くなった。

そうこうしているうちに川発見。

「いやいやいや、これデカすぎるだろ」

少なくとも積みもって幅20mとか規模が違う。

「こ、ここを下って行けば村に出られる……といいなあ」

ある種の賭けだった。

見つければ一食一宿の恩義に預かれるが、なかったら野宿。その差は雲泥だ。

「~~~~」

鼻歌を歌いながら進んでいく。太陽の位置からしてお昼頃だな。よし、飯にするか。

魚を釣りあげ適当に山菜を採ったあと（サバイバル生活ができるようじいちゃんに毒のあるなしに関わらず食わされた。今じゃカエンダケで痺れるレベル）焼いて食す。

「いただきます」

食事の基本はいただきますだ。生命を貰っているのだから感謝の念は当たり前。言わない奴は飯を食う資格がないとじいちゃんは言っていたが、数少ない同意できる点だな。

魚も山菜もかなりの美味だった。自然がとてつもなく多い世界なんだからこれからも期待していいと思う。

心地良い満腹感と暖かな日差でつい転寝をしてしまいそうになるが、

俺の驚異的な聴覚がそれを許さなかった。

「ただのランポスの鳴き声じゃない、それに人の声も。戦闘中だな。行ってみるか」

嫌な予感がするので全速力を持って現場へ急行。全速前進DA！

貴重な情報源だ。死なせはしない。

「????」
SIDE「

「くっ」

迂闊だった。

ランポス6匹の討伐&特産キノコの納品というクエストなので気楽に來たが、弱ったランポスがリーダー、つまりドスランポスと呼ばれるのは予想外だった。

ドスランポスにランポス8匹。駆け出しのハンターである私にこの面子から逃げると言うのは無理。すぐに追いつかれてしまう。

「だったら数を減らさないと……ッ」

できるだけ数を減らして逃げ道を作るため、必死になって太刀を振るう。

だが、うまく当てられないのか、なかなか倒せない。

「キャッ」

目の前の敵に集中し過ぎて背後からタックルを受けてしまった

しかも衝撃で太刀が手から離れる。ドスランポスの近くに落ちた。

「ど、どうしよう」

まさに絶体絶命だった。体力、気力ともに底をつき、アイテムも満

足にない。

武器まで手放してしまったとなるとどうあがいても絶望

勝機と見たのかランポス共が一斉に襲い掛かる。

思わず目をつぶる。これから身に降りかかるであろう衝撃を覚悟して

しかし、その衝撃はいつまでたっても降りかからなかった。

『ギャウッ!』

その代わりランポスの悲鳴が聞こえる。

恐る恐る目を開けると襲い掛かるうとしたランポスが真つ二つになつていた。

何が?と思う前に遠くで声がした

「そのまま伏せ続けてくれ。下手すりゃ当たる」

声の方向を向く。黒い服に黒い髪をした男の人がそこには居た。

手には太刀を短くしたような武器を持っている。けどあの距離からどうやって攻撃したの？

ボウガンや弓ならわかるけど、ランポスは【斬られた】んだから接近武器のはず。

どう見てもあの人は異質だった。さっき言った髪と服装もそうだし、手に持つ武器、なによりランポスを一瞬にして狩り取ったたその実力。

ボケっとしてるとその人はいつの間にか隣に立っている。は、速い

……

「いろいろと聞きたい事があるけど、まずは掃除からか」

落胆にも聞こえるセリフを呟くと、彼はまた私の視界から消えた。

く 白夜 SIDE く

間一髪といったところだ。

森の中を走っていると戦闘場面に出くわした。あれはドスランポスだな。おおっデカイデカイ。

って暢気なこと考えてる場合じゃないな。結構ピンチじゃん、あの子。

「そおい」

威嚇程度に刀を振るう。これで退いてくれると嬉しいんだけど。

『ギャウッ!』

うつそー。真つ二つになったよ。そんなつもりはなかったけど、これが魔改造効果か。恐ろしい。

「そのまま伏せ続けてくれ。下手すりゃ当たる」

そう声をかける。滅多な事さえなければ当たることはないが、念には念を入れよう。

少女の様子を見る。小さな傷は多々あるけど致命傷はないな、体力、気力ともに0に近い。

装備はハンター装備。ってことは駆け出しハンターさんか、ドスランプスに遭遇するとは運が悪い。

この子、俺がどうやって遠距離から斬ったのか不思議に思ってるな、あとで解説入れるか。

じゃ、ちゃちゃっと片付けるよう。話はそれからだ。

「いろいろと聞きたい事があるけど、まずは掃除からか」

呟く瞬間、俺は疾駆する。

ランポスといえはゲームでは最弱に近い敵だ。とはいえドスが居るんだから一応注意しておいた方がいいな。

『キシヤーー!!』

1匹が飛び掛ってくる。はいはい、遅すぎる。

「よつと……」

回り込んで抜刀しつつ回りを確認。特に異変はないな、強いて言えばドスがこつちを観察しているくらいか。なかなか狡猾だ。

それにしても頸動脈斬る程度に抑えたつもりだけど、首が落ちるってやっぱり威力ありすぎだろ。当分は力の把握から始めないと周りに迷惑かけることになるな。ヤバイヤバイ。

あっさり倒したので全員警戒してきたようだ。まあ、警戒しようとしまいと関係ないんだが？

「フツ！」

一度納刀してから再び抜刀し、残っていた雑魚を始末する。おっと、どうやらドスランパスが威嚇してくる。この程度の殺気、じいちゃんに比べればぬるいぬるい。

ん？　じいちゃんの殺気がどれくらいかって？

そうだな、威圧しただけでガラスが碎けるんだよ。パリーンじゃなくてグシャンて感じ。

所謂　完全粉砕　！！

思い出ただけで鳥肌立ってきた。

……そんなことはどうでもいい。今は目の前の敵に集中せねば。

『ギャオオオオー！！』

手下がやられたので相当頭に血が上ってるようだ。うわーめんどくさい。

「まあ、遅いのは変わらんけど噛みつかれたら痛そうだ」

どうでもいい評価を下す。怖い怖い。

ドスランポスが爪とか牙とか体当たりとかで猛攻を仕掛けるが、当たらなければどうと言うことはない！！

全ての攻撃を紙一重でよけ続けながら隙を探す。いや、隙だらけなんだけど癖で探してしまうな。

「ホントに拍子抜けするな。いや、魔改造が凄すぎるだけか？」

一閃

じいちゃんから教え込まれた基本にして奥義の居合い斬り。

その軌道は寸分狂わずドスランポスの首へ向かい……

ストン

刀を納めるとともに首が落ちる。

噴出すのは鮮血。まあ、あんだけ綺麗に頸動脈もろとも首斬れば噴出すわな。

「ーッ」

人いるの忘れてた。駆け出しにこの光景はつらかったか？

「あー大丈夫？」

絶対に大丈夫じゃないけど聞いてみる。

「????」
SIDE

その人は強かった。

気を抜いてるのは一目で分かる。それでいてこの強さ。

彼の攻撃は目を疑うものばかりだった。

鞘に入っている謎の武器の持ち手に掛けている手が、一瞬ブレたと思うと飛び掛ったランポスが斬られていた。

軽く首を回し、もう一度ブレた時には周りのランポス全員が倒れる。彼は一步も動いていない。

「す、凄い……」

思わず言葉が漏れる。一瞬で相手を切り伏せるその動きは、まさに『綺麗』の一言だった。

変に思うけど、それが私の感じた素直な感情。

手下をやられたのが怒りに触れたのか、ドスランポスがその人に襲

い掛かってくる。

その猛攻を涼しい顔で回避して懷に飛び込んだ、と思うとドスランポスの首が落ちた。

「ーッ」

ハンターになるに当たり、先生から「精神面を鍛えなさい」と言われたがよく分かった。

覚悟はしてたけどやっぱり怖い。

そんな私を心配してか、声を掛けてくれた

「あー大丈夫？」

大丈夫じゃないです。

く白夜 SIDEく

返事がない、どうやらただのしかってそんなわけあるか。

「うん、返事くらいしてくれるとありがたいんだが……」

ハッとしたように頭を上げる少女。あらかわいい。

「あ、ありがとございます。えっと……」

あ、名前ね

「俺は神威白夜。こっちじゃビヤクヤカムイか」

「わたしはメティスⅡフロアディーテです」

「よろしくメティス。ちょっと聞きたい事があるんだけど」

主にどこどこかとか。

「わ、わたしに答えられる範囲であれば……」

「どこどこ？」

「えっ？」

「え？」

「……」

やべえ、凄く困惑してるじゃん。選択しミスったか？

「えっと、ビヤクヤさんはどこから来たんですか？」

ごもつともな質問です

第1話「ハンターとの出会い」（後書き）

変なトコできつたな（遠い目

はい、ヒロイン登場です

名前はギリシャ神話の英知を意味する女神です。ついでに苗字も女神様。こちらは文字りました。

レオレイアのレイアって山の女神様なんですって。レウスは知りませんが

第2話「村に行きたい」(前書き)

〔WARNING〕

この物語には以下の要(ry

・チ(ry

・行き当た(ry

・作者の残念な頭

・幼稚な文章構成

・一話の長さが変り過ぎ

ゆっくりしていったね

第2話「村に行きたい」

メテイス SIDE

わたしの命の恩人はビャクヤ「カムイと名乗った。変わってる名前。

ビャクヤさんは遠くの地から放浪の旅をしていたんだって。

「それにしても随分と変わっている服装ですね。髪と目もそうですが」

「髪とか目は生まれつきだから何とも言えん。服は故郷の伝統的な物だ。防御面よりも回避面を重視して作られたからモンスターから一撃もらえば即アウトな代物だよ」

モンスター相手に普通の服と同じ防御力って危なすぎるんじゃないの!?

そう聞くと

「大丈夫大丈夫、喰らったところでたいしたダメージじゃないから」

飄々とそんなこと言ってのけた。一体どんな身体能力してるんですか……

そして、一番気になるのは腰に下げている黒い武器。

一見すると太刀にも見えなくても、それにしては短い。

「これは『刀』と言って……うーん、そうだな、太刀を手ごろなサイズにまで縮めた武器と思ってくれれば。これも服と同様に故郷の伝統品だ」

そう語ってくれた。

いまいわからないけど太刀と同じようなものらしい。

「ついでに言うと遠くから攻撃できたのを不思議に思っただろ？」

わたしが知りたい謎No.1だ。

「簡単に言うとすごい速さで空気を斬って真空の刃を飛ばしたんだ。それだけじゃなくて『気』っていうエネルギー？ みたいのを乗せて。ちょっと難しかったか？」

「うーんと、カマイタチみたいなものですか？」

わたしの答えに満足そうに頷く。

そういうやり取りをしていくうちに、カタナに興味が沸いた。

「カタナ、触ってもいいですか？」

勇気を出して聞いてみる。武器とはハンターにとっての命なので、触られたくない人が多い。ビヤクヤさんもそういう人かもしれない。

でも、わたしは好奇心の方が大きかった。

見たことのない武器。命を奪う物にもかかわらず、澄んでいて、美しく思える。

是非とも触れてみたかった。

「はいよ。切れ味凄いいから気をつけて」

ビヤクヤさんは快く了解してくれた。自分でも吃驚している。

彼は、自分に命を預けてくれたと捉えてもいい行動をした。

とにかく、折角見せてくれたのだ。

しっかり持つて抜いてみる。

シャラン……

「（凄い……綺麗……）」

刀身の部分は真っ直で鞘に納まっているときよりも美しい。

このカタナからは、大自然の慈しむ念を感じ取れた。

それと同時に根底に潜む真っ暗な闇……

慈悲と狂気という相反する感情が伝わってくる。

一流の武器は主に『何か』を伝えることができるようだが、わたし（主以外の者）にも伝えることができるこのカタナは、相当な業物で間違いない。

それを操るビヤクヤさんもまた、この世界でトップクラスの实力者だろう。

「……………」

声を出すのも忘れて魅入る。

1秒とも10分とも1時間とも思える時間が経った。

無言のわたしを心配したのかビヤクヤさんが声を掛けてくれた。

「えと、どうかした？」

「え、あ、大丈夫です。ありがとうございます」

カタナを返す。

「ん、どういたしまして。あ、そうそう。この辺に村とかない？
そろそろ腰を落ちつけようかと思うんだ」

なんでも旅もいいけどまったり暮らしたいそうだ。

「でしたらわたしの村に来ませんか？ 助けてくれたお礼もしたい
ですし、ここから一番近いので」

ちよつと考えるビヤクヤさん。そして「うん……それがいいな……」
と呟いたあと

「そうさせて貰う。この辺のこと聞きたいから歩きながらいいかい？」

「わかりました、こっちはです」

「ありがとう」

その言葉とともに微笑みかけてくる。

わたしにはその笑顔が眩しすぎて。

胸が高鳴った。なんだろう、嫌じゃない。むしろ心地いい。

なんか気恥ずかしさもあったので、つい顔を背けてしまっわたしだった。

（白夜 SIDE）

メティスから色々な質問をされた。服に防御能力がほとんどないと言った時の驚いた顔はクスリときたな。

刀についての質問は想定内。ゲームのほうでも存在しない武器だし。太刀を縮めた感じと言ったが、自分でも言い説明だったと思う。

触りたい、と言ってきたのは驚いたが。

「はいよ。切れ味凄いいから気をつけて」

まあ、メティスなら大丈夫だろう。

鴉（夜叉鴉）を観察するメティスを観察すると、真剣な眼差しの中に尊敬と畏怖の念がハッキリと感じ取れた。

それを見た俺は頬が自然と緩む。自分でも理由は分かんが、彼女に対して好印象を抱いているのは確かだろう。

しばらく見てみると、一向に動かないのが不安になってくる。

気に当てられたわけじゃなさそうだが……

「えと、どうかした？」

「え、あ、大丈夫です。ありがとうございました」

慌てたように返してくる。

「ん、どういたしまして。あ、そうそう。この辺に村とかない？
そろそろ腰を落ちつけようかと思うんだ」

もちろん嘘です。最初から住む村探してました。

「でしたらわたしの村に来ませんか？ 助けてくれたお礼もしたい
ですし、ここから一番近いので」

やったねたえちゃん村に行けるよ（↑おいやめろ

ここから近いってことは田舎っぽい所だろう。現に『村』って言う
てたし。

自分としても都会より田舎の方が好きだし。うん、それがいいな。

「そうさせて貰う。この辺のことも聞きたいから歩きながらでいいかい？」

「わかりました、こっちです」

「ありがとう」

お礼を言った直後に顔を真っ赤にしながら顔を背けられた。なにかマズったか？

と思ったが、歩きだす姿は上機嫌だったのでつまらないことにした。

「歩くこと30分くらい」

「着きました！　ここがわたしたちの村、ユクモ村です！」

第2話「村に行きたい」（後書き）

はい、引き続き読んでくださりありがとうございます
うまい話の終り方がワカラナイ

もうちょっと細かくした方がいかなーと思い、前回の1/2に
してみました

こうすれば話数を稼ゲフンゲフン

御意見、御感想をくだされば作者が泣いて喜びます。ではでは。

第3話「到着、ユクモ村」(前書き)

〔WARNING〕

この物語には(r y

・チ(r y

・行き(r y

・作者の残(r y

・幼稚な文章構成

・一話の長さが変り過ぎ↑ここ重要

ゆ　　っ　　く　　り　　読　　ん　　で　　い　　っ　　て　　ね

第3話「到着、ユクモ村」

今現在、俺は集会場で腕相撲に興じている。

どうしてこうなった。

「にいちちゃん、つえーじゃねえか。細身の腕のどこにそんな力があるんだ？」

by ござつといおっさんハンター

「やるじゃない、これはアタイからの奢りだよ」

by 気風のいい女性店主

「ビヤクヤさん……凄……」

by メテイス

いやいやいや。

どうしてこうなった
（大事なことなので2回言いました）

〈回想シーン〉

森丘(つて場所だったらしい)から案内されて着いたのは『ユクモ村』という村。

なんでも温泉で有名な村で観光客や傷を癒しに来るハンターで賑わっている。確かにさつきから硫黄とかの匂いが漂ってるな。

「おう！ お帰りメティス！ クエストどうだったかい？」

村に入ると同時に鍛冶屋から声が掛かる。

「あ、リザさん。ちょっと失敗してしまいました」

えへへ、と苦笑いするメティス。いい笑顔だ。

「ハツハツハ、そこは嘘でも大成功って言う所だよ。まあ無事で何よりだ……………ん？ お前さん見えない顔だね」

「俺はビヤクヤ」カムイです。旅をやめようとしている旅人ってところですかね」

「ビヤクヤさんすつごく強いんですよ！ 助けてくれたのでお礼を兼ねて案内したんです」

買いかぶりすぎだ。魔改造はされたけど。

「そうかいそうかい。アタイはりザ。鍛冶屋の棟梁やってるよ。武器、防具のことならアタイに聞いとくれ。それと情報とか欲しいなら村長のトコまで行くといいさ。ティメスことも心配してたし……………おや？」

なにか不思議に思ったようにティメスを見る。なんだ？ なにがあった？

「ふむふむ……………なるほどねえ」↑女の勘

「！！」↑気付かれたことに気付く女の勘

「ほえ？」↑鈍感

「まっ頑張りな。アタイにしてもメテイスが「おーい大将！ 助けてくれ！」あいよー！ ちょっと待ってな！ すまん、アタイも忙しいから」

「構いませんよ。またあとで話を聞きたいんですが、平気ですか？」

「この仕事終わったらしばらく暇だからな。いつでもいいぜ」

「じゃあ、またあとでですね。お仕事頑張ってください」

「おう。メテイスも頑張りな」

「もう！ からかわないでください！」

「ハッハッハ！」

そう言つてリザさんとやは奥に戻っていった。直後に「打ち方が甘い！！ もつと腰入れろ！！」と怒号が飛んできたが気のせいってことにしよう。うん気のせいだ。

「……豪快な人だな」

「リザさん凄いですよ。男の人より力が合つて、若いのに鍛冶屋の棟梁になつたんです。本人は女らしくないって悩む時もあるそうです」

悩みを抱える性格にはとても見えないが、会って間もないので全て

を見抜くことはできない。

しかし恋する乙女みたいな悩みだな。今度鎌掛けてみるか。

「そのリザさんに村長に会いに行けって言われたんだが」

そうですねっ、と元気よく答えて案内してくれる。妹を持った気分だ。

実際2つ下みたいだし。俺18ね。

「そっいやメティス」

「なんですか？」

「さっきリザさんが言いかけたところってわかるか？」

聞いた途端、茹でダコのように真っ赤になるメティス。

「し、知りません！ 知ってるとしても教えません！」

どうやら知って入るらしいがこの状態では教えてくれないだろう。
諦めも肝心。でも聞きたいなあ。

さて、件の村長さんに会いに来たわけだが、なんというか妖艶って言葉はこの人のためにあるんじゃないかと思うほどの美人さんだった。

「おかえりなさいメティス。ドスランポスがでたそうだけど大丈夫だったの？ それと始めましてビャクヤくん」

「助けてもらったから無事です。あれ？ なんでビャクヤさんのこと知っているんですか？ 知り合い？」

俺が聞きたい。この世界に来てまだ半日程度しか経っていないから知り合いなんているはずがない。神様の仲間だったら納得できるが、そんな回りくどいことはせず、直接何か言ってくるはずだ。短い付き合いだが断言できる。

返答に困っていると村長さんから答えを出してくれた。

「私には自然と話すことができるのよ。ビャクヤくんのことはこの子とのお友達が教えてくれたわ」

そう言つてすぐ後ろにそびえ立つ桜の木を撫でる。なるほど、ドスランポスのことをいち早く知ったのもその能力お陰か。イイナ、便利だな。

「改めて自己紹介させてもらうわね。私はシルヴィーエティオラ。皆からは村長さんとかシルヴィさんって呼ばれているわ。情報屋として生計を立てていた時期もあるからいろんな情報を持っているわよ。困ったことがあつたら遠慮なく言つてちょうだい」

「俺はビヤクヤカムイです。大体の事情は既に知っていそうなので省かせてもらいます。今後ともよろしく」

「はいよろしく。この村に住むのでしょうか。村の中を見ているといいわ。これからお世話になる施設もありそうだし。メティス、案内してあげてね？」

ここに住もうと決めたことでさえ筒抜けですか。侮つてたな。

この人は絶対敵に回さないようにしなければ。

「ビ、ビヤクヤさんいつ決めたんですか!？」

「決めたつて……なにを？」

「ここに住むつて話ですよ!! で、いつごろなんですか!？」

「まあ、メテイスに出会ってからだな」

「！！ ふふ、そうですか」

？ やけに機嫌いいな。

「あらあら」

何故か村長さんまで機嫌がいい。生前？から思っていたことだが女の考えてることはわからん。

じいちゃんからも「お前は普通の洞察力は高えのに女心はわからん奴だのう」と半ば呆れられたんだが、俺にとってはエニグマ暗号機使ってもわからない代物だろう。断言できる自分が悲しい。

「じゃあ、私のほうで手続きしておくわね。ハンターになるんですよ？ そのこともやっておくわ」

……この人には敵わないな。読心術でも使えるのか？ 使えるといわれても納得してしまう。『村長だから』という理由で何でもできそうな気がする。というかできるに違いない。

「メテイス、さっき言ったとおり案内してあげてね？　しばらくしたら集会場に行くように。受付の子に話を聞けば大抵のことはわかるから。それじゃあ私は書類操作してくるわね」

「わかりました……書類操作？」

「気にしたらダメだ」

「そうですか……」

「はい、ここが雑貨屋です。狩りに必要なものはここで売ってます」

「揺りかごから墓場までって何か違うね？」

「普通だと思いますよ？」

「なんでだよ……」

「ここは武器屋です。基礎武器と基礎防具が売ってます。貸し出しや預かりもしてくれるんです！」

「基礎武器で輝剣リオレウスとか……」

「どんな仕入れルートなんでしょうね」

「知ってはいけない闇だろうな」

「さっき来た鍛冶屋です。リザさんの腕は世界でもトップクラスなんです。遠くから来る人もいますよ」

「へえ、凄いいじゃないか。俺のも見てもらっかな」

「リザさんは珍しい武器は徹底して研究しますからね。もしかしたら流通するまでに量産するんじゃないんですか？」

「刀の扱いは難しいからな。切れ味を追求した結果かなり脆いし」

「わたしも使ってみたいなあ……」

「そんな目で俺を見るな」

「訓練所では多くのハンターを送り出しています。わたしも卒業生です」

「の割にはメンタル面で脆い気がするんだが」

「い、言わないでくださいよー!!」

「まあ、訓練すれば一人前になれるな。あとで見てやるよ」

「……（ボツ）」

「？」

「ユクモ村の名物、温泉です!!」

「デカイな」

「村一番ですからね。個人で引いている人も居るそうですが、皆と一緒に入った方が楽しいですよ!」

「じゃあ、一緒に入るか？」

「なっ! からかわないでくださいよ!」

「ハハハ、冗談だ」

「……冗談じゃなくてもいいのに……」

「何か言ったか？」

「なんでもないです!!」

こんな感じでざっと説明してくれた。忙しそうだったので話などはあとで聞くことにしよう。

そして伝説へ……じゃなくて集会場に来てみた。

ドアを開けたら、あまりの活気の良さに圧倒される。

テーブルを囲んで酒を飲む者、クエストに成功したのだろうか大いに喜んでいる者、意味もなくはしゃいでいる者等々。元氣の大安売りかって程の盛況っぷりだった。

聞いてみると、毎日こんな感じだという。

「まずは受付さんに話を聞くのが先決ですね」

足早にカウンターに向かうメティス。ホントにハンターって感じがしないな。いいところお手伝いに来た子供だ。

「ビャクヤさんー、こっちですよー」

飛び跳ねながら呼ばんでも聞こえるって。何故そんなに急ぐんだ。

「初めまして、ビヤクヤ^{II}カムイさんですね。村長からお話は伺っています。私はサーシャといいます。ハンター登録でよろしかったですでしょうか？」

サーシャと名乗った受付嬢は既に村長から話を聞いていたようだ。ハンター登録まで話が進んでいるとは思わなかったが、説明しなくて済んだのは嬉しいのでスルーすることに。

メテイスと同じ年くらいか？

「そうだね、なにか書く必要のある物あるの？」

「はい、え〜っとですね……これです。こちらの書類の空欄を埋めてください」

文字が読めるのは意外だったな。あの神様がいじってくれたのか。ここにきて文字が読めませんなんてことになったら凄く面倒だろう。

「ふむふむ……ほい、こんなもんでいいか？」

「ええ、大丈夫です。通常、新しいハンターはH R 1からですがビヤクヤさんはH R 3に飛び級です。村長が働いてくれたので。ドス

ハンターランク

ランポスを瞬殺したそうですね」

「随分といきなりだな。実力はともかく知識なんてほとんどないぞ」

まあ、ゲームやっているけどそんな知識はあまり役立たないだろう。
2次元と3次元（現実）の区別をつけるのはゲーマーとしての最低限の礼儀。

「大丈夫と踏んだのでしょう、ハンターの知識はメティに聞けと言
ってましたよ？」

「……なるほどね」

人に教えるというのは非常に難しいことで、自分がその物事をしつ
かりと理解しなければ教えることはできない。逆に言えば、教える
ということ自分で自分が理解する足掛かりにもなる。村長さん、まだま
だ未熟なメティスを成長させる意味で言ったのだらう。抜かりねえ
な。

こうして晴れて俺はハンターの仲間入りをした。新米ハンターが誕
生+そいつは無茶苦茶強いつてもあり、集会場に居合わせた全
員に質問攻めを食らう羽目になった。

で、流されるがままに腕相撲大会に……

ど う し て こ う な っ た (本日
3回目)

く回想シーン終わりく ↑なげえよ

突如始まった腕相撲大会に巻き込まれ、細身のクセに優勝。まあ、中身はラカンさんだもんな、負けるはずがない。

ひとしきり騒いだので満足したのか、個人個人の作業に戻っていく。俺とメティスは軽食を取ることにした。

「やっぱり凄いですね!!」

「鍛えてるかなら。あとは力の使い方だな。修練積みばメティスにでもできるさ」

「じゃ、じゃあ教えて貰ってもいいですか!？」

「もちろんだ、いろいろと恩があるし。しばらくは身の回りを整理したいからお預けだけだな」

「はいつ!」

そのときの俺はまだ知らなかった。村長さんの仕事の早さを……
…

第3話「到着、ユクモ村」（後書き）

あれ？　なんで1話1話の長さが極端なの？　バカなの？　し（ry

読んでくださりありがとうございます。

一瞬シリアスっぽかったですが結局はギャグですね^^；

調子いいので更新速度は早め。いつまで続くか……

第4話「歓迎の宴」(前書き)

～ WARNING ～

この物語 (r y

ゆっくりしていったね

第4話「歓迎の宴」

「なあメティス、確認するがここ空き地だったんだよな？」

「う、うん。村の拡張作業したときに出来た空き地だった……はず……」

「……これ夢でもないよな？」メティスの頬つねってみる

「ひはいひはい……痛いってことは夢じゃないですよ……うう……」

「じゃあなんで家が建ってたんだ？」

俺たちの目の前には立派な一軒家がそびえていた。『ビヤクヤくんへ』という張り紙付で。

ここで状況整理を試みよう。

集会場で軽食を取っているとサーシャがこちらに来て「空き地に行ってくださいと村長が」と伝えてきたのでササッと済ませてその空き地に案内してもらつと……

家が建っていたんだなこれが。曰く、昨日まで空き地だったらしい

が、俺が来ることを見越してのまさかの予知か！？

村長ゆえ致し方なし。

以上。整理終了。

「村長つて……何者？」

「昔はハンターやってたそうですが、途中で飽きたらしく村を起こしたと」

「暇つぶしが村おこしとか……半端ねえな」

俺は村長さんの能力を侮っていたというわけか。

張り紙を手にとって見る。

『ハンター手続きは無事に出来たようね。私は用事が出来たからドンドルマへ行って来るわ。この家はハンターになった祝いということでプレゼントね。好きに使っていいわ。明日には戻るので話はその時に。あ、温泉引いておいたわよ。私の知り合いの大工、仕事が早いでしょう？ シルヴィーエティオラ』

いい仕事しますね大工さん。村長と出会ってから2時間とそこらで家を組み立てるなんて、建築法に触れてないか心配です。

『追記：手抜き工事はしてないから安心してね』

村長のもつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

とはいえ折角建てて貰ったのだ、メティスを促して中に入る。

中かというと、どう見ても純和風の造りです。凄いな、畳完備は勿論台所には釜戸もあるし、囲炉裏もある。俺は今、モーレッツに感動しているッ……！

「珍しいですね。なんですかコレ」

「畳といって故郷の特産品だ。硬くもなく柔らかくもない床だな」

「てことはシルヴィさんはジャクヤさんの故郷に似せて家を建てたんですかね」

「そうなるな……俺の故郷の特徴、誰にも話してないけど」

「……わたしが言うのもなんですが、シルヴィさんって一体……」

「俺に聞かないでくれよ」

＼メテイス SIDE＼

ビヤクヤさんを村に案内して以来、驚きの連続だった。

シルヴィさんに事情を話したあとハンター登録をするために集会場に言ったんだけど

「通常、新しいハンターはH R 1からですがビヤクヤさんはH R 3に飛び級です。村長が働いてくれたので」

登録してもうH R 3!?

いきなりわたしを越えちゃった……早く横に立てるようにガンバロ
！！

あとで聞いた話だけど、本当はHR9にしたかったらしいけど流石
に無理だったって。

いきなりG級は怪しまれるらしい。

この物語の基礎は3rdと2ndGですが、2ndG分が多めで
す。故にHR9が最高になります

「ハンターの知識はメティに聞けと言っていましたよ？」

正直、この言葉を聴いたときには無理だと思った。

わたしのような駆け出しハンターがG級になってもおかしくないビ
ヤクヤさんに何かを教えるなんてできない。

それでもビヤクヤさんは、

「師匠は弟子を育て、弟子は師匠を育てるんだよ」

と意味深長な言葉を掛けてくれました。わたしでも何か教えてあげることができるのかな……

一抹の不安はあるけどしつかりしていかないとね。

ハンター登録が完了した後、皆珍しい格好をしているビャクヤさんに興味が沸いたのか、何故かいきなり宴が始まってしまいました。楽しければいいって考えの人が多いからね、この村。

もつと理解できないのが腕相撲大会。男の人ってなんでああいうの好きなんだろう、勝手も負けても笑顔なのは心の底から楽しんでいる証拠だと思う。いいなああいう雰囲気。

その渦中にあるビャクヤさんが汗一つかかず、呼吸を乱さずに対戦者を負かしているのを見るとやっぱりこの人は規格外だと思う。力自慢のゴウさんもあっさり倒してるし。

なんでも力の使い方みたいだけど難しいのかな？

気疲れしたのか、やれやれといった感じで帰ってくるビヤクヤさんに思い切って頼み込んでみる。

「じゃ、じゃあ教えて貰ってもいいですか!？」

「もちろんだ、いろいろと恩があるし。しばらくは身の回りを整理したいからお預けだけだな」

「はいっ!！」

ふふ、ビヤクヤさんと一緒に修行できるなんて今日は本当にいい日だな

そうして軽食を取っていたらサーシャちゃんがシルヴィさんからの伝言を持ってきて、伝言通りに空き地に行った。

「なあメティス、確認するがここ空き地だったんだよね？」

「う、うん。村の拡張作業したときに出来た空き地だった……はず……」

「……これ夢でもないよな？」メティスのほほつねってみる

「ひはいひはい〜痛いってことは夢じゃないですよ……うう……」

「じゃあなんで家が建つてんだ？」

シルヴィさんの恐ろしさを改めて思い知った事件でした。

促されて中に入ってみると、珍しい造りになっていて、ビヤクヤさんの故郷に限りなく近い（というより、完全一致）そうです。とても和むいいお家。おまけに温泉まで付いてると聞いたときは、すつごく羨ましかったです。

ふむ、どうやって造ったとかどうして故郷を知っているとか疑問は尽きないが考えてはいけないのだろ。この世には知らないほうがいいことはたくさんある。

今日は流石に疲れた。死んだと思ったらモンハンの世界に飛ばされ、ドスランポスをサクッとやって、気付いたら家が出来ていた。波乱万丈人生もいいとこだ。

「そうだなあ、今日は休みたいから細かい案内は明日でいいか？」

「わかりました。じゃあ、明日の朝また来ますね」シヨボン

「頼んだよ。俺は朝弱いから勝手に入って叩き起こしてくれると嬉しい。合鍵もあるようだし渡しておくよ」

「は、はい／＼／」

なんだ？また明日と言ったときにはシヨンボリしたように見えたが合鍵渡したら真っ赤になったぞ？

上機嫌ならいいか（↑激ニブ

「また明日」

「困ったことがあったら何か言ってくださいね！..」

元氣よく去って行った。

さあて、まずは何をするか。

「部屋の確認が定石かな……………生活に必要な最低限のものが揃っているとは驚きだ。服に関してはやっぱり道着だし。まあ、この世界の服を渡されても着方わからんからありがたいが……………なんだかなあ」

ともかく、生活に困ることはなさそうだ。食料も材料が一通り揃っているし。でも、なんでだろうな、この揃えられた材料もこの世界での普通とは違う気がする…………

「まあ材料が見慣れたものってのはラッキーだというべきか。調理道具も一通り揃っているようだし…………そろそろ夕食の時間だし、作るか」

幸か不幸か家では昔から俺が台所に立つことが多く、大抵のメニューなら日本食に限るが作ることが出来るし、味もそこそいいと自負している。作れる理由としては家のものが意外とめんどくさがりということがあるからだ。ダメだ俺の家族。

少年調理中

「こんなもんでいいか……いや、よくねえよ。なんでこんなに作ってたんだよ食いきれない。ハハッ、俺って意外とバカだねえ。食材を無駄には出来ないが保存しようにも冷蔵庫なんてあるわけない。久々だからって羽目をはずしすぎたorz」

詰んだ。

「……食つか」

メニュー

- ・ご飯 (かなり多い)
- ・味噌汁 (とても多い)
- ・肉じゃが (凄く多い)
- ・魚の照り焼き (笑えるほど多い)
- ・おひたし (呆れるほど多い)
- ・うどん (泣けるほど多い)

定番だが括弧を付けたとおり一品一品の量がとてつもない。こっちはフードファイターじゃないんだぞ。

どう片付けようか数分思索して結論、1人食いきれないなら人数居

ればいいんじゃない？

「それがいいな。メティスは犠牲の筆頭だな。あとは集会場にいたヤツらでも呼べば一瞬にしてこの多さが消えるだろう。問題は――」

どうやって呼ぶか、だな。

メティスや村長はお礼としていけるがあのハンターさんたちは呼び出す理由がないし、そもそも居る場所知らない。

新たな問題に痛めていると……不意に扉を叩く音を聞いた。

「なんだこんな時間に？メティスか？」

扉を開けるとメティスがいた。うん、メティスがいた。その他大勢を引き連れて。

「こんばんわビャクヤさん！！遊びに来ました！！」

「「「「「おおー！！！！！！」」」」」

「はい？」

結構な人数が居た。いやなんで？と顔をしかめっていると村長さんが出てきた。

「こんばんわ、いきなりごめんなさいね。でも大変そうだったから、つい……ね？」

この人、料理のこと知ってたのか。その上でこんな人数呼んだのか。

「ちなみに何時頃から？」

「そろそろ夕食の時間だし、辺りからかしら」

「それは木々が教えてくれたものですか？」

「ええ」ニツコリ

「じゃあ止めてくださいよ……」

おもしろそうだったから、で一蹴。この人マジ怖い……

「いいじゃないそんなことは。ここじゃ狭そうだから集会場に行くわよ。手はずは整ってるから」

「これ全部あんちゃんが作ったのか？味は勿論のこと量もすげえな」

「ど、どうも……」

「あとで作り方教えてもらいましょ。メニューに追加しても問題ない一品ね」

「ガツガツムシャムシャモグモグ」

「これがビヤクヤくんの郷土品なのね、美味しいわ」

「おう！魚がなくなつたぞ！誰か持ってきてくれ！！」

「はいはい！今行くよー」

「ビヤクヤさん……強いし料理も出来るし……凄いなあ」

「ほんとね、メティはそんなビヤクヤさんのことが好きなんですよ？」

「うん……ってなんてこと言わすのサーシャちゃん！」

「ハッハッハ、やっぱりアタイの目は確かだったか!!」

「リザさんもからかわないでください!」

その夜は、村をあげての宴会となった。

第4話「歓迎の宴」(後書き)

暴走した結果がコレだよ!!

次回か次々回辺りから狩りに行かせたいですね。

タイトルに宴とありますが最後にちょっとでてきたくらいとかどうしてこうなった。

第5話「宴の後、怪しい雲行き」(前書き)

～WARNING～

こ)ry

行き当たりばつたりの結果がコレorz

第5話「宴の後、怪しい雲行き」

大量の料理を作ってしまったがために始まった宴会は深夜を回つても続いた。

呑みすぎた奴（腕相撲をしたゴウさん等）や遅くまで起きていることが出来ない人（メティス等）は寝ている。というより今現在起きているのは俺を含めて7人しか居ない。そして村長さん？ あなたゴウさんと呑み比べしてましたよね？ 豪快に呑んではいなくせに巨漢のゴウさんを潰すってどんな構造しているんですか？

出会ってから1日と経っていないが、この人には永遠に敵わないだろう。いろんな意味で。

「皆寝ちゃったわ。軽く片づけしてこの子たちを運ばないとね。ピヤクヤくん、悪いけど手伝ってくれるかしら」

「もちろんですよ。それにしても随分と散らかりましたね。片付ける身にもなつて欲しいもんです」

「あなたも一緒になつて騒いでたでしょう？」

「仕方ありませんよね、折角の宴会なんですからむしろこの程度で済んでラッキーです」

はいコロつと意見変えますよ。所詮18年しか生きていないのだ、年寄「ビヤクヤくん？」年上のお姉さんの言うことに勝てるはずがない。亀の甲より年の「ビヤクヤくん？」

なんでもないっす。

余談だが、俺が作った料理だけじゃ全く足りなかったのでキッチンアイルーたちが非常によくがんばってくれたらしい。様子を見に行くと「しばらく起こさないでくださいニヤ」と言っただけ全員バタンキュー。激しい戦争だったようだ。

そんな影の功労者を思い偲んでいると村長さんがアイルーをたくさん召還したようだ。床から沸いたように見えたのは気のせいだろう、気のせいだってことにしておこう、気のせいだ。

「ニヤ！ 村長さんどうしましたかニヤ？」

リーダー格のアイルーが声を出す。トップに相応しい風格をしており、毛並みの美しい銀色なこのアイルーは村長さん（atハンター時代）の右腕らしい。カッコイイ。

俺も雇ってみようかと思った瞬間だった。

「あなたたちは協力して倒れている人を家まで運んであげて。私た

「ちはここを片付けておくから」

「了解ニヤ！」

無数にグループを作って手際よく村人を運んでいく。ここに居る（倒れてる）人の大半はハンターで、ハンターの大体は巨漢なので大変そうである。手伝わないけど。

「ギニヤッ！」

あ、潰された。

「見ているのもいいけど早く片付けるわよ。このままじゃ朝になっちゃう」

「あ、はい」

手分けして片づけを始める。散らかってはいるが物は壊れていないし食べ物をごぼしたわけでもないのでもうそこまで苦労なさそうだ。

手分けして片づけをし始めて1時間が経つだろうか、少人数だが元より家事が得意な人間が残ったのが幸いして特に何事もなく終わった。

「じゃあ私は行くわね」

「あ、はい。わざわざ宴会を開いてくれてありがとうございます。楽しかったです」

「お礼を言うのはこつちよ。あなたが来てくれたお陰でメティスは助かったし……それにおもしろいものも見せてくれたしね」

「おもしろいもの？……なんか見せましたっけ？」

「ふふつ、朴念仁なビヤクヤくんにはわからないだろうけど、とてもおもしろいことになりそうよ」

相変わらず不思議な人である。

村長さんが帰ったあと、村人を運んだアイルーたちが疲れ切った様子で「ボクたちもかえらせてもらうニヤ。旦那さん、また明日ニヤ」と言ってバラバラになっていく。

宴会の生存者も大きなあくびを漏らしつつ「また明日」と声を掛けてくれた。

それだけだったらいんだ。

「村長さん、あなた一体何を企んでる？」

思わず声が漏れる。なぜなら今俺はメティスの隣に居るからだ。それだけ聞けばなんでもないが、現在の場所はベッド。かなり（倫理的に）ヤヴァイ場所である。

銀色のアイルーに頼まれたのはいいんだ。家の場所も教えてくれたから問題ない。

問題なのは帰ろうとした時にメティスが俺の手を離してくれなかったことだ。こんな力がどこにある？　ってくらいの怪力で。

更に問題なのは、親後さんが了承してしまったというとてもじゃないけど太刀打ちできない点にある。

宴会の時でかなり仲良くなって、どうやらメティスの俺に関する秘密（無論わからん）を知っているらしい。手を握られて困っている俺に対して

「じゃあ一緒に寝てくれれば」

という爆弾発言をかるく言ってきたのだ。それに加え

「襲っちゃってもいいわよ」

というのほんとした母君から送られた言葉は親にあるまじき言動ではないでしょうか。

で、今に至ると言う。

俺にどうしろと？

かなり寝相が悪いから寝ている時に潰さないか心配なんだが。
(↑
ずれている論点

「うーん……ビヤクヤさん……」ガシッ

そんなことを考えているうちに腕一本拘束されました。

仕方ないのかどうかは考えないでおくとして、これからどうすればいいのか正解が見えない。かといって起きてるのもなんだしなあ。

「……寝るか」

考えるのをやめた。

くメティス SIDEく

チュンチュンチュン

「ふわぁ……朝かぁ……」

昨日の宴会のあと、いつの間にか寝てしまったらしい。起きたら自分の部屋に居た。

わずかだがビヤクヤさんに送ってもらった記憶がある。

「あとでお礼いわなくちゃ」

どんな感じでお礼を言おうか考えていると、ふと違和感を感じた。

右を見してみる。

そこには

何故か

ビヤクヤさんが

いた

「ーーーーッ!?!?!?!」

な、な、な、なんでビヤクヤさんがわたしの隣で寝てるの!?

「うーん……よく寝た。おはようメティス。昨日（の宴会）は楽しかったね」

昨日?

え? もしかしてわたし勢いのままビヤクヤさんとあんなことやこんなことを……?

ボンッ!!

「ふにゃ／＼／＼／」

「え、ちょ、大丈夫!？」

＼白夜 SIDE＼

「ふにゃ／＼／＼／」

いきなり湯だった!？

「え、ちょ、大丈夫!？」

「みゃ／＼／＼／」

あ、ダメっばい。朝から事件が起こったが一体俺が何をしたらって言

うんだ。なにもしてねえぞ。誰かこの事件の真相教えてくれ。

(どうみても貴方の言動が原因です本当に r y b y 作者)

「何か神の声を聴いた気がするがなんだったんだ今の」

「おーおはようビャクヤ君。昨日はよく眠れた？」ニヤニヤ

「あ、はようございます。ニヤニヤしないでくださいなんか気恥ずかしいです。それと娘の部屋で寝てってなに考えているんですかフランさん」

この人はフラン＝フロアディーテ。お察しのとおりメティスの母親で、俺にこうなるよう(メティスの部屋で寝るよう)仕向けた犯人でもある。どことなくリザさん+村長さんな匂いがある。

「あっはっは、まあ役得だと思って欲しいよ。こんな娘の顔も見れたことだし、アタシとしては充分だね。そうだ、伝言があつたんだ」

「伝言ですか？」

「そそ、リザからよ。なんでもカタナ……だっけ？ それを見せて

欲しいんだって」

そついや宴会の時に言ってたな

『ほーこれカタナってのか』

『そうです。【斬る】ということを徹底的に追求した武器ですね。その辺のモンスターよりよっぽど危険ですので気をつけて』

『存在感がすげえな。ビヤクヤ、これ明日にでもちゃんと見せてもらっていいか？ 興味が沸いた』

『構いませんよ。時間が出来たら呼んでください、明日は恐らく一日中暇なので』

刀を見せることは約束しているが俺がフロアデューテ家にいることを何故知っている！？

「朝ごはんは出来ているから食べていつて。あと今日もメティスのことよろしくね、いい経験になると思うから」

「了解です。朝ごはんまですみません。ほらメティスしっかりしろ」

「うにゅ／＼／＼／」

「……ダメか。仕方ない、運ぶか」ヒョイ

「おおーお姫様抱つことはやるね」

「からかわないでください」

＼メティス SIDE＼

ビヤクヤさんとお母さんが何か話してるけどまったく話が頭に入らないよ／＼／＼／

「了解です。朝ごはんまですみません。ほらメティスしっかりしろ」

「うにゅ／＼／＼／」

「……ダメか。仕方ない、運ぶか」ヒョイ

ひゃあ／＼／／／

い、いきなりすぎるよビャクヤさん／＼／／／

かすかに聞いた話だと、リザさんがカタナを見せて欲しいそうなので鍛冶屋に行くことになりました

何度かビャクヤさんが心配そうにこちらを見てたけど逆効果ってことを知って欲しいです……

（なお、様子がおかしいのでフランさんが問いただしたところ勘違いがあるとわかりました。念のためその勘違いを解消しておきました by 作者）

く 白夜 SIDE く

「調子でも悪いのか？ さっきからため息はいてるけど無理そうなら家に戻った方がいいぞ？」

「いえ、大丈夫です……（ただの勘違いだったとか恥ずかしすぎる……）」

「？ まあいいか」

さっきからメテイスが湯だったり惚けたり落ち込んだりしていて、メテイスには悪いが正直見ていておもしろい。

「おう！ 悪いなこんな時に！」

「おはようございますリザさん。刀を見たいといったときは流石は鍛冶屋の棟梁って感じでしたね」

「確かにアタイは珍しい武器を見るのが好きだからな。ところでさつきからメティスから負のオーラが出ているんだが……？」

「気にしないでください。それよりもなんでメティスの家に居るのを知ってるかを聞きたいです。……心当たりはありますけどね」

「アンタの予想通りだと思うぜ」

やはり村長、あなたでしたか。

「それでなんだが……そろそろいいか？」ウズウズ

「え、あ、はい。どうぞ。ついでに砥いでくれるとありがたいんですが」

「お安い御用だよ。……凄いな、カタナの中でもこれは異質なものじゃないか？ 持つ雰囲気が違う」

「やっぱりわかりますか。製作秘話が禍々しく、地獄の一振りなんて呼ばれ恐れられています」

「そうかそうか。たまにこういう武器が回ってくるけど、とても人が扱えるものじゃないのは武器に関わったものならわかるもんだ。こいつは覇気を隠しているが、それでも使えないことには変らない。そのの主になれるとは……アンタ、相当の手練だな」

「褒めてもなにもでませんよ。それに俺がコイツを使ってるのは相性がよかっただけですから」

「それにしたって凄いことだよ、素直に受け取っておきな」

「……………ありがとうございます」

「どういたしまして。これはスゲーな……………形状もちろんだが話の通り切れ味も半端ない……………どうやって作るんだ？……………いつかは作ってみたいな……………脆いといっていたがこれは三流武器よりは丈夫だぞ……………」
「ブツブツ」

「ビ、ビヤクヤさん……………なんか怖いよ……………」

全身全霊を持って同意しよう。なんでこうユクモ村の住人は一筋縄でいかないんだ。

暢気のことを考えている余裕ができるのは、サーシャが来るまでだった。

「あ！ メティにビヤクヤさん！ よかった見つかった！！」

「サーシャちゃん？ どうしたのそんなに急いで」

「説明はあとです！！ とりあえず村長のトコに行ってください！！」

明らかにヤバイ感じだ。何かが襲撃してきたと見た方がいい。相手によってはかなりの苦戦を強いられる可能性もあるから情報が欲しい。

「……なんだか切羽詰っているみたいだな。リザさん、戻ってくるまで見てていいですから研いどいてくださいよ！」

「ん？ああ、わかったよ」

「波乱ありあそうだな。めんどろなことになるきやいいが……」

第5話「宴の後、怪しい雲行き」（後書き）

（対談）

白「対談ってわけだがなにすんだ？」

作「さあ？」

白「さあってお前……まあいい。えつと読んでくださりありがとうございます。ございます。こんな駄文でも付き合ってくれる人が居るとは思わなかった」

作「ホントですね」

白「ちなみに作者はアホの子なのでその場のノリと勢いで書いている。故に構成とかフラグとか一切考えてないわけで、日によって出来栄えや長さがばらつくというアホっぷり」

作「orz。言い返せない。で、でも俺だって頑張っ」

白「黙れ」

作「（・・ω・・）」

白「作者の元気が続けばしばらく3日以内に更新できそうだとさ」

作「1週間以内と考えていたけど意外とタイピングが進んでびっくりだよ！」

白「……速度を求めた結果内容は犠牲となったのだ」

作「口を開けば酷評しかでないの!？」

白「これ以上どう褒めろってんだよ。ついでに報告すると作者はネーミングセンス皆無だ。何はともあれ頑張って書き続けるがいいさ」

作「なーんか納得できないけど失踪はしない予定なので突っ走りた
いと思います。みなさん、最後まで」

2人「「ゆっくりしていつてね!」「」

第6話「激突！ランボスの大群」(前書き)

＼WARNING＼

(ry

総合PV8000超え……だ……と？

しかもモンハン2次の週間ユニークアクセス順で2ページ目とは

本当にありがとうございます。これからも頑張れそうです

第6話「激突！ランポスの大群」

「シルヴィさん！ 一体なにがあっ たんですか！？」

サーシャに呼ばれたあと、とにかく村長の元へ走る。

「来たわね。 ちょっとまずい状況になつてね……」

「ランポスの大群がここに向かっている……間違っていますね？」

「「！？」」

おーメティスは当たり前だが村長さんまで驚いてるとは気分がいいな。 こういう意趣返したまにはいいだろ。

つてそんなことを考えている場合じゃないな。

「流石はビヤクヤくんね……その通りよ。 数にして200は下らない大群が……ね。 どうやってわかったの？」

緊急事態と言われて周りに注意を払っただけだな。 昔だったら大雑把にしかわからなかったが、魔改造されてからその気にさえなれば周囲2キロの生物の情報なら手に取るようにわかる。

ランポス、ここに来たばかりの頃雑魚と言っていたがそれは数が少ない場合だ。200ともなれば上位ハンターですら危険になる。

「わかってるなら話が早いわ。ビヤクヤくん、貴方にはランポスの大群を討伐して欲しいのよ。で、これは悪い情報になるのだけど……」

「実は……今この村にいるハンターは貴方たちしかないのよ」

「……充分だな」

「もしそうだとしてもやるしかないのだろう？ それに無駄ではあるが無謀ではない。まずは作戦を立てるぞ」

104

防衛というのはかなり難しい。一瞬でも気を抜いて進入を許せばそれだけで戦いが終わる。逆に攻める側は後ろのことを考えなくていいのだから楽といえば楽。

攻撃は最大の防御、とはよく言ったものだ。

「ビヤクヤさん、余裕があるってことはなにか秘策があるんですね？」

「ない」

「え！？」

「俺たちだけだしからないから作戦なんてほとんど意味ないって。まあ9割ほど俺が潰すからメティスは生き残った奴とかを倒してくればいい」

この戦いで魔改造がどの程度が確認を含めて全力でやらせてもらうでしょう。

「ちなみに門付近で戦うからな、覚悟するように」

「な、なんですか！？」

「万が一見逃した奴らが村に入れたら困るから、常に監視しておきたいんだ。それに背水の陣って知ってるか？」

「なんですかそれ？」

「やっぱり知らないか。簡単に言えばあとには退けない状況ってことだな。そして、状況が悪ければ悪いほど人は力を引きだせる。ま、死なない程度に頑張ろうじゃないか」

急ぎ足に門に向かう途中、いい感じに研ぎ終わった夜叉鴉を受け取り腰に携え、気を引き締める

おっと、かなり近づいてきたな。ドスランポス1匹でこの大群を支配するのは驚きだが、逆に言えばその1匹潰せばかなり楽になる。

さあ、開幕の時間だ。

メテイス SIDE

ビャクヤさんは策がないことが策と言っていた。それにわたしにも協力してもらうと。

HRが2とはいえ一端のハンターだ、ランポス程度ならなんとかやる……はず。

でも今回の場合だと数が違う。

正直不安だ。ビャクヤさんがいるとはいえ流れて来たランポスは私
が狩らなくちゃならない。そうしないと大事なものが壊される。や
らなきゃ……いけない。

ビャクヤさんも言ってくれた。

『確かにメティス1人じゃ無理だ。だから俺がいる。数のことは考えなくていい、目の前の敵にだけ集中しろ。だいじょうぶ、必ずで
きる』

[illegible]

無数の足音と共に聞こえるのは戦いを告げる鳴き声。

そこにはもうビヤクヤさんはいない。

…来た。

ここは任されたのだ。覚悟を決める。ユクモノ太刀を握りなおし、ランポスを見つめる。

絶対に、勝つ！

「やあああああああああ！！！！」

ビヤクヤさんを信じて、武器を信じて、訓練を信じて、

わたしは太刀を振るう――

（白夜 SIDE）

「邪魔だ！」

大群を目視確認してから一直線に突っ走る。

リーダー
頭は群れの後方にいるのが定石。

眼前の敵のほとんどを薙払い、ドスランポスを倒すべく群れに突っ込んでいく。途中で数匹向こうへ行ったが大丈夫だろう。

そうして走っていくうちに、こちらを危険視したらしい。群れのほとんがこちらに標的を定めた。

「ふん、逆にやりやすいわ!!」

斬る -

それでも足は止めない -

襲い掛かるものを蹴散らしつつ、目指すのはドスランポス。

「おまけだ、お前ら全員切り捨てる!!」

叫ぶと同時に構える。

「第六ノ型・空閃！」

気を練りこんでの一閃。メティスを助けたときの技術を『技』として極めたもの。

複数を相手にすることを目的とした真空の刃は一瞬にして50前後の命を奪う。この調子ならすぐ終わりそうだな。

群れと激突してからたった5分、すでにビヤクヤは180程のランポスを狩った。そして戦場は大きく変化する。

「おや、やっと出て来てくれたか」

『グルルルルル……』

ドスランポスが姿を表した。

試しに殺気を当ててみるが、流石はリーダー、この程度の威圧じゃ逃げ出さないか……もっとも、逃がすつもりはないけどね。

仲間をやられて怒り狂っているのか、向うから仕掛けてきた。

「参ろうか、群れの統率者よ。この村に襲撃をかけたこと、後悔するがよい。一撃で仕留めようぞ」

すでにドスランポスは目の前まで迫っている。この状態では上位ハンターですら直撃を免れない。

しかし、驚異的な身体能力に加え魔改造された体にドスランポスは触れることができなかった。

『ギイ！？』

驚くドスランポス。振り向けば、刀を仕舞おうとしている白夜が目に写る。

「第四ノ型 - 雷閃」

キン……

ユクモ村に襲いかかった驚異の首謀者は、鏗鳴りの音を聞くこと無く息絶えた。

メテイス SIDE

ビャクヤさんが飛び出してから数秒後、ランポスたちが攻め入ってきた。が数は少ない。

たぶん、ビャクヤさんが極力減らしてくれたんだ。

「やあっ！！」

こちらに向かってくるランポスを斬る。ビャクヤさんのように一刀両断とまではいかないものの、2、3回の攻撃で倒すことができた。

ここまで辿りついたランポスは述べ15匹。同時に相手をしたわけ

ではないので、わたしでも充分狩ることができる数だった。

つまり

「ビャクヤさんは約185匹倒したってことになるよね……」

改めてビャクヤさんの強さを知った日になった。

戦い始めて5分くらい経ったときかな、辺が静かになった。

「もしかして、もう倒しちゃったの……？」

いくら強いからといってそこまで早く……

「おう、お疲れさん。あとは片付けただけだな」

終わったようです。

「ビャクヤさん……」

「ん？ どうした？ 疲れたか？」

「いえ……それはなんですか？」

わたしはビャクヤさんが担いで来たものを指差す。

「ドスランポスだがそれがどうしたのか？ モンスターは売れると聞いたから先にドスだけでもと思ってね」

お金を拾ってラッキー程度のことにように話すビャクヤさん。

別にそれだけだったら間の抜けた質問をしない。普通荷車を使って運ぶけどそれも聞かないことにする。

「そのドスランポス、傷が見当たらないんですけど……」

そう。

ビャクヤさんが担いできたドスランポスには致命傷となる傷が無かった。

（白夜 SIDE）

「そのドスランポス、傷が見当たらないんですけど……」

もつともな質問だ。確かに俺が屠ったドスには傷が無い。いや、正確には『見えない』

倒すために使った『雷閃』とはただの抜刀術。ただ、その速度が非常に疾く、表面上の傷はピタリと閉じてしまう。内蔵は斬っているので息絶えるが、無理にでも開かない限り、刀傷を見ることはできない。

加えて使える臓器は斬っていない。

と説明したところ目を丸くされた。驚かれることにも馴れてきたな。

たださ、自分でもこれ程だとは思ってなかったんだぜ？

そもそも臓器の配置なんて知らないのに何となくここっぽいと思っ
てたらビンゴ。傷口だってここまで奇麗に塞がるわけない。自分で
自分に呆れたよ。

「とにかくさ、高値で売れるようあんまり無駄な傷は負わせてない
から誰かに頼んで捌いてもらおう」

メティスは困惑しながらもランポス回収作業を手伝ってくれた。

〽数日後 ドンドルマにて〽

「なんだ？ 随分と騒がしいな」

レイア装備に身を包んだ女性が怪しむ。

「少し聴き耳を立てさせてもらおう」

「……おい見たか？ユクモ村から売り出されたランポス」

「ああ見た見た。数が恐ろしいまでに多かったな。それに状態もいい。ドスランポスに至っては見た目、傷一つなかった」

「一体どんなハンターなんだよ」

「一つだけ言えることがある。ソイツは人間じゃない」

「はは、違いねえ」

「ふむ、おもしろそうだ。確かユクモ村と言ってたな……」

「ハンターズギルド本部」

「失礼します。隊長、どのようなご要件で」

「忙しいところすまない。なに、ちょっとばかり調査を頼みたくてね」

「調査、といいますと？」

「ユクモ村から届いたランポスの大軍は知っているだろう？ 仕留めたハンターの身辺調査だ。あれほどの実力を持ちながら無名というのはいささか不思議だからな。頼めるか？」

「了解しました」

こうして、本人の知らないところでいろいろと動き始めた。

第6話「激突！ランポスの大群」（後書き）

（対談）

作「はいどうも、引き続き読んでくださりありがとうございます。アクセス解析を見たら凄いことになって驚いた作者です」

メ「ゲストと呼ばれたメティスです。よろしくお願いします」

作「自分もついこの間まで読む側だったけどある小説に感化されて書き始めました」

メ「なんの考えもなく書き始めたから最初はどうなることかと……」

作「うぐ……ま、まあどうにかなってるからいいじゃないか」

メ「前回で書いた通りノリと勢いで生きている作者なので誤字脱字も非常に多いと思いますがご了承ください」

作「やめて！ 俺のライフはもうゼロよ！」

メ「ちなみにこの更新速度でいけるのは長くても8月一杯だと」

作「夏休み終わるからね^^； 学校行きたくないーやだー」

メ「駄々捏ねないでください。全国の9割の学生もそう思ってるんですから」

作「話は変わるけど今回で伏線モドキを放りこんでみた。自分の回収

率のテストを兼ねて」

メ「まあ作者のことだから回収はとうぶん先、下手すれば放置という可能性も……」

作「放置はない!!」

メ「放置『は』?」

作「……」

メ「……」

作「ダッ!!」

メ「あ! 逃げた!」

第7話「ドスラン波斯さん、3回目の登場になりそうです」(前書き)

W A R N (r y

この話を書き終えたのが午前5時。集中しすぎワロタwww

第7話「ドスラン波斯さん、3回目の登場になりそうです」

ラン波斯200匹の討伐という過酷な緊急クエストを成功させた俺はHR4に、メテイスは3になった。

このことに関し、

「わたしそんなに仕事してないんだけど……」

と謙虚なことを言っていたが村を救ったのには変わらない。最初こそ戸惑っていたがやはりランクが上がるのは嬉しいのだろう、最後には照れていた。

さて、身の回りが一段落したのでそろそろ正式にクエストでも受けようかなと思い始めた今日この頃。皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

俺は元気に、

「剣の軌道がブレている。もっと真っ直ぐに振るよう心掛ける。最初のうちは目先の速さに溺れるな」

メティスの稽古に付き合っていた。

あのランポス大騒動以来、メティスが「弟子にしてください！」と頼まれたので、乗り掛かった船と思い弟子を取ってみた。今日で2週間たつ。

メティスは刀を扱う才能が高いと言ってもいい。現に1カ月かかるものを半分で覚えてしまったのだから。本人に自覚は無いと思うが、ドスランポス程度だったら苦も無く倒せるレベルだろう。あくまで実力のみで見た場合だけだね。

メティスたつての願いもあり、扱う武器を太刀から刀へ近々変更するつもりだ。まだリザさんは造れないので俺がやることになる。いやー打ち方覚えといてよかった。

実はもうできてるけど。

俺監視の元稽古を行っているので動きはいい線いつてるし、徹底的に走り込みをさせたので体力なら上位2歩手前なのでぶっちゃけると渡してもいいんだが……

渡す前に試験としてクエストに行くことは決めているが、下位リオレイアに同行させるかドスランポスを1人で討伐させるか悩んでいるところだ。

前者はちよいと強い殺気に慣れさせ、後者は実力を発揮できるかという目論みがあるがどちらか片方を終えた時点で渡すので2つ終わってから、というのはできない。

え？ 理由だって？

いろいろあるが一番わかりやすいのはメティスが捨てられた子犬のような目でみてくるからだ。心が痛い……

そんなわけで今日も絶賛思案中。メティスには毎日恒例の走り込みをさせて時間を稼ぐ。

うーむ……

……

……

……

だあああああああああわからん！！！！

もう本人にどっちがいいか遠回しに聞くしかない！！！！

ちょうど帰ってきたので早速聞いてみる。

「なあメティス。今度クエスト受けようと思うんだが

1・ドスランポスの討伐

2・リオレイアの見学

どっちがいい？」

「自分で……ハア……倒すか……ヒイ……倒すのを……ハア……見
てるか……てことですか？……ゼエ……」

「そうだね。どちらでも俺の目論みとしては大差ないから好きな方
を選ぶといいよ」

「そう……ゼエ……ですか……ハア……ちょっと待って……ゼエ……
……ください……」

さすがに普段の1・5倍の距離だと息も絶え絶えだな。調子にのっ
て増やしすぎたか。

数分後

「ふう……落ちつきました。それで、クエストの話ですよ。……
そうですね、わたしだったらドスランポスがいいかなーって」

ドスランポスさん、3回目の犠牲になりそうです。南無。

「わかった。午前のメニュー消化したら発注しに行くか」

「わかりました!!」

ここしばらくはクエストを受けていなかったためか、妙にテンションが高いな。緊張されるよりかはいいか。

午前の稽古を終わらせ集会場に向かう。

扉を潜れば相変わらずの活気よさに頭が下がるよまったく。隣のメティスもメティスで、やったるぜ！ みたいな雰囲気醸しだしている。気合は充分だろう。

まあ、今日出発するわけではない。

説明された途端にシヨボンとなるがさすがに稽古の疲労が溜まっている状態だと危険だ。こればかりは譲れないな。

「あ、こんにちは。今日はどんなご要件で？」

「クエストの発注だよ。ドスランポスの討伐ってあるか？」

「ドスランポスですか……あ、ありますね。商人からの依頼だそうです。期限は1週間でクリア条件はもちろんドスランポスの狩猟。契約金は150zです。それでいいですか？」

「ああ、頼む。それと出発は明日にするから荷車の手配もよろしく」

「わかりました。これ、メティのためのクエストですよね（ボソ）」

「よくわかったな、その通りだ（ボソ）」

「洞察力はあるんですよ（ボソ）。そういえばパーティー組んだんですね。よかったねメティ」

「う、うん。ビヤクヤさんがいれば心強いもんね」

「褒めてもなにもでないぞ」

「あははー、クエストがんばってねー」

「これからにするか……」

「あれ？ 午後の稽古はしないんですか？」

「ん、ああ、明日が本番だからな。今日は休んでおけばいいさ。そうだな、腹も減ったし昼食にするか」

「それがいいですね。すみません、注文いいですかー」

「はいはいニヤ。おや、お二人揃ってデートですかニヤ？」

「ハッハッハ、それは嬉しいね」

「デ、デ、デートじゃないですー!!」

「まあまあ、仲良いことはいいことですニヤ。ご注文決まっていますかニヤ？」

「俺はサシミウオ定食で」

「わ、わたしは特産キノコのソテ・セット」

「了解ニヤー!!」

奥に引っ込むキッチンアイルーのジヨルト。どちらかというと接客を担当していて、仕事の早さに定評のある有名なアイルーだ。

料理が来るまでの間、メテイスをからかって時間を潰す。

それはそうと、どうやら俺はまだ会ったことのないハンターがたくさんいることに気付いた。ここに来るのは2日目なので当たり前かもしれないが。

最近のハンター事情は、なんかインモラルな人が増えてきて困っているそうだ。居るよな、どこの世界にも常識を知らないアホな奴。

（貴方は強さ的な意味で常識知らずのアホです）

「なんだろう、今すつごく斬りたい気分」

「物騒なこと言わないでくださいニャ。サシミウオ定食と特産キノコのソテ・セットおまちですニャ」

「わぁ……」

とても目が輝いているのは大好物らしい。

く食事風景はカットく

空腹も満たされたところで雑談でもしているところで先ほど話題にあったインモラルハンターさんご登場。皆さん、ブーイングで迎えください。

「やあ愛しのメティス。今日も綺麗だね」

あ、こいつインモラルじゃない。真性のバカだ。

「ビクッ」

声を掛けられた瞬間にメティスが誰でもわかるほど震える。わかってないのはこのおバカさんだけだろう。正直言っただけに相手にするのも面倒だから逃げ出したいのだが、狙いがメティスなんだから追いかけてくるのが目に見えてるよな……

「この前ランクが上がったんだって？　じゃあ今度イヤンクック討伐に行ってみるか？　ああ、心配しなくても俺が着いてくから心配しないでいいよ。じゃあ貼ってくるね」

相手の話を聞かない上に俺のこと完全無視ですか。小物臭しかしない。こんなやつにメティスを任せなれないな、本人も嫌がってるし。

「あ……あの……」

そうだ！　言ってやれ！　自分で運命を変えるんだ！　未来は僕らの手の中！！

「なんだい？　ああ、ドスガレオスで景気付けしてからの方がいいか。俺としてはどっちでも大丈夫だから心配しないで」

「いえ……そうじゃなくて……」

「なあジョルト、いつもあんな感じなのか？」

「そうですニャ。いつも向こうから言い寄ってきて強制的に感じてですニャ。毎回こんな感じだから皆可哀想に思っているけど実力もあるから性質悪いニャ」

「うわぁ……そいつは犯罪扱いで良くないか？」

「なまじレウスとか討伐できるぶん、そういうわけにはいかないんですニャ」

「なるほどね……仕方ない、少し見守るか。まあ、調子に乗ったら捻るけど」

「お願いしますニャ」

「わ、わたしもうクエスト受注しているんですよ……その……ビヤクヤさんと一緒に……」

よく言った！　あとは俺に任せろー（バリバリー

「ビヤクヤってこいつのことか？」

初対面の人間をこいつ扱いって礼儀がなってないな。そういうものは心の中で言うもんだ。

「初めましてだな、俺はビヤクヤⅡカムイ。少し前にハンターになった者だ。よろしく」

よろしくなんてこれっぽっちも思っていないが。

「ふん、俺はリカルド・アंक。お前のことは噂で聞いたな、ドスランポスを倒したんだって？　俺はこの前リオレウスを討伐した」

ああ、そうかい。

「で、そのレウス討伐を成功させたりリカルドさんがごいったご用件で？」

「簡単な話だ。レウスを倒した俺とドスランポスを倒したお前、どっちが強い？」

「話だけ聞いたらあなただろうね」

実際はドスランポス瞬殺だけだな。

「だろう。だからメティスの護衛役は降りろ。お前程度の實力だと彼女に傷を負わせかねん」

「そうか断る」

「そうそう、わかればいいんだって断る！？」

「ああ、俺が弱いからってあんたの言うことを聞く義理はないんで、ついでに言えば協力して狩るからこそその成長もあるし、傷なんて覚悟の上だろ」

「ぐっ……」

ぐっの音出た。

「そういう訳だから今回は引き下がってくれと嬉しいんだが、まだなにか？」

「う、うるさい！！ ドスランポスを倒したからっていい気になるんじゃないぞ！！」

ちっ、このままじゃ埒が明かねえな。確かにこのバカはそこそこ強いけど任せるつても嫌だし……しゃーないか。

「じゃあメティスのクエストに俺とあんたが付いて行くんでいいか？ こちらが先約だからある程度の条件は飲んでもらうが」

なに、基本的にはメティス1人に任せて本当に危ないときだけ手助けする、ということだ。

「おまえが仕切っていることが気に食わんがいいだろう、乗ってやる」

意外と話がわかる奴……なのか？

とりあえず話が纏まっただけよしとするか。メティスには悪いけど数多ある策の中で最善手なんだよ、許せ。その代わりといっちゃなんだが指一本触らせないから安心してくれ。

日程を教えてさっさと帰宅準備。なにか言おうとしてたけどできうにはぐらかして逃げることにした。

「すまんメティス、あんなことになって」

「いえ、ビヤクヤさんが居れば大丈夫です。わたし、頑張れます」

ここまで信頼されてるとは嬉しいね。この信頼に応えられるような師匠でいよう。

「じゃあ明日までしっかり休んでおくように。明日の朝に迎えに行

くから準備しておいてくれ」

「？ 出発は午後からじゃ？」

「ちょっと話したいことがあってね。悪い話じゃないから気負わなくていいぞ」

「はい……？」

「じゃあね」

「あ、さようなら」

さて、メティス用の刀を仕上げるか……

この仕事のお陰で俺は一睡もすることなくクエスト当日になった。まいった。

第7話「ドスラン波斯さん、3回目の登場になりそうです」（後書き）

作者のモチベーションが低いため後書きは省略させていただきます

次回もゆっくりしていいね

第8話「日本刀、雪燕」(前書き)

訂正

第7話「ドスランポスさん、3回目の登場になりそうです」において読者の皆様を混乱させかねない誤植がありましたので、既に直したところではありますが改めて報告させていただきます。

1行目↪2行目

「過酷な緊急クエストを成功させた俺はH R 4に、メティスは2になった。」

←

「過酷な緊急クエストを成功させた俺はH R 4に、メティスは『3』になった。」

第7話時点でメティスのハンターランクは3となります。

今後、作者の意図が汲み取れない、あるいは意味がわからない誤植がありましたらお手数ですがコメント及び感想欄でご報告下さい。作者側でもこのようなことを極力無くすように努力をしていきますので、今後ともよろしくおねがいします。

最後に、今回の誤植を指摘してくださった方に御礼を申しあげ、訂正とさせていただきます。

第8話「日本刀、雪燕」

一応初クエスト当日の早朝。体内時計で4時くらいか？

メテイス用の刀の最終調整に入っていた。

「ふむ……多少丈夫さを求めたから切れ味はそこまで追求できなかったけど、その辺の武器よりは圧倒的に斬れるから誤差の範囲だな。ついでに気を練りこんだからそう簡単には壊れないけど」

素振りをしながら確かめる。最初からメテイスに合うよう創り上げた一振りなので俺には反りが合わないらしく、どうも落ち着かない。

試しに空を斬る。

ヒュン……

辺りに響くのは緊張、そして静寂。

俺という未熟な者が打ったものにも関わらず、この刀は俺の呼び掛に答えてくれた。自分でも驚ほどの出来で、真理に一步近付けたのかと錯覚してしまった。

「いや、それはただの驕りだな」

自重気味につぶやく。

「あとは銘を刻んで出来上りだ。そうだな、兄弟剣なんだから雪燕【ゆきつばめ】かね。いやほんとネーミングセンスないな」

兄弟剣、と言ったのは夜叉鴉と同じ核となる部分が使われているからだ。

夜叉鴉を受け取った時に貰った鋼玉。これを使った。

「……よし、完成だ。果たして主に認められるかな？」

俺の不安をよそに、日は登る。

「メテイス SIDE」

クエストは多くないけど今までこなしてきた。けどこんなに緊張したのは初めてだった。

ビヤクヤさんが『試験』と言った今回のクエストにどんな意図が含まれているかわからないけど、真剣な眼差しからわたしを信じてくれるのが伝わった。リカルドさんが同行するのは意外だったけど、わたしはわたしに出来ることをしよう。

関係ないけどリカルドさん苦手なんだよね。なんかこう、視線が舐め回すような感じがして。

「メテイス、朝ご飯できてるわよー。おりてらっしゃいー」

「あ、はい」

そう言えば午前からビヤクヤさんが来るって言ってたけどなんだろう？

「今日が出発だったよね、無理だけはしないでよ。ビヤクヤくんがいるから大丈夫だとは思うけど」

「もう！　いつまでも子供扱いしないでよ。それでもハンターなんだよ？」

「親が生きてる限り子供はずっと子供なんだよ。ベーコン貰い」

折角とっておいたのに取られた！

この光景、ビヤクヤくんが見てたら「どっちも子供みたいだ」って言いそう。

「……ス、……ティス、メティス聞してる？」

「な、なにお母さん」

「まったく、ビヤクヤくんのことを考えるのはいいけど顔にでないようにしなさいよ」

そんなにわかりやすい顔してたの？

「そのビヤクヤくんだけど、来てるよ」

え？

「すみません朝早くから。あとおはようメティス。気付かなかったの？もつと周りに注意を向けたほうがいいね」

後ろにビヤクヤさんが忍びよっていた。驚過ぎて声がでない。

「い、いるなら言ってくればいいじゃないですか、なんでそう驚かすんですか」

「おもしろいから」

「お、おもしろいからってビヤクヤさん……」

「そんなことより話をしにきたよ、ここじゃなんだから」

「メティスの部屋でいいんじゃない？」

ちよっとお母さんなに言ってるの!？

「え、いやでも、流石に……」

ビヤクヤさんも困惑するのは当然だと思う。

「平気平気、見られて困るものはないし、既に一回部屋に行くことより凄いことしてるでしょ」

「ぐっ……」

あ、ぐうの音でた。というかなんでお母さんがわたしの部屋のことを知ってるの？

「反論ないなら行った行った、アタシは買い物に行ってくるから」

「お、押さないでよお母さん」

無理矢理部屋に押しこまれる。そして心の底から楽しんでいる様子で爆弾発言を放り投げた。

「初孫は男の子がいいな」

「「なっ！」「」」

「じゃあねー」

「……………」

「……………」

「気まずいよ誰か助けて。お母さんが出てっからお互い無言なこの空気、耐えれない。」

「なあメティス」

「ひゃい!？」

「話なんだけど……………」

「あ、あの！ やっぱりそういうのは早いというかちゃんと段階を踏んでからにして欲しいというか！ わたしたし一応知りあってから1カ月しかたっていないくて、でも1カ月あれば充分という意見もですね！ つまり、なんて言うか、その、あの……………」

「プッ」

「？」

「プハハハハハ、違う違う、そのことじゃないよ」

「目尻に涙を溜めてそう言ってくる。もしかしてわたし、また恥ずかしい勘違いを？」

「……………！（ボツ）」

「そんなところも可愛いけどね」

「か、からかわなくてもいいでしょう！」

「本心だつて。まあそれは置いといて本題に入ろつか……………はいこれ」

そういつてわたしの目の前に細長い袋を置く。

「なんですかコレ」

「開けてごらん」

そう促してくる。いかがわしく思いつつも素直に袋からだす。

そこには、

純白の鞘に包まれたカタナがあつた。

「これって……………」

「銘を雪燕、通常の刀よりやや長く、また刀身を多少太くすること

によつて丈夫にもなつたと思う。俺の気を練り込んでから、太くしないで、もうもう刃こぼれすらないよ」

「こ、これをわたしに……？」

「ああ、メティスの相棒だ。大事に使つてくれ」

一瞬頭が真っ白になった。

ビャクヤさんがわたしのためだけに作ってくれた。そのことを思うと涙が込みあげる。ほかに理由はあるけどわからない。

「今日のクエストは雪燕に認められる否か、も含めてるからな。つてどうした？ な、なんで泣いてるの？」

「い、いえ……ヒック……嬉しくて……わたしのために作ってくれて……エッグ……」

「そうか。そこまで嬉しんでくれると冥理につきるよ。ありがとう」

「お礼を言うのは……ヒック……こっちですよ……ありがとう……」

とても優しい顔で微笑むビャクヤさんは、わたしが泣きやむまで頭を撫でてくれた。

く 白夜 SIDE く

いきなり泣き出されたときは何事かと思ったが嬉し泣きだったとは
びっくりした。

刀を渡す際に当たって不安な部分はあるけどこの様子じゃ平気だな。
根拠はないがそう思えてくる。

泣きやむまで頭を撫でる。これはよく妹にやってたことで、すぐに
機嫌を治してくれたものだ。

「落ち着いたか？」

「はい、大丈夫です」

「わかった。説明続けるけど、雪燕でドスランポスを討伐してもら

いたいんだよ、1人で」

「1人ですか!？」

「実践してなかったからピントこないけど、メテイス実力は折り紙付きだよ。それに刀を使った本当の戦いに馴れて欲しいからね。まあ危なくなったら手助けするから大丈夫」

「わかりました! やってます!」

納得してくれてよかったよかった。

「まだクエスト出発まで時間あるから素振りでもして体を温めると同時に刀の重さに馴れておきな。稽古ようとは全然違うから」

出発まで軽く稽古に付き合っただけ時間を潰す。どうやらかなり扱いやすいと言っている。普段の模擬刀よりも軽く感じるらしい。相当相性がいいようだ。

お昼になった。

現在いる場所は集会場。ここで昼食を取ってから出発という段取りだ。

無論食事シーンはカット。ここでもジョルトがからかってきた。

「遅刻はしていないようだな」

はい、みんなのアイドル（笑）のリカルドさん登場。相変わらずの上から目線ですねさすがです。

あ、一応言っておくけど俺は彼のこと叩きのめそうなんて思っていないよ。

……誰に言ってたんだ？まあいいか。

「こんにちは。今日はよろしく頼むよ」

「お願いします……」

「俺に任せておけ、と言いたいが今回はメティスのためのクエストだからな。ビヤクヤとやら、せいぜい足を引っ張るなよ」

忘れてると思ったけど覚えてたのか。脳筋ではないらしいが発言がおバカさんだな。彼の個性ってことにしておこう。うん、そうしよう。

「ちなみに準備してきた？こっちはすぐにも行けるけど」

「当たり前だ。俺を誰だと思っている。そういえばメティス、武器変えたのか？何か珍しいな」

「今日はこの子のテストの意味で行くらしいから……」

どうでもいいが、リカルド相手だと借りてきた猫のように大人しくなるな。はてなくどうでもよかったか。

「まあいい。では出発しようか」

荷車に乗りこんでふと思う。今更なんだが帰りたい。この人相手にするのは疲れる。

だが非情にも荷車はユクモ村から遠ざかっていく……

第8話「日本刀、雪燕」(後書き)

作「対談コーナー!!」

白「随分とテンション高いな」

作「今回のゲストは、他のキャラがいまいち立ってないから主人公にきて貰いましたああああ!!」

白「落ちつけ(ドガツ)。とりあえずここまで読んでくださりありがとうございます。引き続き作者が猿の如く頑張っていくそうです。で、業務連絡があります。8月の13(土)から同月17(水)まで帰省することになったので更新が止まります。ネット環境が整っていないので。失踪するわけではないのでご安心を」

作「この間に4話前後電子辞書のメモ帳機能で書溜めをできたらいいなあ」

白「そういうわけではらくお休み(作者にとっては地獄)をいただきます」

作「業務連絡終了。話は変わるけど本来ならこの話でドスランポス討伐の半分くらいまで進むはずだったんだけど、どうしてこうなった」

白「さすがは行き当たりばったり。ちなみに聞くけど当初は何話で終わらせるつもりだったの?」

作「短編」

白「……」

作「……」

作「ダッ」

白「また逃げた。それでは次回もゆっくりしていつてね」

第9話「メティスの試験？」（前書き）

（ WA ） r y

予定より早く帰ってきました。とりあえず話ぶん書溜めができたので投稿します

第9話「メティスの試験？」

ゴトゴト揺られること半日。拠点となるベースキャンプについたころには日は沈んでいた。

「討伐に向かうのは明日にするとしてこれからどうする？」

「まずは飯だろ、お前が行け」

「断る。人に命令する暇があるなら自分で動けばいい。なんならコイントスで決めてもいいけど？」

はい、勝ちましたよ。コインの回転なんて止まって見えた。

「ちっ、わかったよ」

仕方無さそうにキャンプから出ていく。あの性格を何とかして改善すればいい奴にランク上げできるかもしれないのに。もったいない。

「あ、あのビヤクヤさん……」

「どうした？ 緊張しているのか？」

「それもそうですが、不安なんです。大型モンスターは初めてなの

で」

考えてみればメティスは圧倒的に実践経験が少ない。雑魚戦ならともかく相手は群れを統括するリーダーで、更に初めてなので戦い方がわからないようだ。しかも武器が最近変更したばかりの刀。

「心配ない。稽古で教え込んだのは対大型の戦法だから普段通りの型が通用する」

「で、でも……」

「緊張すると体が動かなくなるから自然体でいるといいよ。周囲の気配を察知するために多少の緊張は必要だけど」

「……………」

「俺が教え込んだんだから平気だって。それにメティスにはドスランプス程度だったら倒せる実力はある。あとは精神の勝負だけだよ」

「そうですね、クヨクヨしてたら勝てる勝負も負けてしまいますからね！」

「そうそう、その意気だ。せいぜい空回りしないように」

「うつ……いじわるです」

上目使い＋涙目＋いじけた声は並の男を一発でKOするだろう。俺は訓練で色香に動じないようにできている。

……なんか釈然しないな。

「なにボケっとしてんだ。アホかお前」

振り返れば大きな魚を持った真性バ……ではなくリカルド。

「まったく、お前のような奴がメティスの師匠だとは信じられないな。確かに実力はありそうだが」

ここに来る道中、10匹のランポス襲いかかって来ることがあつて、時間も勿体無いので俺が2秒で殲滅したからある程度の認識は改めてくれたたらしい。ついでに師匠やってることも話したら苦虫を噛み潰した顔をした。

「褒め言葉として受けとっておくよ。お、いい感じに焼けたな、食べよう食べよう」

捕った魚を豪快に丸焼きにして切り分け、食べ始める。焼く際にあらかじめ持ってきた香辛料や現地調達した薬草を使い一味違うものにしてあるから食べ応えは抜群だ。

「おいしい……」

「だろ？ 普通の丸焼きだと味気ないからちよいと手を加えさせもらった」

あからさまに不満そうな目を向けてくるリカルドはスルーさせてもらっ

く食事シーンは（ry）

食後の休憩ではそれぞれ思い思いのことをしている。

メテイスは本を読んでおり、リカルドは寝ている。というかどことなくふて寝な感じがあるのだが。俺は夜叉鴉の手入れをすることにしよう。

しばらくした後、なにかを思いついたようにリカルドがバツと起きあがってきた。

「おいビヤクヤ！」

「なんだいきなり？ 腹でも減ったのかい、食い意地が張ってるな」

「違うわ！！ 俺と勝負しろってんだ！！」

「へっ？」

思わず間拔けな声が出る。

「お前と俺、どっちが強いか決着をつけようじゃないか！！」

「別にいいけど、今から？」

「そうだ！さあ外に出ろ！」

わあ、やる気凄いなー。まあいい、軽く捻ってやるか。

「あの一大丈夫なんですか？」

「平気平気、明日に影響するダメージは残さないから」

心配そうに声をかけてくれるメティス。なにこの可愛い生物。

「覚悟はいいな！」

「はいよ。時間制限なしの一本勝負で相手が参るまでだっけ？」

「ああ、そうだ」

俺の質問に答えながら構えるのはリオレウスの赤い大剣。パワー自慢の大剣に技術に長ける刀が正面からぶつかれば不利。俺の場合は大剣だろうがなんだろうが真っ向から競り合って勝てるけどな。

「ビヤクヤさん、勝ってくださいね！」

「やるからには勝つよ、それなりに意地があるからな。じゃあ合図よろしく」

どうやらメティスは俺の味方らしい。憐れりカルド、頑張れ、お前は性格こそ残念だが前に進める奴だから。

「……始め!!」

開始直後に突っ込んでくるのはいいがそれは相手があまり俊敏でない大型モンスターに対する戦法だろうに。

地面を砕く一撃をサイドステップで避けて横腹に拳を密着。零距离から撃ち出して相手を吹き飛ばす。

だが腐っても上位。すぐさま態勢を直して横薙ぎの攻撃を繰り出しつつ距離を縮める。

その迫りくる大剣を力カト落として地面にめり込ませ夜叉鴉を首筋に当て試合終了。

試合時間3分足らずというプライドをズタボロにする結果となったがたぶん立ち直れるだろう。たぶん

「……強いですね、あんなにアツサリ……リカルドさんもかなり強いはずなんですけど」

「自分で言うのもなんだけど相手が俺だからな。俺に勝てたら弱い古龍だったらタイマン張れる。さて、実力差はわかってくれた？」

「……お前を人間のカテゴリーに入れてはいけないことがよくわかった」

デスヨネー

「満足してくれたところでもう寝ようか。これ以上起きてたところでなんのメリットはないし明日に響く」

「はい」

落ち込んでいるバカは放っておくとしてキャンプに戻って英気を養うことにする。

翌日

天気は快晴、湿度もちょうどいい。絶好のハンティング日和。

「さあ行きましょうビャクヤさん！！ わたしだってできることを証明しますよ！！」

「急がなくても敵は消えたりしないから落ちつけ」

「消えないけど逃げてしまいますよ！！」

「そうだけどさ……」

昨日の沈んだ顔が嘘みたいだ。このぶんなら倒せるかな。

「そろそろ行くか。昨夜調べてみたんだが、地図で言うところの辺に巣があつた。規模はそこまで大きくないから危険度は低いだろう。地形的にも戦いやすいし、なにより対象となるドスランポスは小さい部類だったから失敗することはないと思う」

「し、調べたんですか」

「ああ。情報がないとやりようがないからね。これは聞いた話だけど最狂の王者とやらがこの辺りに住みついているらしい、俺にはサッパリだから誰か解説頼んだ」

ここで解説を入れたのはさっきまで黙っていたリカルド。顔を見る限りメティスは知らないようだ。

「そんなことも知らないのか。最狂の王者つてのは最近になって現れた火竜、つまりリオレウスのことだ。ギルドの調査の結果ではありえないほど強いらしいな、G級ハンターのパーティーですらおい払うのが精一杯だそうだ」

なにそれ胸熱なんですけど、戦ってみてえ。

「情報提供ありがとう。説明も終わったことだしさっさと終わらせ
るか」

く??? SIDEく

退屈だった。

退屈とは猛毒だと言われているがよく実感できる。

この地に来てから猛者との対決があるか楽しみにしてたが齒向かう
者は皆弱い。

強き者を求めて様々な地へ行ったが私の渴きを潤す者は皆無だった。

人間どもの話しでは古龍となるものが存在するらしく、その場所を見てきたこともあるが時期が悪かったのであるうか、何もなかった。

我が望むのは強き敵。

異世界から来た人間よ、お前は強いか？

〔白夜 SIDE〕

「はあっ！ やっ！ ていつ！」

巢を目前としたところでランポスたちが来たので倒している最中だ。メティス1人で。俺とリカルドは少し離れた茂みで身を潜め、様子

を窺っている。

所々危ない場面はあったものの、全体としての動きはさほど悪くはない。が、合格点はあげられない。

だいぶランポスたちが減ってきた頃になってドスランポスさん3回目のご登場。拍手でお迎えください。

『ギヤアアアアア！！』

目が血走ってるし息も荒く怒ってるのが一目でわかる。けれど、怒りに身を任せれば強くなるぶん周りのことが見えなくなるのは必至。俺の流派にとっておあつらえむきの敵になる。

「余裕だね。……………！！」

強い殺気を感じた。距離がまだ遠いつてことはピンポイントで俺に向けたってことになる。そんなモンスターがいるとはな。こちらから出向いてメティス（トリカルド）から遠ざけるべきか？

そんな考えは一瞬にして打ち砕かれた。

『ギヤッ！』

まだ遠い、そう判断した敵が既に目の前に着地してドスランポスの命を奪った。

「ひっ……」

『グルルルル……』

まずい、標的をメティスに定めた。間に合うか！？

走りながらの抜刀。

「てめーの相手は俺だろうが！！」

ギリギリ間に合った一撃は奴を斬るに至らず弾くだけに終わった。

「メティス！ さがつてろ！ こいつは普通のリオレウスじゃない！！」

レウスにしては巨大すぎる体格。至るところにある古傷。赤いというより紅いという表現が合う色。他者を圧倒する威圧。

その全てが普通ではないことを語っている。

リカルドもそれを感じとり下がる。勝てないと本能が判断したのだらう。

「なるほど、アンタが最狂の王者か」

『グオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!』

けたたましい咆哮が森を揺るがした。

第9話「メティスの試験？」（後書き）

作「はい、というわけで9話目でした。噛ませ犬になってしまった
ドスランポスさんに合掌」

シ「ひどい扱いね。かわいそうに」

作「あ、村長さんいたんですか」

シ「ええ。名前がでてきた人を呼ぶのでしょうか？」

作「そうですけど……」

シ「細かいことは気にしないの。前書きで言った通り3話分連続で
投稿するからよろしくね」

作「とりあえず主人公の超人っぷりが書きたくなってこうなりました」

シ「メティスも不運ね、獲物を横取りされて」

作「ドスランポス戦をきっちり書くとどこで切っていいかわからな
くなりましたからね。後々活躍させるつもりです」

シ「楽しみだわあ」

作「ハードルあげないでくださいよ。それでは次回もゆっくりして
いつてね」

第10話「最狂の王者と最凶の人間」(前書き)

W r y

→の要らないんじゃないかと思い始めた今日この頃

どっちにしろもうすぐ消えそうですね^^;

直径が2mはあろうかというほどの火球を、音に届くかというほどの速さで撃ちだした。それ一つで古龍と張り合えるかね？ 古龍に合ったことがないので基準がわからないが。

おっと、こっち来た。

「温いわ！！！！！！！！！」

夜叉鴉を振ってかき消してそのまま『空閃』による斬撃を飛ばす。

『ガアッ！！！！！！！！！！』

お！？ 火球とぶつかって威力が減退したとはいえ咆哮一発で消されるとはショックだな。

直接潰そうとしたのかこっち突っ込んで来る。あの巨体に潰されれば終わりだな。怖い怖い。

跳んで回避。ついでに斬ってみるが堅すぎる鱗に弾かれる。半端な攻撃は通らないようだ。

尻尾で追撃を仕掛けて来るが、遅い攻撃は当たらんなあ。

と思っていた時期が俺にもありました。

空中で回避する際に更に上に跳躍した（人間じゃないですねbyme
ティス）のだが、その尻尾が急停止&急上昇した。途中で軌道変え
るとはさすがとしかいいようがない。

無論、避けれるはずも無く

「わあああああああああああああ」

直撃。うん、今で肋骨にヒビはいったな。

ちなみに今の激突で俺が吹っ飛んだ先にあつたのは崖だった。過去
形なのはぶつかった衝撃で崩れたんだよ。

「いつつ……おもしろくなってきたじゃないか」

崖（だった場所）から飛びだしながら飛んできた火球に突っ込む。
大爆発が起きたがこの程度、気にしたら負けだと思っている。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

「！！！！！！！！」

単発で効かないなら連撃だな。ゆうに100を越える斬撃は全てレスの体にぶつかる。

『グ、グオオオオ……』

よっしゃ効いてる。

『グ、グ、ガアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！』

わけないか。

重力により真っ直ぐ落ちる。ただ落ちるのではなくその勢いを利用した一撃をお見舞しようとしながら。

だが相手もそれを呑気に受けるはずはない。強靱な翼で迎え打つ。

ガギギギギギギギギギ！！！！！！！！！！

普通のハンター生活を送っていればまず聞けないであろう音を発しながらの鏖競り合いは、体格の差からか向うに軍配が上がった。

「ぬぐ……」

またも吹き飛ばされる。いい加減地上に足を付けたい。

「ならば、こつするまで!!」

空を蹴る。上ではなく下に向かって。

その際に放った攻撃は見事に尻尾を切断した。

『ギャオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!』

おそらくレウス自身が体験したことのない激痛、そして憎しみ。

その目で俺を睨む。

「そうだ、その目だ強き王者よ。憎しみに満ちたその目を俺は待ち望んでいた」

俺は歓喜にうち震え、夜叉鴉を構え直す。

「????」 SIDE「

我は歡喜に憎惡に憤怒に、この世の全ての感情を混ぜたものに震えていた。

目の前にいるのは小さすぎる大きな敵。普段なら取るに足りない存在のはずだった。彼らにはティガレックスのような力がなければ、ナルガクルガのような疾さもない。

だからいつもは虫を払うように殺してきた。

だが、今日の前にいる人間はなんだ？

火球を斬り裂き、尾の直撃も耐え、果ては我の尾を切断した。

クッククク……我が飢えを満たす相手が、この世界にいうとはな。

『そうだ、その目だ強き王者よ。憎しみに満ちたその目を俺は待ち望んでいた』

言っていることは理解できないが、敵もまた我と感情を抱いているのだろう。

楽しませてくれよ？

く 白夜 SIDE く

レウスが突進モーションに入る、が、させるかよ。

異変に気付くレウスは俺に咬みつこうとする。迫るのは命を完全に喰う王者の牙。

しかしだな、お前は知っているか？ 後の先という言葉を

「第五ノ型 - 瞬間」

完全に出遅れたはずの一撃は、この世界のどんな攻撃より速かった。

『ギャオオオオオ……』

瞬間、説明不要。名前でわかる通り速い。以上だ。雷閃と違つのは破壊力重視か速さ重視かという点だけだ。

まあこちらは音速なんて余裕で越えるけどね。

「ふむ、さすがに仕留め切れないか」

低い唸り声と共になんとか立ち上がるリオレウス。王者としての威権がここまでさせているのだろうか。

『ガアアアアアアアアアア！！！！！』

狂ったように吐き出すブレスは一瞬にして辺りを火の海にして視界を狭める。よもやとは思うがこの程度で見失うとでも？

レウスの考えは違ったようだ。

方向を180度変え、そのまま飛びたった。

「に……逃げた……だと……」

不利と思ったから逃げ出す判断を下すのは頭がよすぎる。さて、できれば今日中に決着をつけたいがあの人をどうするか。見たところ怪我はないようだしリカルドは腐っても上位ハンター。メテイスも俺とレウスの殺気に耐えられるから着いてくればいい勉強になるんだが。

意見を聞くために後ろに周りこんで驚かせるつもりで聞いてみるといい反応してくれた。

「どうする？ キャンプに戻ってもいいし付いて来てもいい。ただし同行した場合命の保証はできないけ」

「付いていきます！！」

即答ですか。すっげえワクワクしてるし。

「了解。アンタはどうする?」

「も、もちろん行くに決まってるだろ!」

絶対帰りたかったけどメティスが行く手前退くに退けなくなっ
たんだな。冷や汗が止まってないぞ。

「アンタも頑張るね。まあいいや。わかってると思うけど気を抜け
ば死ぬと思え。見るぶんにはいいが近付くな、巻込まれれば消し飛
ぶぞ」

警告をしてから飛んでいった方向へ歩を進める。かなり遠くまで行
ったから時間が掛かりそうだな。

「前々から思っていたんですがビヤクヤさんって本当に人間なん
ですか?」

ふとメティスはそんなことを聞いてきた。

「俺自身わからなくなってきた。調査の結果新種のモンスターですって言われても納得できてしまう」

「ハハハ……」

少なくとも人間は空中でジャンプしないと思う。死亡前は出来なかったからあの神様は大変な魔改造を施して이었습니다。

「いるな」

歩き初めてから10分くらい経ったときに鋭い殺気が突き刺さるのを感じる。他の2人は何ともないから標的は俺だけみたいだな。その方が後ろを気にしなくていいから楽だが、意識をそらせないのはめんどくさい。

『グルグルグルグル……』

「でてきたな。2人はさがっている……最終ラウンドだッ!!」

『ギャアアアアアアアア!!!!!!』

ん？ レウスの口になにか引っ掛かっているな。あれは確かモンスターが目眩ましに使われる……

閃光玉

投げると同時に光に包まれる。反応が遅れて少しくらってしまった。

「ハンターから剥ぎ取ったのかよ、厄介だな」

身の危険を感じたので目を瞑ったまま近場の木に飛び乗る。俺がいた場所にはレウスの巨体があった。突進をしたレウスは攻撃が外れたのが悔しかつたらしく吼える。

「やっと視力が回復してきたな。お前の頭脳には驚かされる。まあいい、次が最後の一撃だ」

こちらは一度地上に戻ってから縮地クラスのダッシュ。

むこうは一度首を下げてもう一度閃光玉を投げ、咬みつきに入る

「ア
イ
テ
ム
な
ぞ
使
つ
て
ん
じ
や
ね
え
え

え え
え え
え え
え え
え え
え え
！ え
！ え
！ え
！ え
！ え
！ え
！ え
！ え

！

[illegible]

戦いが始まってから鳴り響いた爆音の中でも最大の音を發したばかりあいで、最狂の火竜と最凶の人間の舞台は幕を閉じた。

「ギルド調査団 SIDE」

「なんですかコレ」

我々は隊長の命令でビャクヤ「カムイ」という青年の調査に来たのだが、最近になって現れた最狂の王者が討伐されたというのでその戦闘が行われた地に寄ることになった。

そこにあつたのは……いや、そこにはなにもなかった。

ここは森丘なので木々が茂る場所である。にも関わらず木どころか草すらそこにはない。

「いったいどんな攻防だったらこんなことになるんだ？ 地面が溶けて固まったのかツヤツヤしてる」

「古龍VS古龍くらいじゃないとここまでにはなりませんね。ソフィアさんはどう思われますか？」

ソフィア、と言われたレイア装備の女性ハンターはギルドの人間ではない。なんでも隊長と縁があるらしく、ビヤクヤという青年に興味があつて我々と同行している。

「もしこれが情報通りハンターが関わっているならば【神】と言ってもいいんじゃないか？」

それはそうだろう、その辺の竜ですらここまではできない。

私は調査書に『大地が消滅した』とだけ記し、目的であるユクモ村に向かうことにした。

第10話「最狂の王者と最凶の人間」(後書き)

リ「鍛冶屋を休んで来てやったぜ」

作「そりやどーも。10話目、読んでくださりありがとうございます」

リ「あり得ないバトルだったな。そういやバルバトスネタが多いがなんでだ？」

作「個人的にバルバトスさんは作者のお気に入りキャラクターなのでセリフを拝借させてもらいました。モチーフにした人物を出すのかは未定ですが」

リ「ふーん。そういや伏線回収だけと思いのほか早くできそうだな」

作「無理矢理感がありますが、こうでもしないと永久放置になるので」

リ「ご利用は計画的につてやつだな。話すこともないし終わりにするか」

作「そうですね。それでは次回も」

リ「ゆっくりしてってね」

作「ああ！取られた！！」

第11話「ギルドからの頼みごと」(前書き)

(r y

書溜め消化しました。

明日から課外がまた始まるので更新速度が遅くなりそうです。

頑張りますのでよろしくね！

第11話「ギルドからの頼みごと」

真実を知るものが広めれば確実に伝説として語り継がれる討伐戦が行われてから2日後。

「うがーいてー」

俺は情けない声をだしながらまったりしていた。

痛みの原因は肋骨にヒビが入ったのが一番大きい。他にも無数の傷があるが、それは全く気にならない。まあ、ヒビ程度なら普段の94%で活動できるけど今回の地味に痛いやつだった。例えるなら常時足の小指をタンスにゴン状態。

あまりの嫌がらせっぷりにレウスがこうなるようにやったのかと思うほどだ。

さて、あまりにも現実離れた戦いが終わってからなにがあったかをざっと説明しよう。

まずレウスをユクモ村に持ち帰るため荷車と呼んだがあまりのサイズに乗つけられないことが判明。仕方無く俺が持ちあげる。ちなみにメティスが冗談で「ビヤクヤさんが持てばいいじゃないですか」と言ったためである。一番驚いているのは俺自身。

レウスにやられたドスランポスは荷車に乗せて運ぶ。一応クエストは達成したがもの凄いい不満そうだが俺としては刀を持つに相応しいと判断し、ついでに雪燕にも主と認められたので正式に渡す。

リカルドはサイレスでもかけられたかのように無言だったのでこちらとしては助かった。

で、その2匹をユクモ村に持っていったところ村は大騒ぎ。最狂の王者はかなり有名だったらしく、野次馬が集まっているのを横目で見ながら村長さんに説明をした。

はたして王者の規格外のサイズに驚いているのか、涼しい顔して持ちあげている俺に驚いているのかは不明。

レウスを引き取ってもらうべくギルドの隊員を呼んだ。ドスランポスは特に変わった所がないので既にドンドルマに売り出した。

とってもどうでもいいがリカルドはドンドルマに行くことになった。なんでもお偉いさんから呼び出されたらしい。最後のセリフは

「俺はお前とは違ってエリートだから引き抜きがあっただよ。メテイスと離れるのは寂しいが少しの間我慢してくれ」

あれほどコテンパンにされてもこんなことを言えるのはある種の才

能かもしれない。

そんな感じだな。俺はレウス討伐でお金のほうがたんまり出るらしいのでしばらくのんびりしている。メティスの稽古を早めに切り上げて家にいるわけだ。

呼んだギルドのことだが連絡ではそろそろ着いてもおかしくないと言っていたが……

コンコン

「ふぁい？」

返事と一緒にあくびがでたため変な声になる。

「ビャクヤさん、メティスです。ちょっといいですか？」

客人は我が愛弟子だった。

「おーどうしたんだ？」

「シルヴィさんが呼んでますよ。例のギルドの人が来たそうです」

やっと来たか。俺を呼ぶのは大方事情聴取ってところだな。

「わかった、メティスも一緒に来てくれる？」

「え？　なんでですか？」

「案内よろしく」

「ああ、なるほど……」

ギルドの人間は集会場で待っているそうだ。単にレウスのことや報酬金のことだけじゃないな。

「メティス SIDE」

シルヴィさんの頼みごとをされてビャクヤさん呼びに行ったら

「わかった、メティスも一緒に来てくれる？」

なんて言われた。なんで、と思ったけど案内役らしい。ちょっと残念。

目的地の周回場に行くとシルヴィさんと（たぶん）ギルドの人が2人いた。

あれ？ あの女の人って……

「お姉ちゃん!？」

思わず声が出る。

「ん？ …… メティじゃないか！ 元気にしてたか？」

「わたしは元気だよ。お姉ちゃんこそいつギルドに入ったの？」

「いや、そういうわけじゃないんだ。ちょっと無理言っつけて着いて来ただけだな」

「へえ」

「最狂の王者を討伐したハンターに話を聞きたくて…… 所謂えば後ろの男は誰だ？」

あ、紹介するの忘れてた。

「こちらはビヤクヤさん。お姉ちゃんの知りたがってるレウスを討伐した人で、わたしの命の恩人。ビヤクヤさん、こちらはソフィアお姉ちゃん。ドンドルマで活躍する上位ハンターなんですよ」

「ソフィア＝フロアディーテだ。今はドンドルマに住んでいる」

「ビヤクヤ＝カムイです。変な名前に関しては突っ込まないでください」

「敬語はいらない、馴れてないだろう？」

「助かるよ」

「ふむ、無事に会えたし大丈夫そうね。私は仕事があるからもう行

くけど……メティスとソフィア、ひさしぶりに3人で温泉でもどう？」

「いいですね！ お姉ちゃんも行くよね？」

「もちろんだ。ではジャクヤ、話はあとで聞かせてもらおう」

「了解」

「話はまとまったわね。じゃあとはよろしくねライクくん」

「わかりました」

く 白夜 SIDE

ライクと呼ばれた人はどうやらシルヴィさんの知り合いみたいだ。かなりのベテランの風貌を持っている。

「さて、そろそろ 本題に入ってもいいか？」

「あ、いいですよ」

「私はギルド本部に席をおく調査団の副隊長、ライクだ。隊長のほうは別件がるからので代理ということに」

「ご丁寧にどうも。ビヤクヤ＝カムイです。一応新米ハンターです」

「ソフィアと同じく敬語はいらない。さっそくだが確認したいことが」

「答えられる範囲で」

「率直に言おう。最狂の王者と言われたリオレウスを狩ったのはきみで間違いないかね？」

鋭い目で見据えてくる。

「ああ、その通りだ。と言っても信じられないだろうが」

「話だけでは信じられんが、戦闘当日にはきみたち以外のハンターはいない。それに古龍を個人で狩った話は歴史上、いくつかある」

この世界でも超人はいるのか。会ってみたいもんだ。

「話す前に俺からも1つ。ちよくちよく紛れている仲間をどうにかしてくれないか」

「……バレてるか、わかった」

ライクさんが合図を送ると仲間である4人はこちらに例をしてから集会場をあとにした。

「それで、俺になんか特別な地位につけて話？」

「いや、正確に言えばギルドが直接だす依頼を受けて欲しい」

「例えば？」

「G級ハンターですら手がつけられない危険な仕事だな。きみにとってはとても楽しそうな仕事になりそうだが？」

ニヤリと笑うライクさん。どうやらいろいろと調べたようだ。

「無断で人のことを調べるのは感心しないな」

プライベートの侵害ですぜ？

「私どもにとっては古龍に必敵する飛竜を単身で狩るのだから調べないわけにはいかないんだ」

「当初の目的は俺の周辺調査だな。全く、ひと声掛けてもいいじゃないか」

「それもバレてるのか」

「まあいいさ。で、依頼の件だけに乗ってやろっじゃないか。ただし条件がある」

「なんだ？」

「メテイスを同行させる許可を貰いたい。もちろん戦わせるのじゃなくて見学だが」

見る、というのも立派な修行の1つだ。今回の取引はそれのいい機会になるだろう。

少し考えるとライクさんは鞆から一枚の紙をとりだした。

「いいだろう、登録するからこちらの紙に署名を」

「あいよ、名前だけでいいのか？」

ああ、と返すライクさんは何事もなく話が進んでよかったみたいな

顔をしている。どうやら同行云々については想定内だったらしい。

名前を書き終え、紙を返す。

「これでギルドの依頼が回ってくるようになった。こちらもサポートをするのでよろしく。それで今回のリオレウスの報酬だが」

よしきた。相場はわからんがそれなりにいい額貰えると嬉しい。

「素材は研究の為に渡すことができない、報酬金だけとなる。レウス討伐は予想外のことなので特急で届けてもらった。額は少ないが……」

袋をテーブルの上に置く。相当入ってるぞコレ。これで少ないってどういう思考してるんだよ。

「だいたい20万zだな」

わあ、これこそ予想外だわ。1zが何円かは知らないけど大樽爆弾が500zだった気がするから凄い貰えたな。

「仕事があるから私はこれで。依頼については手紙を出す」

「どうも。あ、ソフィアのことはいいいのか？」

「そうだな。本人がユクモ村までの同行でいいと言ってたから平気だろう」

そう言つと足早に去っていく。いろいろと忙しいのかな？

さて、今回のことを話すためメティスを待つか。

メティス SIDE

「癒されますね」

「そうね、やっぱり温泉は素晴らしいわ」

「久々に入つたからその考えがよくわかりますよ」

「「「はあ」」」

「それにしても……」

お姉ちゃんとシルヴィさんの抜群のプロポーションに目がいつてしまふ。

わたしのは、その、小さいから。

お姉ちゃんは動きづらいだけと言っているけど、やっぱり羨ましい。

こんな絵になる2人と並ぶと自信がなくなってくる。

そんな女性特有のことで悩んでいるとシルヴィさんが近付いてきた。

「大丈夫よメティス。アナタだってあと数年もすればすごく魅力的になるわよ」

「なななな、なにを言ってるんですかシルヴィさん！」

「ふふふ、私に知らないことはないのよ」

色気たっぷりに笑うシルヴィさん。これはまずい。徹底的にからか

つてくるつもりだ。なんとかして逃げないと……そうだお姉ちゃん
が！

「ふう」

ダメだ、完全に溶けちゃってる！

「さあて、覚悟はいいかしら？」

その日、温泉からは非常に色っぽい声が響いたそうだ。

第11話「ギルドからの頼みごと」（後書き）

作「今回の対談コーナーではお蔵入りになったリカルド（表記バ）さんに来てもらいました」

バ「なんでバなんだよ。そしてなぜ俺がお蔵入りしなければならんのだー!!」

作「（だってバカだし）ぶっちゃけお蔵入りの理由は使いどころがない、作者が書くのめんどくさい、書いててうざい。これですね」

バ「ひどく個人的な理由じゃねーかー!!」

作「こういうキャラも書いてみようかと思ったんですが、予想以上に反りに合わないといえますか。完全な失敗作ですね」

バ「いくらなんでもあんまりだー!!」

作「まあ、流石にそれは可哀想なので（気が向いたら）出してあげようかと思えます。とりあえず今は消えてください。お願いします黒服さん」

バ「なんで今すぐってうわなにするおまえやめくあ w s e d r f t g y f u j i c o o p」

作「ちょっとこの小説の情報をみたら週間ユニークアクセス順で5番目という……なんかもう場違いな気がしますよ。だって総合評価142（8月17日0:25現在）なのに。まあそれだけ皆さんが読んでくれていることなので嬉しい限りです。では次回も」

黒服「ゆっくりしていつてね」

作「また取られた!!」

第12話「新しい住人」（前書き）

バトルよりほのぼのの方が合っているんじゃないかと思い始めた今日この頃。

第12話「新しい住人」

ライクさんとの話が終わり、ギルドの依頼のことでメティスに話そうとししばらく待っていると、凄く上機嫌でお肌がツヤツヤしているシルヴィさんと温泉に入ったのにも関わらず凄くげっそりしているメティス、そして普通に堪能したのであるうソフィアが出てきた。

またなにかやったのだろぅが知らないほぅが身の為だからスルーさせてもらおう。

「いいお湯だったわゝ十年は若返った気分よ」

「それはよかったですね。ところでシルヴィさん今何歳「ビヤクヤくん？」もちろん冗談です」

わかってる。こうなること位わかってるけど聞かずにはいられないんだよ。というかこのネタ前に一度やった気がする。

「冗談ならいいのよ。あ、私は仕事があるから戻るわね」

片手をあげながら去って行く。

「あの人怖いな。で、メティス大丈夫？」

「ひゅい!？」

「話したいことがあるんだけど……体調がわるいようだったらまた今度にするけど」

「だ、大丈夫です。べ、べつにシルヴィさんに【ピー】とか【自主規制】とかされたわけじゃありませんから」

聞いてもないのに自分から爆弾発言をあつさり喋るメティス。よかった、ある意味いつも通りだ。ちなみに言ったことに關してはこの場にいる全ての人がスルーという非常に高いスルースキルを發動したので問題なし。

「うん、わかった。わかったから座ってくれ。話が進まないだろう」

「は、はい……」

「いい子だ。ソフィアはどうする? 一緒にいいなら質問に答えるけど」

「そうさせてもらおう」

忙しく注文を聞いて回るジョルトを捕まえ、適当に飲み物を頼んで俺も席につく。

「さて、何から話そうかね」

ここにきて俺の無計画さが露見してしまう。

「じゃあ質問していいか？」

思いがけない提案。乗らないわけない。

「お前何者だ？ 見たところ新米ハンターといった風貌じゃないが」

こりゃまたえらくストレートな質問だね。

「名もない遠い村から旅に出て気付いたらここまで来た人間だよ。ハンター登録はついこの前だけど実力が既にあっただけだ」

「ふむ……なるほどな。ということは武器は故郷の物か？」

軽く頷いて返す。いい加減刀の説明もめんどうだな。

「メティスが似たようなものを持っているということは、師匠にでもなってくれたのか」

姉は妹と違い観察力が凄いな。さすがは上位ハンター。どっかの誰かとは大違いだ、性格的な意味で。

「そういうことだ。こっちからも聞くが、なぜギルドに着いてここまで来た？ 別に個人で来てもなんら問題ないだろうに」

「簡単なことだ、その方が速いし安いからな。無理言って頼んで正解だった」

おかしいな、頼んでの部分が脅してって聞こえた。疲れてるのかな俺。

「そっちからはもうないか？ ないなら本題のレウス討伐について聞きたいのだが」

「あーそれが目的か。えっとだね……」

少年説明中

「……お前ホントに人間か？」

「さあ?」

「さあつて……呆れるほどの超人っぷりだな。お前がメティスのそばにいてくれて助かるよ」

「どうということお姉ちゃん?」

疑問の声を上げるのはメティス。

「ハンターになる実力を持っているとはいえ危なっかしいからな。ずっと心配だったぞ」

「わかるわかる。なんかこうほつといたら迷子になる感じだな」

「よく理解しているな。お前とはいい酒が飲めそうだ」

「ちょっとお姉ちゃん! わたしはそこまで子供じゃないの!!
ビヤクヤさんも悪ノリしないで!!」

割とマジだったんだが。

「どうどう。私の方からは以上だ。メティスに話があるのだろうか?
席を外したほうが……」

「遠慮しないでいいよ。俺からの話したのはさっきギルドの人が

ら危険な依頼を受けて欲しいって言われた。それでメティスには俺の依頼に同行するかってこと」

「わたしですか？」

「そう。わかってると思うけど超が付くほど危険だから強制はしないし毎回ついてくる必要もない。いい修行になりそうだからと思つてね」

流石に今回は即断とはいかないようだ。そりゃあ死ぬ危険性が常に付き纏うのだから迷うよな。

「わかりました、行きます。行かせてください」

メティスの目には強い光が宿っている。この目は自分の意志を貫き通す覚悟を持つ者の目だ。

「その返事を待っていた。行く時に声を掛けるから体調とかしつかり考えるように。いつでも守りながらの狩りができるわけじゃないし。そういうわけで、何か意見あるかい、お姉さん？」

身内が危険なことに首を突っ込むと止めたくなるのが心情だ。多かれ少なかれ反発して

「ない、しっかり面倒見てくれよ?」

反発ありませんでした。可愛い子には旅をさせよって言うけどなかなかできるもんじゃないぞ。

「強いて言うことがあれば……私もそのクエストに同行したいな」

……お姉さん、凄くアグレッシブですね。

「なあメティス、こうなるとも言うこと聞かないだろ」(ボソボソ

「その通りです。何があっても折れてくれません」(ボソボソ

やはり変なトコで頑固なのは流石メティスの姉と言ったところか。

ぶっちゃけるとメティスのおもりは多い方がいい。上位ハンターだから実力は折り紙付きだろう。

「どうした? なにかマズイことでも?」

「いや、気にしないでくれ。それで同行の件だが、歓迎する。でもいつになるかわからないからタイミングが合うかどうか……」

「なんのことだ？」

「ドンドルマに住んでいるから依頼来てから呼んでも間に合わない可能性があるだろ」

「え？」

「エ？」

「え？」

「タイミングも何も私はここに住むために来たんだが。あ、住むと言っより戻るか」

……

……

……

な、なんだってー

「あれ？ 言ってなかったか？ シルヴィさんには言っただが」

「お姉ちゃん、初耳だよ」

「そうだったか。すまない。まあなんだ、これからよろしくな」

ユクモ村に新しい住人が加わった瞬間でした。厳密には戻ってきたんだが細けえことはいいいんだよ。

＼メテイス SIDE＼

ビヤクヤさんの話に乗ってお姉ちゃんが戻ってくることに驚いた後「なんか精神的に疲れた」と言ってきたのでビヤクヤさんとは別れ、お姉ちゃんと家に帰ることにした。

「家に帰るのってどのくらい久々だっけ？」

「確か……ユクモ村付近でのクエストがあつたから寄つたな。かれこれ2年ぶりか」

「へえ」。そうそう！ お姉ちゃんの活躍はここでも耳に入るほど

だよ！」

「そ、そうか？ 照れるな／＼／」

「あははゝ顔真っ赤だよ」

「む、むう。私のことはいいんだ。メテイスの方はどうなんだ？ 師匠も付いたことだし強くなってるのか？」

ピンポイントな質問はわたしの士気を下げる思い出を呼び覚ました。

「強くなってる……とは思っけど」

「ん？ 釈然としないな。修行してからクエスト行ってないのか？」

「行っただけど、ドスランポス討伐だったんだけど、乱入した最狂リオレウスに横取りされて……」

言った瞬間、とても気まずそうな顔をする。

「そ、それは災難だったな。まあ次回があるさ」

「うん……」

「（やばい。地雷踏んだようだ。なんとかして機嫌を……あれだ！
！）」

「メテイス！ 林檎飴でも食べるか？ お前大好きだろ？」

「うん！ 食べる食べる！」

やった！ 林檎飴が食べられる！ ラッキーだね！

「（単純な子で助かった……）」

「なにか言った？」

「（ビクウ）い、いや何でもない。ほら、好きなの買ってこい」

「わーい！！」

言われたとおり林檎飴を2つ買って、お母さんが待つ家に帰って皆でお話しようと。

「????」 SIDE（火山）「

そうか、あのレウスがやられたのか。

アイツも強い部類に入っていたと思うのだがそれを屠るか……

おもしろい、もう少し様子を見させてもらおう

「????」 SIDE（同刻：雪山）「

強き人間がいるそうだな。

長年暇だったので久々に楽しめそうだな。

さて、いつ動くか……

く??? SIDE（同刻：場所不明）く

どのくらい久しいか。

我は人のことなどどうでもよかった。

進むだけ、それだけだった。

あのレウスがやられたのを感じ、その人の子と戦いたくなったのは
いつぶりだ？

クッククク……我は楽しみを最後まで取っておくのでな、もっと強

く
な
れ。

第12話「新しい住人」（後書き）

作「と、とりあえず投稿です……ゲストは今回から仲間入りのソフ
イアさんで……す……」

ソ「作者は精神的に削られたようだ。気にしないでくれ」

作「もう疲れたよパトラッシュ……」

ソ「（ゴソゴソ）はい」つみたらし団子

作「俺 復活!!」

ソ「作者は甘党だからな。こうやっておけば暫くは平気だ」

作「結構伏線入れちゃったねー。これが深夜（書いてるとき）のデ
ンションか」

ソ「回収できるのか？」

作「たぶん……」

ソ「頼むぞ。結構重要な伏線なんだから」

作「ガ、ガンバリマス」

ソ「よろしい、それでは次回もゆっくりしていつてね!」

作「自分が占めるの諦めようかな……」

第13話「もう討伐依頼が来ています」(前書き)

課外期間なのに意外と更新できるもんですね

この調子で頑張ります。

第13話「もう討伐依頼が来ています」

メテイス SIDE

「お姉ちゃん大丈夫？」

「大丈夫じゃない……」

昨日帰った後、大はしゃぎしたお母さんはお酒を引つ張り出してきてセルフ宴会となった。

そのお陰でお姉ちゃんが二日酔いになるという事態に。2人ともお酒に強く、樽が10ヶほど空になったのはいくらなんでも飲みすぎだと思う。

「うっ……水くれ……」

「わかったよ、ちょっと待っててね」

あれだけ飲めば二日酔いになるのが普通だけど、お母さんはピンピンしていた。こんなの絶対おかしいよ。

「はい。今日は動かない方がいいよ」

「というより動けない……無理するんじゃない……」

いつも見ることができないお姉ちゃんの姿はなんか新鮮だなあ。

「じゃあわたしはビヤクヤさんの稽古に行ってくるけど」

「おお、行つて来い……私は寝る」

「お、お大事に」

ああ、と言ってさっさと寝てしまった。水飲まないの？ 折角持ってきたのに。

しっかりと準備をして稽古場（ビヤクヤさん宅の裏の空き地）に向かう。

わたしが着いた時にはもうビヤクヤさんがいた。どうやら座禅を組んで精神統一しているみたい。

「さて、準備できてるようだしやるぞ。いいかい？」

どうやらこっちに気付いているようだ。相変わらずの超人っぷりに頭が下がります……

今日の稽古は文字通りの真剣勝負。一步間違えば死ぬかもしれない危険なものだけど「平気平気」の一言であっさり反論を封じられた。

「いつでもいい。かかってこい」

居合い、抜刀術など色んな呼び方があるこの技術は、どうやら【脱力】か鍵になっているらしい。脱力から一気に力を入れることで破壊力を高めている。あくまでビヤクヤさんが会得している剣術はそうだって。

ちなみにビヤクヤさんの移動速度も脱力↓力みが真意と言っていた。こっちはわたしなりに会得できたと思う。師匠から見ればまだ甘いところはあると思うけど。

一気に距離を詰め、雪燕で斬りかかる。狙うのは右側の頸動脈。タイミング、速度、パワー、全て申し分ない。

（危険と言いつつ急所を狙うってどういうことですか？ by 作者）

わたしの一撃、当てるまで1秒とかからない。けど、その間に確かに聞いた。

「ふむ、最初のころと比べたらいい太刀筋だ。だがまだまだ改良の余地はたくさんあるな」

雪燕がビャクヤさんの体に届くことはなかった。それどころか一切動かない。理由は簡単。ビャクヤさんが片手で雪燕を挟んでいるから。

「くっ……ヤッ!!」

抜刀後の体勢から左足で上段蹴りを放つ。わたしは剣術以外にも色々と教わり、体術もそのうちの一つ。

「いい蹴りだね。自己鍛錬は怠っていないようだ。感心感心」

その蹴りを首を反らして避ける。そのままわたしの腕を掴み背負い投げの要領で投げる。

空中で体をひねって着地したわたしの目に映ったのは、今にも斬りかかって来るビャクヤさん。

ガギツ！！

ギリギリで反応できたのは奇跡に近い。なんとか攻撃を弾くことができた。と、思ったなら既に鞘にカタナを戻し、第2撃を仕掛けてきた。

しゃがんでの回避、それは読まれていたようで下段蹴りが襲い掛かる。これまたやっぱりギリギリの鞘でのガード。奇跡続きって凄いな。

防戦一方なのも悔しいから蹴られた衝撃を利用して距離を取る。それで蹴りと見せかけて抜刀する。

「よつと、これで勝負アリだな」

わたしの攻撃を同じく抜刀で弾いた後、瞬時に首筋にカタナを突きつけられ終了。

勝てないと判っていても悔しいのは悔しい。

軽く落ち込んでいるわたしにビヤクヤさんは声を掛けてきた。

「俺の抜刀と下段蹴りを防いだ時、偶然と思っただか？」

「あ、はい。絶対当たったと思っていました」

「それ、偶然でも奇跡でもなんでもない。単にメティスの反応速度やら判断力やらが上昇した。要は強くなったからだ」

「ホントですか!？」

「そうじゃなかったらここまで粘れないでしょ」

「まあそうですね」

でも強くなったと言われれば嬉しい。小さい一歩だけどビヤクヤさんに近づけたのかな？

手合わせした後、地獄のような基礎訓練をこなし昼食になった。料理はわたしの手作り。たまに朝早く起きて作っている。そこまで上手じゃないけどおいしいって言って貰うと凄く嬉しいから／＼／

「これおいしいね。メティスの旦那さんになる人は幸せ者だな。あ、俺がなればいいかな」

「な、な、な／＼／」

「ははは、冗談だよ。そんなびっくりしなくてもいいじゃないか」

「べ、別に冗談じゃなくてもよかったのに……」ボソボソ

「なんか言った？」

「なんでもないです!!」

「そうか……？ で、この後のことだけど」

なにか用事でもあるのかな？

「早速ギルドから依頼が来てね、どんなものかだけ見に行くんだけどメティスはどうする？」

「着いていきます!」

どんなクエストなんだろ？

「白夜 SIDE」

メティスの成長速度は驚きを隠せない。今日の手合わせでは抜刀はともかく、下段蹴りをガードできるとは思っていなかった。

嬉しい反面少し怖いな。いい意味でだけど。……いい意味で怖いってどういうこと？

手合わせの後は自分でも鬼畜と思える基礎訓練をさせ、いつも通りに昼食の時間となる。

メティスの料理はおいしい。腕は一般的だけど心が込められているからより一層おいしく感じる。

「これおいしいね。メティスの旦那さんになる人は幸せ者だな。あ、俺がなればいいかな」

「な、な、な／／／」

顔真っ赤だな。見てて面白い。

「ははは、冗談だよ。そんなびっくりしなくてもいいじゃないか」

「べ、別に冗談じゃなくてもよかったのに……」ボソボソ

ん？ 今聞き取れなかったけど

「なんか言った？」

「なんでもないです！-」

「そうか……？ で、この後のことだけど、早速ギルドから依頼が来てね、どんなものかだけ見に行くんだけどメティスはどうする？」

「着いていきます！-」

相変わらずの即断ですか。

そんなわけで集会場。

サーシャに依頼について見せてもらうことにした。

「えーっと、これですね。どうぞ」

色々と書いてあるものをかいつまんで説明すると

・雪山で暴れているモンスターが現れた

・調査団を送り込んだ結果、亜種のようなものと判明「ティガレックスキメラ種」と名づける

・無茶苦茶強いので俺に回ってきた

「キメラ種って……なに？」

俺の知ってるモンハンにはなかったはずだが。

「えっとですね、資料によると『体は他のモンスターの特徴が少し混ざっている。能力はその混ざったモンスターと元のモンスターの力』が現段階でわかっていることです」

原因はわからんが同時に複数匹相手するよりも厄介なのは確実だろう。

「つかキメラなんてこの世界で知られてるのか。」

「ちなみにそのティガレックスキメラ種はどんな複合なんだ？」

「なんでもティガレックスとナルガクルガだそうです。あ、両方とも亜種の遺伝子ですね。余談ですが体の主導権を握っている方の名前を取って。キメラ種にするそうです。今回はティガ成分が多いのでこうなりました」

へえ、面白いな。

他の情報を入手すべく手元の資料に目を通す。

「あれ？ 出発が明日中になっているけど急じゃない？」

普通は出発つてだいぶ余裕があるものが多いんだけど。

「ギルド側としては一刻も早く研究したいそうですので」

こっちの都合も考えてほしい。他のクエスト出たらどうするんだ。

と、思ったけどギルドのことだから村にいること知ってるんだろうな。

「はあ……このクエスト受けるよ」

「了解です。じゃあアプトノス車を手配しておきますね」

アプトノス車……馬車のアプトノス版みたいなモンか。

礼を言つて休憩するべく席に着く。メティスが既に確保しておいて、その上お茶の注文までしてくれたようだ。気が利くな、エエ子や。

「今回のクエストはティガレックスカメラ種だそうだ。なんでも体は他のモンスターの（中略）ってのがカメラ種だそうだ。早く研究したいから明日出発だけどどうする？」

「明日ですか……」

「都合がつかないか？」

「いえ、そうじゃないんですけど、お姉ちゃんが二日酔いでもしたら明日もボタンキュウじゃないかと思うんですね」

二日酔いつてなにやってんだ。

「そ、そうか。まあお大事に言ってくれ」

「自業自得な面もありますが。あ、そうだビャクヤさん、この後暇ですか？」

「ん、ああ、暇だな。どこか行くのか？」

「ランポスの素材が揃ったのでランポスシリーズの装備を頼みに行くんです」

「そうか。あれ？ メテイスは今までHR2だったから素材もそこそこあるだろ？ ランポス装備なんて言わずにもっといいの作れるんじゃない」

そう言つとわずかに顔を曇らせる。

地雷踏んだ？

「わたし気が小さいのでソロ狩りは行った事ないんですよ。パーティーで行ってもあまり活躍できないから報酬が少なくて……」

「……ごめん」

「い、いいですよあやまらなくて。それで装備の件なんですが……」

「行かせてもらおう。どんな感じなのか興味があるし」

そう返した途端さっきまでの曇り具合がうそのように目が輝く。このパターンは予想がついた。

「じゃあ行きましょう！ 善は急げですよ！」

「はいはい、わかってるから引つ張らないでくれ」

ハイテンションなメティスに引きずられるように俺たちは集会場をあとにする。

くソフィア SIDEく

「うう……頭いたい……」

昨日の酒が効いて完全にダウン。あんなに飲まなければよかったと今更後悔する。

「水……ああこれか……」

そういえばメティスが用意してくれたんだっけ。あれからだいぶ時間が経ったのか、かなりぬるい。

「はあ、この調子じゃクエストに同行できないな。まあ昨日の今日だから依頼なんてないと思うが……」

見事なフラグだと気付いたのは、上機嫌なメティスが帰ってきてからだった。

第13話「もう討伐依頼が来ています」（後書き）

作「さつそく伏線回収しようと思い、こうなりました。別にいいよね！ いいよね主人公さん！」

白「いいわけないだろ。早すぎだ、もうちょい伸ばせ。そのうち詰まるぞ」

作「今がよければいいんです！」

白「うわぁ……なんというダメ人間。そうそう、感想に『こうすれば面白いのでは？』て感じの提案が来てました。凄く嬉しく、作者は諸手を揚げてよろこんでました」

作「励みになりますね。アイデアに救われてこの話ができたのです。感謝感謝」

白「書いてくれたアイディアは可能な限り入れていきたいと思うので、よければお願いします。作者が詰まないために」

作「一応忠告としてこちらで都合のいいように解釈する場合がありますのでご了承ください」

白「それでは次回も」

作「……」

白「……」

白「言わないの？」

作「言っているの!？」

白「毎回あんなんじゃない流石に可哀想と思って」

作「やった! ではゆっくりs」

「時間切れ」

第14話「オトモアイルーを雇う」(前書き)

書くのって楽しいですね

第14話「オトモアイルーを雇う」

「リザさんー！ ちょっといいですかー！」

メティスの誘いに乗り、鍛冶屋に到着した。熱気と鉄を打つ音、そして威勢のいい大声が響き渡る。

「メティスか！ ちょっと待ってるー！」

こちらの姿を確認したリザさんはハンマーをおろして汗を拭う。一旦奥に引っ込んで氷水を飲みながら向かってくる。

「ふうー、暑いな。これじゃ茹でダコになっちまう。んで、どうした？」

相当長いこと鍛冶に没頭していたのか滝のように汗をかいている。

「防具の予約をしにきました！ やっとランポス装備の素材が集まったので」

「おお！ そうかそうか。じゃ寸法測らなきゃいけないな。おーい、ばっちゃんー」

そう奥に呼びかけると齡100は声ている感じのお婆さんがでてきた。

ここに来てから結構経つけどまだ知らない人がいたのか。

「はいはい、寸法かえ？」

「おう。ランポス装備の予約だとさ」

「そうかい。じゃあお嬢ちゃん、ついてきてもらおうかのう……おや？」

こつちを見る。

「えっと……なにか？」

なにを思ったかは知らないけれど、しきりに「ふむふむ……なるほどのう」とか呟いている。

「おぬしがビヤクヤかえ？ 話は聞いておるよ。わたしやヨネと言う仕立て屋じゃ。昨日までドンドルマに行っておったから会つのは初めてじゃろうな」

「あ、ビヤクヤ＝カムイです。よろしくお願いします」

「よろしくのう。防具以外にも普段着も仕立てておるからなにかあったら来てみるといいじやろ。さ、お嬢ちゃん入った入った」

「わ、わかりました」

ヨネ、と名乗った人物はメティスと共に奥に消えていった。

普段着か。そういやあの神様（爆）は持たせてくれなかったな。お陰で年中道着だよ。もちろん5セットあるけど。

「ばっちゃんの測定は正確だからな。仕立ての腕も確かだし。ドンドルマでもその道の人間には有名だぜ。ちなみに竜人族だそうだが年齢はアタイも知らん」

「へえ。そういや寸法って言ってますが作り置きはないんですか？」

「普通の服ならともかく防具となると命を守るものだからな。一人一人に合うようじゃないと戦いに支障が出るからウチでは寸法から作ようになっているんだ。まあ、時間はかかるけどな」

これがプロ魂か。効率を捨ててまで使用者のことを考えるなんてそう簡単に出来ないだろう、憧れるねそういう心意気。

「ビヤクヤは防具とかいらなの？ あの時レウスの件で素材はあるだろう」

「あー俺は……」

「平気じゃよ」

セリフを続けたのはいつの間にか戻ってきたヨネさんだった。気配も無く背後に立たないでほしい。

「その服には力が込められておるからのう。わたしや覇気と呼んどのが。そいつがあるから下手な防具より固いじゃろう」

見ただけでわかるとは。有名なのも頷ける。

「よくわからんがばっちゃん言うならそういうことだろう。ま、気が向いたら来てくれ……で、サイズはどんなもんだった？」

「前に来た時より成長しとるな。一回り大きくなりそうじゃ。だいたい4日できるじゃろうから4日後ならいつでもええよ」

「わかりました、これ、素材です。お願いします」

「確かに預かったからの。楽しみにしとるんじゃぞ」

完成する4日後にまた来ると言って鍛冶屋をあとにする。

「これからどうする?」

少し買い物に付き合い、一段落したので聞いてみる。この時にメテイスの好物が林檎飴ということを知った。

「うーん……お姉ちゃんが心配なのでこの辺りで」

「大変だねえ。一応明日のクエストのことは伝えておいて。それじやしっかり準備しておくように」

了解です! また明日!! と元気よく返事をして俺の視界から消えていく。

「さてと、俺の方も準備するかね」

なにせ相手はティガとナルガの復合だからな。といってもアイテム整備じゃないけど。俺はよっぽどのがない限りアイテムは2、3個くらいしか持っていかない。

いや、なにもレウスに「アイテムなぞ使ってんじゃねええええ!!」
って言ったからじゃない。単に動きが鈍るのを避けるためだ。そも
そもアイテムポーチないし。

準備というのは……

「こんにちは猫バア」

「おやビヤクヤくんじゃないかい。オトモを雇いにきたのかい？」

オトモアイルーを雇いにきたのだ。

やっぱり人手（猫手？）は多いほうがいい。採取とか話し相手とか
罾仕掛け役とか。

「そうですね。戦闘向きじゃなくてサポート向きがいいんですが」

「サポートね……この子なんてどうだい？」

猫バアが紹介したのは山吹色の毛並を持つアイルー。

「ニヤ！？ 自分は戦闘全くとっていいほどダメニヤんだけど…」

「採取早いし調査だって得意じゃろ？」

「で、でもニヤ……」

「そうだな、この子を雇おう」

直感が続けている。俺の理想にピッタリのオトモであると。

「だ、旦那さん、なに言ってるニヤ！？」

「いや、だから雇うって。俺としては戦闘力なんて判断基準に入れてないし」

注意を引きつけるための攻撃くらいはしてもらいたいが。

「……本当にボクでいいのかニヤ？」

「なんだ？ 嫌なのか？」

「そ、そついうわけじゃニヤいんだけど、あまり役に立たなかったら……」

なんだ、そんなことで心配してるのか。

「あのな、最初から主人に合うアイルーなんていないんだよ。仮に物凄く強かったとしてもだ。時間をかけて成長するのはお前だって俺だって一緒だぞ。だから心配するな。それに前線に出て戦えって言てるわけじゃない」

「旦那さん……」

「そっいうわけだからお前さえよければパートナーになってほしい。無理強いはせんよ」

「わかったニヤ！ 旦那さんのために一生懸命頑張るニヤ！」

ふむ、目の色が変わったな。一番いい援護を頼む。

「話はまとまったようじゃの。初回だから手数料はオマケしておくかの」

「あ、ありがとうございます」

「礼はいらんよ。その子、アニスって名前じゃけん。仲良くね」

「アニスと言いますニヤ。よろしくですニヤ」

「ビャクヤ＝カムイだ。よろしく」

こうして相棒ができたわけだが、俺の名前を聞いて「旦那さんってあのビヤクヤさんなのですかニヤ!？」と驚いていたのは見てて面白かった。

「ここが旦那さんの家なんですかニヤ。立派ですニヤ」

「そうでもないさ」

オトモになるのは（当たり前だが）初めてなのでどことなくぎこちない感じがある。

「まずはクエストにおいてのアニスの役割を確認するか」

「賛成ですニヤ」

「うーん……そうだな、情報収集・採取・伝令・アイテム使用・各種笛使用・たまに注意を引きつける意味での攻撃、くらいか。笛はどのくらい持つてる?」

アイテム使用ってのは罠を設置したり。。玉を投げたりすることだな。

「回復笛と解毒笛、防御笛ですニヤ。真回復笛はないですニヤ……」

「じゃあ今度買つか。というよりなかなか凄いな」

「なにがですかニヤ？」

「アニスの能力だよ。戦闘ができなくてもさっき言った役割こなせるのだろう？ 充分すぎるな」

「まあ、ボクは後方支援の能力しかニヤいので」

聞くところによると家事全般も得意らしい。全部任せるのも気が引けるので分担することにした。

「趣味とかはなに？」

「そうですニヤ……調合ですニヤ。上手な方だと自負してますニヤ」

調合ね。俺はびっくりするほど下手だから助かる。アイテムを持っていけない理由の一つになっていることをこっそり打ち明けよう。

「じゃあ調合担当ね。必要な材料あったら遠慮なく言ってくれ。まだ素材は少ないだろうし」

「いいのかニヤ!？」

「むしろお願いしたいくらいだ。俺に調合はわからん」

そう言っアニス調合担当にしたところ、驚くべき才能が発覚した。

「アオキノコと薬草で回復薬を作って、そこにハチミツを……できたニヤ」

このセリフだけでは驚かないだろう。家には調合書はないが成功率は高いからこれも驚くポイントではない。

問題なのはこの手順で既に30個の回復薬グレートを生産していることだろう。

ゲームと同じ成功率の場合両者とも9割以上成功だがさすがに30個は多い。この世界はゲームではないから確率はもっと低くなるだろうに。

これ作ってみて、と言って作らせたのは閃光玉、音爆弾、落とし穴、いにしえの秘薬etc

調合成功率100%という驚異の数値を叩き出している本人は、恐らく、いや絶対自分がどんな異常なことをしているか自覚していないだろう。

一通り必要な物を作り終えたらしく、くつろいでいるアニス。

「そうだ、明日早速クエスト行くから覚悟しておけよ」

「随分といきなりですニヤ。ちなみになんですかニヤ？」

「キメラ種って言う（中略）でティガ＋ナルガだそうだ。両方亜種ver」

「……」

「……」

「ニヤ、ニヤんですとー！ー！ー！」

メテイス SIDE

「ただいま。お姉ちゃん大丈夫？」

「メテイスか、おかえり……無理……」

「あはは……これじゃあクエストは無理そうだね」

「クエスト……ト……？」

ポカンとしているお姉ちゃんに事情を話す。

「つまり……依頼がもってきたと……」

「そういうこと」

「いつなんだ……？」

「明日だよ」

「なん……だと……？」

ますます青ざめてる。これじゃ明日は絶対行けないだろう。

台所で水を新しくしてからコップに汲んで、飲むように促す。

「ゴク……ゴク……ふう。この調子じゃ明日は無理だな。ビヤクヤに言っておいてくれ。あと、くれぐれも注意するんだぞ……」

「わかってるよ、もうそこまで子供じゃないんだよ?」

「そうか……ならいい……すまない、もう寝る……」

今朝よりも悪化しているように見える。大丈夫なのかなあ。

これ以上長居しても療養の邪魔になるから、おやすみ、と声を掛けて自分の部屋に戻る。さ、準備準備。

第14話「オトモアイルーを雇う」（後書き）

作「相棒を作りたかったのでこうなりました。ゲストは今回から登場したアニスです」

ア「未熟ニヤがらも頑張りますニヤ」

作「ぶっちゃけ、雇う時のやり取りはカットしてもよかったんだけど尺かせ」

ア「言わせニヤいよ!？」

作「おつと失礼。この話はやめよう。次回からはVSティガを書けそうですので楽しみに!!」

ア「バトルとほのぼののサイクルはこんニヤものでいいのかニヤ？」

作「ほのぼのの方が書いてて楽しいけどね」

ア「何でも言うけど、これ原作はバトルモノじゃニヤかったっけ」

作「よいではないかよいではないか」

ア「作者が楽しみながら書ければいいニヤけどね」

作「楽しむんだ者勝ちなんだよ、書く方も読む方も」

ア「好感度あげようとしているのがまるわかりですニヤ」

作「…………… それでは次回もにゅっくり」

ア「嚙まニヤいくださいよ」

作「…………… 面目ない」

第15話「目指すは雪山、その道中」(前書き)

PV85、000超えタ

(。。。)

!!!!!!!!!!

1日1回の更新は出来なくなりそうですorz
投稿予約が午前10時で固定になります。たぶん

第15話「目指すは雪山、その道中」

「旦那さん、ほんとにボクも行くのかニヤ？」

「一応昨日のうちに殺氣当てて大丈夫そうだったから平気だろ」

「でも氣絶しそうにニヤったよ？」

「7割の力を出したのに動けるんだから大抵のモンスター相手でも問題ないよ。なんの訓練もなしに耐えるんだから天性のものだな」

いきなりG級かそれ以上モンスター討伐に連れて行くのは流石の俺も不安だったので試してみたのが昨日の夜の話

今にもぶっ倒れそうな様子だったけどなんとか逃げた。曰く、文字通り死神に睨まれたそう。そんなに怖いのか、少しショックだ。ちなみに殺氣が原因で回復薬グレートの入った瓶が26/30が粉碎し、大急ぎで調合して貰った。

「旦那さんはいろいろと規格外だとは聞いていたけど、それがよくわかった気がするニヤ」

「そうか？」

「人間が威嚇のみで物を壊すなんて普通じゃできないと思うニヤ。それで旦那さん、昨日言ってたお連れの方はまだですかニヤ？」

「そろそろ来るはずだけど……あ、来た」

遠くからメティスが走ってくる。予想はしていたけどソフィアは復活していないようだ。お酒は楽しく飲みましよう。

「すいません、遅れました」

「まだ集合時間前だから気にしないでいいよ」

「そうですか……あれ？ この子は？」

アニスを指差す。

「ボクは昨日から旦那さんに雇われたアニスと言いますニヤ。主に後方支援担当するけど、まだ慣れてニヤいから危なっかしいと思いますニヤ。よろしくニヤ」

「へえ、アニスって言うんだ。わたしはメティス」フロアディーテ。ビヤクヤさんの弟子で強くないから修行って意味で着いていくことになったの。よろしくね」

お互い自己紹介を終えたところでアプトノス車が到着したようだ。目的地は雪山ということで後ろのテントには毛布が積んである。

運転手のアイルーに聞いたら雪山まで片道2日かかるそうだが、それが遠いのか近いのかわからない。いや、遠いんだろうな。行きと帰りで4日＋狩りに1日（予定）だから5日で帰れるな。これならメティスの装備を受け取るのもちょうどいい。

「オトモアイルー雇ったんですね。いいなあ、かわいいなあ」

「ちょ、やめ、くすぐりたいニヤ」

じゃれつくメティス。これではどちらが動物だかわからない。

「そういやメティスは雇ってないみたいだが……」

「わたしのお母さん猫アレルギーなので雇えないんですよ。わたしも雇ってみたいと思うんですが、お母さんの健康には変えられませんがね」

「そうなのか。じゃあアニス、諦めて彼女に捕獲され続けてくれ。死にはしないだろ」

「そんな殺生ニヤ〜!!」

くメテイス SIDEく

そのオトモアイルーはアニスと名乗った。

実力的にアイルーは必要じゃないのかと思ったけど、どうやら後方支援担当らしくビヤクヤさん用のクエストでは基本的にわたしと一緒に行動することになる。

かわいい。

自然と顔がニヤけるのが自分でもわかる。オトモアイルーは猫アレルギー持ちのお母さんの天敵だから雇うことができて少く悲しかったけど、今こうやって触れあえるのだからいいことにしようと。

「本当に好きなんだな。家じゃ雇えないのなら俺の家に住んでみるか？」

……ふえ？（理解不能）

……え、今の発言って（理解完了）

……っ、つまりそういうこと？（過大解釈）

「おお、旦那さん大胆ですニヤ」

「い、い、いきなり結婚だなんて早すぎますよ！！ あ、その、嫌ってことじゃないんですけど心の準備ってものが！！」

「落ちつけ。早口過ぎてなに言っているのかわからない。深呼吸でもするといいよ」

「そ、そうですね。ヒッヒッフー、ヒッヒッフー」

「それラマーズ法ですニヤ」

深呼吸のお陰でなんとか落ちつけた。うう、また恥ずかしい勘違いしちゃったよう……

「すみません、取り乱しました……グスン」

「面白いから気にしないで。もはや名物だな」

「わ、笑わないでくださいよ！」

「いや、見てて楽しかったですニヤ」

「アニスまで!!」

アプトノス車に揺られながらかなりの時間会話を続ける。ビヤクヤさんの生まれ故郷の話とかアニスの面白い体験談とかビヤクヤさんの怪物っぷりについてとか。

しばらくして夜になり、今日はここで夜を明かすそうだ。お食事は材料が用意されてたから外に降りて調理するところに。

てきとうに野菜とお肉と一緒に蒸焼きにして食べていると、匂いに釣られたのか何かの気配を感じる。

「ビヤクヤさん、どうします?」

敵がいるのにいつも通りのほほんとしているビヤクヤさんに伺う。
もしかしたら……

「うーん、3匹程度だったらメティス1人でもやれるだろう。頼んだよ」

ですよね。この人は意外とめんどくさがりの面を持っているからたまにこうなる。ぶつくさ文句を心の中で言っていれば

「メテイスさん、手伝いますかニヤ？」

気遣ってくれる臨戦態勢に入ったアニス。

「ありがとう。でもわたしだけでなんとかなるから」

これは自惚れなんかじゃなくて、修行の中に実力差を測るものがあったからだ。その上で戦うか逃げればいいって言っていた。ビヤクヤさん曰く「自分より強い敵に出合った時の戦方、それは『逃げる』！！」と叫ぶほど。でも叫ぶ必要ないよね。

立ち上がり、雪燕の柄に手をかける。

わたしの異変を感じ取ったのか、3匹のうちの向かって右側となるランポスが飛掛かってきた。それを皮切りに、残り2匹も。

焦らず、じつと待つ。一撃で確実に倒せる間合いに入るまで。時間にすれば1秒も満たないで攻撃を受けるけど、普段からビヤクヤさんの攻撃を凌いでいるわたしにとってはかなりの余裕があった。

「（……入った!）」

そう感じるや否や、雪燕を抜きつつ右足を軸として回転する。

『円閃』（えんせん）。第六の型で遠心力を利用して威力を底上げすると同時に全方向の敵を攻撃する技って言うていた。

わたしはまだ上空の敵には対処できないけど、ビヤクヤさんは師匠だからもちろん出来る上、更に空閃を発射するのでどんなに周りを囲まれていても蹴散らすことができる。まさに怪物。

とにかく、タイミングピッタリで放った円閃は見事3匹のランポスを斬った。昔のわたしから見れば怖いくらいの進歩だと思う。精神的にも。どうやらあの時のレウス戦が強烈な印象を残したため、感覚が麻痺したみたい。うーん、喜んでいいのかな。

付いた血を拭きとって納刀しつつビヤクヤの方を振りかえれば、そこには2匹のランポスが横たわっていた。いつの間にか倒していたのだろう。全く気付かなかった。

さて、今回の評価は？

「だいぶ洗練されてきた動きだけど周りに気付かないようじゃまだまだだな。常に相手の数が固定されているわけじゃないし。まあ、その集中力はたいしたモンだよ」

だいぶ厳しいです。わたしとしては上出来だったんだけど。

「自分としては上出来だった、とか考えてるでしょ」

ギクッ

「考えが甘いよ。俺がいなかったら少なくとも怪我してるんだ。これは帰ったら訓練メニューを追加するべきかな」

あのビヤクヤさん、わたしは隣に立てるようになりたいとは言ったけど人間をやめたいなんて言っているわけじゃないんですよ？

「細かいことはいいからもう寝ようか。明日のお昼前に着く予定だよ」とさ

あっさり流されてしまいました。悔しい。

「白夜 SIDE」

少し危なっかしい戦闘から一夜明けた早朝、いつも通り朝の訓練を行う。今日はティガ討伐があるため本当にいつも通りやったら戦いに支障がでるからやめておくことにしよう。

てきとうに動いて体をほぐしてから朝食の準備にかかる。と言っても昨日と同じ物になるだろう。材料が材料だし。

一応朝食（昨夜と全く一緒）が出来て1人と1匹を起こしにかかる。メテイスだけでなくアニスも朝は弱いようだ。

「さうて、どうやって起こそうか……そうだ」

いいことを思いついたので早速実行。

いいこと↓気当で。ようは殺気や闘気を相手にぶつける技術で、訓練を積みれば相手を選んだり出力を調節したりできる便利なもの

コトコト……

「ギニヤ!？」

「ひゅい!？」

同時に起き上がる、いや、飛び上がる、のほうが正しいか。寝ていても殺気に反応できるとは嬉しいね。アニスも気配に関することなら達人級と言っている。

「おはよう。朝食出来てるから冷めないうちに食べようか」

「朝から心臓に悪いことはやめてください（ニヤ）!!!」

「はは、いいものを見せて貰ったよ」

（沈黙）

「すまなかった、俺が悪かったから無言で雪燕を構えないでくれ。いや、ください。アニスも蛍光ピンクという怪しすぎる薬は仕舞お

うな？」

「「問答無用です（ニヤ）！……！」」

教訓『寝起きドッキリ、ダメ、ゼツタイ』

そんな自滅行動を取ったあと、メティスは1日付き会っ、アニス
は調査用の素材購入ということで許してもらい一行は目的地である雪
山を目の前にした。

「ここからは寒くてアプトノスが動けなくなるので徒歩ですニヤ。
ベースキャンプはそんなに遠くないので頑張ってくださいニヤ。討
伐がかなりようしたら発煙筒で合図を。この話は大丈夫ですかニヤ
？」

「ああ。発見が早ければ今日中、遅くとも明日には終わるからその
ことを頭に入れておいてくれ」

「了解ですニヤ。では御武運を」

そう言って来た道に戻る運転者のアイルー。

言われた通りベースキャンプを目指していくのだが……

「なにこれ寒い」

そう、雪が見え始めたなあと思ったたら急激に温度が下がった。確かゲームの方ではホットドリンクないとスタミナ消費が激しかったが、リアルだとスタミナ消費どころか命を消費してしまうのではなからうか。

「あれビヤクヤさん、ホットドリンク飲まないんですか？」

「いや、あるにはあるが製造工程見ちゃったからね……」

「ああ……」

ホットドリンクの製造はとてもグロい。簡単に言えばにが虫と唐辛子、その他諸々の熱を籠もらせる作用を持つ材料を【ピー】して【自主規制】したあとに【放送禁止用語】ように【見せられないよ！】する。さいごに【禁則事項です】で完成。

子供から老人まで差別なくトラウマを与える。この格差社会で差別をしないのは立派だが、マジで勘弁してくれ。

分りやすくするならば『残念ながら冒険の書1は消えてしまいまし

た』より嫌だ。

最近ではホットドリンク専用の調合所まで出来たらしい。まあその前に普通にお店で買うけど。アニス、よく平気だったな。

「その気になれば気で寒さ熱さから身を守れるけど、そんなことに気を使ったら負ける気がする。気だけに」

「……………」

「……………」

「……………忘れてくれ」

体感温度が更に下がった。

「さ、さていろいろあってベースキャンプに到着できたな。よかったよかった」

「そ、そうですね。これからどうします?」

「戦いの基本は情報だ。てことで探索に行こう。メティスとアニス

は常に行動を共にするように」

「オツケーです」

「わかったニヤ」

相手は未知のモンスターだ。気を引き締めるか。

俺は極寒の中に身を投じ、静かに集中する。

「????」 SIDE「

その者は飢えていた。戦いに。

その者は待っていた。自分と張り合える者を。

その者は歓喜した。最狂の王者と呼ばれた者を打ち滅ぼした戦士の

登場を。

―来たか。暴れていた甲斐があるな

静かに、だが雪山全体に響き渡のではないかと思つほど唸る。

異世界の青年を招待するために暴れに暴れ、轟迅竜と呼ばれるまでに至った竜は辺りが見え無くなるほどの吹雪の中に姿を消した。

第15話「目指すは雪山、その道中」（後書き）

作「あれ？ティガはどこいった？」

フラン（以下フ）「ここまで脱線するとは思わなかったわよ」

作「伏線張ったモンスターを1話で終わらせるのは嫌だから話を入れてみたのですが……ゑ？」

フ「次回予告なんてしないほうがいいね」

作「悔しいですがそうですね。ふと思ったんですがキャラ紹介とかつてしたほうがいいですかね？」

フ「皆さんの記憶からスキマ送りにされている人も結構いそうだしね」

作「『ふざけんな！ 絶対嫌だ！』という意見がない限り尺かせ……もとい記憶整理のためにおまけとして書こうと思います。嫌な人はドシドシご感想を！」

フ「誹謗中傷を待っている作者も珍しいわね。それでは次回もゆっくりしていったね」

作「あっさり言われた……だと……」

おまけ、キャラ紹介（前書き）

ダメ、ゼツタイという感想はなかったので尺かせ……キャラ紹介です。

読まなくても問題ありません。自分のイメージを壊されたくない人は読まないほうがいいかもしれません。

おまけ、キャラ紹介

名前：ビャクヤ「カムイ」（漢字表記：神威 白夜）

年齢：18歳

武器：日本刀夜叉鴉

防具：ユクモシリーズに似ているなにか

特徴：完璧超人（但し調合は除く）

ざつと解説

典型的な普段怒らない人が怒ると怖いパターンの人。大抵のことは気合でなんとかなる。が、調合だけは回復薬ですら10%以下という天才的な数値。こればかりはどうしようもない。

神様（？）の魔改造と幼いことから爺さんの地獄の苦行……もとい修行のため強いなんてそんなちやちなものじゃ断じてねえ。もっと恐ろしい（ry

モデルは「聖剣の刀鍛冶」のルーク・エインズワース。

名前：メティス「フロアディーテ

年齢：16歳

武器：日本刀雪燕

防具：ハンターシリーズ（近々ランポスシリーズにランクアップ）

特徴：盛大な勘違い

ざつと解説

ランポス&ドスランポスと対峙して死にそうになった時に白夜に助けられる。元は太刀使いだったが、『雪燕』を使うことになる。太刀は大切に保管しており、手入れも勿論欠かさない。一応駆け出しとしてはずば抜けて強いが、精神的に甘い部分がある。

白夜に淡い恋心を抱いているがその本人は妹として見ているため悩んでいる。秘密にしているつもりだが大多数の人間に気付かれているのは言うまでもない。

モデルは「BAMBOO BLADE」のタマちゃんこと川添珠姫。

名前：アニス

年齢：生後9ヶ月（人間で言うと13歳）

武器：巨大ネコどんぐり

防具：どんぐりシリーズ

特徴：調合成功率100%

ざつと解説

攻撃が全くと言っていいほどダメなので雇われていなかったが、その実、後方支援の生まれながらの天才。気配に関しては、チート（白夜）をもつてして達人級と言わせるほど。

山吹色の毛並みを持つアイル（雄）。なんで山吹色かって？作者がジョジョ大好きだからさ！

山吹色の波紋疾走から
サンライトイエローオーバードライブ

名前：ソファイ「フロアデーター」
年齢：19歳

武器：熔解銃槍ヴォルガノス
防具：ゴールドナシリーズ

特徴：寝るときはぬいぐるみ必須

ざつと解説

ドンドルマに住んでいたメティスの姉。かなりの実力者で『黄金の銃姫』なんて呼ばれている。男共を魅了する美貌の持ち主だが本人が恋愛に対する興味が全くない。

ユクモ村に帰ってきたのはビヤクヤへの好奇心と妹が心配だかららしい。特徴にもある通り意外と乙女チックな感性も持ち合わせている。妹の恋路を見てニヤニヤしている。

モデルは「伝説の勇者の伝説」のだんご……もといフェリス・エリス

名前：シルヴィ「エティオラ」

年齢：不明

武器：ブリュンヒルデ（元）

防具：日向・覇シリーズ（元）

特徴：ある意味最強

ざつと解説

元ハンターだが、「飽きた」と言って村を起こしたあたり、只者ではない。というか誰もこの人には勝てない。柔らかな物腰と妖艶さが相まって謎のオーラを醸し出している。

自然の声を聞くことが出来るので情報網がハンパない。この人がその気になればプライベートなんてないも同然。ホント歪みねえな。

モデルは「東方Project」の八雲紫

名前：リザ＝クリアリング

年齢：22歳

武器：なし（強いて言えば鍛冶用のハンマー）

防具：なし

特徴：ハイパー男勝り

ざつと解説

若くして鍛冶屋の棟梁を継いだ鍛冶師。腕前は一人前で遠方からわざわざ来るハンターもいる。姉御、という言葉がピッタリでよく子供に懐かれている。本人も子供好き。

人の好意に全く気付かないラノベの主人公クラスの鈍感さを持っており、ファン泣かせ。ただ他人のことに關しては鋭い。メテイスの想いを一番最初に気付いた人。

モデルは「BLACK LAGOON」のレベッカ・リー。

名前：サーシャ・イズベラ

年齢：16歳

武器：なし

防具：なし

特徴：耳年増

ざつと解説

メティスの幼馴染でG級の受付嬢が夢の下位受付嬢。明るいい性格と気遣いの良さから集会場のアイドル的な存在。ハンターたちに元気を与えている。

仕事の早さに定評のある受付。実は上層部が上位受付ならいいんでね？と考えていることを本人は知る由もない。

テイルズオブエクシリアの公式HPでレイアを見て「この子だ！」「と思いついたんだが、知らない人多いんじゃないかなあ……」

モデルは「テイルズオブエクシリア」のレイア・ロランド

名前：フラン・フロアディーテ

年齢：3つわなにををするおまえやめくあ wse d r f t g y ふじこ l p

武器：フライパン

防具：エプロン

特徴：ある意味最強その2

メティスの母親。この人も村長さんに似ていて強い(?)。ランポス程度だったら愛用武器『フライパン・滅』でホームラン。母親

のくせに母としてあるまじき発言をポンポンと言う。

猫アレルギーのためアイルーを雇うことができない。娘には申し訳ないと思っているが白夜がパートナーになってからニヤニヤしている。

名前はフランドール「スカーレットが元。あ、やめて！東方厨だからって石投げないで！！」

モデルは「とある魔術の禁書目録」のオルソラ「アキナス

名前：リカルド「アंक

年齢：19

武器：輝剣リオレウス

防具：レウスSシリーズ

特徴：残念な子

ざつと解説

一応上位ハンター。ドンドルマにお蔵入りになった残念な子。作者の都合で生まれて作者の都合で消されている。もう何も言っちゃいそこそこ強いのは本当。だがソフィアには及ばない

モデルは特になし

おまけ、キャラ紹介（後書き）

次の更新は26日ですが10時とは限りません。もしかしたら23:59とかかも

第16話「狡猾なる轟迅竜」（前書き）

予定時間より2時間の遅刻で更新します

PV100,000超え……だと……

第16話「狡猾なる轟迅竜」

『ギャツ！』

「おい生きてるか」

ベースキャンプで一休みしたあと、ティガ探索のため雪山を上っているとギアノスの集団に遭遇する。まあ、ほとんどランポスと同じだから気にする必要はないが、あまりにもしつこい（3回エリア移動しても追ってくる）ので倒すことにする。

「大丈夫です」

「平気ニヤ」

メティスとはかくアニスは徹底的に逃げているので傷一つない。相変わらずのスニーキング能力で安心した。

「それにしても吹雪がでてきたな。もう少し探していないようだったら戻った方が良くかもしれん」

「そうですね、このままだと迷子になるかもしれないですし」

山の天気は vari しやすい。めんどくさいな。せめて麓で発見できれば

吹雪の心配はしなくていいんだけど。

そうしてギアノスを蹴散らしつつ探索を続ける。途中どうみてもバギイなモンスターが襲い掛かってきて3rdもいるのかー、と感動したが、睡眠攻撃でアニスが眠ったのは少しばかり焦った。メティス曰く最近確認された新種らしい。3rdの敵は全員新種ってことか。

「……吹雪ですね」

「……吹雪ですニャ」

「……吹雪だな」

あわよくばティガ見つけられるかなと淡い期待を抱いていたが、人生そんなに上手くいくはずもなく、逆に吹雪いてきやがった。

まだそこまで強くはないが確実に視界が遮られるほどに強化するだろうね。よし帰ろう、今すぐ帰ろう。

「仕方ないから一旦戻って麓の探索に変更しよう」

「そうですね、吹雪の中討伐なんて……ビャクヤさんならできるかも」

「きっとできますニヤ」

「お前ら俺をなんだと思ってるんだ」

「「悪魔とかその類」」

おい……

「まあ、そのくらい旦那さんは強いってことですニヤ。褒め言葉ですニヤ」

「褒め言葉って……まあいい。麓はあつちか」

あまり釈然としないがここで突っ込んだら話が進まなくなるため断腸の思いでスルー。

吹雪が強くなる前になんとか麓に下りることが出来た。吹雪が原因かどうかはわからないが、道中では敵が一切出てくることなくとても楽だったのは秘密だ。

その麓は天候も安定してるので問題はないが、ティガがここまで降

りてくるのかどうか鍵となる。

「ビャクヤさんー！ こっちこっち！」

何かを見つけたメティスがそう急かす。

「どうした？ なに見つけた？」

「これですニヤ」

二人が指差す先にはポポの死骸があつた。ふむ……傷から見るに一撃で仕留められているな、察するに大型モンスターだな。しかも1匹でなく3匹。相当の腹減りとみた（実際食われている）。

雪山ででてくる暴食のモンスターといったらイビルかティガだろう。出発直前の情報にはイビルはいないようだ。まあ来る途中に縄張りに侵入したとも考えられるが、件のティガという線が濃厚だろう。

と、いうことはここもティガの縄張りになる。広い縄張りをお持ちのよう。探すのに一苦労しそうですありがとう。お礼に秘剣で仕留めてやろうか。

さってどうすつかな。このお食事現場しか手がかりはないし、コレのお陰でますます探しづらくなつたし。これ今日か明日で倒せるの

か？

「どうしたんですかニヤ？」

「いや、縄張りが広いことがわかったから苦労しそудなつて」

「あれ？ ビヤクヤさんって気配探れるんじゃない？」

「……………あ」

「あ、って自分の特技忘れてたんですかニヤ？」

「いやーすっかり」

「ビヤクヤさんって……………意外と抜けてる？」

「ですニヤ。変なところで穴あいてるニヤ」

気配を探索するのはランポスの大群の時に使った特技その1。まあ相手が気配を隠していたら難しくなるがやらないよりはマシだな。というより2人（1人と1匹）とも失礼だな。言い返せないけど。

ぐだぐだ言ってもしかたない、早速やってみるか。

「「！？」」

なんだ？ 2人（1人と1匹）がビクウって感じの反応したけど……

……

……

……

「むっ、見つからない」

「そうなんですか？」

「ああ、大抵の生物なら引つかかるはずなんだが……隠しているのか、そもそも出かけているのか、くらいだ。わざわざ出かける必要もないから隠していると思う。そういえばさっきなんでビクウってした？」

「なんか見られてる感じがして……」

「死神の睨みってかんじでしたニヤ」

ああ、俺の探知を感じ取ったのか。予想以上の成長だ。嬉しいね。

「それで、どうするんですか？」

「気配察知すらできないんだから地道に探しだすしかないだろう。このポポはまだ食われてから時間が経ってないからこの辺りにいる

だろう。アイツも吹雪は嫌だろうし。他に手がかりはない……おや？」

「？」

「これ見てみな」

「えっと……これ血の跡ですね。ポポを持ち帰ったのでしょうか」

「だろうな。手負いのポポを逃がすとは考えにくい。持ち帰ったとなるとこの先に続く場所が拠点だろうな」

「行くんですか？」

「ああ。遭遇する可能性もあるからいつでも動ける準備を。アニスは閃光玉とペイントボールを投げられるように」

「オッケーです」

「はいニヤ」

血の跡を追いかけて歩き続ける。だいぶ薄くなってきた、今ではギリで見えるけどいつ途切れてもおかしくない。

更にそこから歩いて、血が完全に見えなくなった時には広い所に出
ていた。

「消えちゃいましたね」

「また振り出しですニヤ」

その時、妙な違和感に気付いた。

相手は気配を消すまでに慎重だ。 ならなぜ血の跡を残す？

マズい

全身の神経が警報を鳴らしていた。相手の罠にまんまと引っかかっ
てしまったようだ。俺はともかく、メティスとアニスは隠れる場所
が必要。が、その場所はここがない。それを計算してこのエリアを
選んだのだろう。ティガって脳筋なイメージがあっただがな。

無言で構える。

「「！！」」

あらかじめ言っておいたのは、無言で構えたら緊急事態だといっ
と。

「動くな、均衡が崩れる」

こちらは全神経を集中させての探知で反撃を狙う。向こうは全神経を集中させての隠密で強襲を伺う。今、ペースは向こうにあるが俺の探知網を警戒して出てこない。もしメティスかアニスが動けば探知網が揺らぎ、その針の穴のようなスキを狙ってくるだろう。

無音の時間が流れる。

もっと探知を精密に。見ろ、視ろ、観ろ。

ザワッ……

「……………」

全方向から確かな殺気を感じ取る。まやかしか。

と、思った瞬間

「……」

前方から大きな気当たりを感じた。メテイス、アニスが構える。

いや、これは違う。この気当では

「フェイクだ！！ 後ろから来るぞ！！」

叫ぶと同時に2人（1人と1匹）を引つ張り、跳ぶ。

俺の予想は大当たり。完璧といっていい隠密をしていたのは討伐対象になっていた竜だった。

ティガレックス亜種の黒い身体。しかし翼の部分は迅竜『ナルガクルガ』のブレード。尻尾もナルガに近いものだ。2匹のいいとこ取りだな。

「お前が轟迅竜『ティガレックスキメラ種』か。こいつは手強そうだ」

柄を握る右手は微かに震える。これは恐怖からか歓喜からか、というのは俺自身もわからない。けれどそんなことはどうでもよい。俺はただ、

目の前の驚異を叩くだけだ。

『ガアアアアアアアアアア！！！！！！！』

近付く者の本能に恐怖を刻み、全てを吹き飛ばす咆哮はティガそのもの。顔をしかめた一瞬を突いて突撃する速さはまさにナルガ。高火力がスピードを備えると大変だな。

突進を回避しつつ、身を隠せる場所を探す。

あった。あの岩場がちょうどいい。

急加速して岩場に直行。隠れているよう指示をだし、改めてティガを見据える。

弱点はわからないが狙うは脚。機動力を奪うことをメインにするとしようか。

「『空閃』」

高速で発射された真空の刃は寸分変わらず前脚を狙う。が、そんな単純なもの当たると思っていない（左前脚にかすったのか幸運だな）。左右のどちらかに回り込むだろう。そして頭のいい奴のことだ、来るのは振り切った刀を戻すのに時間が掛かる左。

予想通りの左。視界は必殺の爪を捉える。バックステップで回避、同時に振り降ろした右前脚を斬り退却。

深追いはせず距離を取って様子を見れば、ティガは傷を負ったことにたいして驚いているだけで機動力を奪ったとは言い難いようだ。

ティガ、ナルガ共にプレス攻撃はないので一定の距離を保てば有利。と思っていた。

突然尻尾を回したと思えば緑迅竜の棘が飛んでくる。轟竜のパワーもあり、直撃すれば人体なぞ余裕で貫通する。棘があったの忘れていたな。驚くがそれだけだ。途中で曲がることがないのでタイミングさえわかれば子供でも避けれるぜ？

『グガアアアアア！！！！！』

どうやら牽制用らしい。距離を詰めてきて竜の王道攻撃、咬みつき。

「甘いわ!!」

反復横飛びの要領で右前脚に近付き、カウンターの一閃。右なのは狙いやすかっただけで深い意図はない。いい手応えだな。

『グルルルルル』

あ、やば、キレた。通常、怒り状態ではパワーやらスピードやらが上昇する。手負いであっても、だ。えーこれ以上速くなるのかよ。

気付けば目の前まで迫っていて回転攻撃に移行する直前だった。やっぱり速いな。

「尻尾伸びるのかよ!」

尻尾を鞭のように伸ばしてリーチを広げてきた。しかも棘を飛ばすというおまけ付きで。

直撃、とまではいなくても掠ってしまったようだ。だいぶなまってるな、修行1からやり直しだな。

「まあこの程度なら……ぬ」

急に方膝をつく。致命傷らしい傷はないので恐らく毒の類だろう。尻尾の毒はレイアの専売特許なだけだな。

「それにしても、超即効性か。毒に対する耐性があってこのザマ、死にはしないと思うが動きが大幅に制限されるのはつらい」

『グガアアアアアアア！！！！』

これを狙っていたのか俺が呻いた瞬間にブレード攻撃。

避けようと思ったが足がもつれて動けず、モロに喰らう。といっても夜叉鴉を間に挟んだから衝撃くらいしかダメージはない。

「人間をなめるな！」

無理矢理足を動かし、正面から肩に当たる部分を思い切り斬りつける。そこまでの深手ではないが、いいダメージだと思いたい。

「グ、グルルルルル……」

お？ 逃げたのか？

あの角度の飛び方は上空から攻撃ってわけじゃなさそうだ。レウスに続きまたかよ。

「グッ……」

毒の回りが速い。視界が霞んできたぞ。

「だ、旦那さん大丈夫ですかニャ!？」

「大丈夫に見えるのか？ 解毒笛を頼む……」

「は、はいですニャ」

大急ぎで解毒笛を吹いてくれる。体から毒が抜けていくのがわかる。笛の音で解毒ってどういうことだ？ 新陳代謝でも促す理論だろうか。どちらにせよ助かった。

「ビャクヤさんが苦戦するなんて……」

「予想外か？ 俺は強いが負けることだってあるさ。勝率がいいだけだ」

「負けるって……誰なんですか？」

「俺の師匠であるじつちゃん」

あの人には生き地獄を見せられた。

「あー」

「納得ですニヤ」

納得されてもな。

「兎に角追いかけよう。今回は目印つけたからすぐ追いつく」

「わかりました、どこに行っただんですか？」

「山の頂上。まともに歩いたら日が暮れるから担ぐぞ」

「え？ …… ひゃっ!？」

「ニヤ!？」

「舌嚙むぞ、黙ってな」

轟迅竜、首を洗って待っている。

「????」 SIDE「

うまく罠に誘い込めたと思ったが気付いたか。流石だな。

地理的にはオレの独壇場なので勝てると思ったがそう簡単には行かないか。

毒を持っているがここまで動けるのは予想外だな。オレの毒は一瞬で命を刈り取るというのに。

これ以上この場で戦っても決着はつかないだろう。仕方ない、場所を変えるか。

剣士よ、早く来い。

第16話「狡猾なる轟迅竜」（後書き）

作「意外と早く仕上がりました。いやーよかったよかった」

メ「そうですね。今回はバトル入れることができました」

作「バトル場面ってどのくらいの長さがちょうどいいんでしょうかね？ 他の作者さんの見て勉強してきます」

メ「今回からもっと戦闘場面を詳しく書こうと思っているのですが、どうでしょうか？ 想像しやすいといいんですが」

作「その辺りは人によってまちまちなのでなんとも言えないですねー」

メ「そうなりますね。今回は28日午前10時です。次の話もゆっくりにしてってください」

作「それじゃあ次回もゆっくりs」

メ「もう言いましたよ？」

作「なん……だ……と？」

第17話「決着の時」(前書き)

前回の話で雪山なのにフロギイがでてくるというアホな誤字がみつかりました。察しのいい読者様は気付かれたと思いますが「バギイ」の間違いです。既に手直ししましたが、自戒の意味を含めてここに報告します。すいませんでした。

指摘してくれた方、ありがとうございます

第17話「決着の時」

ティガが飛んでいった方向にメティスとアニスを抱えて急行する。目的地は山の頂上。ともに歩けば2時間はかかるけど、このペー
スなら 10分で到着するな。

岩肌をピョンピョン跳ねてるから雑魚を相手する必要ないから楽といえは楽だが、2人（1人とry）にとってはジェット コースター並のスリルだろう。

「キャアアアア！！！！」

「ギニャアアア！！！！」

さっきから耳元で叫ぶのやめてくれないかな。キーンとする。

「お、吹雪やんでるな。これで条件は対等だ」

吹雪の中だったら俺の態勢が不安定だからティガ超有利。勘弁願いたかったが、その心配は無用らしい。

「さて、すぐそこに居るわけだが……ここを中心に自己判断で動け。あのレウスの時よりもヤバイ奴だから時間がかかると思う。アニスも無理して手助けはするな。万一のことがあつたらすぐに逃げろ。」

いいな？」

「……はい、でも一つだけ」

「なんだ？」

「死なないでくださいね」

おい、フラグ立てるなよ。まあその程度のフラグなら破壊させて貰うが。

「善処しよう」

相手の実力は大体わかった。時間がかかると言っただけど速攻で終わらせたいから本気で。気が逸れない限り終始こっちのペースで戦えるだろう。

「さて、居るのはわかってるんだ。素直に出て来い。出てこないなら……」

一息吸ってから、

「こ　　ち　　か　　ら　　行　　く　　ぜ　　?」

気当てを放つ。

『ガアアアアア!!!!』

危険と感じたのか隠密からの強襲を捨て、一撃の下に殺そうとする。

「無駄だ」

先ほど当てた気当て、それは俺の全力に近い殺気を放ったもの。轟迅竜の本能に恐怖を刻み付けることなんて容易い。恐怖からくるわずかな判断ミスと、殺気が原因で辺りの空間が歪んで見えるためデイガの攻撃は俺が一切動かなくても当たることはなかった。

まあ頭のいい奴のことだ。すぐに通じなくなると思っけどな。

攻撃が外れたその隙、俺が見逃すわけがない。

「『雷閃』」

機動力を奪う狙いは変わってないので一番近い右前足を斬る。

ガギッ！！

「ふむ……硬いな。ならもう一回、おっと」

尻尾を振り回す。はい、カウンター美味しいです。

スパン、と小気味いい音と共に尻尾の先を切断。前足よりは柔らかかった。

『グ、グ、グ、グガアアアアアアア！！！！』

凄まじい咆哮。そして俺の周りをグルグルと高速で回りだす。絶えず動いて攻撃をさせない+攻撃を当てるつもりだろう。

回りながら猛毒の棘を発射する。いくつかあらぬ方向に撃ってるのは狙いが上手く定まらないからか？

「あのなあ、一度受けた攻撃を喰らうのは三流のすることだ。手傷を負わせたいなら新しい攻撃を仕掛けてきな」

無数に飛んでくるが全て見ずに叩き落とし、いくつかの棘を跳ね返す。自分の毒にやられる馬鹿はいないと思うので効果は薄いだろう。

やはり毒は効かないようだ。回転を止め、一つ覚えのように突進。今回ののは上空に飛び上がったから+重力となっているがたいした差はないだろ。

反撃に出ようとした瞬間、雪に足を取られバランスを崩した。

「っ！？ まさか足場の雪を脆くするために棘を外してきたのか。なかなか狡猾じゃないか。こりゃやばい」

間一髪受け止めることは出来た。が、非常に危うい状況になってしまった。角度的には斜め上での激突（現在進行形）なのでこのまま耐えててもいずれ潰される。かといってこの体勢で相手のブレードを弾こうとすれば夜叉鴉ごと吹き飛ばさなければ隙を作ってここから抜けられない。

「仕方ないか……おりゃ!!」

潰されたくないので弾く。衝撃で夜叉鴉も吹き飛ぶがあとで回収すれば問題な―

『グガアアアアアア!!!!』(↑夜叉鴉の目の前に鎮座)

問題しかなかった。徒手空拳ではさすがに無理だつて。あの神様(驚)にも体術最強にしてくれなんて言っていないし。

奴も無理に攻撃しようとせず、夜叉鴉を取りに行こうとしたときだけカウンター攻撃してきそうだし。詰んだか？

「ハアッ!!」

『グル……グオオオオオオオ!!!!』

ちつ、やはり気当てに慣れたか。この均衡状態が続くうちに打開策を見つければ。

メテイス SIDE

わたしたちを手ごろな岩場に下ろしたあと、想像を絶する戦いが始まった。あまりにレベルが高すぎて言葉が出ない。

「ねえアニス、なにかわかる？」

「さっぱりですニヤ。たぶん上位ハンターですら見るのがやっとじゃないんですかニヤ？」

「だよね」

テイガが岩場から飛び出してきたと思えばビヤクヤさんが反撃して、尻尾攻撃をすればカウンターで切断してしまう。

「それ、充分見えてますニヤ。さすがは旦那さんの弟子ですニヤ」

そうなのかな？ それだったら嬉しいけど。

しばらくビヤクヤさんが圧倒していた戦いは、急激に展開していた。

「あっ……むぐむぐ……」

「静かにニヤ！ こっちに来たらヤバすぎるニヤ」

「ご、ごめん。でもあの状況危ないよね？」

「ですニヤ。でもどうしようも……」

危ない状況というのはビヤクヤさんのカタナが手から離れて、そのカタナの前にティガが居座った場面。完全に膠着状態に陥ってる。

「これって……わたしたちの出番だよね？」

「え！？ ニヤにを言っているのかニヤ！？」

「だってこのままじゃ負けちゃうよ？」

「そ、そうニヤけど……」

「だから、ね？」

「……わかったニヤ。ボクも頑張つてサポートするニヤ」

作戦はこう。わたしが気配を消して気づかれないようにカタナを取りに行く。アニスは煙玉と閃光玉を準備して、気付かれた場合即投げる。一瞬でも時間を稼げれば平気。

一度限りの大勝負。

「うう、怖いニヤ、見てられないニヤ」

「（そーつとそーつと）」

ほふく前進で進む。カタナまであと10m。まだまだ余裕がある。

9m。まだ遠い。

8m。気付く様子はない。

7m。どのくらい時間が経ったんだろう？

6m。結構近づいてきた

5m。

『グル？』

「（まずい！）」

気付かれたのか、ティガがゆっくりこっちを見ようとしたとき――

ザワツ！！！！！

『ガ！？』

ビクヤさんからこれまでとは比べ物にならないくらいの殺気が吹き出る。

「（うつ……危ない危ない。飲み込まれるところだった）」

どうやらビクヤさんはわたしに気付いたようだ。殺気でわたしの存在を隠している？ それにしてもこの殺気は強すぎるよ……

でもティガの気は逸れたようだ。これなら……

カタナに触れる。見れば目の前に圧倒的な存在感を醸し出す竜が存在している。

「ひっ……（あ！）」

思わず声が！ これはたぶん……

『グルルルル……』

こっち見てる。ああ、わたしの人生終わっちゃったかな。

「メテイスさん！ 早く逃げてニヤ！」

アニスが鼓舞して煙玉と閃光玉を投げつける。

なんとか立ち直ったわたしは緊急回避で第一撃を避けることが出来た。閃光玉のフラッシュもあって。

でも転んだから次の攻撃が避けられない……

「諦めんなよ！！」

ビヤクヤさんの怒号が聞こえる。そうだ、諦めたらそこで試合終了だった！

『ガアアアアア！！！！！』

第二撃の振り下ろした手もなんとか避ける。その直後に体が浮く。ビヤクヤさんがわたしを抱えたようだ。

「いろいろと言いたい事があるけど全部後回し。とりあえず、助かった」

「あ、はい／＼／」

「どうした？ 顔赤いぞ？ やっぱ無理したのか」

いえ、そうじゃなくてお姫様抱っこはちょっと……

＼白夜 SIDE＼

心臓に悪すぎる夜叉鴉奪還作戦をギリギリ成功させたメテイスにはあとで少しばかり説教させて貰おう。

拾い上げたメテイスを元の岩場に戻して、それを追いかけてきたテイガを瞬間で撃退する。

『グオオオオオ………』

見事に右前足にヒットし、転倒させることができた。すぐに起き上がったときにはもう少し転んでくれた方が早く終わったのに、とか思った。

逃げられたら困る、そろそろ終わりにしようか。

『グオ？』

「え！？」

「ニヤ！？」

三者とも困惑する。当たり前だろう、俺が5人に分身しているのだから。

まあ、厳密には殺気による幻の創造だから実体なんてないが。

第三之型『朧閃』。殺気による分身で敵を惑わし、実体で斬る。要は目くらましなんだが極めれば分身の攻撃も実体化する。鋭すぎる殺気は時として敵を斬るらしいが、俺には1人の分身ぶんの攻撃しか実体化できない（やっぱ人間じゃないですねbymeティス）。じつちゃんは5人でも6人でも10人でも実体化させることができるが。

5人が跳ぶ。ティガは困惑の末、5人全てに攻撃を繰り出す。

残念ながら、その攻撃は全て空を切る結果となった。

「目に見えるのが全員じゃない。本体は後ろだ」

5人のうちの1人の攻撃を実体化させ、更に本体が背後からの一撃。

前後からの同時攻撃は、堅固な鱗を切り裂き、その命を刈り取った……

「????」 SIDE「

負けた……か。

いい勝負になったと思ったが、惜しかったな。

まあ、コイツに倒されるなら本望だ。楽しかったぞ。

オレはこのままギルドとやらに行って研究されるのだろう。負けたのだから文句は言わないが「これ」までギルドの奴らに取られるのは癪だな。

戦士よ、受け取るがいい。有効活用してくれ。

〔白夜 SIDE〕

ん？なんだ？

奴の尻尾（残っている方）が光っているように見える。

「どうしたんですか？」

「アイツの尻尾、光ってない？」

「え？光ってませんけど」

メテイスには見えないのか？

反応から見るにアニスも見えてないみたいだ。

うゝむ、こう言った新種は剥ぎ取り禁止だけど俺が取らなければならない気がした。

問題の箇所にはナイフを突き立てる。

「これは……」

「ぎょ、玉!？」

「ニヤンですと!？」

玉だった。漆黒に輝く玉。

でもティガもナルガも玉はださなはずだぞ。

「一体なんで？」

「わからん、でも確かにあったんだからそれは否定できない。ま、貰っておこう何かに使えるだろう」

「いいんですか？」

「普通はない物だから気付きはしないよ。さ、帰ろうか」

「そうですね」

メティスが討伐完了の発煙筒に火をつける。これで麓にお迎えが来るだろう。

「そうだ、帰路に着く前に……」

「はい？」

「ニヤンですか？」

「助かったよ？確かに助かったけどやり方ってもんがあつたんじやない？夜叉鴉奪還作戦」

コニコニコニコニコ

「ひゅいー！」

「ニヤー！」

「少しお話しようか。なーに、こっちにも非があるからソコマデ強ク言ワナイヨ？」

「に、逃げるニヤ！」

「そ、そうだね！」

「逃ガスト思ツテイルノカ？」

くアプトノス車の運転アイルー SIDEく

おっ、発煙筒だニヤ。

まさか本当に1日で終わらせるとは……噂（最強）は本当らしいニヤ。

ニヤんだ？今悲鳴が聞こえたような……

第17話「決着の時」(後書き)

作「うおお、眠い。村長さん、後はよろです」

シ「あらあら大丈夫？今の時間は……午前3時じゃない。無理しちゃダメよ」

作「そうなんです話の流れ思いついたので書かずにいらなくて」

シ「あら、作家気取り？」

作「そういうわけじゃ……(やりづらいな)」

シ「ちょっとした冗談よ。そうね、午前3時ともなると誤字がひどそうね、五時じゃないけど」

作「え？今なんt」

シ「気のせいよ」

作「そうですか。予防線として言いますが、話の構成が粗いです。特に最後なんて超展開……はいつものことですねorz」

シ「意味がわからない誤字脱字は例の如く連絡してね」

作「それじゃあ次回もゆ……」

シ「どうやら眠っちゃったようね。世話の焼ける……そこがおもしろいんだけどね。それじゃあ皆さん、また次回で」

第18話「つかの間の休息……」（前書き）

【！】夏休み終了のお知らせ

あと、謎の改行が多々見受けられますね。なんででしょう？
地道に手直ししていきます。今後の変な改行はミスだと思ってスル
ーしてください。

第18話「つかの間の休息……」

轟迅竜との対決から2日後、討伐成功を聞きつけたギルドのライクさんがすでに待っていた。どうやら報酬金とティガ（キメラ種）についてらしい。

「まずは討伐成功おめでとつ。例によって素材は渡せないが……報酬金20万zだ」

「どうも」

儲かるな。当分は資金的に困ることはなさそうだ。

「それで今回の新種なんだが、戦っている最中に何か気付いたことがあったら教えて欲しい」

「そうだね……まずは個々の特性を合わせた場合足し算的に強くなるのではなく掛け算的に強くなること。もつとも、その個体が強かったからかもしれないが、どちらにせよG級以上の強さだったな。で、通常両種族にも見られない特徴が出てきた」

一旦お茶を飲んで喉を潤す。

「突然変異の類だろう。今回は猛毒を持っていた。総合するとこれ

までの常識が通用しないどころか常識に囚われていたら確実に勝てない相手ってことだ」

俺の場合は余計な知識がなかったから勝てたが（ゲームは役に立たないのでカウントしない）、先入観バリバリで望んだらどうなっていたかわからない。

「そうか。必要なのはその場にいるハンターの判断力ということか。これはまた面倒臭い新種が出てきたな。忙しくなるのは嫌なんだが。お前の方にも回ってくると思うから気に留めておいてくれ」

そりゃそうなるわな。

「まあ、数自体は相当少ないと思うね。あんなのがたくさんいたら自然界が崩壊する」

「それは怖いな」

そう苦笑気味に返答したあと「仕事が溜ってるからこれで」と言い、お茶を飲み干してさっさと出ていった。

「いや、それにしてもやつぱり凄いですね。今回のティガ、恐ろしく強いつて噂だったのに1日で倒すなんて」

声を掛けられた方を見ればサーシャが感慨深げに話してくる。

「確かに強かったな。正直あの2人がいなければ死んだのは俺だと思っ」

「そうなんですか？」

解毒笛がなかったら人生終了だったし、夜叉鴉吹っ飛んだ時には詰んだかと思った。そのことを話せば、

「思わぬ助け舟ってわけですか。まさかメティスがビャクヤさんを助けるとは……」

「あの子もだいぶ強くなってきたからね。本人は自覚してないと思うけど」

「自分のことは案外わからないもんですからね」

何故ニヤニヤしながらこっちを見る。

「そう言えばそのメティスが見当たらないですけど」

「なんでも一刻も早く予約した装備を取りに行きたいそうだな。早口で俺に言ったあと風のように走ってったよ。普段からあれくらいの力を出せばなあ」

「あはは、彼女らしいですね。ということはビヤクヤさんは鍛冶屋に行くんですか？」

「一応お目当ての物（お金）は手に入ったから様子でも見にいくところだよ」

「なるほど。じゃあわたしも付いて「サーシャちゃん、クエスト発注いいかな？」行けませんか。はい、ちよつと待っててください。じゃビヤクヤさん、またあとで」

急ぎ足で受付まで戻る。受付嬢は受付嬢で大変ってことか。

「お、来たね。待ってたよ」

「どうもりザさん。今回の装備、手応えはどうでしたか？」

「完璧だね。素材自体がかなり上質だったから三流の誰が作ったかも知らない上位装備を越えてるんじゃないかな」

いやいや、いくら三流だからって上位装備越えてるってどんな腕前してんだ。

「あと作る際に端材がでたからオトモ用のランポス装備作っておいたよ。アタイからのプレゼントだから金はいらない」

「マジすか。流石にドングリは厳しいと思ってたんですよ。ありがとうございます。そう言えば1つお願いがあつて」

「なんだ？」

「そうですね、まずはコレを見てください」

懐から取り出すのはあの竜の玉【ぎょく】。剥ぎ取ってから時間が経っているのに、その純然たる漆黒には一点の曇りもない。

「これは……玉か。でも見たことない色をしているね。これってもしかして」

「察しの通り轟迅竜の物です」

「へえ」。でもさ、新種素材の剥ぎ取りは禁止されてんだろ？ 密猟になると思っけど」

「ギルドに渡すのは癪なので」

「……アッハツハ、いい度胸してるね。そういうの好きだぜ。で、これを加工して欲しいってか？」

「ええ。と言つても装飾品みたいにして欲しいんです。できますか？」

「やったことないが出来ると思う。ちなみに装飾品を作るためには原珠が必須になるんだが、持っていないならウチで買えるぞ」

意外と商売上手のようだ。金を取るところはしっかり取っていきやがる。

「今から炭鉱生活は時間掛かりますからね。わかりました、買いましょう」

「まいど。早くても1週間は必要だな。気長に待ってくれ」

それだけ加工が難しいと踏んだか。こういった眼力も一流の鍛冶師には備わっているのだろうか。いや、それはリザさんだけだな、きつと。

そんなことを考えていれば奥から新しい装備に身を包んだメティスとおまけで作って貰えた装備に喜んでるアニスがでてきた。

「あ、ビャクヤさん。来てたんですか」

「俺も鍛冶屋に用事があってね。それはそうと装備の具合は？」

待つてましたと言わんばかりにニヤリとする。

「今までと比べものにならないほどフィットします！ それに軽いので疲れにくくなったかと。防御面も飛躍的に上昇したそうです！」

「随分と気に入ったようだな。アニスは？」

「ドングリの重さとお別れ出来ると思うと最高にハイな気分ですニヤ」

やっぱり重かったのか。言ってくればいくらかでも変更させてやったのに。

お礼を言つて鍛冶屋から出ていく。とりあえず目ぼしいクエストの確認をするかな。

「そうかそうか。じゃあその内テストで今度こそメティスのソロ狩りに行くか」

「今のわたしだったら怖いものなしです！-」

「オトモしますニヤ!!」

その元気の10%でも分けてくれれば俺も色んな奴に勝てる気がするのだがな。若いつていいな

(注・2歳差です)

「そう言えばソフィアはどうした? 二日酔いはもう治っただろう」

「それなんです、一旦家に戻った時『リハビリついでにウラガンキン討伐に行った』ということが判明しまして……」

……なんとタイミングが悪いことで。この調子で俺のクエストに同行できる日は来るのだろうか。帰ってくる前に俺当てる用事が舞込んでくるんだろうな。話の流れ的に。

その予感は見事にクリティカルヒットすることになった。

「ちょっといいかしら?」

用事を持って来たのはシルヴィさん。今度はアカムトルムか？　ラ
ージャンか？　クシャルダオラか？

「！　シルヴィさん、いつの間にいたんですか」

驚くのは俺ではなくメティス。予想がついていたから今回ばかりは
耐えられた。

「ついさっきよ。ビヤクヤくん当てに手紙が来ているわ。はい」

「要件はなんですかね？」

こいよ！　古龍でも何でもかかってこいよ！！

「それは手紙を読まないとわからないんじゃない？　それじゃあ確
かに渡したからね」

言うが早いがもう居なくなっていた。

「きつ、消えたニヤ？」

「見事な抜き足だったね。危うく見逃すところだった」

「抜き足……ですか？」

「俺はそう呼んでる。気配を消すことで注意を逸らして消えるように移動する技術だったな。極めると本当に消えたように見える」

これと真逆（気付かれずに近付くこと）の技術は差し足って教わった。どちらもフェイントをかけるには持ってこいの足運びだ。

それはともかく、

「手紙の確認だな。えっと、『この度は依頼に答えてくれて感謝する。実はキメラ種以外にも剛種と言った通常以上の力を持つ大型のモンスターを見つけた、という情報が入った。剛種は新たに出てきた種ではないが楽観視はできない。キメラ種についても謎の部分が深い。そこでなんだがギルド本部では特別に対策班を設立した。ビヤクヤ殿には一度、ドンドルマで話し合いたい。もちろんメリットもあるのですまないが足を運んでくれないだろうか。明日にはアプトノス車がつくだろう。」

ギルド本部近距離戦闘部隊長　バルトⅡアレクサンドロ『」

要はドンドルマまで来い、ってことだろう。ギルドとの仲を悪化させたくないから行かざるを得ないだろう。すつごく嫌だけど。

「なあメティス、アプトノス車でドンドルマまでどのくらいかかる？」

「そうですね……1日だったと思いますよ。何度か行ったことあるので、たぶんそれくらいだと。行くんですか？」

「本部直々のご指名じゃ仕方ないさ。メティスも暇だったら案内して欲しいんだけど」

「え、いいんですか？ 手紙はビヤクヤさんのことしか書いてないですけど……」

「連れ添い禁止とも書かれてないから心配いらないよ」

「じゃあ一緒に行きたいです！」

よし。これで道に迷う心配は無くなった。

「ボクはお留守番なのかニヤ？」

「何言ってるんだ。一緒に行くぞ。相棒を連れていかない訳ないだろう」

「よかったですニヤ」

ちなみに、出発までにソフィアと会うことはなかった。

〈ソフィア SIDE〉

「これで最後だ!!」

溶解銃槍ヴォルガノスで足を狙い続け、転倒したところを竜撃砲を放つ。

零距离からの直撃は、これまでの戦いで体力を消耗したウラガンキに耐えることは出来なかった。

『グオオオオオ……』

弱々しい咆哮と共に地に伏す。

「ふう。二日酔いのダメージが残っていると思ったが意外と大丈夫そうだな。討伐できたから早めに帰ってメティスたちの帰還を待つとするか。今回のクエストは同行できなかったけど、次回は必ず」

素材を剥ぎ取り発煙筒で合図を送る。既に迎えがスタンバイしていたのですぐさま乗り込む。

「ギルドの依頼はティガのキメラ種？ だったか。集会場では相当強いと言われているから日帰りにはできないだろうな。ということは何とか会うことができそうだ」

戦いで疲れきつた体を休ませながらそんなことを考える。

無論、この発言がフラグになったということは言つまでもない。

第18話「つかの間の休息……」（後書き）

作「予定より丸1日遅れての投稿です。前書きの通り学校始まっちゃいましたorz」

サーシャ「諦めてください。それで学校があるため更新速度がおそくなるか、ヤケになって早くなるかは作者にも判らないそうです。気長に待っていてください」

作「何か連絡をしない限り1週間お待たせすることはないので」

サ「がんばってー」

作「あとですね、週間アクセスが6800以上（2011/8/31、2:00）ってどういうことですか。アクセス順で3番目ですよ！？ アクセスに対する評価がアンバランス過ぎるのはデフォでしょうね」

サ「確か当初の目標はアクセス100超えればいいなー、でしたっけ。いい意味で恐ろしいですね」

作「はい業務連絡終了。話の内容に行きましようか。主人公たちをドンドルマに行かせたかったのでこうなりました」

サ「結局ソフィアさんとは会えず終いですか。いつか一緒にクエスト行ける日はきますよね？」

作「えーと、うーんと、そのー、あのー、行けるよ」

サ「（ダメだこの作者早く何とかしないと）」

作「まだまだ話は続くのでよかったら最後までお付き合いください。それでは」

サ「次回もゆっくりしていつてね」

作「うん、わかってたさ。でも期待しちゃうんだよ、人間だもの」

第19話「初めてのドンドルマ」(前書き)

今回から読みやすくするために改良してみました。

どうでしょう？

第19話「初めてのドンドルマ」

ドンドルマ。

ハンターズギルド本部（通称ギルド本部）が置かれている地であり、この世界で最も発展している。大多数ハンターからは聖地と言われて、ここに来ることを夢見る者も少なくない。一般の人よりもハンターの方が多いのも特徴の一つだ。そのため、至るところに道具屋、武器屋といったハンター御用達の施設が豊作である。

ここに来る途中にわかったことだが、ギルドとの話し合いは明日らしい。なんでも下準備に時間がかかってしまったらしい。

予定としては（観光を含めて）明後日まで滞在することになるのでどこか宿泊施設を、と思ったが手配してくれていたようだ。

「うわゝすごい、こんな所に泊まれるんですか？」

「そうなるな。なんだこのVIP待遇は。しかも二人部屋＋オトモ可とか狙ったようにしか思えない」

「どっから情報仕入れてるのか不思議ですニヤ」

連れ添いのことは何も連絡していないから普通は知り得ないはずなんだが。

……ギルドを敵に回すと大変なことになるな。以後気をつけよう。

「ビャクヤさん、これからどうしますか？」

「ん、そうだな……色々と案内してもらいたいんだが、平気か？」

「もちろんですよ。と言ってもわたしもそこまで詳しくないんですけどね」

「まあ何も知らない俺とアニスに任せるよりもいいだろうな。この辺りの地理は覚えておいて損はないと思うから有名な所だけでもいいぞ」

「任せられたからには完璧にこなしてみせますよ！」

「前も言ったと思うけど空回りするなよー」

「メティスさんは危ういところ多いもんニヤ」

膨れた顔をして怖いより可愛いだけだ。言わないけど。

「まずはどこ行く？」

「そうですね……じゃあ、集会場兼レストランに行きましようか」

レストランにもなっているのか。なんでも一般の人でも利用でき、量が多い上に安いそうだ。ちょうどお昼だし食べていくのもいいな。

軽快な足取りで進んでいくメティスに着いていけば、ユクモ村集会場5つぶんくらいの超広い空間にそれを埋め尽くすくらいの人の数、ついでに非常に喧しい。耳がキーンってなるぞ。アニスなんか目を回しているし。

「ここ……ハンター……下位……」

五月蠅すぎてメティスの声が全く聞こえない。元から音量が大きくなかったのが災いしたか。口の動きからすると、

『ここでハンターたちが受注するクエストは、下位：上位：G級』
4：5：1だそうです』

だろう。かろうじて上位が一番なのか。

このままじゃ会話もままならないのでなるべく喧騒の中心から離れることにする。

「五月蠅すぎますニヤ。メティスさんが来た時もこんな感じでしたかニヤ？」

「ここまでじゃなかったよ。なんでだろう？」

「ハンターが増えたか？ ま、いいや。飯にするか」

「そうですね」

目の前に置かれたのは重量感が半端ないほどの料理。俺たちフードファイターでも横綱でもないんだが。

まさにハンター食と言っていいほどのボリューム。2品だけだが6人前はあるぞ。これでこの値段とか採算が取れているのだろうか。

遅めの昼食を取ったあと、アニスの約束（調合用の素材購入）を果たすため知っている人は知っている道具屋に行くことにする。

これまで貯めた金は、使い道がほとんどなく有り余っているから余裕だろう。

目的の店は激安と言っていたので理由を聞けば、

「なんでも店主がハンターをやっていた時期があつて、今でも採取に出掛けているので貧乏ハンターの味方なんですよ……キャッ!」

説明のために振り向いたためにぶつかってしまい、運の悪いことに持っていたジューズをかけてしまった。

げっ、明らかにいちゃもん付けるタイプの人間だ。こりゃ厄介だぞ。

「おい嬢ちゃん、なにしてくれんだよ」

「す、すみません。前を見てなかったの」

「謝つてすむならギルドナイト（いわゆる警察）なんていらねえんだよ。どうやって責任取るんだ？ え？」

嫌な空気に気付いたのか周りの人達が足を止めて見て来る。うゝむ、あまり注目されたくないんだが仕方無いだろうな。

「この装備はな、上位ハンターの中でもずば抜けて強い俺様のために作られた特注品だぞ。わかってんのか？」

「本当にごめんなさい！ クリーニング代はお支払いしますので!」

「こつちには用があるんだ。時間ないんだぞ」

あー腹立ってきた。こつちに非があるとはいえ、あんまりだろう。コイツやっちゃていいよね？

「そのくらいにしとけ。上位ハンター？ 聞いて飽きれるぞ。力があるだけの奴がハンターを語るなんぞ方腹痛い」

「なんだ？ 俺様とやろうってのか？ 止めておけ、そんな細身でどうやって戦う」

「人を見かけで判断するほど愚かなことはないよ。さっさと消えてくれ。目障りだ。貴様とは喋っているだけで気分が悪くなる」

「ふん、そこまで言うなら相手してやろうじゃないか。俺様は優しいから武器は使わないでやるよ。最後の忠告だ、」

「その先は言わなくていい。どうせ今謝るなら許してやってもいい、みたいなことだろ？ 御託はいいからかかってこい」

逆上して殴りかかって来る。大剣を使うだけあつて筋力はあるな。

もつとも、典型的なテレフォンパンチだが。

めんどうなので正面から受け止めて、そのまま雑に投げる。周りの人や建物は傷つかないように注意したから被害はない。

起き上がったところを足払い。態勢を崩させてまた雑に投げる。

この作業をあと3回ほど繰り返したところで相手がキレたらしく、担いでいた大剣を抜く。周りから野次が飛んで来るがアイツはスル―。さつき使わないって言わなかったか？

「舐めやがって、剣の錆にしてくれる」

「手入れをしていない剣でなにすんの？ その剣、死んでも同然だよ。かわいそうに」

「うるせえ！ その減らず口、今すぐ閉じさせてやる！」

予想通りの上段斬り。この名も無い大剣、楽にしてやるか。

相手が振り降ろした時には既に大剣は柄から折れていた。もちろん刀身は俺の手の中。あとで葬ってやるとしよう。

「な、な、な……」

「いい加減実力の差はわかったか？ さつさと失せろ。金輪際ハンターを名乗るな」

少し脅しただけで尻尾を巻いて逃げていく。気分いいな。ああいう奴はコテンパンにするに限る。

ふと、折れた剣に目を落とす。

「お前も災難だな。あんな人間が主人で」

実に悲しい。ハンターにとって武器とは己の命だろう。丁寧に扱うと言うのはHRに関係なく、また、ハンターでなくとも常識なはずだ。ハンターの手となり共に戦うはずの魂は、乱雑にされるために生まれてきたのではない。

この辺で静かなことに気付いた。あれか？ 大剣を手で折ったのがマズかったか？

「おおーーーー！！！！」

「よくやった！！」

「俺アイツ嫌いなんだよね」

「すげえな」

「それでこそハンター魂つてもんだ!!」

待っていたのは大歓声。変な目で見られなくてよかったと思う。

ほっとしたのもつかの間、周りの人からもみくちゃにされ質問攻めもくらった。

嫌ではないが、さすがにこの人数だと疲れるのは目に見えているので適当なことを言ってこの場から離れ宿泊施設に戻ることにする。

アニスの買物はまた今度になってしまった。

「えっと、ありがとございます。庇ってくれて」

「アレはさすがにイラッときたからな。ああいう奴がいるからハンターの価値が下がるんだ」

あんな奴は少ない、とも言えないところが怖いところではあるが。

「それで、その折れた大剣はどうするんですか？」

「ん、まともに使われないまま一生を終えるのは悲しいけど、ここまできるともうどうしようもないからね。墓でも作るよ」

「そう……ですか」

「世界は広い。中にはこんな奴もいるけどメティスが気に病むことはないよ」

はい、とだけ小さく返し俯く。

だいぶ堪えているようだ。

「全て根絶させることはできないが、目についたら教えればいいさ。落ち込んでても始らない、ほとぼりが冷めたら出掛けよう。今夜は祭りもあるみたいだし」

「お祭り？」

「聞いた話によると今夜は『賛地祭』という大地の恵に感謝する祭りだそう。街は発展すると感謝の意が薄れるだけだと思ったが、そうでもないんだな」

「へえ。そういうのっていいですね」

ハンターが聖地と言うだけあってこのような行事は年間を通し、結構あると聞く。

この街はこれまでに豊かになることだろう。

「戻りましたニヤ」

情報収集に出していたアニスが帰って来たようだ。祭り云々も彼から情報を貰った。

「お帰り。なにかあったかい？」

「大体が今夜のお祭りのことでしたニヤ。あ、でも旦那さんのことも噂になっていましたニヤ」

大方、外道をボコしたことだろう。

続きを促せば、

「旦那さんが倒したハンター、あれは自身が言った通り上位ハンターの中でも実力者の部類だったニヤ。まあ、あの性格からかなり嫌がられてたみたいだけど簡単に反発できる人はいなかったけどニヤ。そいつを倒したことで皆スツキリすると同時に、旦那さんは正体不明の英雄って囁かれてますニヤ。至るところで」

英雄って、そこまで大きなことをしたわけじゃないけど。

誹謗中傷よりはよっぽどいいけど、至るところで噂されているなら外に出づらくなるじゃないか。まったく、勘弁して欲しいよ。

「旦那さんの姿を見た人は限られるけど、判断できる人はたくさんいると思いますニヤ」

「服装とか髪の色とかが珍しいもんね」

むう、やっぱりヨネさんに普段着を仕立てて貰って方がよかったか？

今更だな。

「話は変わるけど旦那さん宛てに伝言がありますニヤ」

「伝言？ まさかとは思っけど……ギルド？」

「その通りニヤ。ニヤンでボクが旦那さんのオトモだってわかった

のは謎だけど」

情報は筒抜けのようです。

「なんでも『あのハンターについて幾つか聞きたいことがあるので賛地祭のときに本部前まで来てください。時間はかからないので』だそうですニヤ」

「そうなるよねー。悪いけどメティスたちとは別行動を取るとするよ。終り次第そっちに向かうから自由にしていって……はいこれお小遣い」

まだまだ相場と言うものがわからないので取り敢えず1万Z渡しておく。

「こ、こんなにいらないですよ!」

む、そうだったか？

それじゃあ、と言って7000Zほど抜き取る。特に大きな買い物はしないからこれくらいでいいのかね？

「うーん、ちょっと多い気もしますが」

「めんどくさいから持って行って。余ったら返すなり懷に入れるなりすればいいさ。俺はもう行くけど、必要だったら荷物漁ってもいいぞ」

「え、もうですか？ お祭りって夕方からじゃ」

「コイツの墓を作からね。時間的には調度よくなるはず」

確か街から少し外れたところにいい感じの場所があったからそこがいいな。

思い立ったが吉日、早速埋葬しよう。

「ふむ、この辺りでいいな」

街人に気付かれないように外に出て、誰も来ないような場所に降り立つ。

周りは木々で囲まれており、時折木の葉の間から漏れる光がなんとも幻想的だ。花もかなりあるので色鮮やか。うってつけの場所だな。

「助けてやらなくてすまない。せめて静かに眠ってくれ」

剣の墓を作る際、いくつか方法があるが俺は剣自身が墓標になるものにする。

ちよつとした丘を作り、その周りを大きめの岩で囲む。しっかりとした基盤を造ったあと嵐が来ても抜けないように突き刺す。ついでに気を練り込んで固定して終了。

全ての死んだ剣をこうできる暇はないが、出来る限りのことをするのが俺の信条だ。

「ここなら誰にも邪魔されることはないし、俺もここには立ち寄らない。無念だと思うが俺にはこうすることしか出来ることはない。許せ、とは言わないがわかってくれ」

黙祈を捧げ立ち去る。

瞬間、剣が僅かに輝いたのは光の悪戯だろうか。

第19話「初めてのドンドルマ」（後書き）

作「はい、という訳で19話どうだったでしょうか？」

リザ「今回は作者がヤケになったから予定通り更新できたな」

作「もうやってられっかー、ですよ。学校なんて爆発すればいいのに。リア充こと」

リ「まあそう言っなよ。そうだ、前書きの改良点なんだが

・行間を増やしてみた

・『!』や『?』の後は一文字空白を入れてみた。なんだぜ」

作「微妙な変化ですが、なんとなく読みやすくなったかと」

リ「こうした方が読みやすい、ってのが合ったら教えてくださいな」

作「あんまり長いとグダるのでここらで終わりましたよ」

リ「もう既にグダって……」

作「シーツー!」

（締め台詞のことを忘れるとは、まさに鳥頭ですね by 神様）

第20話「賛地祭」(前書き)

テキストで纏めます。目標は810KBなのですが、今回初めて11KBになりました。バトル描写じゃないのに

第20話「賛地祭」

墓を作るのは意外と時間が掛かるものだ。気付けば夕暮れ時になっており、耳を澄ますと祭り特有の騒がしさが聞こえる。

ギルド本部前だっけ？ あの時のお仕置き（喧嘩とも言う）の処罰なんだろうなあ。

今すぐUターンして脱走したかったがキメラ種などの話し合いがある手前、そういうわけにはいかないだろう。

「帰りたい……」

重い足を上げ、本部前に直行する。その道中で思い出したことがある

「あ、俺本部の場所知らないや」

今となつては後の祭り。それらしい建物探すしかないようだ。

くメテイス SIDEく

「屋台がいっぱいある、すごいね」

「ホントですニヤ。これなら堀出しものも見つかりそうニヤ」

ビヤクヤさんが部屋を出てから数時間たった後、祭りのための身支度をしていればお祭りが始まったことを告げる鐘が鳴り響く。

ドンドルマでのお祭りは初めてなのでとても楽しみ。アニスを連れて外に出みる。

その盛況っぷりはユクモ村の遙か上をいくほど。慣れるまで少し酔っっちゃった。

「まずは屋台を見て回ろっか」

「わかったニヤ。旦那さんがいる時は何も買えなかったからなにかあれば嬉しいニヤ」

「あんまりたくさん買わないでよ？」

わたしの言葉をこれっぽっちも聞かないで走っていく。小さいからあつという間に見えなくなった。

「ちょっと待ってよ。速いってば」

なんとか見つければ、既にトウモロコシに齧りついて幸せそうな顔をしていた。

「ニャー、やっぱりトウモロコシは美味しいニャ」

「おう、いい食べっぷりじゃねえか」

店の人が豪快に笑っている。

アニスはお金を持っていなかったけど

「す、すみません。代金を……」

「お嬢ちゃんが主人か。いきなり飛びついた時には驚いたよ」

やっぱりタダ食いたい。

「面目ありません……」

「いいってことよ。ほれサービスだ」

そう言ってわたしにもトウモロコシを差し出す店主。その顔には一切の打算はなかった。

「え、でも」

「遠慮すんな。いいものを見せてもらったお礼だ。祭り、楽しんでいけよ」

「わかりました。ありがとうございます！」

折角なので貰った。アニスを引きずって屋台をあとにする。

トウモロコシは絶妙な焼き加減でとっても甘かった。

「アニス、もうこんなことしないでよ。びっくりしちゃった」

「でも……モグモグ……匂いに釣られて……ムシヤムシヤ……それにメティスさんも貰えたから……バリバリ……いいじゃニヤいですか」

「そうかもしれないけどタダ食いはいけないことですよ。お金渡しておくね」

一心不乱に食べ続けるアニスは無言（というか喋れない）で受け取る。

わたしも温かいうちに食べることにしよう。

「モグモグ……ふう、ごちそうさまでしたニヤ。それでメティスさん、さっき面白い屋台見つけたんですが、言ってもいいかニヤ？」

「ごちそうさまでした。どんな屋台なの？」

「メティスさんが言っていた道具屋さんが更に安売りしてましたニヤ」

あの店が安売りって……大丈夫なのかな？

もうタダ同然の値段になってたりして。

「（ちょっと心配だけど）一緒に行こうよ。それ以前になんであの店ってわかったの？」

「情報収集は生きるために必須ですニヤ」

ああ、そういうことね。

「お久しぶりですガンツさん」

「メテイスじゃないか。元気にしてたか？」

ガンツさんがこの店の店主で、いかにもベテランハンターだけどー線を退いて店を構えた人。大雑把なのが玉に傷だけど品揃えは確かだし、いかつい顔をとほ裏腹に優しい。

わたしがドンドルマに来るのは数えることができるくらいだったけど、すぐに仲良く慣れるほどいい人だ。

「ここに来るのは久しぶりだな。お？ オトモ雇ったのか？」

「いえ、この子はわたしの師匠のオトモです。わたしはお母さんの関係で……」

「猫アレルギーだったか？ 大変だな。それで、師匠ってことは訓練しているのか。どうだ？ 強くなったか？」

「えっと、たぶん」

「まあソロで狩りをする場面でことごとく邪魔が入ったからニヤ」

「ほー。そっぴや自己紹介がまだだったな。オレはガンツだ」

「アニスといいますニヤ。ビヤクヤの旦那のオトモですニヤ」

ビヤクヤ、の名前を聞いた途端目を丸くして聞き返してくる。

知っているのかな？

「ビヤクヤ……ってあのビヤクヤくんのことだよな？ 最狂のレウスを討伐した」

「？ そっぴですニヤ」

「さっき『師匠のオトモ』と言ったっことは、メティス、お前の師匠っぴビヤクヤくん？」

「そっぴですけど」

沈黙。

何を言おうか言葉を探しているみたいだけど、まさかそこまで驚な
んて。

「いやー驚いた。まさかあのメティスがねえ。面白いこともあるもんだ」

失礼な。わたしだってやる時はやるんですよ。

「で、そのお師匠さんは？」

「ギルドに用事があるので別行動です。そろそろ来てもいいんですけどね。あの、普段から安いことで有名なのに更に安売りにて平気なんですか？」

売り出されている品物を見ればいろいろとおかしいくらいの値段の数々。何故売れ残っているのかと思ったけど、見た目怖い人が物凄く安値をつけているんだ。たぶん不気味がついているんだろうね。

「元手はタダみたいなもんだから充分過ぎるほど儲けてるぞ。どうだ？ 何か買つてくか？」

「アニス、何かあるの？」

わたしは特にないので聞いてみる。

「どれどれ……ニャ！？ 真・回復笛が160z！？ 素材玉が30セットで1000z！？ こんな安くていいのかニャー！？」

他にもトラップツールが通常価格の1/5だったり、回復薬に至っては1個3zだったりと破格過ぎる値段の数々。

これだとお客さんは近寄らないのも頷ける。わたしですら何か裏があるんじゃないかと思うもん。

「倉庫の隅で埃を被るよりはいいと思うぜ」

「そんなものニャンですか？ 取り敢えずコレとコレとコレ、あとコレもくださいニヤ」

真・回復笛と素材玉セット、光虫に加え音爆弾を購入。これだけ買って大樽爆弾と同じ（500z）ってどうということなの……

「毎度あり。そうだ、もう少し経ったら花火があがるの知ってるか？」

「花火ですか？」

「おう、この祭りの目玉といっていいほど圧巻だぞ。日が落ちたら空を見といい。場所はそうだな……向うの木の辺りが見やすい」

指差した方向にはドンドルマの中で最も大きく、『神木』とまで言われている長寿の木。

見るものに神聖な威圧を与えるみたい。ビヤクヤさんが帰ってきたら行ってみよう。

「あそこまで行くには以外と時間が掛かるから少し早めに出発する
といい。じゃ、今度はお師匠さん連れてきてくれよ」

「わかりました。それじゃまた今度」

「お仕事頑張ってくださいニヤ」

別れを告げて掘出し物発掘掘を続けていれば、大方の屋台は回り終
わってしまった。

途中で大好きな林檎飴を頬張りつつビヤクヤさんの帰りを待つこと
にしたけど、なかなか帰ってこない。

「遅いですニヤ」

「そうだね」

スタッフさんに聞いた話だともうすぐ花火が始まるみたいなので、
のんびり待つことにする。

〔白夜 SIDE〕

時間は少々遡る。

「ここがギルドだよな。これまた随分と立派なことで」

それらしき建物を探し続けること10分くらいで異様なまでの存在感を発見した。

案外早く見つかったな。

「で、ここで待ち合わせのはずなんだが……お？ あの人か？」

扉の前で誰かを待ってますよオーラを醸し出している隊員（と思われる）人がいた。

相手もこちらに気付いたらしく走って来る。

「ビヤクヤ」カムイさんですね。お待ちしておりました。ささ、こちらへ」

丁寧すぎる人に連れられてきたのは隊長の部屋らしい。

「隊長が中で待っているのです。それでは私はこれで」

そそくさと戻っていく。謎すぎる。

悩んでも始まらないのでノックをしてから入ることにしよう。

「お、よく来てくれたな。ビヤクヤくんよかったか？」

「そうですね。ビヤクヤ」カムイです」

「私はバルト」アレクサンドロだ。細かいことは明日に回すとして、呼び出した理由はわかるか？」

バルト、と名乗る人物は非常にごつい。問題を力でねじ伏せるんじゃないの？ それに先祖にゴリラがいてもおかしくないと思う。

とても失礼な考えだが、そう考えるほどごっついのだ。プロテインを毎日飲んでもごっついならない。

「なんとなく。ハンターをぶちのめしたことでしょ？」

それ以外に心当たりは……あるにはあるが、それは明日のことだろう。

「あ、堅苦しいのは嫌いだからタメ口でいい。その通りだ」

見た目によらずフランクな人のようだ。

「じゃ遠慮なく。で、苦情が何かきたとか？」

「その逆だ。多くの人間から感謝の言葉を預かった。アイツは相当の嫌われ者だからな」

わぁお予想外。どんだけ嫌いなやつ多いんだ。

「けれど、こういう問題は両成敗と決まっいてな。個人的にも見逃したいのだが特例を許せば規律が乱れてしまう」

「デスヨネー。で、処罰の件は？」

「私のほうが上に掛け合ったからしばらく狩猟禁止とかではない。キミのクエストに監視および報告者を同行させることで纏まった」

同行者が増えるのか。

あれ？ 俺のパーティーって4人（俺、メティス、アニス、一応ソフィア。アニスを1人とカウントしない奴は俺が地の果てまで行って生き地獄を見せる）だからこれ以上は……

「メンバーがフルで入っているからできない、とか考えているな」

うげっ、なんでわかるんだよ。

「心配要らない。報告者はギルド内の人間とは決まっていらないからな」

「ほー。誰よ？」

「お前のパーティーの中ではソフィアが適任だと思うので彼女に任せる。もっとも、報告なんて飾りなだけで無いも同然だがな」

「そうなのか。随分と適当だな」

「必要の無い監視だからな。上の考えていることはわからん。話は

それだけだ、時間を取らせてすまない」

え？

「それだけって……今日呼ぶ必要あったか？」

「上が今日中に解決しろと五月蠅いのでね。私も明日でいいと言ったのだが、どうやら立て込んでいるときに面倒事を長引かせるのが嫌らしい」

困った上層部だ。腐っていないだけまだマシか。

「そうだ、ついでに明日のことも言っておこう。昼に始めるから昼食を取ったらまたギルド前に来てくれ。キミの経験を話して貰うかもしれないからそのつもりで」

「了解。俺はこれで」

「彼女さんによろしくな」

「あはは……」

メテイス SIDE

「遅いですニヤ」

「そろそろ来てもいいんだけど……」

ガンツさんの紹介した場所である大木の傍でのんびりしていてもなかなか来ない。

話し合いは明日だからそんなに時間がかかることもないと思っけど。

「あ」

何かを思い出したかのように声を出すアニス。

「旦那さん、ボクたちがここに居るの知らないんじゃない……」

……

……

……

「あ」

「ど、どうしますニヤ？」

すっかり忘れていたけど、わたしたちがここに来ることは伝えてないから知らないはず。もしかして街中で探し回っているとか？

「一回戻って目立つところに行くしか……そうしないと探し出せない」

「わけないだろ」

いつの間にか背後に回っていたビャクヤさんが気配無くいきなり割り込んでくる。

「だって俺だぞ。メテイスの気配を察知するくらい余裕だ。だから待ち合わせ場所決めなかっただろ」

そういえば決めてなかったっけ。

「どうしてこんなところに？」

「ここからなら花火が綺麗だっけ聞いたので」

「花火があるのか。あ、はいこれ」

差し出したのは焼きソバ。少し早い夕食らしい。

「ふう、全く。下らん話で時間取られたよ」

「なんだったんですか？」

「しばらくクエストに監視及び報告者がついてくることになったんだよ。まあ、そいつはソフィアになったが――」

詳細を話してくれた。

「なるほど、大変ですね」

「形だけだから普段と変わらない。今度こそソフィアには着いて来て貰わないとダメになったわけだ。お、始まったようだな」

夜空に色鮮やかな花が咲いた。

1つ目を皮切りにたくさんうちあがる。

「わぁ……」

「すごいですニャ」

「いいねいいね最ッ高だね」(小声で

綺麗な花火と共にお祭りは幕を閉じた。

くソフィア SIDEく

「ドンドルマに行った……だ……と……」

ウラガンキン討伐が無事終わり村に戻ったところ、メティスたちが見当たらないのでシルヴィさんに聞いてみるとドンドルマに行ったという情報をくれた。

「そうよ、何か話し合いがあるみたい」

「戻ってくるのは？」

「明後日になるそうよ」

「……帰る」

何故私はこんなにもついていけないのであろう。

第20話「賛地祭」（後書き）

祝！ 20話！！

切りがいい数字なのでここらで一旦謝辞を。まあ、プロローグとおまけ入れれば22なんですけどね。

PVやお気に入り登録数、感想、レビュー等々を見るたび、元氣が出ます。

誤字脱字が多いけれど、広い心を持ってスルーしてくださっている人もとてもありがたいと思います。

皆様の応援で成り立っているこの物語はいつ終わるのか私自身も判りません。モンハンには終わりがありませんし。

そして、相談に乗ってくれている友人に感謝の意を。とても助かっています。

すこし短いですが切り上げて次話執筆に移ろうかと。

それでは次回もゆっくりしていつてね！

第21話「対策部って?」(前書き)

詰め込みすぎたorz

第21話「対策部って？」

無数の花火が夜空に咲き乱れ、最後に一番大きな物があがったところで賛地祭は終わった。

「綺麗でしたね……」

「だね。名残惜しいけど帰るか」

「ボクは疲れたニャ……zzzz」

眠たそうにポツリと呟く。というか寝た。

よくよく見れば結構荷物を持っているのに気付く。何を買ったか気になる所ではあるが、無理に聞く必要もないな。

それにしても、この大木は凄い。

古くから崇められているのか、格神化している。一種の守り神だ。大切にされている物には想いが宿るとよく言われるがこの木からは数え切れないほどの想いが感じ取れる。

「これは……頭が下がるな」

思わず言葉が漏れてしまう。

それを聞き取ったメティスは頭に『？』を浮かべるのは意味が理解できないのか。説明してほしそうな顔で俺を見ている。

俺は苦笑しつつ説明を。

「この木のことだよ。メティスも何か聞いているんじゃないか？」

「あ、はい。神木って言われているみたいで。感じ取ったんですか？」

「まあな」

寝落ちしたアニス背負い荷物をささつと纏め、帰る準備をする。ものの数分で終わる作業なので苦ではない。

「うーん、さすがと言いますかおかしいと言いますか、どちらにしてもそういったことまで判るなんて」

「性格には気配を感じた、だな。ついでに敵意の大きさを考慮してどんな物・者を判断しているだけだ。訓練次第で誰にでもできる」

「わたしにもできますか！？」

こういったことにはすぐ食い付くメティス。

「もちろん習得できる。地獄を見ることになるけど」

気配を察知する技術を極めるわけだから一年365日集中し続けることになる。

俺が習得する時、じつちゃんが隙あらば攻撃を仕掛けてくるわ、寝ている時に真剣で斬りかかるわ、修行が終わったと言って安心させてから「そんなことはあるわけねえ!!」と叫んで殺そうとするわですっかり疑心暗鬼になった。

……俺、よく生きてたな。

泣きなくなっただけ思い出ランキングでトップ5に食い込む事件を思いだし、ナーバスになる。

そんなニューウドウカジカ（カサゴの仲間）で、北日本太平洋から東部太平洋の深海に生息。ちなみに和名。人によつては不快感を覚えるため検索注意！）な目をしている俺を見てかなり過酷な、否、地獄な修行だと悟ったのだらう、急に話題を変えてくる。

「アニスも寝ちゃったし帰ります？」

「そうだな。することないし」

「明日はどうするんですか？」

午前の予定なんて無かった。片付けも終わったので宿泊施設に戻る。

「適当に散策だろうなー、午前だけだけど。あ、明日はメティスも連れて行くから」

「なんでわたしまで！？」

「人数増やして注目されるのを薄めたいから」

1人だと全ての視線が集中するからな、勘弁してほしい。

翌日。

午前の時間を適当に潰したあと、昼になったので昨日行ったギルド

本部前まで直行。

ちなみにアニスも連れて来た。文句がある奴は一列に並べ。なに、単に全身全霊の怒りを込めて殴るだけだ。

「ここが本部ですか……立派ですね」

「なんだ？ 来たことなかったのか？」

「わたしみたいな下位ハンターは関わりの無い所ですからね」

「そ、そんなもんなのか」

やべえ、地雷踏んじまった。

なんとか励まして元気にさせたところでやっぱり昨日の礼儀正しすぎる人を見つけた。

「昨日はご足労いただきありがとうございます。どうぞこちらへ」

昨日とは別の部屋に案内される。

「隊員がお待ちですので。では私はこれで」

やっぱりそそくさと去っていく案内さん。うむ、謎過ぎる。

案内された部屋の中からは複数人の気配を感じる上、それぞれがかなりの手練だ。

「失礼しますっ」と

「し、失礼します……」

入ってもいいようなので入室してみれば、動物園のパンダを見るような視線が集まる。

いや、判っていたけど嫌だな。

見知らぬ顔ばかり。唯一の顔見知りであるバルトさんが話し始める。

「来たな。ふむ、時間通りなので始めるか。と、その前に紹介しよう、噂のビヤクヤ・カムイ君とその弟子のメティス・フロアディーテ君だ。諸君も知っている通りビヤクヤ君はここにいる我々、いや、全てのハンターの中でもトップに立っていると言っても過言ではない。実際に彼のクエスト見た者もいるだろう」

見た者……ああ、レウス戦で誰かいるなーと思ったがギルドの人間だったか。

そしてバルトさん、過大評価しすぎです。俺一人の力なんてたかが知れている。

まあ、ここでそんなことを言っても話が進まないので黙ってはいるが何となく背中がむずむずする。

「さて、前置きはこの辺で終りにしようか。本題だが……諸君も知つての通りここ最近モンスターが凶暴化している。その異変に対応すべく設立されたのが我々対策部だ」

なんでも、時期としては俺がこの世界に転生した数日後、各地方から微小だが通常の固体を上回る固体が確認されたそうだ。

本部も最初のうちは上位固体のトップクラスと判断していたが、俺が討伐したりオレイアが現れたことで状況は一変、調査したところ新種であるキメラ種の発生や極めて少ない剛種の増加が確認された。そこまで多いわけではないのが救いか。

……

あれ？　これって俺が原因？

「我々の討伐対象は主に剛種やキメラ種といった存在だ。剛種については諸君も知識があるので省かせてもらうが、キメラ種については知らない者がほとんどだろう。現在、キメラ種を討伐した経験を持つのはビャクヤ君だけだ」

見た目がもやしのようにひょろい俺が討伐したというのに騒めきは起こらず、むしろ「やっぱり」みたいな空気が漂う。

「まずは諸君にキメラ種の知識を持ってもらいたい」

そう言った後、俺にアイコンタクトを送ってくる。説明しろと？

どうやらそうらしいので仕方無しに前に出るけど、話すことで悩む。当たり障りのない部分でいいとは思うが、トークスキルのない俺は隙しかなかった。

「えー、ビャクヤだ。キメラ種の説明って言っても一度しか戦ったことがないので役に立つかはわからないが――」

恐らく全てのキメラ種に当てはまるであろう特徴を淡々と述べていくうちにわかったことがある。

全員尊敬の眼差しをぶつけてきてるのだ。

本来なら喜ばしいことだがハッキリと言おう、嫌な予感しかない。

しかも女性隊員（男女比7：3。意外と多い）に至っては尊敬とはまた違った念、詳しく言うともメティス絡みの面白いことを見つけたときの念を感じるのは気のせいではないはず。

気のせいだと思いたいけどね。

しょうもないことを考える思考を切り替えて本筋に戻る。

「―これが俺の知っている全ての情報だ。詳細はギルドの研究頼みだろう」

ティガが解明されればかなりの情報が入手できるだろうが、残念ながらまだ知らせはない。技術が中レベルだもんな、いろいろと時間がかることは火を見より明らかだ。

「それくらいだな。なにか質問があれば答えるぞ」

質疑応答コーナー。中学生とかは講演でこういうのやってもサイレスをかけられたように沈黙しているのが当たり前なんだが、彼らはどうなのだろうか？

個人的には何も無いほうが楽で助かるが。

「それじゃあ一つ」

俺の思惑をそげぶしてくれたのは俺より一歳年下（あとで確認した）のハンマー使いの青年。

「ティガレックスカメラ種とはどれくらいで決着が着いたっすか？」

「決着か……移動時間を全部カットすればだいたい20分くらいだな」

ぶっちゃけ、戦闘よりも探索の方が時間を食った。ゲームで20分というのは（恐らく）平均的な時間だろうが、この世界は一週間とかザラらしい。ジリジリ追い詰めて倒すのだから忍耐力勝負と言っている。

思った通り20分というのは早すぎるらしく、騒めきだす。耳を澄ませば「化け物だ」とか「いや、悪魔だな」とか聞こえるが、それらはお仕置きコースを味わいたいのだろうか？

1人が質問したことと言いやすい空気になった。ここからはダイジエストでお送りします。

「ティガカメラ種の手強かったところは？」

「知能が高かったところ」

「ハンター登録してからどのくらい狩ったの？」

「大型はドスランポス、リオレウス、ティガレックスのみ」

「年齢は？」

「18」

「訓練はいつから？」

「師匠曰く3歳から。ふざけんなよあの爺」

「お弟子さんのことはどう思いますか？」

「可愛いよな」

「付き合ってください」

「だが断る」

「武器はなんすか？」

「刀と言って（ry」

「古龍種討伐できると思うか？」

「俺一人じゃキツイだろう」

e t c

いくつか狩りには関係のない質問が来た気がする。サラッと告白してきたハンターもいるし。

「静かに。キメラ種についてわかったところで情報班、報告を」

立ち上がったハンターは気配が薄いと言うか存在感が曖昧だった。隠密にはもってこいの人だろう。情報班はこういう人が多いのだろうか？

「今のところキメラ種と思われるモンスターは確認されていません。剛種に関しては人の関与らない場所、とある火山にいますがいつこちらに来るかは不明です。それと気になることが……」

言すべきか言わないべきか迷っている表情を浮かべる。口籠もるってことは確定情報がないようだが、言いかけたのなら最後まで言うて欲しい。

ほんの少し考えた後、決心したのかその重い口を開いた。

「……実は、遠方のとある場所で古龍種と思われる被害が見受けられました」

古龍種、という言葉聞いた途端に騒めきが起こる。

隊長であるバルトさんも表情が暗くなった。

「続ける」

「目下調査中ですが被害の大きさや特徴から見て、ラオシャンロンという線が濃厚です。被害自体はドントルマとは逆方向、つまり人氣のない場所に続いているので非常事態と言っわけではありませんが油断できない状況でしょう」

ラオシャンロン、その巨大さ故に歩くだけで甚大な被害をだす『老山龍』と呼ばれる古龍。長きに渡るドントルマの歴史上、1度だけその姿を見せたそうだ。

万ードンドルマ方面に進行した場合、確実に俺が狩り出されるだろうが厳しいものがあるな。

「わかった、引き続き調査を頼む。何か情報が入りしだい連絡をくれ。切り替えよう、副隊長は通常近接戦闘班の班長がやってもらうが今回はビャクヤ君に任せようと思う。異論はあるか？」

「いやいやいや、何で俺なのか説明を求む」

「お前がこの中では一番強いからな。本当なら隊長にしたかったのだが都合上無理だった。それにメリットもあるぞ」

メリット？　好みでないクエストは他に回してもいいと言うなら喜んで享受しよう。

「副隊長という肩書きがあれば上位ハンターでも知ることのできる情報が手に入る。更に罰則も軽減、免除もできる。まあ、お前はそんなことする人間には見えないがな」

ふむ、罰則云々はともかく情報の方は役に立つだろう。今の俺には少しでも多くの情報が必要だから断る理由もない。

「わかった。やってやろうじゃないか」

「ありがたい。諸君、彼らは知らないことが多いが上手くやってくれ。仕事を片付けなくてはならないので私からは以上だ」

バルトさんが出て行く。解散か、特にすることもないし帰るかな。

周りを見れば談笑している者や帰り支度をする者、既にもいない者とかなりフリーダムな様子。

メティスたちは……あれか？ 女性ハンターに囲まれているんだけど。

なにか質問のマシングンを喰らっているようだが黄色い嬌声で何も聞こえない。

まあ、悪意は感じられないから別にいいか。

「どうやらこの女性ハンターさんはメティスの事を応援しているようですニャ」

メティスと一緒にいたため、話が見えているアニスがそう言うて来る。

「なんのことだ？」

「勘のいい旦那さんもこのことはわからないと思いますニャ」

「ストレートに言わないんだな」

「今までの旦那さんを見ての発言ですニャ。メティスさんはもう少し捕まっただままニャよ？」

昔から女性の考えていることはサッパリという自信がある。アニスはわかっているようだがこの分だと教えてくれないだろうな。

ただ待っているのも暇なので俺も適当に誰かと話して時間を潰すことにしよう。

30分近く待たされたのはさすがに気が滅入った。

第21話「対策部って?」(後書き)

ソフィア「だいぶ変なところで終わったな」

作「……言わないでください」

ソ「大方、書いていたら暴走して長くなりすぎたのを2分割というところか?」

作「反論できません。思いのほかタイピングが進んで」

ソ「まあ詰まるよりはマシだけど。それにしても今回はおっかないフラグ建築したな」

作「ああ、『老山龍』のことですか。モンハンの2次創作者なら一度は出したいモンスター上位に食い込むと思いますよ。自分の場合、当分先ですが」

ソ「で、私の活躍はあるのか?」

作「……もちろんありますよ!」

ソ「その間は何だ」

作「いや……あの……」

ソ「龍 撃 砲 ! !」

作者に36846597のダメージ!!

第22話「特に何も無い平穏な日常」(前書き)

最近、キャラクターが勝手に動くので纏めるのにてこずっています

第22話「特に何も無い平穏な日常」

くメテイス SIDEく

会議はすぐに終わった。

ビャクヤさんが副隊長になったことは驚いたけど、それ以上に驚いたことがある。

古龍種らしきものが確認されたこと。

わたしもハンターの端くれだから聞いたことはあるけど、どれも伝説上のお話なので実感することはない。事実、古龍種が確認されたのは最新でも何百年も前。それも通りかかるのを遠目で見ただけで被害はなかったようだ。

あまりにも現実離れしているので気楽に考えていたけど、ビャクヤさん以下ここにいる全ての人間の瞳が真剣だったので古龍がドンドルマに来ることを前提に対策を立てるみたい。

ビャクヤさんは強い。更には「古龍種には苦戦を強いられる。ま、どうにかなるだろう」と軽く言っていた。けど、今の表情を見ればその言葉がわたしを勇気付けるための言葉だったことがよくわかる。

大丈夫なのかな……

「諸君、彼らは知らないことが多いが上手くやってくれ。仕事を片付けなくてはならないので私からは以上だ」

彼ら？ え？

わたしも含まれてるの？

強い疑問を持つわたしにバルトさん（ビヤクヤさんに名前を教えてもらった）が声をかけてくる。

「念のために言っておくが、ここでの話は他言無用で頼む。混乱を招きかねないからな」

確かではない情報ほど怖いものはないってビヤクヤさんに言っていたから大丈夫です。

注意をして部屋を出ていく。終わったのかと思いき周りを見れば、皆自由になっているのでわたしもビヤクヤさんに近付く。

その前に一瞬にして女の人に囲まれてしまったけど。全員目が輝いていて、どこかおもしろがっている感じがする。

その中の一番背の高い人が唐突に、

「メテイスちゃんだっけ？　ズバリ！　ビヤクヤくんのこと好きなんだでしょ」

爆弾発言をしてきた。驚きすぎて声が出ない。なんとか喋ろうとしても変なことしか言えない。

「な、な、何を言ってるんですか！」

「あれ？　違うの？」

言葉とは裏腹に目の輝きが強くなる。

「じゃあ私が狙うかな。カッコいいし」

「抜け駆けよくないよー」

「じゃあ私も私も」

「いつそのこと全員でアタックしちゃう？」

「それもいいかもね」

「ダ、ダメですー！！」

気付いたら声をあげていた。

「確かにビヤクヤさんはカッコいいし強いし優しいから人気はあるけど、それでも、その、あの、うっ……」

自分でも何が言いたいのかわからない。頭の中が真っ白になって考えが纏まらない。

「取り敢えず落ち着きなよ。はい、ハンカチどうぞ」

「す、すみません……」

しばらくして冷静になったのでちゃんと考えることができた。

そしてこの人たちに乗せられたことに気付く。

「これでメティスちゃんが自白したから話が進むよ」

「頑固なのか素直なのか、どっちだろう?」

「ごめんねー」

や、やられた。今考えれば単純な鎌だったけど頭の中がぐちゃぐち

やになってまともな判断ができなかった。

「お詫びとして『メティスちゃんとビヤクヤくんをくっつけちゃう大作戦』を実行するから許してくれる？」

「最初からこうするつもりだったんだけど」

突然すぎるのでまたもや混乱する。

「……つまり？」

「そのまんまの意味だよ。人の恋路は見ててニヤニヤできるし」

それが本音ですよね！

「それでなんだけど、アドバイスをしたいんだよ。メティスちゃんはユクモ村に住んでいるから温泉関係がいいと思ってね、いろいろ考えたんだ」

いつの間に話合ったのか不思議だ。会議が終わった直後にわたしの所に来たのに。

「そして1つの結論に辿り着きました！ 男を虜にするには混浴し

かないと！」

コンヨク? こんよく、混よく、**こん浴、混浴……**

「ええええええええええええ！！！！！」

「やっぱりベタかな」

「でもベタだけに強力だし」

「これ以外に手はないよね」

混浴ってビヤクヤさんと！？無理無理無理恥ずかしくて死んじやう！

「ッ／／／」

「おー真っ赤になった」

「少しくらい恥ずかしい思いをしないと朴念仁には気付いてもらえないよ。やっちゃえ」

ビヤクヤさんは激ニブだから困っていたけどいろんな段階をすつ飛ばして一緒に温泉に入るなんてできっこない！

それにビヤクヤさんも許可しないと思うし!!

そんな反論をすれば、

「ビヤクヤくんが入ったあとに行けばいいんじゃないの?」

あっさり論破されました。

「で、でも……」

「もどかしいなあ。他の女性とくつついちゃってもいいの?」

!?

想像しただけで胸が痛む。わがままなのは理解しているけどそんなのやだよお……

「だったら突撃あるのみ! 私達も応援するから積極的にアタックだ!」

「えっと……じゃあ……やってみます」

「(計画通り)」↑全員

く白夜 SIDEく

長いな。

時間潰しに暇そうな奴と話してたが男同士だから長話になるはずもなく、またしても暇になる。

「いつまで話しているんだ」

「女性はこのくらいのとても長いですからニヤ」

生前でもそうだったな。1時間の長電話はショックを受けた覚えがある。断片的に話を聞いてみれば本筋とは全く関係のない話が8割以上占めていて、本筋が全く進まないなんてありすぎて困る。

散っていく女性ハンターの内1人がすれ違いざまに「頑張ってね」と励ましてきたが理由がわからない。

メティスはメティスで惚けているが、一体何を吹き込まれたのだろう？ 厄介事にならなければいいが。

「おーい、平気か？」

呼び掛けても反応がないので頬をペチペチと叩く。

「は、はいっ！ 全然大丈夫ですっ！」

これっぽっちも平気じゃない声で返事をする。一般的な下位ハンターには縁のないプレッシャーが常時蔓延していたから体調でも崩したのだろうか。

おでこに手を当てて熱を測ってみる。

「ひゃっ／／／」

断りを入れなかったから驚かしてしまったようだ。ちなみにこの測り方は正確ではないが、俺の場合は誤差 ± 0.2 くらいに収まる。

「ふむ……高いな。体調悪いの如果说てくれ。遠慮する必要なんてないんだから」

「（旦那さん、検討違いもいいところだニヤ）」

メテイスに背を向けてしゃがむ。

「ほら、おぶるぞ」

「い、いいですよ！ 自分で歩けます！」

「これ以上悪化させたらお互い困るだろう？ 言うこと聞いてくれ」

しばらく呻いていたが、最後にはしぶしぶ従ってくれた。そこまで嫌なのだろうか、少しショックだな。

「それじゃあ、失礼します……」

恐る恐るおぶさってくるメテイスの体重はとても軽かった。風が吹けば飛んでいくんじゃないかと思うほど。

俺の流派は力より速さ、剛より柔なのでパワーはあまり必要としないがある程度の体力は欲しいので心配になる。

疑問なんだが、なぜ俺は周りから温かい目で見られている？

「お、重くないですか？」

「余裕だな。メティスがあと100人いても持ちあげられる」

「そういうわけじゃ……」

「（旦那さんの最大の敵は女心だニヤ）」

途中でやっぱり温かい目で見られていたけど無事宿に到着。

「そうだな、消化にいいものと薬を買ってくるからおとなしくして
る。アニス、傍にいてやってくれ」

「いや、あの、ですから……」

「今は異常はないだろうな。そのうち発症するけど単なる風邪だから慌てなくていい」

「へっ？」

「じゃ、行つて来る」

本人も気付いてないようだが風邪を引いている。俺の見立てだとあと数十分で症状がでるだろう。

近場の果物屋にいつて林檎を購入。ついでに薬屋で風邪薬も買う。怪しい薬がたくさん合ったのはビビった。あとは適当に漁って準備をすませる。

次に向かうのは集会場。買い物をする前にキッチンを借りる約束をしたので早速調理に向かう。訳を話したら快く貸してくれたのは何故だろうか。

「お、ビヤクヤくんー。こっちこっちー」

「無理言つて申し訳無いです。あと、ありがとうございます」

「メテイスちゃんの為に動いているのに拒否する意味がないからね」

「それと1つ聞きたいんですが……俺達のことなんで知っているんですか？」

「だってかなり有名だからねー」

……考えるのをやめよう。調理が優先だ。

作るのは定番中の定番、お粥＋林檎の擦りおろしたやつ。お粥はチーズをのつけてハーブを沿える。あまり塩味を強くしないように注意し、且つ薄くもならない妙味を作り出す。林檎も柔らかくなりすぎないように力を加減する。

なにせ病人（予定）が食べるのだからな。慎重に慎重を重ねる。

「よし、完璧だ。長々とすみません」

「は、速い……」

お礼もそこに宿に戻る。

時間的にはそろそろ――

「ゴホッ、ゴホッ。あ、おかえりなさい……」

「言った通りになったニャ……」

ビンゴ。やっぱり風邪だったかー。

わかった理由だけど、まあ例によつての魔改造効果だ。インド人もびっくり。

「起きられるか？」

「なんとか……」

「これが薬だ。あとお粥作ってきたから食べて、それで寝てれば治るさ。1人で食えるか？」

「も、もちろんですよ!」

と、言いつつも手が震えてスプーンが上手く持ててない。

「無理するなよ。ほれ」

スプーンを預かりお粥を掬って差し出す。

「くっく」(あたふたあたふた)

最初こそあたふたしていたメティスだが食欲に負けたのか今では借りてきた猫のようにおとなしく食べている。

誰かメティスが目を反らす理由を教えてください。

「食欲があるならすぐに良くなる。美味しいか？」

コクン、と小さく頷く。口に合うか心配だったが杞憂だったようだ。

お粥の入った土鍋を空にしてお腹が一杯になったからか、すっかり眠ってしまうメティス。

「うん……ムニャムニャ……」

むっ、可愛いね。

「ちょっといいですかニャ？」

ついメティスの頬をムニムニしていたらアニスに呼ばれた。その手には手紙らしきものを持っている。

「旦那さんが出掛けている時ギルドの人が旦那さん宛てに手紙を持ってきたんですニャ。はい、これですニャ」

手紙を受け取り封を開ける。

どうせクエストのことだろう、読んでみれば

『グラビモス剛種がユクモ村方面に進行しているのを確認した。まだ遠いが、2週間後には討伐に向かって貰いたい。無茶な依頼だと思うが前向きに考えてもらえれば幸いだ。』

デスヨネー。

グラビモスって剛種じゃなくて変種だった気がするが……まあいい。

剛種。確かバルトさん曰く、元のモンスターが同一であるなら

下位<上位<亜種<越えられない壁<G級 キメラ種<剛種

だったな。ほー今回は最強クラスか、楽しみだ。

「やっぱりクエストのことでしたかニヤ？」

「そうだな。まあ二週間の猶予があるからメティスに今度こそソロ狩りさせてからになると思う」

「そつえばまだソロやってニヤかったんですよ」

とことん邪魔が入るのはお笑いのには素晴らしいけど。

「まずはメティスさんのクエストですかニヤ？」

「そうだな。まあ風邪が治ってくれなければ何もできないんだけど」

「そうですニヤー」

メティスが掴んだ手を放してくれないので、傍で一休みすることにした。

情報班 SIDE

班長から伝令が入った。

引き続き調査を頼むということ、こちらに向かっていると云つ内容のもの。

その調査はといえば、

「どんなお伽話だよ……」

目の前にあるのは崩れ去った山。恐らく『老山龍』の仕業だろう。

こんなのがドンドルマに攻め入ったら……

幸い、方向は真逆なので大丈夫だとは思うが最悪のビジョンが頭から離れない。

第22話「特に何も無い平穏な日常」（後書き）

作「気づけば連載を始めてから1ヶ月経過したんですねー。時間の流れが速い速い」

白「そうだな」

作「何か記念に外伝的なもの作った方がいいですかねー」

白「そうだな」

作「リアル友にも外伝作ってーって言われてますし」

白「そうだな」

作「……さっきから、そうだなとしか言っていない気がする」

白「こっちはメティスの看病の途中で無理矢理連れて来られたんだぞ。早く終わらせろ」

作「心配なんですかー？」ニヤニヤ

白「当たり前前だ」

作「（断言できるとは）」

白「話が無いなら俺は戻るぞ」

作「あ、はい、わかりました。次回もゆっくりしていったね」

第23話「帰還。それと小さな決意」(前書き)

前話では不等号(コレ↓『<』)の使い方が普通に間違っていました。

直す前は下位が最強となっていたという

第23話「帰還。それと小さな決意」

メテイス SIDE

今日はかなり早く目が覚めた。

風邪を引いてしまったが、早い対応のお陰で気分がいい。どうやら治ったみたい。

外が薄暗かったので時計を見れば午前5時。アニスも気持よさそうに眠っていた。

「あれ？ ビヤクヤさんは？」

わたしの風邪にわたしより先に気付いた師匠の姿が見当たらない。

部屋の中を一通り探してみただけじゃないってことは外にいるのかな？

窓を覗いてみる。

「あ、いた。こんな時間から訓練してるんだ」

庭の一角で素振りをしているビヤクヤさんを発見。毎日5時に起きているのだろうか。一流のハンターほど地道な訓練を欠かさないってお姉ちゃんも言っていた。

しばらく眺めているうちにわたしの視線に気付いたのか、素振りを止めてこちらを向いてくる。すぐに戻る、そう言ってドアをくぐるところまで見えた。

「だいぶ早いお目覚めだな。風邪の方は大丈夫か？」

「はい、すぐにでもクエストに行けますよ！」

「その元気があればソロ狩りでも問題なさそうだ」

ソロ狩り？

「ギルドからの依頼は2週間後になったから、その間だけに今度こそメティスのソロに行こうって話になってね。どうする？」

「もちろんです！ 今度こそ……今度こそ絶対に……」

「（だいぶ根に持ってたのか）」

ソロ狩りと聞いてがぜんやる気がでる。ドスランポスだけは絶対に嫌だけど。

「で！ 何の討伐ですか！？」

わたしの気迫に押されたのか、はたまた驚いているのかは知らないけど少したじろぐビヤクヤさん。

「ドスランポスは嫌なジングスが成りたっているからイヤンクックでちょうどいいかもな」

イヤンクックと言えばハンターが初めて出会う飛竜種で、更に飛竜の基本的な動きをするので『先生』と呼ばれることも多い。

他のハンターの協力を借りて倒したとはいえ、動きはわかっているので対策を立てられる。

「アニスがお供するし俺も同行するから、武器を刀に変更して一発目が飛竜種でも勝てるだろうな。何も無い限り」

あーあー、最後の不吉な言葉は聞こえない聞こえない。

「そうつわけでユクモに戻ったら早速クエストに行くから覚悟しておくように。俺は汗を流してくる」

訓練をしていたから汗だくだったらしい。そそくさとお風呂へ消えていく。

お風呂？

お風呂↓温泉↓混 y

「……！」ボンッ

うわゝ恥ずかしいこと思い出しちゃった！

でも実行しないとこの人は気付かないんだよね……

「むゝ、朝からなんですかニヤ」

「あ、ごめん。起こしちゃった？」

自分でも気付かないうちに暴れていたようだ。眠い目を擦りながら起き上がるアニスに注意される。

「話はうつすら聞こえていたから別にいいですニヤ。頑張ってくださいニヤ」

「が、がんばるってなにをかなつ!？」

「元よりあの時の会話を聞かせてもらったので隠す意味ニヤいですよ。決行する時はボクは空気を呼んでお出かけするのでごゆっくり」

うう……バれてるよ……

「スツキリした。おうアニス、起きたのか。珍しいな」

「そついう日もありますニヤ。それで旦那さん、いつお迎えが来るのですかニヤ？」

「もう来てるぞ。どの道起こすつもりだったから手間が省けたな、ほら準備しろ。俺は土鍋を返しに行ってくる」

お粥が入っていた土鍋を持って部屋を出て行く。

「いくらなんでも急すぎると思うニヤ。事前に教えてくれたらいいものを」

その通りだよ。今回は荷物が少ないからすぐに終わると思うけど女性には仕度に時間が掛かると言うことを知らないのだろうか。

「まあ今更言っても仕方ないね。わたしたちも準備しようか」

「そうですニヤ……むむむ、なかなか入りきらないニヤ」

目の前では明らかにポーチに入るとは思えない量の堀出し物を無理矢理詰め込もうとしているアニス。そんなにしたら破れると思うけど……

そもそも笛なんてポーチと同じ大きさなんだけど。

「よし、入ったニヤ！」

え！？ どうやって！？

〈白夜 SIDE〉

時間をもったいないので全速力で集会場まで走っていき、裏口から仕込みをしているキッチンアイルーに渡しておく。帰りも全力疾走。所要時間5分。普通に走るのなら片道20分はかかるだろうから上出来だろう。

「ただいまー」

「ビヤクヤさんビヤクヤさん！ 怪奇現象を見ました！」

扉を明けるなりみぞおちにタツクルをかましてくるメティス。

何ごとかと聞けばポーチと同じ大きさの真・回復笛がポーチに入っ
たという。そっぴや前に上位オトモならどこからともかく小樽爆弾
これでもかって程取り出すと言っていたな。

うーん、ミステリー。

「どうかしましたニヤ？」

「いや、何でもないんだ。メティスは準備できたか？」

「バッチリです！」

忘れ物もないようなので表で待っていてくれたアプトノス車に乗る。

丸1日の移動だから暇にならないよう本を持ってきておいて正解だった。今読んでいるのは『今日からキミもハンターだ！』入門編『。狩りのルールとか書いているのでありがたい。なんでも見習いはこれが教科書らしく、そのためとてもわかりやすい。

「そつえばお姉ちゃんが監視役ってことは着いて来るんですよね？」

唐突に話題を振るメティス。膝立ちで身を乗り出してくるので必然的に上を向くことになる。

「そつだが……？」

質問の意図が掴めないのでポカンとしている俺をよそに話を勧めてくる。

「じゃあお姉ちゃんはパーティーに入りますね？」

「断定型で聞くのも不自然だけど、まあ元から入るって約束しているしな」

「つまり、わたしのクエストも一緒ですよね？」

「本人さえ了承すればだけど。どうしてそんな事を聞く？」

「いつまでも子供扱いしているお姉ちゃんを見返してやろうかと思
いまして!」

なるほどね。子供扱いされるのが嫌ってわけか。もともと、姉の方
はメティスのことが心配でそう言っているだけなのだが、汲み取っ
てくれというのは無理だろう。

「ソフィアの性格からしてこっちが断つても着いてきそうだな」

アニスをこねくりまわしつつ応える。抗議の悲鳴なんて聞こえる訳
がない。

ソフィア SIDE

「クシュン!」

「ん、どうした？ 風邪か？」

休憩を取っていたリザを捕まえ、雑談していたら急にくしゃみがでた。

「体調は万全だからそれはない」

二日酔いでダウンしていたらメティスたちがクエストに行ってしまったので、以後そんなことがないよう普段から気を使っている。

そのため風邪のかの字も引いていない。

「じゃあ誰かが噂してるのか？ 容疑者はメティスたちだな。そういや今日帰って来るんだっけ？」

「シルヴィさん情報だとそうだな。かなりの期間寝食を共にしたんだから何か進展があれば面白いんだが」

「難しいと思うぞ。何せ相手は超がつく程の激鈍だからな」

メティスも昔から消極的で、久しぶりに会った今でも変わっていないようだから道のりは険しそうだ。愛する妹の初恋だから応援してやりたいんだが、本人達がアレだからな。

いい案がないか考える。

……

……

……

「これだ！」

「これしかないな！」

私とほぼ同時に声をあげるリザ。長い付き合いだからわかるが、同じ作戦のようだ。

「そしたらまずは……」

「番頭さんに相談だな」

（2人の思いついた作戦はあの時の作戦とそっくりだった。偶然と言つ名の必然だろうか？）

く白夜 SIDEく

途中、憎きあの猪やホーミング生肉に狙われたこともあったがなんとかユクモ村に帰ってこれた。時間は早朝6時。これなら少し休んでからイヤンクック先生の討伐に行ってもいいかもしれん。

気持よさそうに寝ているアニスを脇に抱え、そんなことを考えていれば――

「さあ行きましょう!」

「待たんか」

首根っこを掴む。強くなったところを見せたい姉も(たぶん)寝ているぞ。頼むから自重してくれ。

「む、何ですか」

「いくらなんでも早すぎる。少し休憩してからでいいだろう。」

「む」

フグのように膨れるメティス。本人は怒っているようだが、とてもそうは見えないため狐に包まれる気分になる。

「それでなんだが、時間は8時頃でいいか？ ソフィアにも伝えておいてくれ」

「はい」

未だに膨れているのを見て苦笑しながら別れたのだが、実はほんのちよつとだけ続きが合った。

荷物を降ろそうと自宅に向かっていれば背後から足音が聞こえる。

「ビヤクヤさん」

日頃の修行（苦業とも言つ）の賜物なのか、凄く速さで近付づいてくるのはメティス。目の前まで来たら急停止した。

「実は……鍵が掛かってて家に入れませんでした。テヘ」

「……」 ↑ 可哀想なものを見る目

「すみません」

「はあ。メティスのドジっぷりは今に始まったことじゃないからいいけどさ。行く当がてないなら俺の家に来るか？」

「!？」

驚過ぎて言葉が出ないようだ。そんなに変なこと言っていないと思うが。

「嫌か？」

「そ、そんなわけありませんよ！ むしろ嬉しいです！」

「？ よくわからんがいいなら着いて来い」

メティスを家へ招き入れ、適当に時間を潰すことになった。

（メティスの家に鍵が掛かっていたのは村長さんがフランさんに伝えただと言ったことを2人は知る筈もない）

第23話「帰還。それと小さな決意」(後書き)

作「うーん、ドンドルマ編長かったな」

メ「そうですか？」

作「当初は3話くらいで収まってバトルに移行するはずだったんですが、自重できませんでした」

メ「と、いうことは次回からイャンクック討伐に？」

作「そうですね。久々のバトル描写、何故か緊張しています」

メ「(わたしには関係ないので)頑張ってください」

作「……今軽くひどいと言わなかったか？」

メ「気のせいですよ気のせい」

作「そうなのかなー？」

第24話「イヤンクック先生」(前書き)

忙しくて予定日より1日遅れました。

今後2日に1話というのはキツイかもしれませんが

この物語のモンスターはゲームで存在しない攻撃をすることがあります

第24話「イャンクック先生」

メティス SIDE

「この辺りにいると思ったんだけど……」

わたしたちは今、イャンクックを討伐するために森丘に来ている。

ソロ狩りということもあってビヤクヤさんとは別行動。ここに来る前にお姉ちゃんを巻き込んでわたしの成長を見てもらうことにした。

近くに思うけど気配がないからわからない。別に隠れなくていいのに。

「メティスさん、コレ、イャンクックの巣じゃないですかニヤ？」

アニス（わたしの狩りを手伝うことになった）が呼ぶ方に行けば、確かに巣と思われる痕跡が見られた。

「と、いうことはここを中心に探せばいいね」

「旦那さんみたいに気配察知ができれば楽なんだけどニヤ」

「無理言わないで」

あんな芸当ができるのはビヤクヤさんを筆頭にしたThe・人外ズだけで充分。そう簡単に使えてたまるもんか。

「時間的に捕食している頃かな。だとしたら見つけやすいんだけど」

「しらみ潰しに探すしかないですニャ」

予想通りと言うか運が悪いと言うか、捕食場所には姿を見せなかった。ここからが本当の地獄だ。

先生は一度見失えば発見するのにびっくりするほどの時間を費やす。そのため、上位ハンターですら嫌がる時もあるらしい。

もちろん、経験が少ないわたしたちがそう簡単に発見できるはずもなく――

「メテイスさん……ゼエ……ちょっと休憩を……ゼエ……」

「わたしも……ハア……その意見に賛成……ハア……」

戦う前から疲れた。なんでこんなにも見つからないの？ それらしいエリアは一通り回ったけどいなかった。だからずつつつつつとグルグルグルグル同じ場所を回っているのに足跡すら見えない。

あらかじめ持参した水筒に口をつける。疲れが取れるようにハチミツレモンを入れてきて正解だったね。

アニスは麦茶みたい。

「ふう、それじゃ再開しようか！」

しばらく休んで体力を回復させてから立ち上がる。

「見つければいいんですけどニャ……」

再び探し始めてからどのくらい時間が経過したのかも考えたくないほど時間が流れた。

朝一で出発したのに太陽は真上にあって、今がお昼だと教えてくれる。

携帯食料でお腹を満たして同じエリアを回る。そろそろ見つからないと心が折れそうです。

「メテイスさん！　こっちですニヤ！」

特に前フリもなく呼ばれたので少し驚いた。

期待半分にアニスについていく。指差す方向に目を向ければ――

「あ、いた」

やっと見つけたイャンクック。サイズはちよつと大きめだけど体力とかその他のステータスは普通だ……と思っていたい。

「どうやって奇襲かけますかニヤ？」

「うゝん、逃げられると困るからアニスはペイントボールを投げてわたしが斬りかかるからそれに合わせてちょうだい」

どうやらこっちに気付いてない見たいだから最初の一撃を入れてペースを掴みたい。雪燕を握り、走る準備をする。

アニスがペイントボールを取り出すのを横目で確認してから隙だらけのイャンクックの背中に向かってダッシュ。

相手は生まれた時から野生生活を送っているので気配に敏感だ。す

ぐにわたしに気付いて迎撃しようと態勢を整える。けれどわたしの方が断然速い。

「やあっ！」

胴を狙って斬る。奇麗には入った一撃、しかしこれだけで勝負が決まるほどわたしは強くない。

『クワッ！？』

回転攻撃を前転回避で避けると同時に一旦距離を取る。

不意に背後から飛んできた物は頼んでおいたペイントボール。これですばらくは見失うことはないと思う。

さあ行くよ、雪燕。

「白夜 SIDE」

メティスと別れてこっそり後から着いていくこと3時間以上、やっと戦闘が始まった。

「ほー、いい出だしだな」

横にいるソフィアが感心しながら呟く。彼女に着いてくるか否かを聞いたところ腹ペコなワニが餌に食らいつくが如き速さでOKを出したので俺と一緒にスニーキングミッション中。今回のためだけにスキルである『隠密』を発動してもらった。

この世界にもスキルという概念があるのには驚いたな。

「そういえばビャクヤ、よくソロ狩りをさせようと思ったな」

「複数人とはいえクエストの経験はそこそこあるし、俺の修行の元でかなり力をつけてきたから大丈夫だと踏んだ。様子を見ている限り失敗することはないだろう」

もつと言えばアドバイスをしたかったんだが、クック先生については俺よりメテイスの方が詳しいから余計なお世話だろう。ぶっちゃけゲームとの動きがまるで違うので役に立たないのもいいとこだ。

ちゃんと勉強するか。

「強くなったな……ハンターになったばかりの頃は危なっかしい感じがしたんだが、すっかりやってるじゃないか。認識を改めないとな。ってなんでニヤニヤしている」

「いや、なんでもない」

仲よきことは美しきかな。微笑ましいな。

さて、今回の先生のステータス（俺調べ）のうち特筆すべき点はこんな感じだと思う

- ・性格はどつちかと言えば攻撃的
- ・何故か通常より固い
- ・通常固体より大きい
- ・頭悪い

脳筋タイプよりの先生みたいだ。なるほど、体育系の先生でしたか。

頭の回転が速い理系タイプの先生だったら苦戦するだろうから助かったと言えは助かった。

「おい、私達も移動するぞ」

言われて初めて気付いたが、エリアチェンジしたらしい。

俺も人（竜）のことも言えないようだ。

＼メテイス SIDE＼

「追いかけるよ！」

「はいですニヤ！」

しばらく様子を見ていたら違うエリアに飛んでいった。ペイントボールのお陰で居場所がなんとなくわかる。あの臭い、間違って服につくと1週間は取れなくて昔はとっても嫌な思いをした。

その臭いを辿ってエリア移動。そわそわしているイヤンクックを補足する。

すでにこっちには気付いているので隠れるのをやめて距離を詰めようと走る。そこで異変を感じ取った。アニスも感じたらしく安全圏までさがる。

その地点から跳び退く。直後に着弾したのは超高温の粘液の塊。

火炎弾とは違い、纏わりつくのでかき消せない上水に入ってもなかなか溶けない。危険なブレスの上位に入るものでこれによって重傷を負うハンターは後を断つことなく、むしろ増えているらしい。

発射後の硬直を見逃さず懐に入る。移動の要となる脚を狙い、会心の抜刀をお見舞すれば流石のクックも応えたみたい。その場で暴れる。

「キャッ!!」

回避できたと思ったけど尻尾が遠心力で伸びてきたので当たってし

まった。

うう……痛いけど我慢。骨は折れてないみたいだから動きが制限されることはない。

起き上がると同時にクック特製プレスがふってくる。ギリギリのタイミングで避けることはできた。危ない危ない。

「はあああああああ……!!」

『クワアアアアアア……!!』

突進してくるのでそれに合わせるように横に回ってカウンター。これも奇麗に翼に入る。これで上手に飛ぶことは出来なくなっただろう。

痛みに耐えかねて逃げ出そうとするクック。

「逃がさないよ!!」

ここで攻撃をしない手はない。連続で斬りつけたけど、結局は飛んで行ってしまった。

まあ、傷からして遠くまで行けないと思うけど。

「メテイスさん、強いじゃニヤいですか」

目を丸くしたアニスがテクテクと近寄ってくる。

「わたしもここまでとは考えもしなかったよ。動きがハッキリと見える」

修行の成果が出てきたってことかな。ビヤクヤさんの攻撃に比べればハエが止まれるほど遅く感じる。

けれどパワー不足は否定できない。わたしの戦闘スタイルは手数で押しているため一手間違えればひっくり返されてしまう危険性がある。

更に、手数で稼ぐ〓時間が掛かる〓集中力の持続が不可欠。

簡単に言えば効率が悪いのだ。

それでもしばらく闘っているうちに弱らせるところまで削れた。

「ハア……ハア……ハア……」

初撃を当ててから1時間が経過した。致命傷らしい傷は貰ってないけど集中力をずっと持続しているから精神的な疲労が大きい。

この疲労が隙となり、クツクが突進を仕掛けてくる。不意に発生した攻撃を避けるだけの余裕がわたしにはなかった。

『クワッ!』

ゴロゴロと転がるわたしに向かってプレスを吐きだして息の根を止めようとしてくる。

ここからはほぼ無意識の行動だった。

すぐに立ち上がってプレスに突っ込むようにダッシュする。当たる直前でかいくぐりクツクの死角に立つ。

構え、全ての生物の弱点とも言っているいい首の経同脈を斬り捨てればその巨体を有するイヤンクツクは地面に伏せ、二度と起き上がることはなかった。

つ……疲れた……

負けるとは思ってたけど、正直もつと楽に倒せると思ってた。

「お疲れ。意外と時間かったな」

気配もなく背後から話しかけてくるビヤクヤさん。相変わらず心臓に悪い。

「お疲れ様。どうしてなかなか頑張ってるじゃないか」

「わたしだってやれば出来るんだよ」

「そうだな。まだまだ危なっかしい所はあるが、しっかりハンターになれたようで一安心だ。ビヤクヤから見てどう思う？」

「そうだな……45点」

だいぶ低い評価のようです。

「大きく分ければ集中力の持続時間と火力不足が目立つね。これからの修行方針が決まってラッキーだったぞ。ま、大きな怪我なく討伐出来たのはよくやったと思う」

そう言っでわたしの頭をクシャクシャと撫でてくる。恥ずかしいけど嬉しい／＼／

「帰ったら一緒に温泉でも入るか。ビヤクヤもどうだ？」

なっ！？

「男の俺を誘っても面白くないと思うんだけど？　面白いとしても遠慮する」

ムスツとした顔で否定するビヤクヤさんに対し、教科書に載せたいくらいのニヤニヤしているお姉ちゃん。あの顔は何か企んでいるときの顔だ。気をつけないと。

「そっか、それは残念だな。お、迎えがきたな」

わたしが倒す頃合いを見計らって迎えを呼んでいたらしい。疲れた

身体に鞭を打って乗る。

緊張の糸が切れたみたいで、乗った瞬間腰が抜けてビャクヤさんにもたれ掛かかってしまった。

「はは、結構疲れてるようだな。無理しないでこのままでもいいよ」

優しい言葉をきっかけに、ビャクヤさんに体重を預けて夢の世界に行くことにした。

あれ？ 何か忘れてるような……

アニス SIDE

「旦那さん、メティスさん、ソフィアさん、どこですかニヤ
」

第24話「イヤンクック先生」(後書き)

作「あれ？ アニス、どうしたのこんなところで」

ア「旦那さんとはぐれてしまったニヤ」

作「さっき見たぞ。車に乗ってた」

ア「（。A）」

作「どんまい。それより業務連絡、前書きの通りペースが落ちそうです」

ア「朝6時に家を出発してるもんニヤ。疲れて当然だニヤ」

作「寝落ちとかもありますからねー。頑張って更新していくつもりですが」

ア「それよりボクはどうすれば？」

作「仕方ない、必殺『ご都合主義』を発動しますか……そおい!!」

第25話「作戦決行（笑）」（前書き）

投稿忘れてました。すみません。

第25話「作戦決行（笑）」

「正直すまんかった」

「申し訳無い……」

「く〜」

イヤンクック討伐後、普通に荷車に乗ったがその後を全速力で走って来るアニスを見て置いてきたのに気付いた。

「間に合ったことだし別に気にしてニヤいですよ」

とは言うが、どこぞのシジミがトゥルルって人も黙って首を横に振る程の負のオーラが出ている。

雰囲気重い……

「そ、そうだ、ビヤクヤが頼んでいた玉の装飾品が出来たそうだ」

この状況から抜け出そうと必死に話題を絞り出してくれた。これに乗らない手はない。

「へえ、それじゃ受け取りにいかないとな。そしてソフィア、何故知っている？」

玉のことは横で寝ているメティス、超絶不機嫌なアニス、棟梁のリザさんしか言っていないはずなのだが。

「リザから聞いたからな。久々に手応えのある仕事だったらしいぞ」

「仕上がりが楽しみだ」

会話終了。

ゴトゴトと荷車が揺れる音だけが響き渡る。

打破したいのはやまやまなんだが、何を話してもさっきみたいにくに終わるのは目に見えているからなあ。

結論・触らぬ神に祟りなし作戦

口は災いの元作戦（日本語的に何か間違っている気がしてならない）とも言つ。

何か喋っても逆効果なら喋らなければいいという超単純な考え。

いやさ、これ以上にいい行動が見当たらないんだよ。

そうと決まればさっそく暇潰しの準備を。取り出したのは愛読書『
今日からキミもハンターだ！　く入門編く』。これがまた長くて読
み終えるのも一苦勞な代物。

時間を潰すにはもってこい。

ソフィアも本を読んでいるようだし、事態が悪化することはまずな
いだろう。

メテイスはいつまで寄り掛かっているのだろうか、そんなことを考
えながら時間は過ぎていく。

「お帰りなさい。あらあら、メティスは寝ちゃったのね。折角話を聞こうと思ったのに残念だわ」

ユクモ村に着けば、シルヴィさんが迎えてくれた。

「特に何もありませんよ……よつと、うん、やっぱり軽いな」

起きる気配が感じられないメティスを担ぐ。いい笑顔で寝ているので見ているこっちも和むな。

「何も無いって言ってもアニスくんが機嫌悪そうだけど？」

「聞かないでください」

「まあいいわ。それでソフィア、例の『あれ』のことなんだけど」

例の『あれ』？ 見当もつかないが、絶賛冷や汗量産中なので本能が危険ということを告げている。

しかも相手側には最強といわれているシルヴィさん。

あ、これどうあがいても終了だな。おとなしく調理されるか。

「9割の準備はできたからあとは……」

「ふむふむ、となると……」

「そうね。じゃあ……」

「……（暇だ）」

「ビヤクヤはこれからどうするんだ？」

急に話をフル切り、俺の予定を聞きだそうって魂胆か。

いいだろう、乗ってやる。

「鍛冶屋で頼んでおいた装飾品を受け取りに行くかな」

「じゃあメティスは預かるよ」

「そうか？ 悪いな」

メティスを軽々と担ぐあたり、流石は上位に名を馳せるハンターだな。

一応メティスの姉だよな？　なんで妹の方はこんな運動能力なのだろう。誠に不思議である。

これ以上考えても、ここにいても始まらないので行動を起こそうか。

「リザさんー、例のブツ取りに来ましたー」

いつもの通り怒号が飛び交う鍛冶屋。俺の声が通っているのかも疑問だ。

「来たかー！ ちょっと待ってる！」

思い切り鉄を打ちつけるハンマーを置いて一旦奥の部屋に入っている。

この喧騒の中でもハッキリと聞き取れるほど「ボタン！」やら「ドサッ！」やら「バリバリー」と聞こえるのだが……大丈夫なのだろうか？

「ほれ、自信作だ」

手に握られているのは漆黒の首飾り。加工前まで放っていた威圧感
は見事に隠されていた。やっぱりプロの仕事は違う。

「ありがとうございます。手応えのある作業だと聞きましたが……」

「普通に削ろうとしてもゴリゴリと削ってもハンマーでぶっ叩いて
も変形しなかったからな。溶けた鉄の中にぶち込んでその中で形を
整えたよ」

ぶっそうすぎる加工方法ですかそうですか。

純粋な鉄の融点って1535 だったような……

「……」

「? どうした?」

「ちょっと考え事を……アハハ」

自分でもわかる。これは全く笑っていない笑い声だ。

「無理して考えすぎでも知恵熱だすぞ。話は変わるが『ソレ』の説明
いいか?」

説明ね。素人の俺が見たところで鍛冶のことなんぞコレっぽっちも判らないから是非お願いしたい。

スキル云々言われてもこの世界ではどのような効力を発揮するか知らないし。

「この装飾品1つで隠密と高級耳栓がつく非常に便利なものに仕上がった。普通は1つの装飾品だけで何らかのスキルが発動することはないんだが、ついたのだから仕方ない」

2つのスキル美味しいです。

もつとも隠密なんて素で出来るし、高級耳栓の代わりは気でガードすればいいから俺に必要な物になってしまった。

メテイスにでもプレゼントするか。

「そういうわけだからメテイスにでもあげなよ。お前さんには必要ないだろうから」

うげっ、なんで心読んだし。

貰う物も貰えたから早々に自宅に帰る。

アニスはどうやら帰ってきてないようだ。うむ、後でちゃんとした詫びを入れないとな。

それはともかく、

「……暇だ。暇すぎる」

退屈は猛毒ってどこかの妖怪も言っていたが、それがよく理解できる。

死因Ⅱ 退屈死

いやいや、シャレにならんで。過労死の逆か？ ハハ、そんな訳……

「あるかもな……」

刀の手入れも夕食の下準備も部屋の掃除も大抵のやることは終わったので妙案が浮かんでこない。

暇なんだけどする事がないこのジレンマ、どうやって片付けよう。

ビュッ!!

「のわっ!?!」

全開にしておいた窓から超高速で飛び込んできた矢。手紙が括つてあるから矢文のようだ。

これ、鏃が鋭すぎるタイプだけど。正確無比に俺の頭狙ってくる辺り悪意を感じる。

「怖えよ、弓怖えよ……えっと、何々? シルヴィさんからだと?」

『ビャクヤくんへ』

暇をどうやって潰そうか考えているわね? そこで朗報よ。実は今

は月が一番綺麗な時期なのよ。更に今夜は満月。月見をしながらの一杯は最高よ。あ、温泉に入りながら酌み交わすのもいいわね。そういうわけで私のほうで手頃な人に声を掛けておくから夜になったら温泉まで来てね

PS アニスくんも温泉に入らせるからその時に謝っておくといいわよ』

ピンポイントすぎる内容だったな。

温泉か。それもいいな。時間まで余裕があることだし走り込みでもして温泉でサッパリできるようにするか。

くメテイス SIDEく

「おい……起きろ……聞いているのか？ ……おい」

うーん、あと1時間。

急激に来る浮遊感。その後、重力によって落下して―

「にゃー!」

地面にビターン！ と、ぶつかった。

「やっと起きたか。相変わらずの目覚めの悪さだな」

「うう……起こすにしてももう少し方法があるんじゃないの……？」

「優しくしたら起きないだろう」

反論できない。

で、でもわたしだって最近では早起き出来るようになってきたもん。

「ほらほら、膨れてないで。いい話があるから」

いい話？ 何だろ？

HRがあがったとかなら凄く嬉しい。

「そうね、結論から言えばジャクヤくんの背中でも流してあげる」
と出来るわよ」

……

……

……え？

「私の調査だとソフィアが立てた案とギルドの人達が立てた案が似てたから、この際纏めちゃおうと思って」

な、なんでギルドの人達の話を知ってるの！？

誰にも言っていない筈なんだけど！

「ギルドの方ではメティスも了承したようだからちようどいいな」

そこまで知ってるの！？

「既にビヤクヤくんには連絡入れておいたから後には退けないわね。あ、番頭さんに話して貸切状態にしといたから心行くまで堪能するといいわ」

本人そつちのけで話を進めるってどういうことなの……

心の準備がまだ出来てないんですけど！

「そのためのだけの演技を無駄にしニヤいでくださいよ」

さっきまで口を開かなかったアニスが急に喋りだす。

「演技？」

「ずっと不機嫌のフリをしていれば旦那さんと一緒に温泉行くことはニヤくなりますから。矢文には合流するみたいなのはあります。が、ドタキャンすれば問題ないニヤ」

どうやら荷車からの不機嫌オーラはこの作戦のためだったらしい。なかなか狡猾みたい。

「でもビヤクヤさんなら見抜けたと思うけど」

「半分は本当に不機嫌だったから気付かなかったただけかと思います
ニヤ」

「空気も重かったからそこまで気が回らなかったんだろうな」

流石のビャクヤさんも気まずい雰囲気には弱いそうです。

「というわけでいつてらっしゃい」

「ってなんで行くこと前提の話になってるの!?!」

「行かないんですかニヤ?」

「そついうわけじゃ……」

ビャクヤさんにはお世話になってるし、一緒には入りたくないと言
えば嘘になるけど……む。

「行かないなら私が行こうかしら」

!?

「シルヴィさんだけ狡いですよ」

「村長特権ということぞ」

「わ、わたしが行きます！」

……ハッ！

この状況、なんかデジャヴュなんだけど。

恐る恐る2人の顔を見れば――

「（ニッコリ）」

「（ニヤリ）」

ま、また嵌められた。

「メテイスが行くなら私達の出番はないな」

「そうね。あとは若い子同士に任せて隠居しましょうか。ビヤクヤくんが温泉に入ったら連絡するから頑張ってね」

覚悟を決めるしかないのかな……

第25話「作戦決行（笑）」（後書き）

フラン「最近出番がないわね」

作「なかなか話しに絡ませづらいですから……勘弁してください」

フ「あとで見せ場を作ってもらおうとして、25話どうだった？」

作「今回はいい感じにタイピングが進んだので後先まったく考えていませんでした。誤字脱字（ry）」

フ「あと、これ。実は学校から急いで後書き書き上げて投稿」

作「メタ発言は勘弁してください」

フ「まあ後書き自体がメメタアだからいいじゃない」

作「よく知ってますね、メメタアとか一部廃人くらいしか」

フ「細かいことはいいじゃない」

第26話「過去」(前書き)

変な時間にそおい!!

第26話「過去」

「ふう、いい湯だねえ」

ユクモ村名物の温泉は名物と言っただけあって質がとてもいい。

シルヴィさんの言う通り、月のお陰で幻想的な風景となっている。

うむ、酒が旨い。やはり月見酒は素晴らしいね。

（お酒は二十歳になってから）

酒が旨いのはいいのだが、誰もいないとはどういうことだろうか。

まあ、1人でもものんびりできるからいいけど。

「月だけじゃなく桜も見えるからいいな」

この世界の桜は俺の知っている桜とは異なる植物のようだ。花が咲

く時期が圧倒的に長い。流石に冬には散っているが、代わりに雪見酒ができる。隙なんてなかった。

「おおぅ……」

思わず変な声が漏れる。この所まったり出来なかったので個人的に嬉しいシュチュエーションだ。

おや？

誰かが入ってきたようだ。足音の感覚からして160cmないな。緊張している気配が感じられる。

……俺の知っている限り、この少ない条件にもドンピシャで当て嵌る人物がいるのだが。

「あ、あの！ 一緒に入ってもいいですか!？」

予想通り我が愛弟子でした。

これが例の『あれ』だろうな。てっきり俺を家から出させてその間に何か仕掛けようって案だと思っていたが、見当違いも甚だしい。

「別に構わないが、一体どっという風の吹き回しだ？」

こんな大胆なことを自主的にするとは考えられない。答えは聞くまでもないだろうが、確認しとくか。

「簡単に言いますと乗せられて……」

困っているのか喜んでいいのかよく判らない表情で答える。まあそうだな。

しかし、いいのかね？ 俺も一応男なんだが。

それと誤解のないように言っておくが、メティスはタオルをしつかり巻いている上お湯は乳白色なのでお湯から出ている所しか見えな

い。

全国の人。コソの皆さん、残念だったな。

「俺は何を言ってるんだ？」

「何ですか？」

「すまん、何でもない」

久しぶりに変な電波を受信したな。

「それよりも、だ。もしかしくても2人きりか？」

「えっと……その通りです／＼」

デスヨネー

まあたまには裸の付き合い（変な意味ではなく）もいいかもしれない。

「ビヤクヤさんは兄弟とかいるんですか？」

唐突な質問。答えるのに少し迷う。

「ああ。ちょうどメティスの1つ下だな。ちなみに妹だ」

「そうなんですかー」

呑気にお湯に浸かるメティス。

「妹さんは可愛いですか？」

ッ！

……彼女になら言ってもいいかもしれない。

「なあメティス、少し聞いて欲しい話があるんだが……暗い話かどうか？」

俺の言葉の重みを理解したのか、ハッキリとした声で答えてくる。

「……はい」

その目にはどんな暗い思い出でも受け止める覚悟が見受けられた。

優しいな。

その優しい性格故に悩む。

本当に話すべきなのか？

話したところで自己満足に終わるだろう。いや、もしかすると彼女の心に傷を負わせる可能性も否定できない。

では何話そうとする？

この子に、俺を尊敬してくれているハンターに知って貰いたかった。

「……じゃあ始めるか」

覚悟を決め、重い口を開く。

〈メテイス SIDE〉

「……じゃあ始めるか」

覚悟を決めたように重い口を開く。

「俺の住んでいた所はちょっと特殊だな。裏の世界では強力な力を持った一族が纏めていた」

一旦言葉を切る。

「で、その纏めていたというのが、俺の一族を含めて十家あった。共通しているのは考えられない程強い、ってことだ。俺の一族は剣術だけど、格闘技術が優れている家もあれば射撃に秀でている家もある」

「そうなんですか」

「それで、だ。一応は協力状態にあったその十家が内部分裂を起こした。と、言っても九家が一家に攻撃を仕掛けた、だな。『神威家』つまり俺の一族が対象だったんだ」

「それはなぜですか？」

「簡単だ。『神威家』が強すぎたんだ」

いまいちピンとこない。強すぎてもなんら問題はないと思うけど

「やっぱり理解できないか。例え話をしようか」

わたしの顔を見たビヤクヤさんは苦笑している。失礼な。

「ある所に世界を牛耳っていた魔王がいました。その魔王はとてつもなく強く、人間は何度勝負を仕掛けても帰り討ちにされていました。人間側が諦めかけたその時、魔王にも対抗できる力を持った勇者が現れました。彼は疾風の如き速さで瞬く間に魔王軍を打ち破つていき、やがて魔王を倒しました。国へ戻った勇者は全世界の人から尊敬され、伝説としてかたり継がれましたとさ」

「？ 普通のお話ですよね？」

特に変わった所はない、よくあるおとぎ話だった。

「ここで終わればな。けれど、まだ続きがある。しばらくしてこの勇者はどうなったと思う？」

「えっと、幸せに暮らしたんじゃないですかね？」

「いや、その逆だ」

え？ 逆ってことは虐げられたってこと？

仮にも世界を救ったのだから悪く言われることはないと思うんだけど

ど……

「国をまとめるにおいて、最も効率がよいのは共通の敵を作ることだ。その敵である魔王が消えたため、民が反乱を起こす可能性が出てくる。上層部は反乱を恐れ新たな敵を作ろうとし、また民は常識離れた勇者の強さに不審感を覚える。もうわかるだろう、共通の敵として白羽の矢が立ったのは、ほかでもない魔王を倒した勇者だ」

どこか自嘲めいた風に喋る。

「つまりはそういうことだ。わかったか？」

「……はい」

「話を続けよう。さっきの例えで魔王つてのが十家の本来の敵、勇者が『神威家』、人間側が残りの九家だ」

「……」

「今から5年前だったか、九家が攻め込んできた時に激しい抗争が起こった。いくら強いと言えど九家を相手するには無理があった」

ゆっくりと話し続ける。

その表情はいつもの明るさが一切なく、とてもつらそうに見える。

「結果として、俺以外の家族は全員殺された」

殺された……その言葉の意味が理解できなかった。

いや、理解はできるけどしたくなかったただけなのかもしれない。

家族がいなくなるとはこういうことなのか、それは家族がいるわたしには一生判らない。

でも、1つだけ言えることがある。

「何で……何で言ってくれなかったんですか！」

〔白夜 SIDE〕

「何で……何で言ってくれなかったんですか！」

伝えることを全て伝えた後、今まで黙っていたメティスが急に声を上げる。

「わたしには家族を失った悲しみは理解できません。でも、その傷を癒すのを手伝うことはできるんですよ！」

傷を癒す……か。

考えたこともなかった。

「全て抱え込む必要なんてありません！ 何に為に友が、パートナーが、わたしがいるかわかっていますか！？」

いつもは温厚なメティスの怒り。それだけに真剣になっているというのか。

「心の傷は本人の知らないうちに心を壊すんですよ！ 誰かに話して少しでも心を軽くするのを遠慮する必要なんてありますか！ それともわたしのことが信用ならないんですか！？」

そのようはつもりはなかったが、第三者から見ればそうなるのだろう。

俺自身が壁を作っていたのか。

誰かを傷つけるのではないかと勝手な幻影に怯え、孤独を選んだ時もあった。

全ては世界を信じていないことによる一人相撲。

未熟だな。

「わたしはビヤクヤさんの抛り所になりたいんです！ ビヤクヤさんは強いからわたしなんて必要ないかもしれません。でも……それでも……わたしは……」

必死になって涙を堪え、言の葉をぶつけてくる。

「わたしは……あなたと一緒に笑って、喜んで、泣いて、悔しんで……楽しく暮らしたいだけです。だから、遠慮しないでください」

「メティス……」

「ヒック……エッグ……」

愚かだ。

こんなにも俺のことを考えてくれるのに、俺は彼女のことを何も考えていなかった。

大粒の涙を湯に落とすメティス。どんな言葉を掛ければいいかわからない。

俺のために涙を流してくれているのに何もできないとは。

俺はどこまで弱いのだろう。

「ありがとう」

口から出たのは感謝の意。これ以上の言葉は必要ない。

「出過ぎたことを言ってすみません……」

「いや、そんなことはない。変われそうだ。それとメティス、さっき『わたしなんて必要ない』と言っていたがそれは違っぞ」

今なら濁さずに言える。

「俺にはメティスが必要だ。不甲斐無いが、これからよろしく頼

む」

「ビヤゝグヤゝざゝん」

言っておいてなんだが、気恥ずかしくて背中を向ける。それにしがみつくメティス。

視界が歪んでいるのは涙のせいか。

既に枯れたと思っていたが、まだ泣けたみたいだ。

今回ばかりは、作戦とやらに感謝。

月が綺麗な夜、
少しでも心が軽くなった気がする。

第26話「過去」（後書き）

作「暗い過去をお持ちのようで」

シルヴィ「うん、まあ良い機会になったと思うわよ」

作「そうですね。これで一層絆が深まったと思いますし」

シ「ニヤニヤできるわね」

作「ですねー。さて、業務連絡です。今まで投稿した話を一生懸命手直ししています」

シ「内容を変えているわけじゃないから読まなくても平気だけどXTダウンロードした方は覗いてみてね」

作「実を言えば別の物語の構成できてるんですが、同時進行なんて器用なことは出来ません（キリッ）」

シ「自慢できることじゃないわね」

作「……ええ」

第27話「普通のピクニック？」（前書き）

どうしてこうなった？（話の展開的な意味で）

第27話「普通のピクニック？」

温泉から出てメティスを家まで送った後、少し散歩をすることにした。

夜風が気持ちいい。いつもは賑わっているこの村も静寂さが辺りを包んでいる。

遠くの方で明るい光とかすかに聞こえる喧騒。集会場はいつも通りのようだ。

「こんな時間に珍しいわね。ちょっと付き合ってくれないかしら？」

なんとも退屈そうにしているシルヴィさん。

ちょうどいい、お礼も言っておこう。

「月はいいわね。太陽ほど光は強くなく、常闇ほど暗くもない。淡い光で薄く照らす。お酒がとっても美味しいわ」

「……ええ」

「どう？ 少しは役に立てたかしら？」

詳しくは語らない。全てを知っているに違いないが、あえて言葉を省いたようだ。

「ありがとうございます」

「そう。ならよかったわ。ま、私としては最初の予定とだいぶずれちゃったのが残念だけど」

いたずらっぽく微笑むシルヴィさん。思い通りになっていたらいたでどの道笑うと思う。

渡してくれたお酒をちびちびと飲み、月を見上げる。

「幻想的ですな」

「そうね」

しばらく無言の時が続く。

「ねえビヤクヤくん、もっと周りを頼ってもいいのよ。世界は、あなたが思っているよりも優しいのだから」

答えない。無言の了承と言ったところか。

シルヴィさんも俺の表情を見て満足したのか、腰を上げる。

「それじゃ私は帰るわね」

そう言い残して闇夜に消えていく。

月は、相変わらず桜を照らしていた。

翌日。

アリスの不機嫌が演義によるものと気付き、軽くショックを受けていた頃、

「ビヤクヤさん、おはようございま〜す！」

「お、来たか。まあ入って」

あの時の約束（ティガレックスキメラ種の寝起きドツキリの時の）を履行するため、メティス呼び出した。

ギルドのクエストの方もあるが、それは明後日なのでまだ余裕はある。

あ、そういえば俺自身からソフィアに伝言を言ってないな。

メティスに伝言を伝言してくれと頼んでおいたので耳に入っていると思うが、メティスのことだから忘れている可能性も否めない。

「確認なんだがクエスト監視云々ってことをソフィアに伝えてくれたよな？」

「はい。すっごくハリキってましたよ。『やっと……やっとだ。長かった……』って遠い目をしながら言っていました。少し怖かったで

す……」

やっぱり悔しかったのか。悪いことをした気分だな。

さて、今日1日何をするのか聞いたところ「ピクニックに行きましょう!」と言うわけで森丘まで行くことになった。

事前に貰った情報では大型のモンスターは確認されてないから何ごともないだろう。

何ごとがあっても俺がいるのにわざわざ出て来るようなおバカさんはいない。出て来もご退場願う。実力行使的な意味で。

ピクニックということでメティスは私服のようだ。これはまた可愛いね。

俺は相変わらずの道着だけど。

「? どうしたんですか?」

「何でもない」

「そうですか……? とにかく早く行きましょう」

そう言って急かしてくる。

そんなに急がなくなつて目的地は逃げはせんぞ。頼むから朝食くらい食べさせてくれ。

森丘にあるお目当ての場所まで行くことになつたが、なかなか遠くて大変だ。

「こつちですよ」

どこに向かつているのかを一切明かさずどんどん進んでいくメティスを追いかける。

「どこに向かっているんだ？」

「秘密です」

「どおしても?」

「どおしても、です」

このやりとりはもう数十回と繰り返したきがる。

ここに来るまでにわかったこと、まあ予想は付いていた、が1つ。

どうやらメティスはバトルモード以外の時はスキル「ドジっ娘+2」が常時発動状態にある。

川に落ちそうになったり（無事救出）ランポスの尻尾踏んだり（威嚇により追い払う）すべったあげく三回転したり（ギリギリキャッチ成功）e t c

よくハンターになれたな。

俺の心配をよそに脇目に目もくれないメティス。

やはり蜂の巣の存在に気付いてないらしい。

案の定蜂に追いかけられる羽目になってから更に20分くらい歩い

たところで目的地らしき場所に到着。

で、何故崖まで来た？

聳え立つのは断崖絶壁。それはもう高い高い。

どうしてこんな所にこんな崖があるのは果てし無く謎だが、この際気にしないことにしよう。

ここが本当の目的地でないのは断言できるのでこの付近ということになる。

え？ まさか崖登りするのか？

聞いてみれば、

「それはないですよ。確かに目的地はこの頂上ですが、裏から回ればそれなりに楽に行けますね。でも時間は掛かります」

やはり上か。

回り込むのはいいけど時間を浪費するのは実にもったいないな。も

つたいないお化けが出てきそうだ。おお怖い怖い。

と、言うことで

「よし、登ろう」

「へ？」

「ちょっと口閉じてろ。舌噛むぞ」

メティスを担ぎあげて軽快に岩肌を跳ねていく。少し足場が不安定なのは大目に見よう。

「よし到着。ん？ どうした？」

「な／＼／ 何でもないです／＼／」

「？ そつか」

取り敢えず持参したシートを敷いて休憩を取る。

かなり高い場所に位置しているので眼下には森が一望でき、また遠くにある山も見れる。

「いい景色だな。ここにはよく来るのか？」

「そこまで多くはないですけど、お姉ちゃんとたまに」

「へえ」

のんびりしながら昼食（メティス作）を頂く。自信作と言うだけあって美味しい。

まあ、キノコづくしなのはどうかと思うけど腕はかなり上達したようだ。

聞けばフランさんに鍛えて貰っているらしい。前に一度だけ朝食を御馳走になったが、あの味は今でも忘れられないほど美味しかった。

レストランでも開けばいいのと思うほどの人の下で練習しているのだから、将来有望だな。楽しみだ。

食べながらふと疑問に思ったことを聞いてみる。

「しかし、よく知っていたな。調査団ですら来ないような立地条件の悪さなのに」

ここはモンスターの監視にはちょうどいいかもしれない。が、周りからもよく見えるので襲われるリスクが高い。

飛竜の巢目当てでも意外と狭いから巢なんて作れるはずもなし。

デメリットばかりでいいことなんて一つもない

「ここはですね、わたしがハンターになろうって決めた場所なんです」

「ほう。興味深いな」

「昔、森丘に来た時にモンスターに鉢合わせしたことがあるんです。たまたま来てたお姉ちゃんに助けられて事なきを得たんですけどここでこっぴどく怒られちゃって、自分の身くらい自分で守ろうって思ったのがキツカケですね」

ハンターになる理由は人それぞれなのか。中には敵討ちもあるって話だ。

「守れると言っても、この分じゃまだまだ遠いな」

「それは言わないでください！」

「すまんすまん。ところで、いいのか？ 俺を連れてきて」

「どういことですか？」

「ここはメティスにとって思い出の場所なんだろう？ 部外者の俺が立ち入ってはまずいきがするが」

ある意味、思い出を穢すようなことにも繋がるからな。なるべく綺麗なままに残させてやりたい。

「ビヤクヤさんに来て貰いたかったです。わたしの……大切な……人……だから／＼／」

顔真っ赤にするなら言わなきゃいいのに。

「そうか。それじゃもう少し居させて貰おう」

「（む）、勇気を出して言ったのに」

それから2人で会話をしていたが、時間が経っていたことに気付いたので切り上げることに。

名残惜しそうだったが、夜になれば大型のモンスターが活発になるという旨を伝えれば、

「長居は危険ですよ！　今すぐ帰りましょう！」

驚ほどの変わり身の速さに驚いた。

で、来た道に戻っている最中。

「あそこはいい場所なんですけど、いかんせん道のりがつらいですよね」

「そうだな。長い上にオール獣道だから面倒臭いことこの上ない」

人の手が入っていないので思わぬ所に思わぬ自然発生した極悪な罠（引っ掛かったら重傷or死）が多々あるのでメテイス1人では絶対に行かせたくない。

間違いなく天に召されるだろう。

それにモンスターの縄張りにもなっていることもあり得る。

「静かですね。もしかして嵐の前の静けさだったり。そんなことはないですね」

無邪気に笑うメティス。対して俺はその一言で嫌な予感が頭をよぎった。

「メティスよ、『そんなことない』ってのは俺の故郷ではフラグと言って、それはそれは不吉な言葉として忌み嫌われているんだ」

「そうなんですか？」

そうなんです。その証拠にほら、早速回収しに来ました。

ポケっとしてるメティスを抱えて跳べば、眼下を漆黒のプレスが焼き尽くす。

第27話「普通のピクニック？」（後書き）

サーシャ「出番少ない人物の内の一人です。どうも皆さん、お元気でしょうか？」

作「うん、実はこの子のことを忘れていたアホな作者です」

サ「超展開すぎやしません？」

作「うん、そうなんだ。またなんだ。取りあえず落ち着いて聞いてほしい。仏の顔も三度までって言うし、許してもらおうとは思わ」

サ「長いのでカット。つまり？」

作「スミマセンデシタ」

サ「わかればよろしい」

作「ちなみに次回もはこれ以上の超展開になるとかならないとか」

サ「（この作者はもうダメかもしれない）」

作「頑張りますのでお手柔らかに」

サ「次回もゆっくりしていつてね！」

第28話「漆黒の乱入者」(前書き)

リアルが忙しすぎて寿命がマッハな件

第28話「漆黒の乱入者」

「グオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

数いる竜の中でも片手に入るであろう強力なバインドボイスは大気はおろか木々をも揺るがす。

巨体から溢れ出ている殺気からして、相当の強者だろう。

「最狂の王者と轟迅竜に比べてば幼稚だけどな」

このイビルからはあの2匹のような気配は感じられない。ただの上位モンスターといったところか。

ここが特定のモンスターの縄張りであるのなら特に何もせずさつさと逃げるのだが、相手はイビルジョー。悪食で有名。

高い体温を保つため常に食べ続けなければならず、コイツが通った後は死々累々、暴食期だったら動くもの全てを食らい尽くし絶滅に追いやってしまう。

最近の生態系バランスを崩しているのに一役買っている竜。

「見逃すわけにはいかないな」

「た、戦う気ですか!？」

驚いているが、どちらかと言うと相手のことを心配しているように見受けられる。

そこまで残酷なことはしないのだが……

「放っておいたら大変なことになるだろう?」

ショルダータックルを難なく回避。体が大きい分、隙が多い。

当たったら痛いではすまなそうなかわりに攻撃が単調で読みやすい、まず当たることはないな。

「明日に響くといけないから一瞬で終わらせる。ここで待ってて」

適当に降ろして振り向きざまに斬撃を飛ばす。

ザシュッ! という音と共に斬れたところを見れば、やはり強くな

いようだ。

これなら苦勞しないで済む。よかったよかった。

飛ぶ斬撃により傷つけられたイビルジョーは、怒り状態に移行する。

全身の筋肉が隆起し、数々の古傷が浮かび上がる。

その姿は数々の修羅場を幼き頃からくぐり抜けてきた様子が伺える。こいつを放置しておけば、いずれはてこずる敵として相對することになるだろう。

それほどまでに潜在能力は高い。

危険な芽は早めに摘み訪っておくのが定石。

目が充血した後怒りに任せブレスの放射。

真正面から飛び込んでみる。肌が焼けるような、切り裂かれるような、電撃を浴びたような、何とも言えない痛みが襲ってくる。これが竜属性なのか。

無傷だけだな。痛いだけだった。

プレスを突き抜け、頭目掛けて刀を抜く。

が、相手も伊達に恐暴の名を持っていない。俺を丸ごと食らおうと強酸の唾を垂らしている口で咬みつこうと待ち構える。

流石に食われるのも酸を浴びるのも嫌なので、余裕をもって空中ジャンプでの回避。

イビルの巨体を飛び越えて背後へ着地すると同時に体を捻って斬りかかる。

驚異的な体のバネで振り向くイビルだが、既に斬る直前まで来ている俺より速く攻撃できるわけなからう。

貫った。

首筋から腹部を通過し、尻尾に至るまでの縦一文字の斬り傷。

噴水のように血が噴き出る。

『グ、グ、グオオオオオ……』

これほどの重傷を受けながらもその竜は地に伏せることはなかった。

息も絶え絶えだが、その目は怒りに燃え敗北を拒んでいる。

根性だけは一人前だと認めよう。

「まだ立つか。絶えぬほうが身の為だと言うのに」

鞘に納め、確実に息の根を止めるため精神を集中させる。

しかし、それは無意味な行動に終わった。

横から不意に気配を感じたかと思うと、暗闇から飛び出す黒い影。

『ガアアアアア！！！！！』

その影はイビルに張り手をぶつける。ボギツ、と骨の折れる音が木玉し、地に伏せることを拒んでいた恐暴竜は強制的にねじ伏せられた。

「今日は厄日なのかね……」

ポツリと呟く。

突如としてイビルジョーの命を奪った乱入者はイビルジョーを上回るほどの巨体を有していた。

こちらに意識が向く前にメティスの前まで一足飛びで戻る。

「ビャクヤさん……あれって」

震えた声で小さく問い掛けてくる。

俺も目の前の光景に我が目を疑ったほどだ。

「何故こんな所にでてる？ お前の居場所はどこじゃないだろう、
覇竜よ」

＼メテイス SIDE＼

あつと言つ間に終わりそうな戦いは思いもしない展開になった。

覇竜と呼ばれる幻の竜、『アカムトルム』の乱入によってイビルジョーは命を落とすことになる。

漆黒の鱗に大きな牙。鋭い眼光を持ち、居るだけで中堅のハンターは戦意を喪失しうるであろう存在感。

飛竜とは比べものにならない程の大きな爪に斬れぬものなどあんまりないんじゃないかと思える。

「まだそこまで強くないようだから、今のうちに屠っておくか？」

呑気にそんなことを言っているけど、わたしはビャクヤさんの背中
で震えるだけ。

それなりに殺気に馴れたと思っただけどまだまだみたい。

そのアカムトルムは倒したイビルジョーを見下ろしている。わたし

たちなんて全く気にしていない。

黙って見ているビャクヤさん。けれど、動きに対応できるよう神経を集中させているのがわかる。

しばらくしてアカムはこちらを振り向くと、空が落っこちる程びっくりする行動に出た。

『いやー助かったよ』

……

……

……え？

「「喋った!？」」

流暢に人間の言葉を喋ってきた。

わたしはもちろん、ビヤクヤさんも啞然としている。

モンスターが喋るだなんて聞いたこともない。

あんまりにも驚過ぎて恐怖なんてどこかに飛んでいった。

『え？ そんなに変？ アイルーやメラルーも喋るけど』

「いや、それはそうなんだが……もうどこから突っ込めばいいのか判からない。あとは頼んだ」

ポンと肩を叩かれる。

「わたしに任されても困りますよ!」

『えっと、話を進めてもいいか？』

困惑したように（表情は判らない）喋るアカムさん。幻聴ではないみたい。

「ああ、頼む」

あれだけ驚いたビャクヤさんは今では普通に対応している。こんな絶対おかしいよ。

『イビルジョーってフードファイターだろ？ この辺りの生態系が崩れるのは防ぎたいから俺が出て来たんだけど逃げられてしまつて』

「そこで足止めたのが俺達つてわけか。あ、俺はビャクヤだ。こっちはメテイス」

『名前はないからアカムでいいよ。普段は俺に喰つて掛かるアホか食べるために草食モンスターくらいしか仕留めないけど、イビルは例外だな。俺はそこまで強くないから本当に助かった』

手負いとは言えイビルジョーを張り手だけで仕留める力を持っていながら強くないって……

「人間側としては強くなる前に討伐したいけどね」

悪魔の微笑みを浮かべるビヤクヤさん。必要とあれば瞬時に攻撃を繰り出すつもりらしい。

『勘弁してよ。お前さんと戦ったら瞬殺されちまう』

そういうアカムさんからは全く緊張感が感じられない。まるで友人と喋っている雰囲気。

「仮にもアカムなんだから成長して暴れたら俺でも手が付けられないくらいそうだ。なあメティス」

「え、あ、はい、そうですね」

『俺は大型モンスターの中でも理性ある方だから見逃してくれない？ 特に騒ぎを起こすつもりもないし』

慌てて弁明するアカムさんはとても伝承上のアカムトルムとは思えない。

全てを破壊し、滅亡へと導く竜って聞いたきがするんだけど。

「冗談だ。お前が大人しいのはよくわかるからな。それに食う量も

少ないし」

『わかるんだ……』

「血の臭いがしないからな」

わたしにはサツパリ、なんで判ったのだろう。

イビルの返り血で血の臭いしかないんだけど

『血の臭いしないことが判るって……呆れるほど規格外だなー。ともあれ助かるよ。んじゃ、俺はもう帰るけどこの辺の情報ならそれなりに詳しいから何かあれば聞いてくれ』

「まず見つけられないと思いますが……」

『うーん、ビヤクヤは見つけられると思うから平気だと思う。ちなみに火山の麓に住んでるから』

「わかった」

地面に潜って去っていくアカムさん。この世界はミステリーで溢れています。まだまだ人間の常識では語れないことが多いみたい。

「驚いたな。何か変だとは思ってたがまさか喋るとは」

「ですね……」

しばらく沈黙が続く。

「帰るか？」

「帰りますか？」

見事にかぶる。

あまりのタイミングの良さに2人して笑ってしまった。

〈対策部情報班 定時連絡〉

老山龍、ラオシャンロンについての報告

被害と思わしき跡は海岸沿いまで続いていたがそこから痕跡が消え、追跡が不可能となる。

目下、全勢力を持つて探索を続けているものの新たな情報は今のところ入ってこない。

最も近い人里でもかなりの距離はあるため老山龍の進行ルートには入ることはないだろう。

それと興味深い話が入った。

ある村の竜人族の長老曰く『老山龍が人に興味を示した』らしい。

老山竜と言えば、人を石と同じように見ていることで有名である。

根拠は不明だが、あの青年の出現に呼応しているのでただの推測と決めつけるのは早合点ではなからうか。

ともかく、現状では危険はないであろうと判断する。

以上。

第28話「漆黒の乱入者」（後書き）

作「やべえ、疲れた」

リザ「冒頭からいきなり何だ？」

作「頑張っているんだけど、何かこう疲れが溜まるんですよ」

リ「それはお前が3：00就寝の6：00起床というバカな睡眠サイクルを送っているからだろう？」

作「あ、やっぱりそれですかね」

リ「それ以外になにがあるんだよ……そのうち倒れるぞ」

作「そうですねえ。まあ、皆さんもお体には気をつけてください」

リ「……特にオチがないな」

作「……いつものことです」

リ「言つてて悲しくないか？」

作「ええ……」

第29話「突撃！ 火山のグラビさんへ準備編」(前書き)

見直してみると結構書いたんですね。自分でびっくり

第29話「突撃！ 火山のグラビさんへ準備編」

フレンドリーすぎるアカムと別れて村に戻り、集会場へ。

普通はクエスト以外で大型モンスターを狩るのは厳禁とされているが、俺はギルドから特別狩猟許可証なるものを貰っていて、名前の通り自己判断で狩猟することを許されている。

最寄りのハンターズギルドに報告する義務はあるけれど。

ちなみにこの許可証を取得するためには実力はもちろん人間性の調査や筆記試験、果ては心理テストを行った上でギルド本部のお偉いさんが長期に渡って判断するらしい。それを俺は何もせずに貰えたのだから、世の中って不公平だと思う。

「あ、メティにビヤクヤさん、どうしたんですか？」

受付で人を呼べば出て来たのはサーシャ。こうやって会話するのは久しぶりだ。

イビルを危険と判断、討伐したことを述べ回収する為に荷車の要請持って帰ることも出来るが、本音を言えばあんなきもちわるい皮膚

には触りたくない。

それに持ってきたらきたでこの村に迷惑が掛かるだろう。

「まさに悪魔クラスの強さですね。一太刀入れた後にぶん回して木に激突させたとか人間技じゃないかと」

まあ、あのアカムのことは言えないから必然的にこうなるよな。

これが原因で更に噂が広がるかもしれないが背に腹は変えられないだろう。

いくら何でも流石にそこまでの怪力は持ち合わせていない。あの時のレウスを持ち上げられたのは相手に抵抗する意志がなかったからで、生きていたら集中出来ず、持つことなんて夢のまた夢。

……使いづらい怪力なこと。

「それと明日のグラビモス討伐のことなんだが、何か情報入ったか？」

「入りましたよ。はい、これ資料です」

一枚の紙を渡される。そこまで量はないと思ったが細かい字でビッシリ書かれているので読むのも嫌気が差す。

要点を纏めれば、

- ・ 凄く堅い
- ・ とてもデカイ
- ・ 驚ほどアグレッシブ
- ・ 色々と規格外

びつくりするほど役立たずだな。

もっとう、。。。が拠点だとか。。。を嫌うだとか。。。する習性があるだとかそんな感じの情報はないのか？

おや？

『対象となっているグラビモスの捕食場所のエリアが判明した』

あるじゃん。これはいい情報だ。しばらく張り込んでいれば発見できるだろう。捕食場所に来るってことは腹が減っている。力が出ないと考えてもいいから有利になるだろう。

「ふむ……これはまた苦勞しそうだな。今回はかりは重傷を負ってもおかしくはない」

「根拠は？」

「ただの勘」

戦闘に関しての勘は以外と命中率高いんだぞ。

だから2人とも、その不審な目はやめてくれ。

「出発は明日なので今のうちに準備しておいてください。くれぐれもクーラードリンクを忘れないように」

忠告を受ける。このような特殊なフィールドでの狩りの場合は一声掛けるのが決まり出そうだ。

クーラードリンクか。メティスは忘れそうだな。余分に持っていこう。

メテイスにクエスト情報の書いた紙を託してから帰宅。

早速アニスにクーラードリンクの補充を頼む。

「グラビモスと言えば疑態に定評がありますニヤ。どうやってみつけるつもりですかニヤ？」

相変わらずの調合成功率を叩き出すアニス。正直、羨ましい。

「それってバサルモスだった気がする」

棚からポーチを取り出しつつそう答える。

この間、ミニサイズのアイテムポーチを購入したので数は少ないがいくつかアイテムを持ち込めるようになった。

「……そうでしたニヤ」

今回は

- ・クーラードリンク×3
- ・秘薬
- ・投げナイフ×3

となっている。

これらは全て万が一の事態を想定してのアイテムなので基本使わない。

クーラードリンクだけは例外となるが。

「アニスは特別に用意するものとかあるか？」

いつも通りの荷物なので少し心配になって聞いてみる。

まあ、あの中には考えつかないような特殊な仕舞い方で訳がわからない物も入っているのだろう。

「うーん、いつも通りでいいですニャ。まあクーラードリンクは持ち込めるだけ持ち込むつもりですニャ」

ありがたいね。切れたら暑くて敵わない。

「ここをこうして……っと。旦那さん、できましたニヤ」

3個のクーラードリンクを手渡してくる。それを受け取ってポーチに入れる。

クーラードリンクを作には氷結晶という石が必要になるらしいが、一体石のどこから液体が発生するのだろうか？

氷が名前にあるだけあって溶かしたりするのか？

興味はあるが、ホットドリンクのトラウマみたいになるのは勘弁願いたいのであえて聞かないことにしよう。

チラッと虫の残骸が見えたのは気のせいに決まっている。

疑問はレグルス（獅子座の首星）の彼方まで吹っ飛ばしておいて夜叉鴉の手入れをする。

まあ砥石で軽く砥いだあとに気を込めるだけの簡単な作業だから、大剣やランスに比べてはお茶の子さいさい（死語）だろう。

することがなくなった。

いつもであれば頼んでもいない厄介ごとが舞い込んでいるので動きっぱなしだったが、今日はそうでもないらしい。

忙しすぎるよりはましだ。

「さてと、明日に備えてゆっくりするか」

明日のことを考えてメティスの修行は中止しているので客人はない。ダラダラ過ごせるのは久しぶりではなからうか。

最近クエストに行く回数も増えたので一日中家に居ることはまづなかった。それだけこの世界に馴染んだのか。神経を使う環境だが、それ以上に楽しいので来てよかったと思える。

今では森でランポス見ても何も感じなくなり、最初の頃の感動なんかどこに吹く風。

「うむ、慣れって怖いな」

「ニヤにがですか？」

「気にするな」

くメテイス SIDEく

「ただいま」

ビヤクヤさんにクエスト情報が書いてある紙を受け取って別れたあと、足速に家に帰る。

既にお姉ちゃんは明日の準備をしているみたい。声を掛けて紙を渡す。

わたしも確認したけど特に目新しいことは書いてなかった。たぶん何も知らないお姉ちゃん用だろう。

「はい、これに明日のクエストが書いてあるから見ておけてビヤクヤさんが」

「ありがとう。ふむ……なるほどな……」

「それじゃあわたしは準備をしてくるね」

自室に戻り棚を開けて必要な物を取り出そうとする。

入っている物は多くないけど、必要な分はあると思うからわざわざ買いに行かなくてもいいだろう。

でも、いろんな所にいろんなアイテムをしまっているから見つけるのは一苦労。

世の中には物欲センサーなるものがあって、必要な時に限って欲しいものが見つからないことがあるみたいだけどわたしは今まさに体験している。

数が少ないはずの音爆弾や秘薬とかは見つかるのにクールドリンクを始めとする基本的なアイテムが一切見つかってない。

「おかしいな。ここに入れておいたはずなんだけど……」

探すこと30分、ようやく発掘することができた。

「こんな所にしまった覚えはないけど……ま、いつか」

今回の持ち物はこちら

- ・クーラードリンク×3
- ・煙玉×3
- ・回復薬グレート×3

少ないかもしれないけど主役はビヤクヤさんだからいいよね？

一通り武器防具の確認&お手入れをして準備完了。暇になったからお姉ちゃんの様子を見に行く。

「準備終わった？」

「ん、一応終わったぞ。私達は見ているだけだからアイテムも必要ないからな」

お姉ちゃんは典型的な石橋を叩いて渡るタイプなので一回のクエストにかなりの量のアイテムを持ち込んでいる。

万一のことにも対応できるように、とは言っているけどいつもアイテムの大半を使わずに持って帰っているので無駄だと思う。むしろポーチが重くなる分損をしているんじゃないかな？

それにしても、さっきアイテムは必要ないって言ったくせにわたしの2倍くらいは用意しているんだけど……

「そうだ。彼専用のクエストはG級かそれ以上って話だろ？ よくついて行こうと思ったな」

「うーん、騒がなければわたしのことなんて眼中にないみたいだから平気だと思って。そもそも正式なのは1回しかついて行ったことないけど」

ビヤクヤさんの存在感が強すぎるから滅多なことではわたしを狙わない。

「言ってて悲しくないのか？」

「……うん」

「……そうか」

空気が凍ったので話題を変えてみる。

「お姉ちゃんは初めてついて行くんだよね」

「そうだな。噂には聞いているが本物の戦闘は見たことないから楽しみだ」

「もしかして……戦闘狂？」

目が輝くのはいいけど台詞が危ない。

「なっ！？ 失敬な。純粹に戦いを見るのが楽しみなだけだ」

それを巷では戦闘狂って言うんだけど。

ビヤクヤさんといいお姉ちゃんといい、何でもこういう人がわたしに大きな影響を与えているんだろう。

「そうだ。メティスはこの後、用事あるか？」

ポーチの整理を終えて愛用のガンランスのお手入れをしながら聞いてくる。

「ないけど何で？」

「少しばかり少し聞きたいことがな」

キラーンと音がせんばかりに目を光らせる。この光り方は悪巧みを思いついた時によくなる。

早いとこ逃げないと。

「あ、そつえば買い物に行かなくちゃ」

《メティスは逃げ出した》

ガシッ（↑腕を掴まれる

「……」

「さて、洗いざらい話してもらおうか。お前の師匠に対する感情について」

《逃げられない!》

〔白夜 SIDE〕

翌朝、朝が早い村人と挨拶を交わし既に到着している馬車があるのでその前で2人の集合を待つ。火山には次の日の朝到着の予定となっている。

しばらくアニスをこねくりまわして暇を潰していればだいぶツヤツヤしているソフィアとだいぶゲツソリしているメティスが姿を見せた。

「おはよう。ってだいぶ疲れているようだが大丈夫か？」

「ちょっといろいろありまして……少し休めば平気です」

口数少なく馬車に乗って休む態勢に入る。心配だな。

「まあ本人が平気と言うなら平気なんだろう。それでソフィア肩書きは監視及び報告役だからその辺りは頼むぞ」

「任せろ。お前の戦いをまともに見ることが出来ればの話だが」

「うゝむ、ソフィアの実力からして参戦するならともかく普通に見れると思うけど。あとそんな過大評価しないで欲しいね」

期待が大きければ大きいほど落差は激しいから過剰な期待は厳禁と言われているだろうに。

運転手（猫？）に呼び掛けられたので俺達も馬車に乗って出発する。

途中で一夜を明かすようで夕食用の食材もそこそこ揃っているのだからありがたい。

「相手は鎧竜、堅いだろうな」

呑気なことを考えながら馬車は進んでいく。

く??? SIDEく

ほう。オレの所に来るのか。

もう少し経ったら暴れて存在を示そうと思ったが、手間が省けた。

最近ではオレに挑んでくる兵【もののふ】はいなくなったので暇を持て余していた。

そこで聞いたのが異世界の人間の話だ。

最狂を倒し、轟迅を屠る。今の戦歴はその2つだけだが、常識の壁を超える強さを持っているのは明らかだ。

火竜の牙を折り轟竜の爪を破壊するオレの鎧、奴の斬撃は斬り伏せてくれるのだろうか？

楽しくなりそうだな。

第29話「突撃！ 火山のグラビさん〈準備編〉」（後書き）

作「やべえ、電子辞書が逝ってしまいました」

ソフィア「何か問題でも？」

作「PCが近く似ないときは電子辞書で書いていたんですがそれが出来なくなつた訳ですよ」

ソ「直して貰えばいいだろ。保障期限は？」

作「保証書は犠牲となつたのだ……」

ソ「つまりなくしたと」

作「その通りでございます」

ソ「別にルーズリーフか何かに書けばいいだろ？」

作「書いたものを入力するのは意外と時間がかかるんですよ。そういう訳でもしかしたら更新頻度が落ちるかもです」

ソ「甘えんな」

。（ノム。作）。

第30話「突撃！ 火山のグラビさんへ対決編」(前書き)

テスト怖いお

第30話「突撃！ 火山のグラビさんへ対決編」

「やっと着いた。ここが火山か」

黙々と進むこと1日。予定通りの時間に到着することができた。

身の回りの整理をしてから早速探すことになる。前回のティガはそれなりに早く探し出せたが今回はどうだろう。

グラビモスと言えば飛竜種の中でもトップクラスの大きさを誇るので見つけやすい……といいな！。

「一部のエリアでは溶岩が溜まっているので注意が必要ですね」

やはり溶岩はあるのか。クーラードリンク程度でこの灼熱を凌げるとは思えないが、先駆者達は凌いできたのだから信じるしかないな。

「それで旦那さん、グラビモスがどこにいるか検討はついているのですかニャ？」

「いや、例によって気配を隠しているから探知できない。近くにいれば判ると思うが」

馬車を降りた時に探知網を広げてみたが引っ掛かるはずもなく。

俺が相手をする大型モンスターはこれからこんな感じだろうな。
はあ……面倒だ。

「なに溜息ついているんだ。ほら、探すくらいなら手伝っぞ」

「探す、か。意外だな」

「？ 何がだ？」

「ソフィア程の実力だったら参戦してくると思ったんだが、予想が外れたってことだ」

彼女はG級とまではいかないが、上位ハンターの中でもトップクラスにいたのでこのような特殊モンスターと戦いたくて仕方ない心情かと。

「私もこの程度の力で驕るわけじゃない。まだまだ上のハンターがいれば、考えられないほどのモンスターもいることは判っている。それに実際見た」

そう言っただけで呆れるように笑っている。この表情から察するに相当強い奴だったんだろう。

見たというのは特殊モンスターと出合ったという事で、つまりはそ

の内俺に回ってくるという事だろう。

「話を聞かせてもらっていいか？」

「えっと……私が見たのは砂漠だ。ベリオロス亜種の討伐を終えた頃にあるディアブロスに出くわした」

ほー、ディアブロスね。俺が（ゲームで）嫌いなモンスターTOP 3に入る奴だ。

あの尻尾攻撃に泣かされたのはいい思い出だな。

「で、そのディアブロスは蒼い体躯をしていた」

「蒼？」

疑問の声を上げたのはメティス。なまじ知識がある分それだけ「？」が多いようだ。

「そう、蒼だ。通常固体は薄茶色で亜種は黒いということは知っているだろ？ 突然変異の類だと思ったが、突然火急球を飛ばした時は驚いた。危険だと判断してそこで逃げたから詳しいことは判らないが」

蒼い体躯に火球……もしかして……

「なあ、ソイツはよく飛ばなかったか？」

「そういえば通常固体に比べればよく飛んでいたな」

はい、どう考えても蒼レウスとのキメラ種です。本当にありがとうございました。

さつさとキメラ種のメカニズムを解明しないと面倒ごとが山積みになるぞ。頑張れギルド。

「うがー」

「ど、どうしたんですか？」

これから起こるであろう事態を考えると腹痛で胃が痛い。

キメラ種って強いからなあ。前回なんてメティスがいなければ死んでたかもしれないし。

そんなことは置いといてグラビ探しに戻ろう。新しく入った情報にある捕食エリアまで移動するが、

「まあ、いるわけないよな」

「だろうな」

「ですね」

「そりゃそうですニヤ」

簡単に見つかるとは思ってないが期待するよ、人間だもの。

「ほかを当たるか」

いくらクーラードリンクを飲んでいるとはいえ好き好んで溶岩の近くには行きたくないの火山の麓から探していく。

気配は感じられないので手がかりは0の状況だけれどグダグダ言っても見つかるはずがないから我慢せねば。

「うーん、麓にはいないみたいですな」

効率を考えて3グループ（俺、ソフィア、メティスはアニス）に別れて探し回る。あらかじめ決めた時間になったので集合したわけ

だが、どこにもいないようだ。

「となると……やっぱり中だよな」

「これでもいなかったら笑えますニヤ」

そんな訳ないと思いたい。

火山内部は意外とシンプルなので迷うことはない（メティスは例外）。こちらがシラミ潰しに探していけば例えあちらさんが移動中でもどこかで鉢合うことができるだろう。

少しでも痕跡を見つけるために地道に探し続ける。

「おや？ あれは……」

グラビモスではないが別のモンスターが見つかった。

「アグナコトルだな。威圧感からして上位クラスだろう」

アグナコトル、【炎戈竜】と呼ばれ地中を自由自在に動き回り溶岩の中でも元氣一杯に泳ぐことのできる竜。体に付着している溶岩が冷えて固まると非常に堅くなり、生半可な攻撃は弾いてしまう。火

属性攻撃や爆弾で肉質を柔らかくできる。

熱線を発射することでも有名。

「もしかしたら使えるかもな」

この辺りはグラビさん宅（縄張り）となっているので、アグナをこのまま泳がせておけば不法侵入という名目で攻撃してくるだろう。スニーキングミッションの開始だ。

（30分後）

「来ませんね」

囿であるアグナを見失なわないようにこっそりと着いていっても一向に出て来る気配がない。アグナ如きを相手する暇なんてないのだから？

「旦那さん、あれじゃニヤいですか？」

アニスが指差す先には岩しかない。

ん？ あれは岩じゃないぞ。よく目を凝らしてみる。

微妙に上下する岩。一部が光っており、恐らく目であると判断できる。翼と思われる部位は器用にたたんでいた。

「こ、こんなに近くにいるのに気付かないとか……流石は剛種、その名に偽りはないようだ」

目標であるグラビモスは完璧に背景に溶け込んでいた。擬態する必要があるのは幼少期だけで、成人（成竜？）したら隠れなくてもいいはずだがまあそこは剛種だからということだ。

とにかく見つかったのだから攻撃態勢に移る。あわよくばアグナを倒してくれたら嬉しいが、もうしばらく待つ必要があるな。

3人に下がるよう指示を出し、じっと待つ。

その時はすぐに来た

アグナがグラビにかなり近づいたところでやっと気付いたらしくタツクルを仕掛ける。が、鎧の甲殻にダメージは全く通らず、逆に回転攻撃を受け吹き飛んでしまう。

アグナもアグナで意地があるのだろう、嘴を打ち合わせて熱線を発射する――

ドゴオオオオオオオオオ！！！！

――前にグラビの熱線（別名グラビーム）によって息絶えた。火に強いはずのアグナが一発で落ちるとは意外や意外。

「い、一撃で……」

「嘘……」

メティスもソフィアも目の前の光景が信じられないようだ。いくら強いとはいえ上位クラスのモンスターを一撃だもんな。そら驚くわ。

俺もまともに喰らえば怪我どころの話じゃすまないな。気をつけよう。

あっさりとアグナを仕留めたグラビはこちらに標準をあわせる。いつでもいいーそう言っている気がした。

「それじゃあちよつと行ってくる」

3人に軽く声を掛けてグラビの前に躍り出る。

今まで見たことのあるモンスターがちびっ子に見えるほどの巨体、数々の修羅場をくぐり抜けてきたことを示す傷ついた甲殻、相手に恐怖を与える鋭い眼光……

「手ごわいな。このまま放っておけば確実に人間に対して被害を与える。お前に個人的な恨みはないが狩らせてもらうぞ。もしかすると戦いたくて騒いだのかもしれないが」

今まで騒ぎを起こしていないのに何の前触れもなく暴れだした辺り、暇にでもなったか？

まあいい。

「その命貰い受ける！ー！」

「グオオオオオオオ!!」

グラビモス、この竜の厄介なところと言えば攻撃範囲の広さと堅さが挙げられる。

そして今対峙している鎧竜は別格だろう。

今まで数多の敵を切り裂いてきた『空閃』がいとも簡単に弾かれてしまうほど。肉質が柔らかいはずの腹部や隙間がある関節部、堅いと機能しない翼膜にすら通らないのだから嫌気を通り越して呆れるしかない。

遠距離攻撃はやはり威力に欠けるので近距離攻撃に切り替える。――
気に距離を詰めれば――

「ちっ!」

タイミングを合わせたガス攻撃が襲い掛かってくる。見た目に反して衝撃が強いので吹き飛ばされた。

袖が燃えて消えている。気を練りこんでいるのに燃えるとは……

「火傷のおまけ付きか」

ガス攻撃は全範囲攻撃なので避けるためには距離を取らなければならない。警戒しながら踏み込む。

「ハッ!!」

『空閃』よりも力を込めた一撃でも堅固な鎧には通用しないらしく、金属同士がぶつかり合った音を立てて弾かれる。

まだ届かないか……

弾かれた時に出来た一瞬の隙をグラビは見逃さず、あのアグナを吹き飛ばした回転攻撃。紙一重で回避し、そのまま反撃に移る。

更に力を込めた斬撃は奴の鎧を上回ったらしく斬ることが出来た。

とは言っても、傷とは言えないような些細なものだが。

「グオオオオオオオオ!!!!」

回転攻撃や突進攻撃を嫌な角度から次々と繰り出してくる。

一旦距離を置くか。このまま足元にいても埒が明かない。

そうだな、距離を取るなんてケチ臭いことを言わず広い場所に移ろう。ここからだ……最初の探索エリアだった麓がいいな。

踵を返して出口に向かう。ここで着いてきてくれなければ面倒なことになるが、しっかり追いかけて来てくれたようだ。

広場で向かい合う。あの3人もいるようだし、さっさと始めようか。

「グルルルルルル……」

「さて、予想通り骨が折れそうだな」

最硬の守と最強の攻。今回の矛盾はどちらに軍配が上がるのかね？

第30話「突撃！ 火山のグラビさんへ対決編」 （後書き）

白夜「30話だな」

作「30話ですね」

白「思い返せば色々なことがあったな」

作「あ、何か総集編みたいなこと言ってますがさせませんよ」

白「冗談だ。30話記念で何かおまけを書こうと思っているのだが、特に要望が無いようなら外伝でも書こうかな、と」

作「まあ、次で入れても半端になるのでグラビさん編が終わり次第、
って感じですが」

白「話は変わるが、この調子だとどのくらい続きそうだ？」

作「100つてのが現実味を帯びてきました」

白「マジか……」

第31話「突撃！ 火山のグラビさんへ決着編」 （前書き）

テストは犠牲となったのだ……

一週間ぶりの更新です。長々とお休みして申し訳ありません。

第31話「突撃！ 火山のグラビさんへ決着編」

グラビを誘き寄せてから即ち30分以上は経過した。

斬っては逃げ、近づいては斬り、また逃げ、という繰り返し作業になっっているが、この作業の恐ろしい所は一手でも間違えれば優劣をひっくり返される点だろう。

前よりもダメージは通っていると思うが、奴は高い体力を誇るので削れている気がしない。

「この堅さ、どうにかならないか？」

斬れているとは言え堅いことには変わらないので斬り方を間違えれば鴉が折れてもおかしくはない。

「グオオオオオオオ！！！！」

一方的に攻撃され続けたのが癢に触ったのか、俺が踏みこむタイミング逃げ合わせたカウンターから少しでも当てようと大きな動きに

変化した。

カスっても相当のダメージを受けそうだ。

「甘いな。驚異的ではあるが大雑把な攻撃で当たると思っているのか？」

常に動いているのでこちらの攻撃はなかなか当たらないが、それは向こうとて同じこと。

一度翼を攻撃してそのまま背中へ跳ぶ。瞬時に5、6回斬りつけた後一旦離脱。

グラビもやられっ放しと言う訳ではない。着地予定地点に俺が着地するよりも早くタックルをかます。

これ異常なほどのタイミングなので避ける事は出来ず、またカウンターで撃退することも不可能。あまりの重量故に怯ませたとしても慣性に則って突っ込んでくる。

ここは素直に喰らうとしよう。

「ぐっ！ 重いな！」

来るべき襲撃に備え、攻撃に回していた気を防御に回す。なるべく接触面を減らそうと体を丸める。グラビの突進が綺麗に決まった直後、俺の体は2、3百メートル先の岩肌に弾丸のような速さで叩きつけられた。

「ふう……ここまで飛ばすとは。なんというパワーファイターだよ」

表情には出していないが、実は一時的に神経が機能しない程度のダメージを貰った。気を巡らせたお陰で目立った外傷はないが、衝撃までは防げなかったらしく少しばかり動きを制限されることとなる。骨のヒビはもはやお約束。

「これじゃ勝てないな。少し休むか」

幸い、グラビはこっちに向かってくる様子はないのでさっさと回復させよう。

と思った刹那、一点の煌きが見えた。

悪寒が走ると同時に動かない体を無理矢理動かして、その場から退却。

ドゴオオオオオオオン!!!!!!

轟音と共に背後で走った光、ワントンポ遅れて拡散する爆風。

どうやら俺を飛ばした後にグラビーム（熱線）を放ったらしい。痕跡は凄まじく、大地は抉れ岩肌を消していた上遠くまで傷は続いていた。

よく見ればその痕跡が走っている所は、あまりの高温で一度溶けて冷えて固まったようでツヤツヤしている。

「危なかった……アグナを仕留めたものは本気ではなかったのか」

まだこれ以上の威力を秘めているのか。全く、鬱だ。

ここに居ても狙い打ちされるだけなので、俺が攻撃できる間合いまで戻ることしよう。

途中で一発ほどグラビームが照射されたが、先ほど痺れが取れたのでこれっぽっちも問題はない。

数秒の全力ダッシュで吹き飛ばされた場所に着き、そのままこのスビードを乗せて攻撃に転ずる。

一度持ち込んできた投げナイフで注意を上に向けて、その後ガラ空

きの腹部を一閃。

『グオツ！？』

手応えあり。戦い始めてからやっと有効打を与えた。

「なるほど……このくらいの力が必要なのか」

今まで手を抜いていたわけではないが、一発貰えば即アウトのオワタ式なのでいささか慎重になりすぎていたようだ。

「よし、力加減は修正した。これまでのようには行かないぞ？」

最初こそこの程度かと思っていたが、どうやら力加減を試していたらしい。

その上全ての攻撃がオレの弱点を正確に突いてくる。

突進をともに食らったのにも関わらずその後の熱線かわし、あまつさえオレの鎧を切り裂くとは……

今まで全ての攻撃を弾いてきたというのに。

この人間はまだまだ強くなるな。もしかすれば『奴』とも戦えるかもしれない。

そのためには、まずオレを倒してみせよ。

くソフィア SIDEく

火山内部から移動したので私達も慌てて追いかけていく。エリアは麓、狭い場所では不利だと踏んだのだろう。

「まさかここまでとは……」

ビャクヤが強いことは知っている。が、それは全て聞いた話であって実際に見たわけではない。

目の当たりにすれば、アイツが常識なんて微塵に碎いたような存在であるということが嫌でもわかる程の実力を持っている。

鳴り止むことのない金属音（カタナと甲殻がぶつかり合った音だろうか？）が常に攻撃し続けていることを教えてくれる。

かろうじてその姿を黙認できるが、少しでも気を逸らせば一瞬にして見失ってしまった。

「いつもあんな感じなのか？」

「うん……」

「見えているか？」

「わたしは少しだけけど」

「ボクは全くですニヤ」

アニスは仕方ないにしてもメティスが見えるのは意外だな。

普段からこのような呆れるほどの速さを見ているからだろうか、お陰で動体視力は上位ハンターの中でもトップクラス並みのようだ。

将来が楽しみだな。

観察に戻ろう。

気付けば目の前を何かが弾丸のような速さで飛んでいき、数百メートル先の崖にぶつかった。

しばらくして、飛んでいったものがビヤクヤだと判明する。突進をまともに受けたようだが大丈夫なのだろうか？

ドゴオオオオオオン！！！！

「！？」

「えっ！？ なに！？」

「ニヤ！？」

凄まじい爆風と轟音、閃光が辺り一面を包み込む。

アグナを仕留めたときとは大違いの熱線。ビヤクヤが吹っ飛んだ後、間髪入れずに撃ったので直撃したのかもしれない。

不安だ。アイツ自信が重症を負ってもおかしくないと聞いていたらしいので、無事ではすまないだろう。

「今の……平気なのかな……？」

不安の声を上げるメティス。グラビームのあまりの迫力に恐れたのだろう。

『グオッ！？』

なんだ？

急に呻きを上げたグラビ。特に何も起こらなかったと思うのだが。

注意深く周囲を見渡す。あのグラビが呻くぐらいだ、何か仕掛けてあるのだろう。

「なるほど……このくらいの力が必要なのか」

仕掛けはなかったが、代わりに先ほど飛ばされたはずのビヤクヤ本人がいた。

気付かないうちに鎧のような甲殻を切り裂いたのか……一体どういうことだ？

堅いことで大半の剣士に嫌われており、攻撃したら逆に武器の方が折れたという話も珍しくない。

それを意図も簡単に、とは言わないが確かに切ったのだ。

底なしだな。

カタナをしまい、再び居合いの体勢に戻る。

溢れ出す殺気は私達を恐怖させるには充分で、アニスに至っては気

絶寸前のようだ。

かく言う私も耐えるので精一杯。まともに観戦することが困難なレベルだ。

しかし、ここで意識を失っては上位ハンターの名折れ。この戦い、最後まで見届けよう。

く白夜 SIDEく

斬られた事で危機感を持ったのか、一層攻撃が激しくなり避けることさえ困難となってくる。

紙一重の回避から反撃するが溜めが少ないので思うように力が入らず、溜めようと動きを止めればすぐさまグラビムを撃ってくる。

それに加え一番のハンデとなっているのが……

「（今頃になってか）」

内心で舌打ちをする。突進のダメージが戻ってきたのだ。

再び痺れだした左手。抜刀の要となるので思うような有効打を出すことが出来ず、自然と超がつくほどの苦戦を強いられてしまう。

「これはヤバイな。倒せるか？ いや、倒すしかないだろう。思考を止めるな、何か手があるはずだ。一定以上の力を込めれば斬れたのだが、今は無理。となれば方向転換すべきか……」

刀によるモーションパターンを思い浮かべる。

斬る、薙ぐ、払う、流す……突く。

「それしかないよな」

突きには腕力、握力、背筋が関わっており、左手の支えを必要としない。

通常のモーションよりも危険が伴い、相手を仕留められなかった場合は一度刀を戻さないといけなくなるので、無防備となってしまう。そのぶん破壊力は充分過ぎるほどで、試してはいないが既にある傷を狙えばグラビの鎧を貫けるだろう。

一撃必殺でなければいけないのでまずは頭部に傷をつけるか……

『グオオオオオオオオ！！！！』

足元から頭にかけて跳躍するのとはほぼ同時にガスが襲い掛かってくる。

これは……催眠ガスか！？

猛烈な眠気を振り払い狙いを定める。鴉が鎧に届いた後、またもや吹き飛ばされる。

眠気のお陰で動きが鈍り、防御を固める間もなくグラビの強靱な翼が直撃。

「左腕が死んだか……」

横目で見れば骨は砕け肉は裂けているのがわかる。動かしづらかつ

ただけがこれっぽっちも動かなくなってしまった。ハンター生命が絶たれることはなさそうだ。

「代わりに勝ち目が見えてきたな」

確かに届いた鴉は、グラビを死へと誘う小さな傷を与えていた。狙う部分はシビアすぎる判定だが、やりがいがあるな。

不敵に微笑み跳ぶ。何一つの策略もなく。

すかさず放つ熱線は足をかすめ、彼方にある崖に当たる。

鴉を水平に構えて右腕を引き、神の如き速さで極小の的を突く。

生物の最重要機関である脳。それを守る鎧は貫かれ、断末魔をあげることなく鎧竜は沈んだ。

「勝った……」

緊張の糸が切れ、思わず方膝をつく。思っていた以上に精神をすり減らしていたようだ。

意識を繋ぎ止めるのもつらい。

慌てたように駆け寄ってくるメティスたちに「後は頼んだ」とだけ言い、意識を落とす。

直前に『楽しかったぞ』と聞こえたのは幻聴ではないが、こっちとしてはいったもんじゃない。

第31話「突撃！ 火山のグラビさんへ決着編」 （後書き）

作「お久しぶりです、作者です」

メティス「お久しぶりです」

作「テストが終わってホッとしたので早速の更新です」

メ「体調管理の出来ない作者は風邪を引いていながらの執筆なので粗すぎることは仕様です。皆さんも気をつけてください」

作「それにしても1週間放置しているのに総合評価にあまり影響がないのは吃驚しましたね。ありがたいことです」

メ「これからも急に休むかもしれませんがご容赦ください。では次回も」

神「ゆつくりしていつてね！」

メ・作「!？」

外伝？「メテイス奮闘記・前編」（前書き）

30話記念の外伝です。これから40・50・60……という度に挟んでいきたいと思っています

外伝？「メテイス奮闘記・前編」

メテイス SIDE

「うーん、どうするかな」

「なんですか？ いきなり」

毎日恒例の訓練を終えて一休みしている頃、急に頭を抱えだすビヤクヤさん。

「ギルド直々のクエストってかなり危険なものが多いだろ？」

「普通じゃ考えられませんよね。たぶん、これからは危険度が増していくと思いますよ」

確証はないけど決定事項だと思う。最終的には古龍種との戦いを繰り広げるんじゃないかな？ この人だったら有り得てしまうから怖い。

「そこなんだよ。実はさ……」

何でもわたしが同行するのは諸手を挙げて賛成するけど、いかんせ

ん防具が頼りないらしい。確かに今現在はランポスシリーズなので紙切れ同然だと思う。

「で、ランクアップを考えているんだけど必然的に上位防具になる。つまり今のメティスでは素材を集められないから俺が集めることになる。でもメティスは自分の力で防具とか作りたいだろ？」

「そうですね。流石に頼りっぱなしという訳にはいきませんし……」

いつでもビヤクヤさんが傍にいるとは限らないので極力自分の力でこなしていきたいと思っている。

「おれとしてもメティスには様々な経験をして欲しいからできるだけ手出しはしたくないのだが……」

また唸りだす。事が事だけにどうしようか迷っているみたい。

わたしに上位モンスターを狩れる力があればこんなことにはならなかっただろうけど、ない物ねだりをしてもしようがない。

うーん、どうしよう。

しばらく2人して唸っていると、ビヤクヤさんが妙案を思いついたらしく「あ」とどこか間の抜けた声を出す。

「深く考えないで俺のクエストだけ防具を変えて、メティスのクエストはいつも通りという方針にすれば万事解決だな。となると俺が適当に狩ってメティスにもクエストへ行かせればいいか」

わたしも？ あ、もしかしてタダでやるのは考え物だから試験的なもののかな？ だとするとそこその難易度になる。お手柔らかにお願いしたい。

ともあれわたし主体のクエストは結構久しぶりだから腕が鳴る。このところ、意外と立て込んでいたから正式なものだとあの時のドスランポス以来。

ちよくちよく採取クエで乱入してきたドスファンゴとかはかっているけど。

そしてビヤクヤさんが提示したのが上位リオレイアの討伐。

……え？ 上位？

「あのー、わたしHR3だから上位クエストの受注できないし、ドスランポスからいきなりレイアというのも厳しい気が……」

「そんなことか。ハンターズギルドに向かって少しばかり魔法の言葉を唱えれば受けられる。それにソロ限定ってことじゃない」

魔法の言葉？

深く考えないことにしよう。

どうやらパーティーで行ってもいいということみたい。その場合はわたしと同じくらいの実力の人限定と言ってきた。

同期くらいが丁度いいんだけど……

「どうした？ アテがないのか？」

「実は……同期で仲のいい人は結構前にドンドルマに行ってしまったので……。入れ替わりでビヤクヤさんが来たんですよ」

「そうか。まあ募集すればたぶん集まってくれるだろう。たぶん」

たぶん、って2回も言わないでくださいよ。

「それと期日だが、早いほうがいい……けど焦らなくてもいいから死ぬ確率が上がるだけだから」

不気味に笑っている。はい、どうみても悪役です本当にありがとうございます。

「脅かさないでくださいよ」

「事実だからな。さて、訓練を再開するぞ」

訓練が再開するようなので出されたお茶を飲み干して立ち上がる。

「つて、え！？」

「『え！？』つてまさかとは思いが終わりだと思っていたの？」

そうですね！　ビヤクヤさんが手を抜くなんてことないですよね
！！

「レイアのこともあるし、少しペースを上げるか」

「ひっ！？」

翌日。

ビヤクヤさんが早速素材集めにクエストに行っただのに対しわたしは
例えば、

「やっぱり集まらないよね……」

当たり前といえば当たり前だけど、わたしを同じくらいのHRの
限定で「上位レイアに行こう！」なんて物好きはいなかった。

ビヤクヤさん基準では上位なりたて位の人がいい、と言っていたけ
どなりたての人が色んな段階をすっ飛ばしてレイアというのは尻込
みもする。

「でも1人だと無理があるし……うわゝどうしよう」

もし誰も集まらなかったら、と思うと頭が痛い。

クエストボードの前で頭を抱える。何人かのハンターさんが心配そ
うにこちらを見ているので空いている席に着く。

「どうかしたのかニヤ？」

いつの間にか向かいに座っていたジオルト（絶賛職務放棄中）が呑気にお茶を飲みながら話しかけてくる。

「簡単に言つとわたし位の実力の人と一緒にレイアを狩りに行かなくちゃならなくなったの」

「へえ。だから頭を抱えていたんだニヤ。あ。はいお茶どうぞだニヤ」

「ありがとう」

五臓六腑に染み渡るほのかな甘さは、日頃の疲れ（主にビヤクヤさんとの訓練）を薄めてくれた。

しばらくまったりしていると何かを思い出したように、

「さっきお客さんを乗せたガーグア車が到着したんだけど、その仲にメテイスさんがよく見知った人がいたニヤ」

わたしが知っている人？ 詳しく話を聞こうとすると――

「メティスいるー!？」

騒がしい集会場にもハッキリと聞こえるほどの大きな声と共に懐かしい2人が入ってきた。

「そんな大きな声を出さなくても……」

「まったく、男のくせに小さいことを気にするんだから」

「ディーナちゃんももう少し女の子っぽくしたほうが……」

「なんか言った？」

「な、なんでもない……あ、メティスちゃん久しぶり」

こつちを確認したらすぐに近寄ってきた。

「ディーナにライナス！　うわゝ久しぶり！　どうしてここに？」

2人ともドンドルマでハンター生活をしているはずだから、ここに帰ってくるのにはそれなりの理由があるはずだけど。

「理由なんてないよ」

「へっ？」

「いやね、ドンドルマに行っただけいいものの雰囲気になんてさー、ちょっと戻ってきたんだよ」

そ、それはまた随分とフリーダムな思考だね。ディーナは昔からこうだったけど、それは今でも変わっていないみたい。

「大変だったんだよ。ディーナちゃんがいきなり『ユクモ村に帰る！』なんて言い出して勝手に僕の荷物纏めちゃうし」

哀愁漂う顔で溜息をついている姿は、昔よりも一層洗練されている。同じ年のはずなのに枯れすぎているんじゃないかな？

「そうそう、メティスに聞きたい事があったんだ」

「わたしに？」

「うん。ドンドルマにいた時に聞いた話なんだけど、何やら開いた口が塞がらないほどの強さを持ったルーキーがここに住んでいるらしくて。シルヴィさんはメティスに聞けて。名前は確か……」

とても強い＋ルーキー（？）＋わたしに関わっている人。予想はついている。まあ特徴を聞かなくても話の流れで判るんだけど……

「ビヤクヤ」カムイだっけ？ 確かそんな感じ。知ってる？」

その人しかいないだろう。ビヤクヤさんの知名度はここ最近鰻登りで、一目見ようと遠くの地方から来ているハンターさんもいるほどだ。

当の本人は名前だけが一人歩きされると困るって言っていた。

「うん、わたしの師匠」

師匠、という単語を聞いた瞬間これ以上ないほどに目を見開いている。少ししてからハツとしたように、

「上位より強いリオレウスを瞬殺しちゃう人を師匠に！？」

とか言ってくる。ミステリアスなものを見たような表情をしている。

何もそこまで驚かなくてもいいと思う。

「あーやっぱりね」

対してライナスは満足げに頷いていた。

「あんた判ってたの!？」

「そうじゃないけど、メティスちゃんの武器が変っていたからもしかしたらなあなんて」

「何で言わないのよ」

「確証がなかったから……って痛い!! アイアンクローはやめて!! 頭割れちゃう!!」

ライナスは同年代の男の子に比べて小柄の方だけど、それを涼しい顔をしながらアイアンクローで宙に浮かせるとは。

非常に恐ろしい。

「いやー凄い力だな」

「そうですよね。……ってビャクヤさん!？」

背後には早朝にクエストへ行っただけのビャクヤさんが立っていた。

「おう、ただいま」

「あ、おかえりなさい……だからそうじゃなくて!! クエストは

どうしたんですか!？」

「あんなもん3分とかからない。ただの上位だと気が抜けるな」

何この人怖い。

仮にも上位クエストなのに移動含めて3時間で帰ってきた。

行き1時間25分、帰り1時間25分、探索及び休憩9分、戦闘1分らしい。

1分ってどういうことなの……

狩られてしまったモンスターに心の中で合掌して話を進める。

丁度いいタイミングで帰ってきたので紹介しておこう。

「デイナー、ライナス、こちらが師匠のビャクヤさん。鬼神クラスの強さの持ち主。ビャクヤさん、この2人がわたしの同期のデイナー、イレネとライナルアポロシア」

「よろしく」

「じちらじそ」

「どうもです」

「いきなりだけど2人は上位なりたてでいいんだよね？」

何も話してないはずなのに言い当ててくる。どういう理論で見抜いているのか不思議だけど、理解できたところでわたしには再現できるものではないだろう。

「えっと、そうですがメティスから聞いたんですか？」

ライナスが驚きながらも聞いてくる。

「いや、覇気がそれくらいだったからだ。丁度いいかもな」

いきなり話を振ってくる。

えと、レイアの話だね？

「少女説明中」

「……どうかな？」

「……最ッ高に面白いじゃない！　なんで言わないのー！」

目を輝かせながらピョンピョン跳ねるディーナ。

どうしよう、予想外の返答だ。助けを求めようとライナスに目を向ければ……

「うーん、ディーナちゃんがそう言うなら」

消極的ながらも肯定されてしまった。3対1・民主主義によってこの案は可決されました。

「決まりだな。詳しいことはメティスから聞いてくれ。俺は報告云々とかあるからこの辺で」

嵐を巻き起こすだけ起こしておいて去っていく。

まあ、クエストにいけるし万事オツケーのかな？

「さて、じゃあ行こうかー!」

「えー!? もう!?」

「ディーナちゃん、いくらなんでも早すぎるよ……」

30分だけ待ってあげると言ってきたので押しに弱いわたしたちは

そそくさと準備をすることになった。

外伝？「メティス奮闘記・前編」（後書き）

作「すみませんでした」

アニス「一体何がですかニヤ？」

作「外伝なのに2部構成になってしましまして……さすがにバトルを挟むとなると前振りが必要で、その前振りが1話分に」

ア「あー」

作「てなわけで次回も続きます」

ア「本編が気になる方には申し訳ニヤいですが勘弁してください」

作「まあ大して気にされてn」

神「おいやめろ」

ア「（また出てきたニヤ）」

外伝？「メテイス奮闘記・後編」（前書き）

ねんがんの 上位防具を 手に入れたぞ！

外伝？「メティス奮闘記・後編」

「よし、いっちょやるか」

アノトプス車に揺られること3時間。目標であるレイアはユクモ村から割と近いところに住み着いているのらしく、のんびりしていると村に大きな被害が出るのでさっさと片付けてと言われた。

一度ベースキャンプで突撃準備を整える。

ディーナの武器はハンマー、ライナスはヘビーボウガン。訓練生時代から変わっていないみたい。

「メティスちゃんは師匠を取ってから何か変わった感じがある？」

「少なくとも昔みたいに消極的ではなくなったと思う」

「それは頼もしいね」

巨大なハンマーをぶんぶん振り回しながら話してくる。

ベースキャンプ内は狭くないけど室内で素振りをするのはやめてほしい。と、言うよりハンターなりたての頃に同じ事やって、ハンマーがすっぽ抜けたこと忘れたんだろうか？ 室内大惨事になったことは言うまでもない。

一通りの準備を終えて、今後の行動予定を話し合う。

「巢は滝の裏の洞窟にあるみたいだから、そこを見張ってればいいね。レイアが来たらライナスが奇襲を仕掛けて気を引く。あたしはスタン（目まい）を狙って頭を中心に叩くからメティスは翼や足をよろしく」

「了解」

「わかった」

あらかじめ閃光玉をライナスに渡しておいて、隙があったら投げ、と頼んでおく。遠距離にいるガンナーだからこそ幅広い視野で戦場を見渡せるのでここの一番のタイミングで投げてくれるだろう。

意外とシビアなタイミングだけど。

巢を発見してから10分くらい見張っていた頃だろうか。早くも陸の女王、リオレイアが姿を現した。

わたし達はレイアを中心に三角形を成形するような場所に隠れていて、お互いの声が全く聞こえない状況だからヘビィボウガンの弾丸を合図とする。

幸い、レイアはこっちに気付いていないようだからじっくり狙いを定められる。しばらくの間息を潜めてやり過ごす。

『グオツ！？』

レイアの驚いた声と共に雷撃弾が炸裂する。一瞬だけ走った閃光と電撃特有の音が戦いの始まりを教えてくれる。

作戦通りに翼を狙う。

ディーナの方を見れば既に縦3（ハンマーによる振り下ろし↓振り下ろし↓振り上げの基本的なコンボ）を決めていた。

負けずと翼を斬る。ディーナの攻撃とライナスの援護があるから攻めやすい。

『グルルルル……』

低く唸りだす。このモーションは……

「さがって！ 咆哮がくる！！」

『ガアアアアアア！！！！』

わたしが叫んだ後、少しの間をおいて怒りの咆哮。洞窟という地形なので反響し増幅されて襲い掛かる。

「くっ！」

咆哮の発生点の近くにいたディーナは逃げ切る事が出来ず、怯んできました。その隙をレイアが見逃すはずもなく……

「（間に合って！）」

火弾をチャージするわずかの時間にかけて自分でも信じられないくらい速さで駆けつける。

ドゴオオオオオオン！！！！

発射された火球はすぐ後ろにある石柱に辺り爆発、わたしの背中に

熱気を与える。ライナスも雷撃弾を撃ち込んでくれたお陰もあり軌道がズレたのもあり、紙一重で回避することに成功。本気で突き飛ばしたので勢いあまって壁にぶつかった。

「危なかった」

「助かった……！」

一息つく間もなくレイアが突進してくる。背後が壁なので退路なし。どうやって切り抜けようかと考えていると、

「そおおおりゃあー！」

いつの間にか走っていたディーナがカウンターのホームラン攻撃。レイア自身が出したスピードと相まったその一撃の威力は見事にスタンを取った。

『グオオオオオ！？』

すかさず追撃。日ごろから鍛えている脚力で翼膜部分までジャンプして抜刀する。空中で数回きりつけた後、万一のことを考えて一旦離脱。攻撃↓離脱は鉄板らしい。

わたしが着地すると同時に火球を飛ばそうとするが、真横から飛ん

できた弾丸にまたまた起動を逸らされる。加えてディーナが転倒させるために足へ攻撃する。

「倒れた！」

転倒したレイアをここぞとばかりに叩く。今のところ調子がいい。このままいけば遠からず……と甘い期待を抱いたそのとき――

「きゃっ!?!」

凄まじい衝撃が体を襲う。ゴロゴロと転がり石柱にぶつかったところでようやく止まる。

サマーソルトを喰らったようだ。ディーナも避け切れなかったらしく向こうの方でうずくまっていた。

「早く体勢を立て直さないと……!」

クラクラする頭を抑え立とうとする。しかし、急激な脱力感に襲われその場に座り込んでしまう。よく見れば左腕に切り傷があった。サマーソルトの時に出来たのだろうか。

「つまり……毒!」

レイアの尻尾にの棘には毒が含まれていて、獲物を仕留めるときに使われる。大型のポポやアノトプスがやられる位だから（普通の）人間はひとたまりもない。慌ててポーチから解毒薬を引っ張り出そうとすると……

ドゴオオオオオン！！！！

目の前で爆発が起こる。爆風に煽られて飛ばされ、壁に叩きつけられる。

朦朧とした意識は怒り狂ったレイアを捉えた。滑空して突撃しようとしていて避けようと体を動かそうにも痛みで動かない。

「目をつぶって！！」

反射的に目をつぶる。直後、目をつぶっていても判るほどの光が走った。ライナスが閃光玉を投げてくれたみたい。目が眩んで落ちたレイアはわたしの10m前で倒れている。

「逃げるよ！ 立てる！？」

解毒薬を飲んでヨロヨロと立ち上がる。既にディーナを背負っているライナスがわたしの手を引いて洞窟から脱出する。

レイアに追いつかれないよう色々と複雑なルートを通ってベースキ

ヤンプまで戻る。

「ハア……ハア……大丈夫？」

「な、なんとか……ディーナは？」

「気絶しているよ。油断したね……」

怒り状態になってから戦闘力が跳ね上がり、サマーソルト一発で優勢をひっくり返されてしまった。やっぱり上位は一筋縄ではいかなさそう。

左腕からは少し出血しているので念のため解毒薬を傷口にかけたあと常設されている包帯でしっかりと巻く。その他に目立った傷はないのでわたしの手当ては終了。気絶しているディーナの容態を聞いてみる。

「尻尾が直撃せずにハンマーを挟んだお陰でだいぶダメージが軽減されたようだ。休ませておけばそのうち起きると思う」

不幸中の幸いと言うべきかな。サマーソルトとの正面衝突コースだったので下手をすれば命に関わる怪我を負ったのかもしれない。

ディーナが目を覚ますまでわたし達も休むことにする。

く白夜 SIDEく

様子見にこつそりついてきたが、少し危なっかしいな。最初の方こそ調子がよかった。予想通りと言っべきかサマーソルトで形勢逆転されたわけだが。

すぐに逃げた判断は正しい。これで慎重に動いてくれるだろうから勝てる……と思いたい。ふむ、怒り状態をどうやって凌ぐかが鍵となるな。

それにしても頭に血が上った。やはり天井にコウモリよろしく長時間ぶら下がるのはキツイ。

「勝つも負けるもメテイス達しだいだな。まあ、何だ、頑張つてくれ」

ここには俺とレイアしかいないので気付かれる可能性がある。そう
なると面倒だからさっさと逃げることにしよう。

あ、そうだ。ついでにハチミツ探しておくか。

＼メテイス SIDE＼

横になって1時間、ディーナが起き上がる。自分が置かれている状
況を掴めずに呆けているけど、ここがベースキャンプだと気付くと、

「やっぱり強いなあ」

小さく呟いた。

「体の方は大丈夫？」

お茶を入れて2人に渡す。わたしの分も入れてちびちびと飲んで喉の渴きを癒した。ディーナは一口で飲んで決意を表明する。

「絶対に勝つわよ！」

「もちろん」

「ここまで来たら引けないね」

今のわたし達よりもレイアの方が強いことが判ったけど、それだけで諦めるほど賢くはない。無謀だと思われるのは当然だけど未熟には未熟なりの意地がある。

このまま逃げて負けるくらいなら戦って負けた方がいい。そして、どうせ戦うなら勝ってみせる！

背水の陣の覚悟で再び雌火竜のいる洞窟まで戻る。

「怒り状態になったら攻撃するのはライナスだけ。わたしとディーナはある程度の距離を取って囷役でいこうと思う」

さっきは転倒中に怒った訳だけど、その倒れている状態から一気に

サマーソルトに移れるほど機敏になって不安定な姿勢にも関わらずかなりの威力を誇っている。下位とは比べ物にならないことは嫌でもわかった。

しばらくは遠距離から安全に攻撃できるライナスに任せておこう。

『グル？』

野生の勘で異変、つまりわたし達が来たことに薄っすらと気付いたみたい。

全力ダッシュで近くまで詰め寄る。目視確認される前に煙玉でかく乱して結構ボロボロな翼に止めを刺す。これで飛ぶことはおろか滑空することすら難しいだろう。

ディーナも脚を叩いていることもあって早速怒り状態になった。

作戦通りに一定距離を置いて注意を引く。タイミングよくライナスが狙撃してくれるけど、なかなかダメージが通らない。

ただど少しなら体力を削れているので地道な作業になる。注意を引くよう危険を覚悟で攻撃する時もあった。

「2時間後」

「ま、まだ倒れないの……!?!」

「ここまでタフだと……尊敬するね!?!」

『グオオオオオオオオ!?!?!』

何回も危険な場面があったものの、特に大きな傷を負うことなくここまで来れたけど、倒せる気配がない。

上手く雪燕で首を切り捨てれば終わらせることが出来るだろうけど首には他の部位とは違って強固な鱗に覆われていて斬ることが出来ない。

「メテイス！ 首斬れる！？」

「無理！ 鱗が堅すぎる！！」

「じゃあ鱗が壊れたら！？」

「いける……と思う！！」

「わかった！ ライナス！ 雷撃弾の残りは！？」

「あと一発！！」

「充分！ お願い！！」

雷撃弾がレイアの首に向かっていく。鱗を破壊するつもりだろうけど、単発では火力が足りない。

と、思っていたら――

「どおおおおりゃああああ！！！！！！」

着弾する直前に雷撃弾をハンマーで勢いよく叩く。イメージ的には弾を杭に見たてて打ち込む感じ。

なるほど、内部に無理矢理押し込んで爆発させると見た。

バヂッ！！

『グオオオオ！？』

首付近で爆発が起きたため流石のレイアもたじろぐ。煙が消えたら鱗が剥がれ落ちて弱点があらわになっていた。

「任せたよ！」

爆発に巻き込まれて転がっていくディーナ。

よし、任せられた！

「えいやああああ！！」

滑り込むようにレイアの間合いに入って反撃を受ける前に雪燕を振り上げる。そこから今持っている力の全てを注いで振り下ろす！

『グオ！？』

鱗が剥がれ落ちた箇所を機転に綺麗に斬れる。しばらく立っていたレイアだが、力尽きて陸の女王は天に昇った。

「勝った……？」

動かなくなったレイアを見て呟く。とことんしぶとかったただけに見える光景が素直に信じられない。

「……………やったあああああああー!!」

耳が破裂しそうなほどの大きな声で叫ぶディーナを見て、勝ったのだと実感できる。

「つ、疲れた……」

「はい3人ともお疲れさん」

音もなく上から降ってきたのはビヤクヤさん。驚きすぎて皆声が出ない。

「自分で言っておいてなんだけど、よく倒せたな。いやゝ感心感心」

「大変だったんですよ……それよりついてきたなら言ってくれても」

「それじゃあメティスにクエスト任せた意味ないだろ。とにかく、皆動けないようだからアプトノス車呼んでおいたからそろそろ……来たぞ」

指差す方向にお迎えがスタンバイしていた。仕事の早いことで。

乗り込んで（と言うかビヤクヤさんに投げ込まれて）今回の評価を聞く。

「実力についてはどうこう言うつもりはない。ハナから力負けしているのは火を見るより明らかだからな。評価したいのは連携だ。いいコンビネーションだったぞ。75点」

おお、高評価。もっと低いと思っていた。

「まあ、こんな無茶は滅多にないだろうけど……飯にあったらまた頼むぞ、お2人さん」

2人―ディーナとライナスは目を丸くして聞き返す。

「「え？」」

「よければメティスをパーティーに入れて欲しいんだが……マズかったか？」

「既にビヤクヤさんと組んでいるんじゃない？」

「それもそうだが、実力が同じくらいの方が切磋琢磨できるだろ？」

「ああ、なるほど」

今後、わたしメインのクエストはディーナとライナスと組んで行って欲しいそうだ。わたしとしてもその方が心強い。

「もちろん。これからよろしくね」

「うん！ お互い頑張ろうね！」

こうして身の丈以上のレイア討伐は幕を閉じた。新たな仲間を増やして。

「装備のことなんだけど。作るのに1週間かかるそうだ。今から帰れば丁度いいと思う」

「あ、当初の目的はそれでしたね」

「忘れてたのか？」

「……実は」

貰えたのはレウスS装備でした。急だったからこれくらいしか、と言っていたけど充分過ぎますって。

着るのに怖かったのは秘密です。

外伝？「メティス奮闘記・後編」（後書き）

作「遅れてスイマセン」

ソフィア「よし、焼き土下座だ」

作「え、ちょ、アンタ何言って」

ソ「謝罪と言ったらコレだろう？」

作「それ偏った知識だから！」

ソ「そうなのか」

作「（この人怖え）そうなんです。番外編でだいぶ時間食ったので本編忘れている方も多いんじゃないかなあ」

ソ「そういえば番外編の目的は？」

作「とりあえずメティスの防御力が大幅に上がったことを目的としたんですが……」

ソ「脱線もいいとこだな」

作「ホント申し訳ない」

第32話「ランクアップ！」

「ここは……？」

目を開けたら見知らぬ天井。ありきたりなパターンだが、これがまた不安を煽るには効果覲面で死んだんじゃないかなーなんて思う。

なにせ1回死んでるからな。ハハハ、我ながら笑えない冗談だ。

体を無理矢理起こして見回すことで初めて病院らしき施設に搬送されたことがわかる。

左腕には包帯とギプスらしきものでガッチリと固定されており、時折鈍い痛みが走った。

「治療されたのはいいけど……」
「……どうぞ」

窓の外から見えるのはいつも見ているユクモ村の風景で間違いはないのだがいまいちピンとこない場所だ。

「メテイスが起きたら聞いてみるか」

いつからいたのかは不明だが、俺が寝てたベッドの横で椅子に座りながら器用に寝ている

見て面白かったので頬をつねってみる。おお、伸びる伸びる。

調子に乗っていると流石に目を覚ましたようだ。

「ん……ふああ……」

「おはよう。ん？ おはようでいいのか？」

時間感覚が狂っている。昼寝とかするとよくなるな。

「ビヤクヤさん！！ よかったあ……」

うん、しがみついてくるのは構わない。構わないんだが俺が（一応）重症患者なのを忘れてないか？ 骨に響いて物凄く痛い。

（5分後）

……そろそろ離してくれないと悪化する。

ちょ！ 力を込めるな！ 全身から安堵と喜びのオーラが出ているのは判ったから離してくれ！！ いただただだ！

「落ち着いたか？」

「ごめんなさい」

あまりの痛さに意識がログアウトしそうになったところで部屋に入ってきたアニスに助けられた。あのままだったらまた寝入ることになっただろう。

「嬉しいのは判るけど旦那さんのことも考えてあげてくださいニヤ。旦那さんも戦闘のときは痛みでは一切声を上げニヤかったのにどうしてですかニヤ？」

「そりゃ、バトルモードだったからな」

「？ よく判らないけどいいですニヤ」

流された。

「お、起きたようだな。調子はどうだ？」

2人目の来客は部屋着に着替えたソフィア。当たり前だけど一年中防具を着ているわけではないようだ。例外は俺だけかよ。

「ぼちぼち。それで、ここはどこだ？」

ユクモ村に住み始めてから3ヶ月以上は経っているのにまだ知らない施設があるとは思ひもなかった。

「なんだ、来たことなかったのか？ まあ、お前のような異常なハンターには来る必要ないか。ここは訓練場にある医療施設だ。全ての怪我病気に対応しているから病院って言った方がいいな」

あー訓練場か。あまり関わりがなかったから内部をじっくり見ることはなかったな。それに医療施設なんて行ったことない。

で、その医療施設で怪我の状況の説明を受けた医者曰く、普通ならハンター生命を絶たれるどころか左腕の肩から先がなくなってもおかしくない程と分析したらしい。

それでも重症程度で済んだのだから色んな意味で匙を投げたとさ。

「見立てでは全治1カ月らしいが、お前なら1週間も休めば充分じゃないか？ 実際、左腕以外はほぼ治っているようだし」

流石にそこまでおかしくはない……と思いたい。

普段は回復させたい箇所を集中させることによって自己治癒力を上げている。加えてチート効果で何かしらあるだろう。1週間で回復しても不思議ではない。自分の底知れぬスペックに恐怖している、

「くう……むにゃむにゃ……」

メティスの寝息が聞こえる。教科書に載っているお手本位のわかりやすい睡眠。いきなりどうした？

「つきつきりでビヤクヤの容態を見ていたからな。安堵感から今までの疲れがドツと出たのだろう。2日も徹夜に近いことをしていれば当然だろう。私も無理はするなと釘を刺しておいたのだが、頑なに拒んでいたから好きにさせといたよ。まったく、頭が下がる」

つきつきりか。そこまで俺のことを心配してくれたのは嬉しいけど何もそこまでしなくても……

慈しむようにメティスの頭を撫でる。寝ていても判るようで「えへへ……」とはにかみながら笑う。

「それにしても旦那さんがそこまで大怪我をするとは思いませんでしたニャ。やっぱり強かったですかニャ？」

「そうだな。まあ、大型モンスターを相手にするときは大抵一発貫えれば絶体絶命に陥るから何とも言えないけど、あの2匹よりは確実に強かった。剛種は絶対数が少ないようだからお目にかかれないうけ助かる。正直、古龍の剛種だと勝てる気がしない」

古龍自体が剛種レベルだと言われている（らしい）ので、それこそ世界規模で災害が起きるだろう。うわー勘弁してくれ。

「そこまでなつてくると人がどうこう出来るレベルじゃないな。今までは古龍さえ確認されているものの通常固体だったからこれからも平気だろう」

おいやめろ。あなたはあれですか？ 一級フラグ建築士でも目指しているんですか？

ただでさえラオシャンロンの姿が確認されているのに……おつとこれ以上言つと別のフラグを立てるところだった。危ない危ない。

「そうそう、その腕じゃ普通のクエストはともかくギルドのクエストは受けられないだろうからしばらくは保留させるように言っておいた」

「助かる。でも平気なのか？ 緊急なものがあつたらヤバイだろ」

「その点については問題ない。私も最近知ったことだがビヤクヤ以外にも常識に捕らわれない強さを持っているハンターが少なくとも

2人いるようだ。なんとかなるらしいぞ」

へえ、この世界にもチートクラスのハンターがいるのか。是非とも会ってみたいな。

会ってはみたいけど出会い頭に攻撃されてはたまらない。恐らく武器は己の力をダイレクトに反映できる大剣やスラッシュアックスの類だろうから、俺の夜叉鴉でともに打ち合えば120%負ける。いや、負けるから戦いたくないって訳じゃないんだけど。

「それじゃあそろそろお暇させて貰おうか。長居しても養生の邪魔になるだろうし。メテイスは……置いていくか」

おい、それでも姉か。放任主義すぎるだろ。

「あ、別に変な事してもいいぞ。私が認める」

「なっ!？」

なんてことを言うんだ？

「じゃ、楽しんでくれ」

「誰がするかああああああ!」

逃げるようにアニスを掴んで出て行く。養生の邪魔になるといけな
いからと言いつつもすっかり邪魔していきやがった。

この姉といいあの母といい、どうしてこんなにもC4級の爆弾を何
の躊躇もなく投げ込めるのだろうか。もはや尊敬に値する。

「その妹であり娘であるメティスは微動だにせず寝ているとか……
よほど疲れているのか、単に神経が図太いだけか、どっちだろう？」

そこまで大きくないとはいえ、叫びを一番近くで聞いたはずなのに
起きる気配がしない。

俺の場合、寝ているのに常に攻撃が、しかも殺しにかかってくるの
で安眠なんてマイ辞書には登録されていない。ついには敵意を感じ
ると強制的に目覚めるといふ悲しい体質になってしまった。

「寝るか……」

変な姿勢で寝ると体を痛めるので隣のベッドにメティスを寝かせ、
自分も回復に専念すべく休憩を取る。

どのくらいで完治するのは謎だけど、1週間もあれば平気だろう。

翌日。

「なあビヤクヤくん、君は本当に人間かい？」

左腕の包帯とギプスを取りながら、捉えようによっては失礼なことを医者と言ってきた。

「自分でも信じられませんよ。まさかここに運び込まれてから3日で治るとか誰も予想しませんでした」

気絶中の2日＋目覚めてから一晩の計3日で完治。全神経を回復に集中させていた訳だが、いくらなんでも早すぎるだろ。ちゃっかりついてきたメティスも啞然としている。

神様よ、別に人型モンスターに転生させてくれなんて言った覚えはないぞ。

「と、とりあえず完治おめでとう。いつでもクエストに行っても大丈夫だろう。くれぐれも無理は……しなきゃ勝てない相手と戦っているからしょうがないか」

今回のように相性が悪い特殊モンスターが出現すれば無茶をしないと勝てないだろう。あーやだやだ。

「ああ、それと伝言がある。動けるようになったら集会場に来てくれだとか。何でもハンターランクがあがったらいい。おめでとう」

「そう言えば防具の素材集めのためにレウスを狩ったなあ（外伝参照……しなくていいです）」

グラビ戦の印象が強すぎて半分以上忘れてしまった。戦闘時間が1分弱なんだから仕方ない。

「わたしも？」

「上位レイア狩ったよな？ 発注こそ裏技使ったけどクエスト自体は公式だからだろ」

「なるほど……喜んでいいんですかね？」

「喜ばない理由はないな」

小さくガッツポーズをしながら小声で「やった！」と言うのは見て和む。いやー可愛いね。

「あ、こっちですこっち!!」

言われたとおり集会場に来てみれば服装がいつもと違うサーシャが手を振っている。

「あれ？ 服装違うけどどうかしたの？」

「ふっふっふ、実はね、今までの功績が認められてこの度晴れて上位受付嬢になったのよ!!」

ぶっちゃけ受付嬢の功績ってなんだろうか。普通に仕事の早さとか？ まあ、めでたいことには変わりがない。

「そして私が上位受付になると同じくしてお2人も晴れて上位ハンターに！　うち1人は上位なんてレベル通り越しているけど」

ジトツとした目でこちらを見てくる。

「そんな訳で一気に飛び級をした2人に新しいギルドカードを授与します。パチパチパチ」

手渡されたのは結構豪華なカード。なんでもマカライト鉱石が使っているらしい。なくしたらそれなりの費用がかかるそうだ。無料での提供は最初の一回だけか。

「ざっくり説明するとメテイスはH R 5、ビヤクヤさんはH R 7になりました。いやー数少ない飛び級だね」

「わたしなんか5でいいの？」

「上の方が判断したからいいんじゃないかなー。過去には1から9に上がった人もいるらしいし」

初心者から最高レベルまで飛んだのか。恐らくソフィアの話に出た俺以外の変態（いい意味で）だろう。

「そういうことなのでようこそ上位へ！」

これで俺の肩書きは特別狩猟許可証＋上位ハンターとなったから色々動きやすくなるな。

メティスも俺が手助けをしなくても上位を発注できるし仲間もいる。

これで一層楽しくなりそうだ。

さて、どんな無茶なクエストを受けさせるかな（悪魔の微笑）

第32話「ランクアップ！」（後書き）

シルヴィ「最近出番がないわね」

作「あれ？　なんかデジャビュ」

シ「気のせいよ」

作「……いまいち納得できませんがそういうことにしておきましょう。ともかく、主人公最強を貫くのも何なんで同じ立場的なハンターさんのフラグを建設しておきました」

シ「賢い読者の人は気付いていると思うけど、ドラゴンボール現象が起こっているのよね」

作「仕方ないですよ。あ、実は最近読者の方から新モンスターのアイディアを頂きましたね、嬉しくって小躍りしました」

シ「それを母親に見られたらしいわね」

作「……」

第33話「宴会（2度目）のお買い物」（前書き）

模試の教科5科目中、数学だけ日曜日。

お願いだから一日に纏めて欲しいorz

第33話「宴会（2度目）のお買い物」

上位になったお祝いにメティスの家でプチ宴会を開くことになり、その材料調達のため買い物に来ている。

何故かフランさんは俺たちが上位に上がったことを知っていたらしく、宴会の旨をサーシャに伝えたのを俺たちが聞いた。

あの人の情報網はいつたいていどうなっているのだろうか？

アニスと言えばソフィアに拉致されて以来姿を見ていない。南無。

「で、メティス、えらい上機嫌だな」

「だって昔からの夢だった上位ハンターの仲間入りを果たせたんですよ！ もう嬉しくって嬉しくって」

「そうか、それは残念だ」

「な、なんでですか？」

「俺は最低でもG級ハンターにまで育て上げるつもりだったんだが……夢が上位ハンターだったとは」

「G級！？ わたしが！？」

埋蔵金を発見したように驚き跳ねる。 あれ？言ってなかったか？

可能性はお釣りが来るくらいあるので折角なら高みを目指そうと最初から決めていた。俺の一族の元で修行すると、崖を登るようにゆっくり強くなつて時折落ちる（挫折）する感じではなく、常人と違う崖の頂上から人外という谷底へ真つ逆さまに落ちるようなものだと言われている。

確かどこぞの史上最強の弟子さんの所もそんな感じだったな。

「潜在能力は高いけど今のままじゃ無理だよな。まあ時間はたっぷりあるんだ、気長にやればいいさ。あまり待たせるのもどうかと思うからさっさと頼まれたものを買っていくぞ」

「はい」

1件目 魚屋

「な、なんだこれ……」

目の前にはデン！ と特大のカジキマグロがぶら下がっている。 1匹丸々。

この村に住むどんな物好きが全長3mを超える化け物魚を購入するのだろう？ あ、もしかして集会場用か？

「凄いですね。こんな大物は滅多に釣れる物ではないですよね」

「まーな。久々に熱くなれた漁だったぜ。どうだい兄ちゃん、買ってたか？ 安くしておくぞ」

「全身全霊を持って遠慮しておきます。2人暮らしなのにどうやってコイツを処理しろって言うんですか」

「だろうな、こんなの買うの村長さんくらいしかいねえ」

何やってんすか村長さん。

2件目 精肉店

この世界で食べられているお肉は生前(?)の世界とよく似ている。

牛にあたるポポ、鳥にあたるガーグア、豚にあたるモス。他にも憎きあの猪やホーミング生肉も一部では食されているようだ。俺も一度食べたことがあるが、なかなかクセが強かった覚えがある。

ちなみに品物は全て氷室（氷結晶いっぱい）に保存されているから
カウンターにはメニューしかない。

「おう、お2人さんいらっしやい」

「どうも。えつと……ガーグアとポポ、それぞれ2人前ずつお願いします」

「了解、ちよつと待ってな」

非常にゆっくりとした速度で氷室に入っていく。長時間滞在しない
とはいえ、氷点下な部屋に半袖で入室とは寒くないのだろうか？

心配なんぞ何のその。特に変わった様子もなくお肉を持って出てき
た。

「ほれ注文の品だ。それにしてもよくお似合いだな」

「「？」「」

「お前らが新婚に見えるってことだ。見ててニヤニヤできる。いや
ーごちそうさん」

「新婚って……／／／」

「（はぁ……）」

顔を真つ赤にするメティス。見ていてニヤニヤできるがつい嘆息してしまう。この手のからかいは嫌と言うほど受けてきたので慣れたくないのに慣れてしまった。

なお、シルヴィさん、フランさん、ソフィアに限って本気で言ってくるので性質タチが悪い。メティスが嫌いと言うわけではなく、好きな部類に入るのだが……なんかこう……ねえ？

3件目 八百屋

実を言うと八百屋は非常に苦手だ。

「あら、ビヤクやくんじゃない。来てくれたのね、嬉しいわあ」

ここの店主がオカマだからだ。しかもハンター顔負けのガチムチ。

基本的にはいい人なので仕事に関しても完璧と言えるのだが……い
かんせん性格が怖い。

これが本当のSAN値直葬野菜。ただし男に限る。

何故か女性に対して恋愛相談を受け付けており、それがまた好評。的確なアドバイスによって大人気なのは何か間違っていると思う。

「はは……ははは……」

頬が引きつり冷や汗が出る。今の店主さんの目はまさしく狩人。目的のものも買えたしこれ以上ここに留まる理由はないな。と言うか、これ以上ここに留まったら何をされるか判ったもんじゃない。

「ねえ、この後時間があるなら家に――」

「1年後まで予定ギッシリなのでお断りさせていただきます。今は急いでいるので、それでは」

逃げ道を塞がれる前にメティスの手を引いて逃亡。もうやだこの人。

「あらら、逃げられちゃったわね。彼にはメティスちゃんがいるけど味見くらいならいいわよね」

逃げるように（実際逃げている）メティスの家までダッシュ。家の

前ではフランさんが出迎えてくれた。

「おかえり、わざわざありがとね」

「お安い御用ですよ。色々とお世話になってますし」

「お互い様よ。入った入った」

「ただいま」

「お邪魔します……あれ？ アニスがいる」

玄関開けたら丸くなっているアニスがいた。なんかコキ使われているらしく、全身から疲れてますオーラが出ている。

「ボクがいるのがおかしいのかニヤ！？」

「記憶が確かならフランさんはアレルギー持ちだろ、アニスがいると危ないんじゃない？」

俺の疑問に答えてくれたのはそのフランさん本人。

「その辺は大丈夫。マスクしているしあまり近づかなければ問題ないよ。アニスちゃんだけのけ者にするのは可哀想でしょ」

ああ、だからマスクをしているのか。

自分の体調を気にしないでアニス俺の家族を向かい入れてくれるのはありがたいし、そう簡単に出てくることじゃない。よく出来た御仁だ。

「じゃ、ちゃっちゃと作るから待ってて」

「あ、俺も手伝いますよ」

「うーん、今夜の主役を働かせるのはねえ」

「招かれていますから何もしないのは落ち着かないんですよ」

「そう？　そう言う事なら手伝って貰おうかな。少し話したいこともあるし」

アニスにはしゃいで猫の毛を撒き散らさないように釘をさしておいて既にキッチンへ行ったフランさんを追いかける。

「で、何を作りますようか？」

「そうねえ、ビヤクヤくんの得意な物でいいよ」

「了解です」

得意なもので無難な料理。

世間の常識に合わせることなく、簡単確実おいしいもの。ホットケーキを焼き……

いかん、今遠い世界の次女の魂が乗り移った。普通に肉じゃがでないな。材料もお手軽だし。

いつも通りジャガイモを切っている横で手際よく包丁を動かしているフランさん。普段のおおらか（大雑把とも言つ）な性格からは想像できない器用さだ。

「それにしても随分手馴れているね。昔から得意だったの？」

「家のものがだらしなかつたですから必然的に俺が台所を預かっていたんですよ。まったく、少しは助けてくれても……」

「若いのに大変そうね……」

他愛もない話をしながら調理を進めていると、

「あの子たち、このところ楽しそうなの」

「と、言つと?」

「メティスは毎日凄くいい笑顔で家を出発していくし、ソフィアはよく判らないと思うけどよく笑っているの。まあ、あの子の笑顔はニヤニヤしている感じだけど」

そのニヤニヤは俺とメティスに注がれているから十二分に理解している。

「ビヤクヤくんが来てくれたお陰で村全体も明るくなつたし、遠くから来る観光客も増えたしね」

「えーつと……」

むう、照れるな。褒められるのはあまり慣れていないからなんともくすぐつたい。

足の裏に塩を塗ってヤギに舐められているような。あ、あれは拷問の一種か。

「これからよろしくね」

「……もちろんです」

一旦手を止めて応える。

「ビヤクヤくんがいれば我が家も安泰」

「身内じゃないんだからそこまでアテにされても……」

「いつかは家族になるんだから気にしない気にしない」

「ハハハ……」

「うわゝ美味しそうですね」

「これがビヤクヤの郷土料理か……」

そっぴやソフィアは来た当事に開かれた宴会に来てなかったな。

「食事はたくさんあるからタツプリ食べれるニヤ」

「お前小食だろう」

この後、アニスが食べ過ぎて倒れたり、誰に仕組まれたメティスがお酒を飲み酔った挙句俺に纏わりついてきたり、フランさんに質問攻め喰らったり、ソフィアがすやすやと寝ていたのはまた別のお話。

ここが例の小僧がいる村か。

アイツのほかにギルド直属の依頼を受けているらしいから相当な実力者だろう。

手合わせを試みたいが、本気でぶつかったら村がどうなるか判らん。

適当に場所を移せばいいな。

第33話「宴会（2度目）のお買い物」（後書き）

サーシャ「宴会の様子は？」

作「外伝で入れようかなと」

サ「ぶっちゃけメンドクサイ？」

作「ええ……」

サ「……」

作「……」

サ「そういえば何かいいことがあったんですね？」

作「そうなんですよ！ 前回に引き続き、またモンスターのアイデアを頂きましたね！ 計6匹ですよ！ いやゝありがたいです」

サ「モンスター以外にも何かあれば是非ともお願いします」

作「そうすれば自分の仕事が楽に（ry」

サ「モンスターについては順番待ちが起きているのであしからず」

作「では今回はこの辺で」

少し聞きたいことが……（本編とは無関係です）

《アンケートは締め切りました。ご協力感謝します。尚、サーバー負担のことを考慮し、このアンケートは未来永劫残しておきます。なんか黒歴史になりそう……》

どうも、この度は私の書いた二次小説をお読みくださりありがとうございます。作者である香具師之樹です。

今もせっせとプロットを書いている途中なのですが、少し、いや、結構大きな壁にぶつかってしまいました……

それは

ヒロインであるメティスに恋のライバルが居たほうがいいのか否か！？

あ、待って！！ ブラウザバック押さないで！！！！ 真剣な話なんだから！！！！！！

ほら、ラノベのほとんどは三角関係みたいになっているじゃないですか。無論、にじファンにある小説のほとんどもそうです。

私としてもどこことなく物足りない感がしまして……張り合いがないというか……

「じゃあ、今まで出さなかったのは何故？」

判ります。そう言いたいのはよく判ります。

理由は簡単、私はハーレムを書くことが出来ません。と、なると必然的に主人公に選ばれるのは一人となるので選ばれなかった人が可哀想じゃないですか！！

一種の偽善ということは理解しているんですケド。

優柔不断な私には到底決断できないことなので、是非とも皆様の意見を取り入れたいなと思いました。

まあ、そういう訳で

1・メテイス1人だけで充分

2・もう1人出して！

3・もう2人出して！

の内からアンケートを取らせて頂きます。

2か3の場合は新キャラを出すつもりです。設定決まっていけど。

それと結果が出て反映するまでに時間がかかるかと。

あ、感想欄に書いていただけると助かります。

期間は投稿日より1週間、2011年11月1日です。

皆様のご意見をお待ちしております。又、「こつこつというのは？」というのであればそれらも合わせてお願いします。

ではでは。

第34話「紳士的なハンター」（前書き）

編集の都合上、ばっさりカットした部分があるので違和感MAXですが勘弁してください。

第34話「紳士的なハンター」

「うつ……気持ち悪いニャ……」

あの、よく言えば宴会、悪く言えば地獄絵図を終えた次の日、ものの見事にアニスはダウンしていた。

声には一切の覇気がなく、じっとしていると落ち着かないのかひたすらゴロゴロと転がっている。

二日酔いに効くとされているアサリの味噌汁を出してしばらく見守る。

「昨日あれほど食べて、慣れない酒にも手を出したのだから当たり前だろ。自分で判っているのに何でまた」

「あの時の自分に問い質したいくらいですニャ。旦那さんもボクと同じくらい食べて飲んだのにニャンでピンピンしているんですかニャ……」

そりゃ鍛えているからこの程度じゃへこたれないな。普段はここまですぐに食べないけど。

アサリの味噌汁をゆつくりと飲むアニス。一息ついたら大分楽になったらしく、上半身を起こして布団から出ようとするが、足が縛れ

てうまく立てないようだ。1、2回チャレンジしたところで早々に諦めておとなしく布団に戻った。

「今日のところはゆっくり休め。幸い俺の方でクエストは来ていないようだし行く予定もない。今日、明日は暇だ。俺は少し出掛けてくるけど何か欲しい物あるか？」

「平気ですニヤ。申し訳ないですニヤ……」

「そう思うならさっさと治してくれ。じゃ、行ってくる。あ、そうだ、メティスの修行もあるからお昼過ぎても戻ってこないぞ。1人で頑張れ」

「そんニヤ無責任ニヤ!!」

抗議の声を軽く受け流して家を出る。どうにかなるだろ。

さて、家を出た目的だが、愛読書である『今日からキミもハンターだ!』シリーズの新刊が発行されたいので早速買いに行くこと。あの本は勉強するのに超使えて、ハンターになって随分時間が経つけど知らないことや裏技的なことも書いてあるのでとても嬉しい。特にモンスターの生態調査とか。

わくわくしながら書店に向かえば……

「完売かよ……」

キレイさっぱりなくなっていた。流石は大人気の新刊、置いてあったであろうスペースだけ何も無い。

2、3度瞬きしてもあるはずない。聞いてみたところ、再入荷するのは3日後らしいので仕方なしに店を出る。次回はもっと早く来ないと……

「クエストは来てないですね」

確認のため集会場に寄ってクエストのことをサーシャに聞いてみたけど、やはりないようだ。あっても困る。

「あ、でもギルドからのお手紙は着ていますね。はいどうぞ」

そう言ってA4用紙を3枚ほど渡してくる。軽く礼を言って適当な所に座り、お茶を頼んでから目を通す。

内容はキメラ種に関するものだった。

『ギルド本部より報告、キメラ種について。

近頃、一部のハンターに関わっているキメラ種についていくつか判明したことがあるのでここに記す。

まず、キメラ種は、人はおろか大型モンスターでさえ入り込まないような場所を拠点としており、発見は困難。現在も正確な数は判っていない。

また、その人知を超える力の代償として寿命は人と比べても短く、繁殖する機能も持たない。つまり、キメラ種が爆発的に増えることはない。本部の計算でも通常種との比率は9：1を保っているらしい。

更に、通常固体とはまったく異なるため成体になる数は少ない。誕生する原因は不明な点が多いが、別種同士が何らかの理由で配合し、低確率で生まれると言われている。

脳の大きさも通常種よりはるかに大きいので知能も高いだろう。各人、十分に注意するように』

みたいな事を延々と書いているので何が言いたいのか非常に判りづらい。

要点だけ纏めれば3枚も使わなくていいのに。

紙をしまつて時計を見ると、時刻は10時30分を指している。メ
ティスの修行まであと2時間ほどあるから、アニスには悪いけどこ
の辺でのんびりさせて貰おう。

うむ、お茶がうまい。

「で、何の用だ？　ずっとそこにいても面白くないだろう」

呟くように言う。と、同時に天井から音も無く着地する1人のハン
ターらしき人物。

周りの人々は気付くことなくそれぞれの作業を続けていた。

「ほう、よく判ったな。いつ頃だ？」

降りてきた人物はかなりの長身で筋骨隆々。いかつい顔立ちに加え
背中に斧を携えている。隠しているが、全身から滲み出ている覇気
は彼が強大な力を持っていることを教えてくれる。

「あんたが集会場に入った辺りからだよ。しばらく放置していたけ
どなんの動きもないから呼んでみた。大方、俺がどれくらいの力を
保有しているか観察しに来たんだろ？　隠れる必要はないと思うが」

「そこまで判っているのなら話が早い。おっと、自己紹介がまだだ
ったな。俺の名ゼノン＝アデライト、表向きはG級ハンターだがお

前と同じギルド直接の依頼を受けるハンターでもある。あと1人いるのだが、あいつはどーも苦手だ。名前はクレア・コルディナ。あの女、確か、大剣使いだったか？ まあいい、機会があればいつか会えるだろう」

へー、残り1人は女性の方だったのか。意外と言えば意外だが、この世界においてハンターの男女比は6：4らしいので女性が活躍してもおかしくないだろう。

「話を戻そう。目的は言った通り実力の確認だ。お前ほどの者ならどっという意味か判るな？」

「模擬戦……か。よし、お断りしよう」

「なんだと？」

断った瞬間、彼から殺気が吹き出した。

ご丁寧に俺にだけ向けているのは構わないんだけど、めっちゃくちゃ怖いんだよ。これなら眼力で人を殺せるな。比喩的な意味じゃなくて言葉通りに。おお、怖い怖い。

「どんなモンスターかは知らないけど、かなり長引いた戦いをして体力を消耗しているだろ。そんな状態で手あわせしても無意味だと思うぞ。と、言うかその状態で俺の力が測れると思われるのは心外だな。少なくとも、今のあんたなら圧勝できる」

「……何故そう思う？」

「ただの勘。しんどそうに見えたからかな？」

ふう、とゼノンは一息ついて、やれやれといった感じに口を開いた。

「その通りだ。ここにくる途中で依頼にあつたディアブロスのキラメを狩った。蒼レウスとの合成だったな」

ん？ 蒼レウス？ あ、ソフィアが言っていた固体だな。ゼノンに回っていたのか。いやーラッキーだ。

ディアブロスとは相性が悪そうだから戦いたくない。前にも言ったけど、そもそもこいつ嫌いだしな。

「今、戦わなくてよかった……とか思ってたんだろ」

うつ……見事に見破られたな。

「まあいい。お前がそう言うなら今日はやめておこう。都合がいい日は何時だ？」

「うつん、3日後にここに集合でいいか？ 少し弟子のことで用事

がある」

メティスなら確実にについて来る。さすがに今回ののは規則的にマズイこと（ハンター同士の武器を使った喧嘩）なので無関係を証明させるために知らせないでおこう。

クエストにでも行かせればいいか。

ちなみに、上記の規則を破ったらハンターとしての資格をボツシュートされる。そのことを言ったら、

「バレなきゃ平気だ。それに、バレても上は俺達を解雇には出来ねえよ」

と言い放ってきた。これって最悪だよな。

話が纏まった。さっさと出ていくゼノンを見送って俺も修行場へ向かう。

早速メティス達にクエストへ行くよう言うか。そろそろ時間だから来るはず……

「ビヤクヤさん」

噂をすればなんとやら。向うの方から小走りで近付いてくる。

「今日もよろしくお願いします！ あ、1つ報告が。明日からベリオロス討伐に行くことにしました！」

「明日だな。了解。判っていると思うがくれぐれも気を抜くなよ」

「もちろんです！ ビヤクヤさんは同行しないんですか？」

「ああ、ちと別件があるからな。」

メティス達には多くても2週間に一度、自由にクエストに行っていると言う事になっている。実践は大切な時間、その辺自分で決めさせた方がタメになるだろう。

たまに俺の方から言うこともあるが、そこまで頻度が高いわけではない。

「あれ？ 他の2人は？」

他の2人とはディーナとライナスのことである。レイア討伐の後2人から頼み込まれ、メティスのお願いビームの追加攻撃もあり弟子にすることになった。

俺は刀以外使ったことがないので武器の扱いを教えることは出来ない

いが、基礎的な運動能力を上げたり弱点を克服させたりすることは出来るのでいいことにしよう。

「そういえば見ないですね……あ、来た」

「遅れました」

「ディーナちゃん……武器忘れるのは仕方ないとしても僕まで巻き込まなくて……」

「いいじゃん別に……」

「……………」

いつも通りの光景だ。ディーナの方で何かあると必ずライナスは犠牲となる。最初こそ不憫だと思ったが、今では何とも思わない。

「はいはい、痴話喧嘩はそこまで。明日のクエストのことは聞いたから普段の1.5倍でいくぞー」

「ふ、増えた……？」

「普通は減るんじゃない……」

「何でそうなるんですか……」

つい最近知ったことだが、3人ともエンジンがかかるのに時間を要するので今の内から暖めておくのが吉。無論怪我をさせるような真似はしないので怯えないで欲しい。

「そこまで怖がらなくても……。思ったんだが、俺の修行って結構鬼畜なのか？」

「「「今更！？」「」」

一斉に同じことを言うので少したじろいってしまった。

まあ、少しはキツイかなーとは思っていたけど3人の表情から見て相当なエクストリームモードだったのだろう。

だからと言って易しくするつもりはないけど。

「じゃ、走り込みから。いつも通り8kmでリミットは30分。+10秒ごとにスクワット30回」

「「「オニー！」「」」

「はっはっは、何とでも言うがいいさ。はい、スタート」

文句は言うものの、やはりペナルティは嫌なようで言うが早いが全

員が走り始める。

フル装備で走らせているわけじゃないし、間に合うだろう。

さて、俺もいつも通り走ってくるかな。

メテイス SIDE

必死になってスタート地点に戻ってきたはいいけど……

「結果……は……？」

「31分……20……秒……」

80秒のオーバー。つまり、スクワット240回！？

「ペ、ペナルティがひどすぎる。メティス、なんとかならない？」

黙って首を振る。ビヤクヤさんは言った事をまず曲げることはない
ので240回の地獄が待っている。と、思ったら、

「あれ？ 師匠いないよね」

ペナルティに気を取られすぎて気付かなかったけど、言われたとお
りビヤクヤさんの姿が見えない。いつもはいるはずんだけど……

仕方ないので3人で手分けして探そうとした矢先、

「やっべ、遅くなった」

スキル『神出鬼没』を常に発動している探し人が降ってきた。

「どこ行ってたんですか？」

「俺の方も走っていたんだけど少しばかり遠出しすぎて。やっぱり
大猫地蔵までは遠いか」

大猫地蔵…… え！？ あの大猫地蔵！？ 確かここから片道20 kmくらいあった気がする。

ビヤクヤさんはわたし達の5倍のスピードで走っていたことになる。ディーナもライナスもポカーンとしていて、と言うことはわたしもポカーンとしているのだろう。

いつもわたし達より早く戻ってきて涼しい顔して死の宣告をしていたのか。

何この人怖い。

「で、タイムリミットには間に合ったのか？」

「もちろん！」

「ギリギリだったけど」

「危なかった……」

ここで3人の意見が同じだったことは言うまでもない

「（なんか違和感が）まあいいか。さて、メニュー消化して早めに終わらすぞ」

いつもより5割り増しの密度。明日に影響しなきゃいいけど……

翌日、

「……筋肉痛とかどう？」

「……いや、全く」

「……僕も」

朝一番にビヤクヤさんの見送りの元アプトノス車に乗り込んで目的地である雪山に向かっている最中、昨日の修行の話になったんだけど、

「一体どんな魔法を使えばあれだけキツイ修行で筋肉痛にすらならないの……」

そう、絶対に悪影響が出ると思った難易度ルナティックなものなのに、いつも通りどころかいつもより調子がいい。

「」「……」「」

わたし達は考えるのをやめた。

第34話「紳士的なハンター」（後書き）

キャラ紹介

名前：ディーナ・イレネ

年齢：16歳

特徴：猪突猛進

ざつと解説

メティスの同期（ハンマー使い）でドンドルマに行った上位成り立てハンター。腕っ節に定評がある。過去に一度、ベースキャンプ内で素振りをしていたところすっぱ抜け、ピタゴラスイチの壊滅してギルドマスターのおっちゃんからキツイお叱りを受けた経験あり。兎に角真っ直ぐ進む。

名前：ライナス・アポロシア

年齢：16歳

特徴：押しに弱い

ざつと解説

メティスの同期その2（ヘビィボウガン使い）。基本的にディーナに引く張られる不憫な子。が、どこか嬉しそうな表情をする。決してDMさんではないのでそのところ間違えないように。猪突猛進のディーナと意外と話を聞かないメティスの2人と組んでいるため、一番冷静で一番常識人。

尚、この2人、武器防具が決まっていなかったので誰か助けてください。
上位成り立てという事を考慮して頂ければ何でもいいです……

第35話「お前ら絶対人じゃねえ」(前書き)

今日の俺は紳士的だ。運がよかったな

第35話「お前ら絶対人じゃねえ」

「ぶるあああああああああああ！！！！」

「はあああああああああああ！！！！」

不自然に存在するクレーターの中央でぶつかり合う2人。

周囲の大地や岩肌には大きな『傷』が幾つも走っていた。とてもではないが、人vs人が生み出した光景だとは思えない。

この力比べが始まったのは今から数時間前のことである。

くバイツァ・ダスト！！く

メティス達を見送ってから2日が経った。

ダウンしていたアニスが見事に復活を果たし、「クエストについて行きたかったニャ〜」と病み上がりなのになかなか度胸のあることを言ってきた。

念のために今日1日は安静にしておくよう言い渡し『準備』をする。普段とあまり変わらない格好でいいからそこまで気にする必要はないし、相手も殺すまではしないだろう……たぶん。

「またお出かけですかニャ？」

動きたくてウズウズしているアニスが聞いてくる。飛び回りたい気持ちは判らんでもないが、ゼノンの力比べに巻き込まれれば確実に天に召されるから何と言われようと連れて行かない。

「夜まで長引かないと思うから心配すんな」

「いつてらっしゃいニャ」

「おう、行ってくる」

足早に集会場に行けば既にゼノンが周りとは決定的に違う雰囲気（近づいたら殴り倒すぞオーラ）を醸し出しながら1人でお茶を飲んでいる。

うわ、なんかシユールだ。

「や、こっちの都合で待たせて悪いな」

「構わん。押しかけたのはこちらだからな」

俺も席についてお茶を頼む。悪ノリして周りとは決定的に違う雰囲気（近づいたら殴り倒すぞオーラ）出しているので猫の子1匹たりとも近づいてこない。それどころか、涙目になっている新米さんもいる。

普段は騒がしい集会場が虫の声さえ響かない墓地のような感じになっってしまった。なんかスマン。

「で、場所は決まっているのか？ この村でやるとは思わないが近くの森でも確実に騒ぎになるぞ。まさかそのつもりだったとか？」

「お？ ダメなのか？」

「ダメに決まってるだろ！」

い、意外と馬鹿？ そんなイメージとは180°。反対なので考えも

しなかった…… こういう風になるのは戦闘が絡んでいる時だけだ
と思いたい。常にこうだったら街中に超ド級危険モンスターが住み
ついているようなものだ。

「はあ…… 少し遠いけど荒地があるからそこでいいよな」

「ふむ、いいだろう」

残りのお茶を一気に飲み干して、低い声で「うまかったぞ」と言っ
ても怖がらせるだけだからやめてあげてくれ。

少し走って目的地である荒地に到着。火山が近くにあるのでこの辺
りは草や木が育つことのできない場所となっている。

軽く腕を伸ばしたりジャンプをしたりして体をほぐす。

「確認するけど時間無制限一本勝負。どちらかが負けを認めるか戦
闘不能となった時点で終了。殺すのはなしの方向で」

「そうだ。最初に言っておくが手加減しようなんて思ったら死ぬぞ。
せいぜい俺を楽しませろ」

背負っている斧を片手で持つ。あの重量の物を片手で操るのはそう簡単にできることじゃない。やだな、パワーアタッカーとは相性が悪いんだよ

「今さっき殺しはなして言ったんだけど……あとお前さん相手に手加減する余裕なんて皆無だ」

応えるように夜叉鴉の塚に手を掛けて腰を軽く落とし、いつでも飛び出せるように準備する。

真正面からぶつかるのは好ましくないが、うまく力を流せば罅迫り合いも可能だろう。

膠着状態が続く……

先に仕掛けたのはこちら。自分が持てる速さの85%で背後に回り刀を抜き放つ。少し遅れてゼノンも反応するが、その少しの遅れがあれば当てられる。

はずだった。

「俺の背後に立つんじゃない！」

叫びと共に刀が当たるよりも速く、空いている左手で襟首を掴みそのまま叩きつけられた。

「いつまで寝てんだ！」

慌てて横に転がる。そのまま立ち上がり安全圏と思われる所まで下がった直後、ゼノンの踏みつけによって大地に小さなクレーターができた。なんつー馬鹿力してるんだよ。

それにしても、さっきの超反応はなんだ？ 俺の行動に割り込んできたが、狙って掴んだのではなく反射に近い行動だった気がする。背後に回るときには気をつけよう。

背後がダメなら正面。リスクは増えるもののそれしか打つ手がない。更にスピードを上げて俺の攻撃が届く間合いまで走る。

「死ぬかあッ！！」

タイミングを合わせて発火している斧で斬りつけてくる。地に触れると爆発した。

おい待て、なんで燃えているんだよ。

「消えるかぁッ!!」

続けて風の刃を纏った斧で切り上げる。避けたのにも関わらず風圧によって斬られた。

風を飛ばすなら判るけど装備すんな。

「土下座してでも生き延びるのかぁッ!!」

今度は掴みかかろうとする。もし掴まれたら……

掴まれる↓そのままジャンプ↓叩きつける

うげえ、確実に殺しに来てるよ。

取り敢えず、スカった直後の隙を狙ってガラ空きになった横腹を斬りつける。薄皮1枚斬ったところで斧によって止められた。

ちっ、惜しい。

「流石だな。今の三連殺を回避しきったヤツはそうはいないぞ」

「そりゃどーも」

鐔迫り合いをしながらの呑気とも取れる会話をする。一見、拮抗しているように見えるが少しずつ押されているのは俺の方。

力の拮抗がグラついたところで鴉を跳ね上げ横一線に薙ぎ払ってく
る。

上体を逸らして避けると同時にサマーソルトで顎を蹴り上げた。

「効果ある訳ないか……」

体格差がありすぎるのではほぼ全ての体術は通用しないと考えていい
だろう。けん制くらいにしか使えないか。

少し距離が開いたのが両者共に走り、俺は斜め下から、ゼノンは斜
め上から互いの攻撃を繰り出す。すれ違いざまに大きな金属音を出
し、行き場のない衝撃は地面を穿った。

距離があまりあかないうちに止まって『円閃』による回転攻撃を出
す。が、向こうも考えていることは同じらしく、鴉と斧がまたもぶ
つかり合った。今度は無理をしないで一度鞘に戻して突き出されて
いる斧をかくぐって斬る。

確かに入っただけど何故か傷は深くない。あえて前に出ることでもクリ
ンヒットを免れたか。

「『空閃』……」

間髪入れず放つ真空の刃は防ぐことが出来ない。

「せいっ!!」

……いやいやいや、真空の刃を潰すなよ。一体どついう理論なんだ？

「飛び道具なんぞに頼ってんじゃねえ!!」

少し呆気にとられていた間に目の前まで迫ってきたゼノンが切り上げてくる。

かなりギリギリだったが、反射的にバックステップをして危機から逃れた。

「男に後退の2文字はねえ!!」

なっ!?! あの振り切った状態から追撃できるのかよ!! 体を動かす時間はない。瞬時に鴉を間に挟ませておくことで死にはしなかったけど遠くまで飛ばされた。

「予想に反することなく笑いたくなるほどに怪力だな。片手でこれ

だから両手を使われたら……考えたくもない」

後からギルドマスターのおっちゃんに聞いた話だと、この人外さんはナルガクルガと追いかっこしたり、ラングロトラをシュートしたり、拳句の果てにはドボルベルクをグーパン1発でスタンとったりと一風変った武勇伝をいくつも持ちのようで、ギルド本部公式のバグキャラとして認定されたいらしい。

彼を知っているハンターは皆口を揃えて「G級モンスターよりよっぽど怖い。腹ペコなイビルジョー3匹のいる闘技場に取り残された方がマシ」と言う。そんな化け物と戦っているんだよね……生きて帰れるだろうか。

「ボーっとしている暇はねえぞ!!」

「ちょ! タンマ!!」

「どうわあれが待つかあ!!」

持っている斧を両手でしっかりと持って腕を下げる。そのままあたかもゴルフをするかのように……

「吹き飛びやがれい!!」

思い切り振り上げてきた。素直に吹き飛ばされるのは勘弁願いたいのでダイナミック前転回避。

「ちい！ 外したか！！」

「いや、当たったら死にそうだ……し……？」

げえ！！ 振り上げたはずなのに斧を叩きつけたかのような亀裂が
できてる。こんなの絶対おかしいよ。

「ふざけんなごる あああ！！！」

「八つ当たりすんなああ！！！」

人には見えることのできない速さで打ち合う。ぶっちゃけると俺も
見切れていない。

なんとなくブレて見える軌道をボンヤリと捉えて、あとは勘と感覚
で防いだ後にこれまた何となく隙がありそうな箇所に分身でも見え
ない速さで打ち込む。考えないで反射的に攻防を繰り返しているよ
うなもの。たぶん、ゼノンもそんな感じなのだろう。

そのボンヤリとした攻防の被害はそこらじゅうに広がっていて、見
る見るうちに荒地がランクアップ（マイナス方向に）していく。時
折、どこをどうやったかは判らないが大きな爆音を響かせながら。

「ぬう!!」

「ぐっ!!」

同タイミングに拮抗状態を崩そうと渾身の力を込めた斬撃を放ち、それらがぶつかり合うことでこれまで以上の衝撃が周囲の空間を襲う。あまりの強さに後ろに押されてしまった。

「これくらい距離あれば……」

接近戦はゼノンの独壇場だとよく判った。馬鹿力に加え鋼のような肉体を持っているので斬り合いで勝てる気がしない。俺自身、ヒットアンドアウェイ戦法なので近づかれたら色々と困る。逆に言えば、ある程度の距離があれば俺の独壇場ということだ。今まさにそんな状況。見逃す手はない。

「屑があッ!!」

どうやらゼノンはカウンターを得意としているようで、またもやタイミングぴったりに薙ぎ払ってくる。が、トップギアに切り替えた俺には、例え見えなくとも危険を察知して避けることなど容易い。そして、

「俺の背後に――」

反射に近い叩き付けを貰う前に斬る。

「それは既に見た。1回貰った攻撃をもう1回食らうのは三流のすることだ」

距離を詰められる前に再度切り抜け、距離を取る。

「ほう……スゲー速さだな。では、俺も」

その言葉を真後ろで聞いた。余裕を持ってかなり遠い所にいたのに背後に回られたようだ。

「なに!?!」

「余裕かましてんじゃないやねえ!?!」

無意識によって出た蹴りのお陰でわずかにかすっただけで済んだ。

横腹をやられたか……かすっただけでこれかよ。

体勢を立て直そうに距離を取っても、同じ速度でついてくる。

面白い、速さ比べか。

「ぶるあああああああああ！……！」

「はあああああああああ！……！」

「ゼエ……ゼエ……予想以上に強いな」

「ハア……ハア……そろそろ諦めてくれない？」

「……そりゃ無理な相談だ」

「……デスヨネー」

いくらチートの存在とはいえ、全力疾走で2時間も戦い続けられ

息切れも起こす。

致命傷となる傷以外は途中から避けるのがめんどくさくなったので体には無数の傷ができていた。もっとも、普通のハンターから見れば大怪我レベルのものだが。

既に荒地は原形をとどめてはおらず、流星群でも降ったかのように見るも無残な地形になっていた。いやはや、自分でやっておいてなんだが、どうしてこうなった。

「さて、次で最後でいいよな？ これ以上やっても長引くだけだろう」

「よし判った。さあ、行くぞ……」

「『雷閃』!!」

「微塵に碎けるお!!」

＼ソフィア SIDE＼

「また私だけ置いてけぼりか……」

あの身に宴会で飲み過ぎ、お約束どおりに倒れてから早3日。メテイスの姿が見えないので母に聞いてみるとベリオロスの討伐に向かったことが判明した。ビヤクヤの方も何か用事があつて村を出ているのを人から聞いたので、特にすることもなく、休憩中だったリザを捕まえ昼間から温泉に入っている。

「運がないねえ。いつものことながら惚れ惚れするほどの不幸つぶりだ」

人の気も知らないで豪快に笑っている。少しばかりイラッとしたので攻撃態勢に入ったところ……

ドゴオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

「な、なにごと!？」

建物が揺れるくらいの振動と共に爆音が響き渡った。

「まさか……モンスターか!？」

もしそうだとすれば、爆音の規模からして私の手に負えるモンスタ―ではない。しかし、頼みの綱のビヤクヤがいない今、グダグダ言っている暇もない。

すぐにお湯から出て装備を身につける。

「ソフィアさん！　今の爆音の原因を突き止めてください！　危険と判断したら全力を持って逃げろだそうです！！」

サーシャが慌てた様子で緊急の依頼を持ってきた。普段は能天気な彼女だが、今回ばかりは焦っている。

もはや一刻の猶予もない。髪が微妙に濡れているのも気にしないで
爆音が響いた方向に向かう。

強力なモンスターでないことを祈るばかりだ。

第35話「お前ら絶対人じゃねえ」(後書き)

キャラ紹介 その2

名前：ゼノン＝アデライト

年齢：30歳

武器：斧のような何か

防具：防具になんぞ頼ってんじゃねえ！

特徴：紳士的

ざつと解説

とにかく強い。そして何でもあり。ギルド直属の依頼を受けるバグキャラ。理不尽さには定評があり、ガードなんぞ意味を成さずどんなに距離を取ろうと彼の間合いから逃れるすべはない。つかへビイボウガンより射程距離が長い。そしてカウンター大好き。背後に立ったら大型モンスターですら持ち上げられて叩きつけられる。アイテムを使うなんてもつてのほか。

色んなセリフからお分かりの通り、まんまバルバトス・ゲーティア。姿形もそのまんまの方が作者がイメージしやすいのでその方向で。

ちなみに「微塵に碎けるお！！」の後にジェノサイドブレイバーは撃ちませんのであしからず。基本的にチープエリミネイトとかワールドデストロイヤーとかルナシェイドとかは使いません。が、それでいても尚強いのは言うまでもない

第36話「ギルド本部の裏側」(前書き)

作者「私は帰ってきた!!」

メティス「随分と長いお休みでしたね」

作「データが3回も吹っ飛んだんだから休みたくもなりますよ」

メ「あー」

作「それと、遅くなりましたがアンケート結果です」

メ「アンケート自体を忘れている人もいそうですね」

作「……………感想欄及びメッセージボックス、リアル友人や二次小説書き仲間の意見を集計したところこんな感じになりました」

1・メティス1人だけで充分……………16人

2・もう1人出して!……………4人

3・もう2人出して!……………2人

メ「1番人気ありすぎですねえ」

作「ここまで圧倒的になるとは思っていませんでしたよ。ご協力ありがとうございます」

メ「〜♪」

作「ご機嫌だな」

メ「メインヒロインはわたし1人で充分って思っている人が多いので嬉しいんですよ」

作「まあ、その相手は果てしなく朴念仁だからなああのチート」

メ「そうですね……」

作「とにかく、36話、お楽しみください!」

第36話「ギルド本部の裏側」

メテイス SIDE

「む、なんであんなことになるのよー!!」

「ま、まあまあ。戦わずに済んだんだからいいじゃない」

「そうかもしれないけどさ、ベリオがまっくろすけになっていないって思わないでしょ。うが」

「落ちついてディーナちゃん。うん、上手に焼けていたから火炎攻撃を受けた訳で、でも雪山には炎を操るモンスターなんていない。ベリオには剥ぎ取った痕跡はなかったからハンターの仕業でもない……サッパリだ」

狩りに行ったはずなのに問題のベリオロスは既に仕留められていた。ライナスの言う通り、焼き過ぎたステーキの如く焦げているので息絶えていることは一目で判る。

一応クエストは成功しているのですが、発煙筒で合図を送ったけど、わたし達全員ポカーンとしていたと思う。第一声は「なあにこれ」

「結局、日帰り旅行になっちゃったね」

「いい経験をしたと思えば……」

「思えるわけないよ」

雪山に行く（１日）↓翌日に探索（半日）↓帰る（１日）。ユクモ村に着くのは出発してから３日経つ、今日のお昼くらい。凄く時間がもったいない。運がないってレベルじゃないよねコレ。

「でもなー、折角だったら戦いたかったなー。地獄の修行を始めてからの初クエストだったし」

「案外乱入してくるモンスターがいるかもよ。それこそG級だった」

「あはは、まさかそんなころあるわけないよ」

あ、「まさかそんなことあるわけない」ってふらぐ……だっけ？
ビャクヤさんの故郷ではそれはそれは不吉だと言われているー

ドゴオオオオオオオオオン！！！！！！

「えっ!？」

「なに!？」

「ひゅい!？」

突然発生したティガレックスの咆哮を軽く上回る爆音。少し離れた所ではモクモクと煙が上がっている。あそこが発生地点のようだ。

「ど、どうする?」

「様子くらいは見にいかないと……メテイスはどう思う?」

「モンスターが関わっているならG級以上だから危険だと思うけど……」

ハンターの規則では、クエストの最中及びその前後で乱入してきたモンスターが危険だと判断した場合「特別狩猟許可証」がなくても上位ハンターなら倒していいことになっている。ただ、帰ったあとの手続きがひじょにめんどくさくなるけど。

基本的に、今すぐ倒さないと甚大な被害が及ぶ時だけ倒して他の場合はモンスターの特徴を把握して逃げるとというのが暗黙の了解になっている。

アプトノス車から降りてゆつくりと進んでいく。いつしか周りの風景はゴツゴツした岩だけになっていて、かなり見通しがいい。つま

り、向こうからもわたし達を見けやすいということ。息を殺して慎重に歩く。

しばらくすると、ディーナが声をかけてくる。

「ねえ、メティス。今、人影が見えなかった？」

「人影？」

「うん、あの辺」

ディーナが指す方向をよく見ると、確かに岩の上を軽快な足取りでピョンピョンと跳び跳ねている人がいた。

あれ？ あの装備って……

「もしかしてソフィアさんじゃ？」

わたしの予想を確信に変えたのはライナスの一言。お姉ちゃんがいるってことはたぶん調査に来ているんだろう。ビャクヤさんの出番だと思ったけど、どうしても外せない別件があるんだっけ。とにかく、一緒に行動した方が安全なので接触を試みる。

「お姉ちゃん！」

「メテイスじゃないか！　こんな所で何をしている？」

「クエストから帰る途中で大きな音があつたから様子見に。お姉ちゃんも？」

「そうだ。原因を探ってくれと言われてな。もつとも、モンスターだったら逃げるつもりだが……おや？　後ろの2人はディーナにライナスか。懐かしいな」

名前を呼ばれるが早い、ディーナが瞬時に反応する。

「お久しぶりですお姉様！　覚えていてくれたんですね！」

「頼むから『お姉様』てのはやめてくれないか。私には似合わん」

「そんなことないですよ！　お姉様はムグムグ……」

「はいはい落ちつこう。お久しぶりですソフィアさん」

「助かったよライナス。2人とも、変わってないな」

そう言えば2人が返って来てからお姉ちゃんに会ったことなかったね。わたしから話したことないし、今まで話に出なかったのが不思議なくらい。

「土産話を聞きたいけれど、ここは調査が先決だ。覚悟はいいな」

まだ砂煙が少し舞っている中、これまで以上に気を張り詰めて進んでいく。モンスターの気配はないけどビヤクヤさんですら察知できないこともあるから何があってもおかしくない。

小高い壁を登ったり、至る所にある大きな亀裂を跨いだり、小さいクレーターを跳び越えたりと、普通の荒地では考えられないような悪路えおどん歩いているうちにようやく中心地が見えてきた。

「な、なんだこれは……」

その中心地には大きなクレーターが存在していた。それこそ、モンスターが大暴れしないと出来ないような。

お姉ちゃんのガンランスで計測したところ直径は約50m。調査の結果、自然的要因は見つからなかったのはいよいよモンスター説が濃厚になってきた。そんな凶悪モンスターを想像して身震いをする。

「あ、なんだメティス達か」

「知り合いか？」

「弟子3人とそのうちの1人の姉。一般の上位ハンターだけどキメ

ラ云々は知っている」

「ふむ、隠れる必要はなかったか」

なんの前振れもなく背後から声がしたので驚過ぎて言葉を失う。後ろを見ればビヤクヤさんと厳つい顔をしたおじさんが立っていた。

最初に硬直から抜け出したのはお姉ちゃん。色々と言いたいことを考えた末、最初の一言が、

「誰？」

まあそうなるよね。

「俺か？俺はゼノンⅡアデライト。キメラを知っているのならギルド直接の依頼を受ける奴と言えば判るだろ」

噂で聞いたことがある。ビヤクヤさんの他に2人、人間をやめたハンターさんがいるらしく裏で大活躍しているらしい。

「それで、4人はなんでここに？メテイス達はクエスト終わったの？」

「あ、はい、一応。帰る途中で大きな音が聞こえたので」

「私は緊急の依頼だ。村まで響く音だから当然だろう。ビヤクヤ達がいるということは何か関わっているんだろ？」

「（ちょ！ バレてるし！ どうする？ 素直に言うのはマズイ）」

「（だろうな。ここはモンスターと戦っていたと言っべきだ）」

「（2人がかりでか？ それでも倒せなかったということになるから絶対ヤバイだろ）」

「（それ以外に妙案が？）」

「（……ない。しゃーないか）」 ↑ここまで0・5秒

「新種らしいモンスターとバトってた。逃げられたけどそこそこの深手を与えられたから、この付近にはもう現れないだろう」

「なるほど…… って、倒せなかったということか！？」

目を丸くするお姉ちゃん。当然の反応だ。ビヤクヤさんはもちろん、ゼノンさんも人をやめたくらいの強さを持っているはずなのにそのモンスターは逃げ切るなんて……

「ど、どんなモンスターだったんですか!？」

どこことなく目を輝かせているような気がするライナスの大きな声に、少したじろぐビヤクヤさん。少し考えて意見を纏めたあと、そのモンスターの特徴を話してくれた。

「え、あ、えっと、白い狼をそのまま大きくした感じだな。体毛のクセに滅茶苦茶堅かった。火力もバカにならないし……今の俺1人じゃ殺されるな」

こ、この人を持ってしてここまで言わせるなんて。

もしその狼みたいな奴が村や街に出現したら、シエンガオレンが襲来してきた時よりも大きな被害を受けるだろう。怖い……

「ま、何とか追い払えたいし幸いに大きな怪我也受けていないわざわざ来てくれて申し訳ないが戻ろう」

厳しい戦いがあったことを全く感じさせない明るい声で言うてくる。普通のハンターなら倒れること間違いない傷がたくさんあるのに、これっぽっちも気にしていない辺り改めて人をやめたんだと考えさせられる。

（作者注：一応、分類上は人間です）

「（おい、勝手にモンスターを作り上げていいのか？）」

「（あそこで口ごもる方が変に思われるだろ）」

「（それもそうか）」↑ここまで（ry

「そうだ。小僧、お前に言いたいことがあった。機密事項になるから悪いが4人には先に帰っていてもらおう」

そう言つて一枚の紙を渡してくる。なんでもこれをギルドマスターのおじさんに渡せば色々と解決するらしい。こっそり開けてみただと変な記号ばかり書いてあつて私たち全員理解できない。まあ、重要なことなら暗号で書かれるのが普通か。

な〜んか都合よく厄介払いをされた気分だけど、機密事項と言われれば反論できないのでしぶしぶ帰ることにした。

「白夜 SIDE」

話があると言うことでしばらく待つことになった。4人が完全に見えなくなるまで話し出さないと言うことは相当なものだろう。

「……そろそろいいか。さて、早速話をしよう。あくまで憶測の話だが、どうにもひっかかることがあってな」

「ズバリ言っと?」

「キメラ種のことだ。ここ最近、キメラ種の数が増えているのに気付いたか?」

「言われてみれば確かにそうだ。俺がこの世界に来る前までは1匹たりとも出現されていなかった。それが幼体をすっ飛ばして成体が何匹も。」

「急に新種として確認されたのは成体のみ。人が関わらないような

場所に存在しているのにギルド本部はかなり詳しい情報を持っている」

「違和感がありまくりだな。発見数の増え方が自然的なものじゃない。情報だつてそう簡単に集められるはずない」

「同じタイミングに生まれたキメラ種達が同時に成長して成体になったと考えられる。そもそも、ギルドの説明にあった『別種同士の配合』なんて第三者が手を加えない限りあり得ない。そして、ある事実を加えるとギルドの裏が見えてくる」

裏……巨大な組織は必ずと言っていいほどどこかが腐っているものだ。場合によっては社会的にも実際にも消される代物だろう。

「実はだ、キルド本部の研究部の技術と言うのは非常に進んでいる。これにはしっかりとした裏がある。技術については本部の中でも一部の人間しか知らないことだ。そう、それは遺伝子操作可能レベルにまで……だ」

「遺伝子操作……まさか!？」

いきなり同時出現したキメラ種。通常ではあり得ない異種配合。更には遺伝子操作。

これらを合わせて出てくる答えは……

「キメラ種は……人が生み出したとも言っのか」

「……ああ。仮定の話だが突如発生した説明がつく。恐らく、過去に生み出したはいいが何らかの理由で逃げられたか、逃がしたかしたのだろう」

「その幼体が自然の中で成長した。同じ時期に生まれたのだからある程度の誤差があるとはいえ、成体になるまでの年月はほぼ等しい。それが『今』か」

「脳を大きくしたのは人の言うことを理解させるためだな。こいつは失敗したようだが。とにかく確証が欲しい。場合によってはギル

ドを敵に回さねばならん」

そこまでヤバイのか。まあ、キメラ種を生み出している可能性がある以上最低でも事の真相を知っておく必要がある。なるべく早く本部へスニークキングミッションを決行しないと。

「そんな訳で俺の調査を手伝ってほしい。いきなりだと流石に都合がつかんだろうし下準備もしていない。けれど3日後には始めたい……大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。厄介なことになりそうだな………！」

「！」

瞬時に、俺は『空閃』を、ゼノンはなんかよくわからん衝撃波を7時の方向に飛ばす。当たった壁は大きな音を立てて崩れた。

「……逃げられたか」

「ぬかったな。今の話の一部始終を聞かれたか。関係者、と見て間違いない」

いつからかは判らないが気配を完璧に殺して、それこそ俺とゼノンに感じ取られないほどに、盗み聞きをしていた人間がいた。まさかここまで隠密に長けている人間が相手側についているとは……

めんどくさいことになりそうだ。

そして、この話を聞かれたと言うことはギルド本部は俺達を口止め、最悪亡き者にしようとするだろう。表立って動くことは出来ないが暗殺のスペシャリストやら特殊クエストの連続依頼やら事故に見せかけに来るやらで殺しに来るだろう。さて困った。

「この際、今のうちに作戦を立てておくか。俺は潜入が苦手だ。小僧、お前が証拠を集めてきてくれ」

まあ、そんなごつつい体格してれば目立って目立ってしかたないだろうな。どこかの蛇さんよりも筋肉モリモリすぎるからあんな柔軟な潜入ミッションはできなさそうだ。

「それと、お前の弟子のことだが―」

「その心配はない。メテイス達に手を出せば俺がブチキレるのは理解しているだろうからリスクを犯すことはしないだろう」

結果として、普通に潰れるか、跡形もなく潰れるかの違いだけだな。

「わかった。それでは証拠を得た後の話をしよう。相手が非合法とはいえギルドだ。泥をかぶるのは俺達だけでいい。故に2人で潰す。

相手は怪しげな薬を混ぜているか椅子にふんぞり返っているヤツらだから余裕だろう」

護衛が入ることは判りきっていることだが、ぶつちやけ2人いれば街の1つや2つは軽く破壊できるので戦力的には問題ない。破壊活動ならどちらか1人いれば充分だろうし。

問題はその後の処理についてだけど、今からそれを考えても始まらないから気にしないことにする。

「ああ、あと、お前が調査しているときに回ってきたクエストは全てこちらで持とう。なるべく早く終わらせてくれ」

「あいよ」

その後、集合場所だとか宿泊場所だとかを決めて別れた。最初の集まりは3日後の正午インドドルマ。俺だけで動くのも怪しまれるから不本意ながらメティス達も連れて行くか。

合^{キメラ}成獣が最大級の禁忌ということを教えてやろう。

第36話「ギルド本部の裏側」(後書き)

書きたいことは全部前書きに書いたので特にはないです。

次回もゆっくり待っていてね

第37話「作戦会議2回目」ロンドルマ（前書き）

最近、書く量がちょっとずつ増えてきています。

第37話「作戦会議2回目」ロンドルマ

「????? SIDE」

「……ここどこだ?」

おかしい。ビヤクヤがいる村に行こうと思ったが、気付けばよくわからん密林に来てしまった。

どこで道を間違えた、と考え込んでいると自分と呼んでいる声が聞こえる。

「あ、アカムさんじゃないツスカ」

声の方向を向く。声はしているのに姿が見えない。しばらく首を動かしてキョロキョロと辺りを見回す。でもやっぱり見当たらない。

「こつちツスよこつち!」

声の主がピョンピョン飛び跳ねることで存在感をアピールしている。が、俺に比べればかなり小さいので跳ねても跳ねなくてもあまり変わらないな。

「なんだラージャンかい。相変わらず小さいね」

金色の立て髪を持ち『金獅子』と人間に呼ばれている俺の友人。コイツの方が年下なので常に敬語モードで話しかけてくる。

「アカムさんが大きいだけだと思うツス。それより、どうしてこんな所に？」

異世界^{ビュクヤ}の青年の話をすれば、ラージャンは納得したような顔をしてその苦笑いをした。

「ここ、その村の真逆の方向ツス。人は一切入り込まないような密林ツスよ」

「……本当か」

「はいツス。相変わらずの方向音痴っぷりで安心したツス」

けなされている気はしない。まあいい。

コイツは昔から気が合うのでよく駄弁っていた。久しぶりなので少し話することに。基本的にはどうでもいい雑談なのだが、1つだけ気になることがあった。

「最近、エサが減っているんスよね」

「でもこの辺ではお前くらいしか肉食いなかったと……」

「そうなんスけど、な〜んか見掛けない奴が増えてて」

話によれば既存の種族同士を掛け合わせたような奴らが現れたらしい。言われてみれば移動中に変なの見たな。無視しても突つかかってきて非常に邪魔だったので瞬殺させて貰った。

昔の俺だったら逆に捻られたけど、最近急激に強くなってるんだよね。それでもチート使用人間には勝てそうにないけど。
ビヤクヤ

で、その謎の種族についてはいい情報が望めないのですくつと話を切り替える。

「そうだ、俺はドンドルマ経由で例の村に行くつもりだけどラージヤンもどう？」

「あー、自分はパスス。変つてるとかよく言われるツスけど、のんびり平和に暮らす方が好きツスので。確かに異世界の青年には興味あるツスけど……」

そついやこういう奴だったな。のんびり暮らせればよしとして、他

の大型モンスター等に関わらないような静かな地でグダグダしている。口癖の「働いたら負けだと思っているツス！」には金獅子とは思えないダメ二ートっぷりが伺える。

しばらく思い出話に花を咲かせていると既に辺りが暗くなっているのに気付いた。知らず知らずのうちにかなり長い時間話していたみたいだね。

「そろそろお暇させて貰うよ。んじゃ、またいつか」

「たまには遊びに来てくださいツス」

「と、言うわけでやってきましたドンドルマ!!」

「「「わー!!!!」」」

「……お前ら元気だな。言いだしっぺは俺だが」

先日にしたゼノンとの作戦を進めるために、なるべく注意を薄めるよう弟子3人と家族1匹を引き連れてドンドルマにきた。理由は判らんがはしゃぎっぷりが凄まじい。これだと注意を薄めるどころか目立って仕方ない。今の俺にとってはこの場所は敵地のど真ん中と同意義なんだけど、それをこの3人+1匹が知る由もない。

「そして、何故にソフィアがいるのかを教えて貰おう」

「ん？ いや、暇だから？」

聞き返されても困るんだが。ま、まあ、もし連れに対して襲撃が合ったとしても戦力的には心配する必要がなくなっただと思えばいいか。

若干上擦った声で話を進める。

「さ、さて、数日はここを拠点にして動くのは来る前に話したとおりだ。しっかり宿を押さえてるから早速向かうでしょう」

諸々の調査や作戦の結構及び練り直し、最終的な攻撃も含めれば早くても1、2週間はかかるので宿は必須となってくる。

俺が予約を入れたのではなくゼノンの方で手配して貰ったが、この際そんなことはどうでもいい。アイツの懐の深さも見れることだし。

「えつと……ここで……いいんですね……？」

「……ああ、間違いない。間違っていて欲しいと思ったのは初めてだ」

「師匠、凄く場違いな気がしますよ……」

「「……」」↑1人と1匹絶句

「ここは貴族が泊まるような所だぞ……ハンターも泊まっているけど、超がつくほどの一流ハンターのみだ……」

中に入って目に映ったのはシャンデリア。床一面は大理石で出来ており、中央には室内の癖して噴水もある。

ソフィアの言うとおり、お客は全てお金持ちオーラを醸し出してい

た。独特な袴姿と普通の私服とネコ1匹は他にはいない。いても反応に困る。

えー、いくらなんでもゼノンさん？　いくらなんでも限度つてもんがあるでしょ。前に来た時にギルドに手配されていた宿を遥かに超える質。一体、どんなコネを使ったのか……

予約を確認しても間違いでないどころか、予約名を聞いた瞬間に受付の女性がVIPを相手にするように緊張していた。マジで何したんだよ。

受付の対応とは真逆の、周囲から突き刺さる奇妙なものを見る視線。いたたまれない気分になり、さっさと部屋に行つてこの状況を抜け出したい。しかし、そんな希望とは裏腹にびっくりするほど長い手続き。ようやく終わつて絨毯が敷かれている廊下を渡つて準備されている部屋に向かう。

ドアとドアの間隔が長いということは1部屋が呆れるほど広いはずなのだが、スタッフさんによると1部屋2人と言つて定員らしい。

「それで、部屋割りはどうするんですかニヤ？」

ふと立ち止まつてそんなことを言い出すアニス。今まで普通に言うの忘れてた。

「特に考えることなく俺＆ライナス、メティス＆ディーナ、ソフィア＆アニスでいいんでないか？ 何か意見があれば受け付ける」

「それじゃつまらない」

つまらないってソフィアさん？ 別にそこで面白さを求める必要性は皆無だろう。俺にとっては寝に帰るようなものなのだから。しかし、ここで議論していても時間を潰すだけで、結果として待ち合わせに遅刻してゼノンにムツコロされかねるので言われた通りにした。それが間違いだと気付いたのは部屋に入ってから。

「ふ、ふつつつかものですが、よろしくお願いします！」

「動揺しすぎ動揺しすぎ。それと『っ』が多い」

部屋割りの提案は俺＆メティス、ソフィア＆ディーナ、ライナス＆アニスという一組だけおかしいもの。言っては悪いがアホだろ。俺とメティスを除いた3人と1匹がニヤニヤしていたのはイラッとした。

そもそも、年頃の男女を2人きりにするとはどういう神経をしている。

「……今更だなあ」

「な、なにがですか？」

おっと、声が出ていたか。

ずっと歩き回っているメティスを座るように促して話題を変える。
ちょうどいいのでベリオ討伐の話聞くことにしよう。

「真つ黒焦げっておい……」

「そうなんですよ。誰があんなことしたんでしょうね」

一波乱来そうな気がするが、今は目先のカメラ種調査が優先。そわ
そわして落ち着かない様子のメティスに話しかける。

「少し出かけてくる。クエストとかの予定はないから皆で買い物と
か行っただけいいぞ」

どこに行くんですか？ と聞かれると困るので返答を待たずして逃
げる。残り2部屋でも同じ事を言って、これまた何か聞かれる前に
逃げる。

集合場所は集会場（洒落に非ず）。あんな人が多い場所で極秘の会話をしているのかという疑問はあるが、なんか理由があるのだろう…… たぶん。

「深く考えても始まらないな。不安だけど行くしかないんだよね……」

溜息と共に人ごみに紛れていく。

場所は变つて集会場。

一度しか来たことがないが、それでも記憶に残るほど騒がしい集会場。とはいえ、人が動けるくらいの人口密度なので待ち人を見つけてるのは余裕だった。そしてここでも周りとは決定的に違う雰囲気（近づいたら殴るぞオーラ）をわずかに醸しだしているゼノン。

ほとんどの人間は気付かないとは言え、判る人は判るからやめておいたほうがいいのに。

「来たか。早かったな」

「殴られるのは嫌だからそりゃ早く来る」

席について小腹を満たすためにフライドポテトと頼む。なんでも、ここ一番のオススメの品らしい。

出てきたポテトをつまみながら話を進めるゼノン。頼んだの俺なんだけど。

「今後の計画の前にこいつを見て欲しい」

そう言つて2枚の紙を取り出しテーブルの上に置く。キメラ種討伐と見出しに書かれた紙の内容はあたり前だけどキメラ種討伐の依頼（大事なことry）。

「どこをどう見ても妨害工作だな。クエストで忙しくさせて調査をさせないつもりだろう」

汚いなさずがギルドきたない。こんなドンピシャなタイミングで来

るなんて『パタワータをためたたテオたに ヒント：狸』という暗号（笑）くらい判りやすい。

作「いいですとも！」

今何か聞こえたような……

「まあ、こいつについては俺の方で葬っておく。同じ時間帯に2匹討伐しろってんだからクレアにでも頼んでみるか」

クレア？ あ、生物災害が起こった地域で不自然に置いてある銃火器や弾丸を回収しつつ怪物を撃ち抜く人。ではなく大剣使いの人間を超越した者が。

作「俺は人間をやめるぞ！ ジョジョーッ！！」

また何か聞こえたような……

「そうだ、あんたがクエストに行くのは判ったけど、是非とも弟子達に観戦させてくれるとありがたい。平気か？」

ドンドルマにメティス達を連れて来た理由の一つはこれ。もつともクエストが舞い込んでくるかは賭けだったが、どうやら勝ったようだ。よかったよかった。

「何故だ？」

「レベルの高い戦闘を見るのはいい勉強になる。けど、俺の戦いだけを見ても変化があまりないので効率が悪いからな。ダメと言うなら諦めー」

「いいだろう」

「わあお即決ですか。弟子のレベルを知るわけないのだからもう少し迷ってもいいとおもう。あ、コイツのことだ、実は知っていてもおかしくはない。」

「よし、クエストの法はこんくらいでいいだろう。次は潜入の方だ。まずはギルド本部の見取り図を頭に叩き込んでくれ。警備についてはお前なら見つかることはないだろう。問題はここだ」

見取り図のある一部分を指差す。他の部分とは違い、内部の状況が書かれていない。

「ここは本部の中でも一部の人間しか入れない。件の研究室に間違いはないが、どんな配置なのかも判らんで充分注意して欲しい。
マスタークラス
この間の達人級のような奴もいるだろう」

むむむ、内部が不明なのは痛いな。どんな侵入者迎撃用トラップがあるか判ったもんじゃない。警備の方も難易度インフェルノになつてることだろう。

あー嫌だ嫌だ。

「頑張ってみる。開始する時間だが、向こうになるべく策を練らせる時間を与えたくないから今夜に決行するつもりだ。クエストはいつだ？」

「明日だ。お前の弟子は俺の顔を覚えているだろうから明日の10時に集会場に来てくれればいい」

そりゃまあ、そんなオンリーワンな顔をしていれば物覚えが悪い人でも名前と顔が一致できる。しかも背負うは斧。スラッシュアックスではなく斧。1回もあつたことがなくても特徴を聞けば特定余裕だろう。

俺も人のことが言えないくらい珍しい格好しているな。そんな2人が同席していれば否が応でも目立つ。

「今更なんだがここで話してよかったのか？ 目立ってるぞ」

気配を消していないので周りから「何だあいつ」みたいな目で見られている。他人の目なんか知ったこっちゃないが、本部の奴らが偵察に来ている可能性はある。何気なさを装い周囲を見回してみる。

「心配いらない。この時間帯、ギルド本部の人間は会議みたいのをしているから本部にいる。ギルドナイトは例外だが」

なるほど、戦闘バカなこの人もちゃんと考えていたのか。ただの戦闘バカだったらキメラ種の真相なんて気にしないしな。

「今何か失礼なことを考えてなかったか？」

うわぁ、心読んできたよ。

只者ではないことは知っていたけど、やっぱりただのバカでは――

「……………」

腕組みを解いて右手でおもむろに背負っている斧の柄を握る。どことなく怒っているようにも見える。

タンマ、無言で斧を握むのはやめて。こんな所で素振りされたら遙か後方まで色んなものが消え去るから。

「あ、うん。謝るから勘弁して。ごめんなさい」

とりあえず謝ってみる。あのまま止まる事はある得ないし、ここでドンパチやるのはス。ランカー先生が自身の身長以上ある高さから何の工夫もしないで飛び降りるくらい危険。

後者の場合、危険なんてものじゃなく即GAME OVER。作戦前に集会場消滅の罪でお縄につくなんてシャレにならん。

「今日はここまでにしといてやろ。クエストは移動を含めて3日あれば終わる。3日後の同じ時間にここに集合でいいか？」

「判った。余計なお世話だと思うがキメラ種は強い。気をつけてくれ」

フツ、と不敵に笑って席を立ち、集会場を出て行くのを見届ける。

うゝむ、あいつよりメティス達のほうが心配だ。

「ーと、言うわけで明日はゼノンについていってくれ」

というよりホテル宿に戻り、全員を呼んで明日のことについて話す。万全を期すために何が疑問があれば聞くと言ったらまず手を上げたのはディーナ。

「師匠、防具はどうするんですか？ 特殊クエスト用の防具は持ってきていないんですけど……」

「実は俺の方で運んでおいた。全員分な」

弟子が増え、クエスト同行者が多くなったので急遽ディーナとライナスのための上位防具を作っておいた。あまり時間の余裕がなかったのでジンオウガ一式とティガレックス一式。戦うわけではないのでこれで充分だと判断。最初こそタダで受け取るのを渋っていたが、「死ぬよ」と言ったら素直に受け取ってくれた。

アニスの防具についてもメティスのレウス一式防具を作ったときに出了た端材でオトモ装備も作った。これが2人が弟子になってから1週間経ったことの出来事。

クエストのパーティーメンバーが俺を含めて規定数を超えているのに何も言われないのは驚いた。これが権力か……

「あとソフィアもついて行って。正直、こいつらだけだと心配だ。迫力満点すぎる戦いになるだろうから何かありそうだったら起こる前に脱兎の如く逃げに徹すること。それと、ディーナとライナスは初観戦になるから注意点とかメティスに聞いてくれ。クエストについて何か質問は？」

今度口を開いたのはライナス。この場にいる全員が思うことで俺が答えるのに困る質問だった。

「師匠はどうするんですか？」

「ん……えつと……まあ何と言うか調査みたいなものだ。見つかりたくないのなるべく人数を抑えて、というか、1人の方がいい。先に言っておくとキメラ種の調査だ」

よし、これで嘘は言っていないことになる。日本語って便利だな。

話している言葉が日本語とは限らず、俺だけにあのネコ型ロボットが出した例のコンニャクを使用したかのように自動翻訳されているだけかもしれない。そんなことは果てしなくどうでもいい。

「他に何かあるか？　ないなら明日の準備しとけよ。戦わないはいえその辺の上位クエストは比べ物にならないんだから」

念を押してそれぞれの部屋へ帰らせる。普段から準備を徹底させて

いるのでいつも通りで何の問題もないが、多少大げさに準備させたほうが生存確率も上がることだろう。メティスなんか俺の横で解散する前に渡した防具をこれでもかと言うほど磨いている。

「あ、そういえばメティス、今日の別行動で何か買ったと聞いたけど、何を？」

「買ったものですか？ えへへ、秘密ですよ」

ふむ、機嫌もいいことだし無理して聞く必要はないな。メティスくらの年齢なら少なからず秘密にしておきたいことはあるだろう。

……でも気になるなあ。

くサーシャ SIDEく

「あゝ暇だよ」

最近、メティス達がよく出かけるので1人で仕事していることが多い。今回もドンドルマに行っているらしい。

ドンドルマと言えばディーナとライナスが帰ってきたね。相変わらずの元気のよさで安心した。

「私もハンターになれば楽しめたのかなあ」

一瞬はそう思ったものの、昔から運動神経がないのですぐに諦める。この仕事も楽しいからハンターにならなくていいか。

でも、お昼ちよつと過ぎの時間帯は食事をしに来る人は多いけどクエストを発注する人は少なくなるので暇には変わりがない。

来ないとは断言できないからフラフラと出歩くことも出来ない。うむむ

「仕事の方はどう？ あら、聞くまでもなかったかしら？」

「あ、シルヴィさん。珍しいですね」

いつの間にか目の前に立っていたのは村長であるシルヴィさん。彼女がここに来ることは結構珍しい。いつもは桜の前でのんびりしているイメージがある。

「私だつて一日中動かないって事はないわよ。少し聞きたいことがあつてね」

「聞きたいこと……ですか？」

「ええ。この辺りのことじゃないからあの子たちには聞けないの。
『ドンドルマから3里離れた密林で霧が確認された』って情報が入っているかしら？」

「何か雑談みたいな情報ですね。えっと……ないですね。なにか特殊な霧なんですか？」

「単に幻想的な景色になるだけよ。とっても綺麗だから情報として出回ってるの」

「へー、そうなんですか」

霧があ。あんまり聞いたことないな。シルヴィさんが言うにはとても綺麗なんだろう。見てみたい。

「ないならいいの。じゃ、お仕事頑張つてね」

「あ、ちょっと……行っちゃった。もう少しゆっくりして行っても

いいのに」

やっぱり不思議な人だ。

「サーシャちゃん？ 頼んでおいた書類は纏め終わった？」

「……あ！！」

第37話「作戦会議2回目iンドルマ」(後書き)

リザ「久々の対談形式の後書きだな」

作「特に紹介とかもないですからね。実はこの対談、ネタに困」

リ「おっと、その先は言わせない」

作「別に楽しいからいいんですけど。それより、このところユクモ村での話が少なくなってますね」

リ「確か、『山場を作りたい』って言ってなかったか？」

作「ええ。その山場が『キメラ種の真相』って訳です。キメラ種のアイデアが出た時点でこうしようと思っていたので個人的にとっても楽しいです」

リ「作者の楽しみ」読者の楽しみ という訳じゃないから気をつけるよ」

作「そうですね。読者の方にも楽しんで貰えるような作品になるよう頑張ってます」

リ「なんかまともな対談だな」

作「たまにはいいでしょう。自分だってそこまでバカじゃー」

リ「いや、バカだろ」

作「ひどい!!」

第38話「スニークンゲミッションのような何か」(前書き)

遅くなりましたー。ギリ1週間だからセーフだ……よね？

第38話「スニーキングミッションのようなか」

深夜、草木も眠る丑三つ時。街中には猫の子1匹おらず、かすかな虫の声だけが響く。闇夜に潜んで動く影が目標であるギルド本部の前に姿を現した。

「ッてカッコよさげなことを言っているけど、これ、犯罪なんだよね。腐っていてもギルドに弓引くのだから。」

明かりが灯っている玄関には2人の門番が見張っている。外にある明かりは、その玄関と建物の回るを囲っている塀の上にくっつか設置されていて、全体的に明るくなっている。

さて、俺が尊敬する蛇さんの潜入スタイルは誰にも気付かれることなく任務を遂行する感じだ。潜入するだけなら、手当たりしだいバツバツと立ち塞がる敵をなぎ倒せばいいけど、そこら中に気絶している整備員がいれば「潜入しに来ましたよ」と言っているのも同然。警戒レベルが一気に跳ね上がる。

そんなことになるのを防ぐため敵に接触することなく動かなければならない。

「（さすがに門番に見つからずに玄関から入ることは出来ないな。どっかに裏口でもあればいいんだけど……）」

そろりと建物を一周してみる。と、なんともまあベタな感じがするが、裏口を発見した。見たところ鍵がついている様子はない。機密情報があるのに無用心だな。

「（とにかく、入らせて貰うか）」

ドアノブに手を掛けて回……そうとした瞬間に動きを止める。ゆっくりと手を離して壁に耳をつける。

「（人がいるな。あのまま開けてたら鉢合わせになってたところだ。人数は2人。ん？ 何か話をしているぞ？）」

「……にしても本当か？」

「近々、ここに入り込もうとする奴がいるということか？」

「ああ。何でわざわざここに来るのか不思議だな。特に面白い物もないだろうに」

「『^たで 蓼食つ虫も好き好き』って言うだろ。つまりはそういうことだ」

「ナメック語は勘弁ww」

「なんだ、ただのバカか」

うーん、やはりこちらの情報は漏れていたか。

しかし、収穫もあった。この会話にはキメラ種のことはおるか何が目的かすら判っていないようだ。注意を呼びかけた人間がキメラ種のことを伏せていたということになり、つまり、キメラ種に関係のない人間もいる。組織全体は腐っていないようだ。一安心だな。

とは言っても、警備が厳しくなっているのも事実。入り込む手段は窓をぶち破るくらいしか残されていないが、それもどうかと思う。

「まさか入るだけでこんなに苦労するとは……」

内部にいる人間を、気付かれることなく外におびき寄せる方法、『物音を立てる』。俺が（ry蛇さんも壁を三・三・七拍子で軽快に叩いておびき寄せたりしている。

幸い、すぐそこには木箱やら何やらがあつて、風もそこそこ吹いているからあまり怪しまれないと思う。

「そおい」

気の抜けた掛け声と共に積み上がっている木箱を倒す。派手な音を立てて散らばった。これでホイホイと外に出てくるだろう。

再び壁に耳を当てると、

「なんだ？」

「物音がしたぞ」

「一応見てくる。お前はそこで待ってる」

「ういゝっす」

計画通り。あとはドアが開いた瞬間に常人では捉えられないスピードで入るだけ。

「（今です！）」

ドアが開き、1人が出たのを見計らって超高速移動。物や人にぶつからないように注意を払う。夜と言っても明かりがあるのでステルス率は10%くらいか？ 見つからなければどうということはない。

「む、なんだ風か。妙に強いな」

出て行った見張りは特に怪しむことなく俺が倒した木箱に近づいていく。物音の原因が木箱と知るや否や落胆の溜息をついて律儀に積み直している。律儀な人だ。

「どうだった？」

「木箱が倒れてただけだ。大方、風が原因だろう」

「なんだ、侵入者じゃないのか。ツマネンネ」

「お前な……」

いえいえ、門番さん進入者であってますよ。今まさに貴方達の真上の天井に蝙蝠の如く張り付いていますよ。

で、入ったはいいけど、どこかの核兵器が収納された倉庫のように色んな物がなく、せいぜい植木鉢くらいしかなかったので天井のわずかな凹凸を掴んでふんばっている。

ロッククライミングの達人となるとわずか1、2cmの凹凸があれば崖に登れるらしい。生憎俺は未経験者なんだよ。体勢を保つので精一杯。

「（とにかく進むか。裏口から入ったから目的地までかなり遠いぞ……）」

門番の会話からして未だ俺の侵入はバレていないようだ。長居は無用なのですぐその曲がり角を曲がって無音で降り立つ。

長い直線の廊下が続くので小まめに点在する部屋に入るか天井に張り付くかしないと巡回と鉢合わせになってしまう。

しかし急がば回れ。ゆっくり行こう。

最初の直線廊下を3分の2くらい進んだところで向こう側から足音が聞こえた。天井を見ても掴めそうな物はない。そばにある部屋に誰も居ない事を信じてダイナミック入室（無音ver）。

「（はあゝ、誰もいなくて助かった）」

冷静になって考えれば中を探知できたけど余裕がなかった。まあ、結果として誰もいなかったのでよしとしよう。

「（ここは……あ、バルト隊長の部屋か。暗くてよく判らんが……おや？）」

暗さに目が慣れ、まるで暗視スコープをかけたような視界になった時におもしろいものを見つけた。それには『日誌』と書かれている。

……彼には悪いが、もしかするとキメラについてのヒントが書かれているかもしれない、という建前を作っておいて一切の遠慮なく開く。

『本日、噂になっっている最凶の王者・リオレウスを討伐した青年を招くことが決定した。足を運んでくれるかと言う不安はあるが、私は出来る限りのことをしよう』

懐かしいなー。レウス討伐からかれこれ……あれ？ どのくらい経った？ 半年くらいか？

『キメラ種と名付けられた新種の姿が確認された。並みのハンターでは立ち向かうことすら出来ない。ゼノンとクレア、そしてビヤクヤ君に頼らなければならないのは心苦しいが、現状ではこの3人とG級ハンターでしか倒せないだろう。迎え撃つ準備が出来ていない今、キメラ種の数が増えないことを祈るばかりだ』

この時点でゼノンとクレアさんにもクエストが回っていたのか。しかし、特におもし……情報が無いな。やはり日誌には書いてないのか、と思いつつも読み進めていくと興味深いコメントを見つけた。

『最近、この付近が騒がしい。音のする方向からして研究部の方か？ あそこは何をしているか不明だ。騒がしいのはいつものことだが、何かが違う。まるで七年前のような』

『部下の1人が地下からモンスターの声を聞いたと相談を受けた。念のために上の方に問い合わせてみたがそのような情報は入っていないらしい。しかし部下は聞き間違いではないというので独自で調べる必要がある』

『先日相談をしてきた部下が戦場で散ったという情報が届いた。彼以外にも4人の仲間を失った。本日、その葬儀が行われる。追記：地下からの声を調査しているが、今のところ何1つ手がかりがない』

『本部全体に、研究部が怪しい実験を行っているという噂が広がっている。万一のことを考え、許可を取って研究室を視察させてもらったところ何も怪しい部分はなかった。その事実を伝えたら、噂はすぐに沈静化した。しかし、日のないところに煙は立たないと言う。悪い予感がするな』

……………ビンゴ。

怪しいと睨んでいる俺から見れば確証以外の何者でもない。更には知られたからにはギルドの人間ですら始末している。予想以上に裏は暗く、そして深いな。

「（勝手に人の日誌を見たからにはそれ相応の働きをしないとなさくて、そろそろ動くか）」

出る前にドアの向こう側の気配を探る。気付かないうちに長時間滞在していたらしく裏口の門番すらお帰りになっただよう。交代と言った可能性もあるけど居ないのなら都合がいい。今のうちにドン進んでいこう。

静かな廊下を、足音を立てないよう注意深く進んでいく。たまに巡回の人と出くわしそうになるが、天井に張り付くなり部屋に不法侵入（既に行っている）するなりしてやり過ぎしていった。こんな簡単なことで発見されずに済むなんてザル警備もいいとこだ。

頭の中にある見取り図と照らし合わせると、すぐ目の前まで、というところまで来たようだ。しかし、2人ほど扉の前で喋っているの動きが取れない状況。

つてか、あの2人、裏口を見張っていた奴らだよな。お前ら仕事しろ。

しばらく待ってみても動く様子はないので倒した方が早いのかもしれん。いやいや、いくらなんでも危険だ。ここは暗いのでしばらくは平気だろうが……

「誰か居るのか？」

背後から声をかけられた。しくったな。前方に気を取られてたとはいえ簡単に背後を取られるとは。と、一瞬思ったが、どうやら事情

が少し違った。

探知網を広げてみても後ろの人物の気配を感じることが出来ないの
でプロのようだ。もっとも、本物のプロなら声をかけるなんて事を
しないで殴りかかるので成り立ってわけか。隠密については花丸
をあげるのにもったいない。

敵についての評価をしていないで対処法を考えよう。無能な2人も
異変に気付いてこっちに向かってくるし。

戦闘力は3人合わせても高くないので倒すことは簡単だ。やるなら
今のうち。

「！ 侵――」

おっとその先は言わせない。叫ばれる前に後ろのプロモドキを失神
させる。んで、すかさず前の2人も張り倒す。時間にしてわずか1
秒前後の早業で仮初の安全を手に入れた。

「（こいつらはどっかの部屋に閉じ込めておくとして……）」

目的地である部屋の前まで行く。プレートには『研究室』と書かれ
ているので間違いないようだ。おや？　ここだけ鍵がついている。

「（針金2本あったとき） 図工かな？ 図工じゃないよ ピッキング」

懐から針金を取り出して、よい子には見せられない方法で開錠。覚えてよかったピッキング。ピッキングのお陰で宝くじが当たりました。

気を引き締めてドアを開く。蝶番が軽く錆びているらしく、ギギギ、と不快な音を鳴らす。

「（じゃ、失礼しますよ）。よし、警備は居ないようだ。バルトの日誌によるとここには何もないとあったから、たぶん隠し部屋でもあるんだろう。それにしても広いな」

研究室というだけあって、中はスカッシュが出来る程度の広さ。怪しげな薬品や顕微鏡といった器具が机の上の至る所に散らかっている。……どこをどうやったら蛍光ピンクの液体なんて出来るのだろう。俺にとってはコレのほうが恐怖だ。

「（一応この部屋も調べておくか。資料はどっかに纏められているだろうから……あれが臭いな）」

視線の先にあるのは小さな引き出しがたくさんついたタンスのようなもの。引き出し1つはA4用紙がピッタリ収まる大きさなので可能性としては一番高い。どんどん下から開けていく。

上から開けていくと1つ下の中身を見るためにいちいち仕舞わないといけないので時間のロスがある。その点、下からなら開けっ放しでもいい。

「（……よくないわ。侵入したことをバレないようにしないと）」

肝心の情報はモンスターの生態を綴った物や新武器のアイデア、予算やら人員の名簿といった機密事項っぽい物もあるけど欲しいものはなかった。ざっくり探したところで見切りをつけて隠し部屋の探索に切り替える。

「（空間とつながっている場合、わずかな隙間からでも風が通るはずだ。それさえ見つけられれば……）」

まあ、風の流れなんて判るはずもなく。

怪しい場所をひたすら探して耳を済ませて音を聞く作業を繰り返す。

周囲の壁には存在せず、わざわざ本棚とかも動かしたのに見つからない。もちろん、後で元に戻しましたがとも。そこまでしても見つけれないことを考えると、かなり手の込んだ場所に入り口を作ったのだろう。ここで時間を潰されてはたまらないので必死になって探し続ける。

そして、ついに怪しさ120%の所を見つける。

「（ここの床だけ引きずった後が多いな。床一面に傷があるから判りにくいけど、よく見つけられたな俺）」

つまりはここに物があつたわけで、真横には机。おわかりいただけだろうか？ この机を動かした時に出来た傷ということになる。

この机の下か。予想に違わず手の込んでいることで。早速移動させて床を観察。

すると、なんと大胆にタイル等のフェイクなしにいきなり入り口が広がっていた。手の込む場所が違ふと思うのは俺だけじゃないはず。下から机を戻さなければならぬことを考えると仕方のないことだろうが。

「（時間も押してきているようだし、サクッと終わらせるか）」

螺旋階段に足をつけ机を頑張つて戻した後、軽快な足取りで降りていく。かなり深い所まで降りていってようやく階段が終わり、何の文字も書かれていない扉が出てきた。またしても鍵がついているのでピッキングで開錠。

意を決して中に入っていく。ここからが本当の地獄だ。

第38話「スニーキングミッションのような何か」（後書き）

作「微妙なところで切った上、少し短かったですかね」

白「まあ、2回に分ければこうなる」

作「はい、と言うわけで前編でした。次回でスニーキングミッションを完結させて、その次でゼノン編をやっていく『予定』です」

白「予定を随分強調するな。心変わりでもするのか？」

作「いや、そういう訳じゃないんですが自分、優柔不断でしてどう転ぶか判らないんですよ」

白「それを心変わりと言わずして何を心変わりと言う。そして、やはりMGSのようなスリル感は再現できないようだな」

作「情景描写はヘタクソなので……」

白「情景描写『も』だろう？」

作「うぐっ！ ま、まあいいじゃないですか！ それより、眠い目を擦りながら誤字脱字チャックをしているので意味がないどころかいつもより酷いと思います。どうぞよしなに」

白「巢で見してるけどな」

作「貴方こそ」

作&白「……次回もゆっくりしていったね！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5500v/>

最強がハンター生活をした場合

2011年11月21日14時22分発行